

秋田県文化財調査報告書第265集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

—片野Ⅰ遺跡—

1996・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書第265集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

—片野Ⅰ遺跡—

1996・3

秋田県教育委員会

# 序

秋田県には先人の残した多くの文化財があります。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局秋田工事事務所により、秋田市上北手から昭和町豊川に到る秋田外環状道路建設事業が計画されました。路線は周知の遺跡である片野Ⅰ遺跡にもかかることが判明し、秋田県教育委員会では、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の住居跡・土坑・陥し穴遺構・古代の住居跡などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものであります、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、秋田市教育委員会、ならびに地域住民の皆様など、調査にあたり御指導・御協力下さった多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成8年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顯信

## 例　言

1. 本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った秋田外環状道路建設事業に係る片野Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書においては、各年度の発掘調査担当者が担当区を執筆し、編集は庄内昭男が行った。
3. 付編について  
海綿骨針含有土器について、奈良大学西田泰民氏より寄稿していただき263頁から270頁にまとめた。  
放射性炭素年代測定は学習院大学に依頼し、測定結果は286頁にまとめた  
また、残存脂肪分析はメズコーシャに、花粉分析・プラントオバール分析は、古環境研究所に委託した報告である。
4. 本報告書に掲載した2万5千分の1の地形図は、建設省国土地理院発行のものを、5万分の1の地形図は、大日本帝國陸地測量部測図（大正15年印刷）を複製したものである。
5. 遺跡における層相の色調観察には、小山・竹原著『新版標準土色帖』（1973）を使用した。

## 凡　例

1. 本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。
  - 1) 遺構の記述について  
遺構実測図は、構成上不定縮尺である。  
遺構実測図の中の矢印は、国家座標第X系座標北をしめす。  
住居跡・土坑・陥し穴遺構については、( ) 内が現場での注記番号であり、本書では新たな番号をつけて編集した。
  - 2) 遺物の記述について  
本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。  
実測図は次の縮尺に統一してある。
    - [土製品] 土器：1/3、その他の土製品(円盤状土製品等)：1/2
    - [石製品] 石器(石鎚・石匙・石鏡等)：1/2、磨製石器・砾石器・砥石：1/3、  
実測図では欠損部を示す表現として、斜線を入れた。遺構外出土遺物の挿図番号は各節における通し番号としたが、A・L・M区の土器は挿図番号を示し、( ) 内に通し番号を加えた。挿図番号の下には、グリッド名・層位(アラビア数字)を付記した。  
写真図版の縮尺は、土器以外は実測図と同じである。

# 目 次

序　　例言・凡例	i · ii
目次　挿図目次　図版目次	iii · iv · v · vi
第1章　はじめ.....	1
第1節　調査に至る経過.....	1
第2節　調査要項.....	1
第2章　遺跡の立地と環境.....	2
第1節　遺跡周辺の地形.....	2
第2節　周辺の遺跡.....	3
第3章　調査の概要.....	7
第1節　遺跡の概観.....	7
第2節　調査の方法.....	7
第3節　調査日誌.....	8
第4章　調査の記録.....	11
第1節　各調査区の地形と層位.....	11
第2-1節　A・L・M区の検出遺構と出土遺物.....	15
第2-2節　A・L・M区の遺構外出土遺物.....	17
第3-1節　B・C区の検出遺構と出土遺物.....	75
第3-2節　B・C区の遺構外出土遺物.....	102
第4-1節　D・E・F区の検出遺構と出土遺物.....	112
第4-2節　D・E・F区の遺構外出土遺物.....	125
第5-1節　G区の検出遺構と出土遺物.....	140
第5-2節　G区の遺構外出土遺物.....	154
第6-1節　H・I区の検出遺構と出土遺物.....	164
第6-2節　H・I区の遺構外出土遺物.....	179
第7-1節　J区の検出遺構と出土遺物.....	192
第7-2節　J区の遺構外出土遺物.....	197
第8-1節　K区の検出遺構と出土遺物.....	202
第8-2節　K区の遺構外出土遺物.....	232
第5章　まとめ.....	260
付 編.....	263

# 挿図目次(1)

第1図 遺跡周辺の地形分類	2	第73図 第10号・第11号陥し穴遺構	91
第2図 周辺の遺跡分布	5	第74図 第12号陥し穴遺構	92
第3図 遺跡の位置	6	第75図 第13号陥し穴遺構	93
第4図 グリッド配置・土層模式(1)	12	第76図 第14号陥し穴遺構	94
第5図 グリッド配置・土層模式(2)	13	第77図 第15号陥し穴遺構	95
第6図 A・L・M区の遺構位置	14	第78図 第16号陥し穴遺構	96
第7図 ピット群と第1号土坑	16	第79図 第17号陥し穴遺構	97
第8図 A区の斜面層位と遺物分布	17	第80図 第1号古代住居跡	99
第9図 縄文晩期の土器属性凡例	23	第81図 第1号古代住居跡内出土遺物(1)	100
第10~33図 A・L・M区の遺構外出土遺物 -土器-	24~47	第82図 第1号古代住居跡内出土遺物(2)	101
第34図 A・L・M区の石器分類と計測基準	48	第83~87図 B・C区の遺構外出土遺物 -土器-	104~108
第35~58図 A・L・M区の遺構外出土遺物 -石器-	49~72	第88~90図 B・C区の遺構外出土遺物 -石器-	109~111
第59図 B・C区の遺構位置	73・74	第91図 D・E・F区の遺構位置	113・114
第60図 焼土遺構を伴う落ち込みと出土遺物(1) .....	76	第92図 第8号・第9号・第10号土坑	115
第61図 焼土遺構を伴う落ち込み内出土遺物(2) .....	77	第93図 第12号・第13号・第14号土坑	117
第62図 第2号・第3号・第4号土坑	79	第94図 第11号土坑・第22号陥し穴遺構	119
第63図 第5号・第6号・第7号土坑	81	第95図 第18号陥し穴遺構	120
第64図 第1号陥し穴遺構	82	第96図 第19号陥し穴遺構	121
第65図 第2号陥し穴遺構	83	第97図 第20号陥し穴遺構	122
第66図 第3号陥し穴遺構	84	第98図 第21号陥し穴遺構	123
第67図 第4号陥し穴遺構	85	第99図 第23号陥し穴遺構	124
第68図 第5号陥し穴遺構	86	第100~102図 D・E区の遺構外出土遺物 -土器-	128~130
第69図 第6号陥し穴遺構	87	第103図 F区の遺構外出土遺物-土器-	131
第70図 第7号陥し穴遺構	88	第104~108図 D・E区の遺構外出土遺物 -石器-	132~136
第71図 第8号陥し穴遺構	89	第109~110図 F区の遺構外出土遺物 -石器-	137・138
第72図 第9号陥し穴遺構	90		

## 挿 図 目 次 (2)

第111図 G区の遺構位置	139	第146~152図 H・I区の遺構外出土遺物	
第112図 第1号縄文住居跡内出土遺物	140	—石器—	184~190
第113図 第1号縄文住居跡	141	第153図 J区の遺構位置	191
第114図 第15号・第16号・第17号土坑	143	第154図 第37号陥し穴遺構	192
第115図 第18号・第19号土坑、礫群	145	第155図 第38号陥し穴遺構	193
第116図 第24号陥し穴遺構	146	第156図 第39号陥し穴遺構	194
第117図 第25号陥し穴遺構	147	第157図 第40号陥し穴遺構	195
第118図 第26号陥し穴遺構	148	第158図 第20号土坑	196
第119図 第27号・第28号陥し穴遺構	150	第159図 焼石・焼土遺構	197
第120図 第29号陥し穴遺構	151	第160~161図 J区の遺構外出土遺物	
第121図 第30号陥し穴遺構	152	—土器—	199~200
第122図 第31号陥し穴遺構	153	第162図 J区の遺構外出土遺物—石器—	201
第123~127図 G区の遺構外出土遺物		第163図 K区の遺構位置	203~204
—土器—	156~160	第164図 第2号縄文住居跡	
第128~130図 G区の遺構外出土遺物		第21号・第22号土坑	205
—石器—	161~163	第165図 第23号・第24号・第25号土坑	207
第131図 第32号陥し穴遺構	164	第166図 第26号・第27号・第28号土坑	209
第132図 H・I区の遺構位置	165~166	第167図 第29号・第30号・第31号土坑	
第133図 第33号陥し穴遺構	167	第32号・第33号・第34号土坑	211
第134図 第34号・第35号陥し穴遺構	169	第168図 第35号土坑内出土遺物	213
第135図 第36号陥し穴遺構	170	第169図 第35号・第36号・第37号土坑	215
第136図 第2号古代住居跡	172	第170図 第38号・第39号・第40号土坑	217
第137図 第2号古代住居跡内出土遺物(1)	173	第171図 第38号・第39号土坑内出土遺物	218
第138図 第2号古代住居跡内出土遺物(2)	174	第172図 第41号・第42号土坑	
第139図 湿地の土壠	175	第43号・第44号土坑	220
第140図 湿地の木材検出状況	176	第173図 第41号・第43号・第44号	
第141図 湿地の杭列検出状況	177	土坑内出土遺物	221
第142図 湿地杭・木製品	178	第174図 第45号・第46号・第47号土坑	
第143~145図 H・I区の遺構外出土遺物		第48号・第49号・第50号土坑	224
—土器—	181~183	第175図 第41号陥し穴遺構	226

第176図	第42号陥し穴遺構	227	第181~190図	K区の遺構外出土遺物	
第177図	第43号陥し穴遺構	228		-土器-	238~247
第178図	第44号陥し穴遺構	229	第191~202図	K区の遺構外出土遺物	
第179図	第45号陥し穴遺構	230		-石器-	248~259
第180図	第46号陥し穴遺構	231	第203図	遺跡概要	262

## 図 版 目 次

図版1	遺跡航空写真（南一北）	図版11	J区焼石・焼土遺構（北一南）
図版2	A区の近景（南一北）		J区の断層断面（北一南）
	A区の土層断面（西一東）	図版12	K区調査前の状況（北一南）
	M区の調査風景（北一南）		K区沢部の調査風景（東一西）
図版3	B・C区の調査風景（東一西）	図版13	K区南土坑群の調査状況（東一西）
	C区からB・E・F区の調査後（西一東）		K区沢部の遺物出土状況（北一南）
図版4	C区焼土遺構を伴う落ち込み（西一東）	図版14	K区の第26号土坑完掘状況
	C区丘陵部の陥し穴遺構群（西一東）		K区の第35号土坑完掘状況
図版5	B区の陥し穴遺構群（東一西）		K区の第41号土坑完掘状況
	B区の第1号古代住居跡（北一南）	図版15	A区の出土土器
図版6	G区調査前の状況（南一北）	図版16	A区の出土土器
	G区調査後の状況（東一西）	図版17	A区の出土土器・土製品
図版7	G区の第1号縄文住居跡（南一北）	図版18	A区の出土石器
	G区の陥し穴遺構群（東一西）	図版19	A区の出土石器
図版8	H・I区の調査風景（西一東）	図版20	A区の出土石器
	H・I区調査後の状況（西一東）	図版21	B・C区の出土土器
図版9	H区の第2号古代住居跡（南一北）	図版22	B区の第1号古代住居跡出土土器
	カマド近景（南一北）		H区の第2号古代住居跡出土土器
	カマド断面（南一北）	図版23	G区とH・I区の出土土器
図版10	I区の調査状況（東一西）	図版24	K区の出土土器
	湿地の土層断面（東一西）		
	湿地検出の杭列（東一西）		

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

秋田外環状道路は、秋田市内の交通混雑の解消をはじめ、交通量の増加にともなう国道沿線の生活環境の改善等を目的として、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から計画が提出されたものである。

昭和61年4月には、秋田市上北手古野から南秋田郡昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。その路線決定にしたがって、秋田県教育委員会では、ルート上の遺跡分布調査および範囲確認調査を継続的に行い、6ヶ所の遺跡を確認した。

本報告書にとりあげる片野I遺跡は秋田市東北部で確認された遺跡で、平成3年に範囲確認調査を実施し、平成4年・5年・6年の3カ年をかけて発掘調査を実施したものである。

※現在秋田外環状道路の名称は、昭和I.Cから秋田北I.Cの間をさしている。

## 第2節 調査要項

**遺跡名稱** 片野I遺跡 ※遺跡記号5KTN I

**所 在 地** 秋田県秋田市上新城中字片野283外 遺跡状況 山林、原野

**調査対象面積** 28,200m<sup>2</sup>

**調査面積** 平成4年12,900m<sup>2</sup>、平成5年10,000m<sup>2</sup>、平成6年5,300m<sup>2</sup>

**遺跡性格** 縄文時代狩猟地・貯蔵施設群、弥生時代遺物散布地、古代住居跡

**遺跡時期** 縄文時代、弥生時代、古代

**調査目的** 秋田外環状道路建設事業にかかる事前調査

**調査期間** 平成4年5月11日～10月9日 平成5年5月10日～11月5日

平成6年6月27日～10月31日

**調査主体者** 秋田県教育委員会

**調査担当者** 平成4年庄内昭男（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）

小畠 嶽（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

磯村 亨（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

平成5年庄内昭男（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）

伊藤 攻（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）

平成6年武藤祐浩（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

伊藤 攻（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）

**総務担当者** 佐田 茂・佐々木真・皆川清・藤肥良清・佐藤広文・須田輝樹

**調査協力機関** 建設省東北地方建設局秋田工事事務所 秋田市教育委員会

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡周辺の地形

片野I遺跡の位置は、北緯 $39^{\circ} 46' 50''$ ・東経 $140^{\circ} 6' 40''$ にある。

日本海に沿った秋田県中央部の地形を東側からみると、標高200m以上の山地、標高50~100m前後の丘陵地、標高10m前後の低地、海岸に沿った砂丘地に分けられる。遺跡の位置する秋田市上新城道川地区から下新城笠岡地区にかけては、仁別山地山麓からのびる標高30~90mの豊川丘陵地が、沖積地に半島状に突き出し、上新城上谷地地区にある片野I遺跡はその張り出しの中間地点に当たる。上新城上谷地地区をみると、南側は沖積地に面し、北側には西に伸びる深い沢、東側にも沖積地に開く五百刈沢があり、独立した丘陵地形を呈している。沖積地に面した南側はいく筋ものこまかい沢が入り込み、鋸歯状の出入りがある。調査した遺跡は丘陵地の頂上部から中腹に立地しており、76.8mを頂点とする丘陵頂部から南に走る小支谷がいくつかあり、起伏にとんだ地形となっている。



第1図 遺跡周辺の地形分類

## 第2節 周辺の遺跡

ここでは、片野Ⅰ遺跡の歴史的環境を理解するために、秋田市北西部の新城川、道川流域の遺跡について概観したい。

第2・3図は、片野Ⅰ遺跡と周辺の遺跡群を秋田県遺跡地図（秋田県教委：1990）および秋田市遺跡詳細分布報告書（秋田市教委：1989）に基づいて地図上におとしたものである。

### 縄文時代の遺跡

この時代の遺跡は、北東へ約1.5km離れた上新城五十丁地区において、上新城中学校（16）、松木台Ⅱ・Ⅲ（15・32）、小林Ⅰ・Ⅲ（17・18）、堂ノ前Ⅱ（19）、杉崎12・13・15号（36・37・38）で確認されている。他に、保多野地区において、大保（23）、保多野Ⅰ・Ⅲ（24・25）、堂ノ前Ⅲ・Ⅳ（20・21）、桂沢（22）、道川地区において、山ノ下Ⅰ（42）、貝布沢（47）、中地区において片野Ⅱ（50）、下新城小友地区において、長面Ⅲ（5）、羽田台Ⅰ（8）、谷地Ⅱ（28）、外旭川笹岡地区において尼館（51）で遺物が採集されている。この中で時期を特定できるのは、晩期中頃の大洞C式土器が採集されている桂沢と、発掘調査された上新城中学校遺跡である。上新城中学校遺跡は、昭和29年に学校建設工事の際に晩期を中心とした遺跡であることが確認され、昭和30年、昭和54年、昭和63～平成3年と発掘調査が行われている。調査の結果、溝が周る集落と、その外側に土壙墓、土坑が存在する遺跡であることが判明している。晩期後半の大洞A式の時期の遺物が大多数を占めており、大洞B-C式の時期が中心の片野Ⅰ遺跡とは様相を異にする。

また片野Ⅰでは中期後葉から後期前葉の土器群が多く出土しているが、周辺で拠点となる集落遺跡は確認されておらず、南東に約15km離れた御所野台地において当該期の集落遺跡として、下堤B・E・G遺跡、湯ノ沢B・C遺跡、野畠遺跡、坂ノ上A・E遺跡が調査されている。

### 弥生時代の遺跡

上新城地区においては松木台遺跡で弥生後期の土器が採集されている。北西に約6km離れた金足小泉地区の砂丘地においては、渴向Ⅰ・Ⅲ・Ⅳが遺物散布地として知られている。また、御所野台地において、地蔵Ⅱ・B遺跡で柵に囲まれた集落跡や土壙墓、遠賀川系土器を使った土器棺墓が確認され、南東に約18km離れた風無台台地において、石坂台Ⅱ、風無台Ⅱで天王山式土器が確認されている。

### 古代の遺跡

上新城五十丁地区の末沢窯跡群（27）、谷地Ⅱ・大沢Ⅰ・Ⅱ窯跡（29・30）、小林窯跡（31）、

下新城岩城地区の右馬之丞窯跡（34）は須恵器焼成の窯跡であり、大沢I窯跡では瓦の焼成も行われているものとみられる。

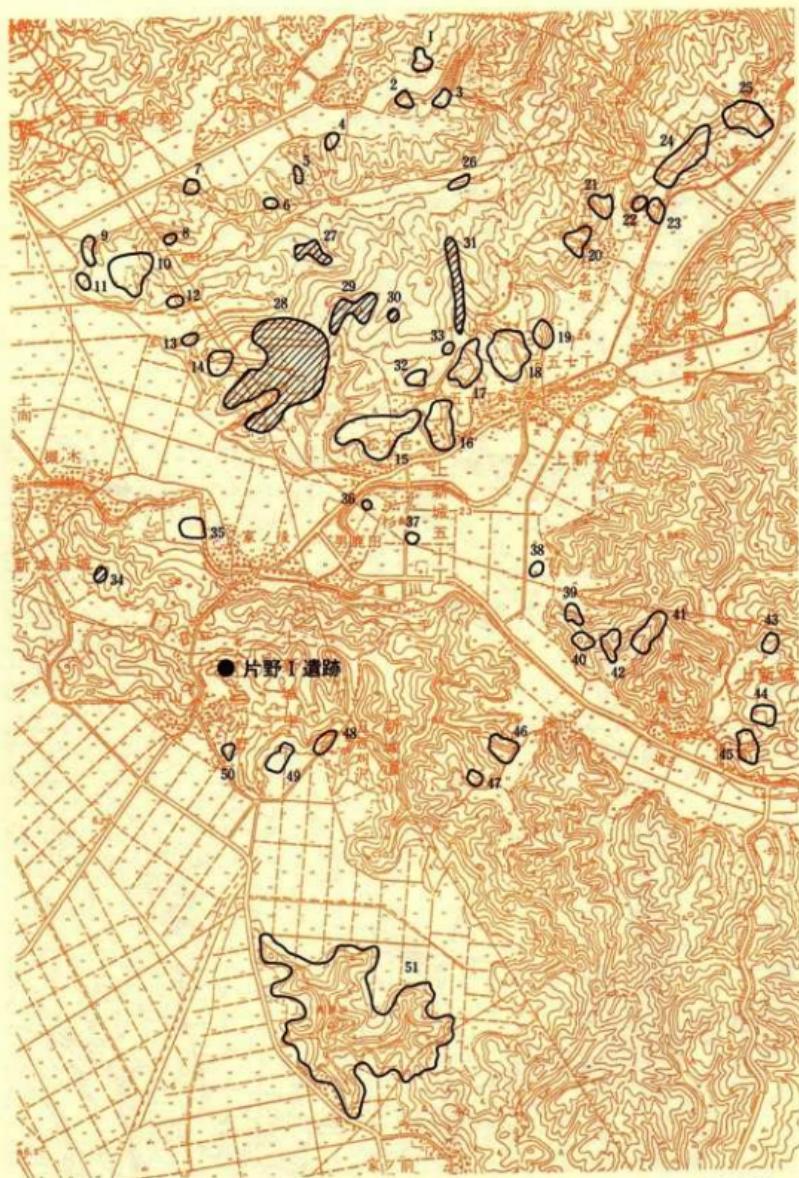
五十丁地区において、小林I・II（33）・III、松木台II、保多野地区において、谷地I（14）、堂ノ前III・IV、大保、保多野I・II、下新城小友地区において、猿田沢I・II（1・2）、家ノ前I・II（3・4）、長面I・V（7・6）、羽鳥沼I（26）、塩田沢（9）、末沢（10）、羽田台II（11）、末沢I・II（12・13）、岩城地区において堂ノ前（35）で須恵器、土師器が採集されている。これらの遺跡は、窯跡の周辺に分布していることから、土器生産に関連する遺跡群である可能性が高い。その他、道川地区的桑ノ木I・II（39・40）、山ノ下II（41）、牛沢（43）、雷I・II（44・45）、五六沢（46）、中地区的五百刈沢（48）、鼻コシリ（49）、片野II、外旭川箕岡地区的尼館で古代の遺物が採集されている。

### 縄文・古代の複合遺跡

谷地II、保多野I・II、大保、堂ノ前III・IV、小林I・III、松木台II、片野II、尼館が縄文と古代の複合遺跡である。

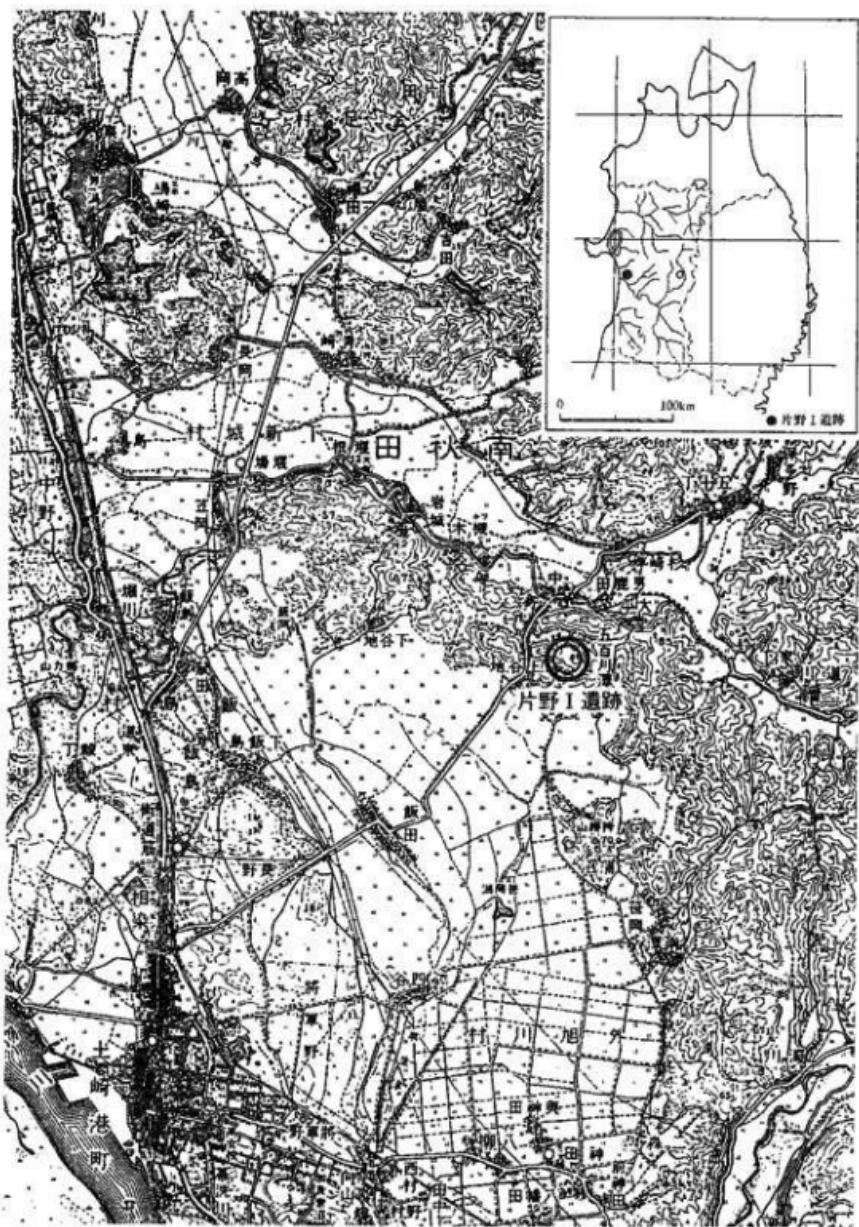
### 参考文献

- 秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡発掘調査報告書」 1980  
秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡－学校改築に伴う緊急発掘調査概報」 1989  
秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡－学校改築に伴う緊急発掘調査概報」 1991  
秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡－学校改築に伴う緊急発掘調査報告書」 1992  
秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」 1973  
奈良修介・豊島昂 「秋田県の考古学」 吉川弘文館 1967



第2図 周辺の遺跡分布

1 : 25,000



第3図 遺跡の位置

1 : 50,000

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

片野Ⅰ遺跡は、秋田市上新城中字片野283外に所在している。

秋田市の東北部にある遺跡までの交通手段を説明すると、最寄りの駅はJR奥羽本線土崎駅であり、駅から東北方向へ4km程離れている。秋田駅からは上新城行きのバスを利用し、中入口でおりるとよい。バス停から南に向いた山側に遺跡がある。

遺跡のある丘陵地の裾部には老人福祉施設幸楽園と片野の集落があり、集落を横断する市道が通っている。市道から20~30m高い丘陵地全体が調査対象地である。起伏のある丘陵地を概観すると道路計画杭NO.26の東側に頂上部があり、東西を区画している。東側と西側にそれぞれ尾根状の高まりがあり、その裾には南側の沖積地に向かって開く沢が入っている。

遺跡の調査前の現況は、原野であった。戦前は上谷地・中集落の草刈場として使用していたが、戦後は上谷地・中・片野の集落の人達が畑地として開墾したことであった。なお丘陵地の中程に東から西に下る沢が入っており、その中位面は昭和30年頃まで水田として使用されていた。

### 第2節 調査の方法

#### 1. 調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象地に一区画 $4 \times 4$ mのグリッドを設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭NO.27を原点として国家座標第X系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Y軸とし、これに直行するラインを東西基線X軸とした。

原点NO.27を基準交点MA50とし、Y軸に2桁の算用数字、X軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。南北はIから91まで、東西はIBからRCの名称が付された。

#### 2. 発掘方法および記録作成

地形と範囲確認調査の結果を考慮し、AからMまでの調査区を任意に設定して調査を進めていった。

遺構確認は黒褐色土および地山の明黄褐色土層面で行った。遺物は表土から地山まで掘り下げる間に出土したものに番号を付して取り上げた。遺構内のものは一括して取り上げたものもある。

〈遺物の記録〉 遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、区域内における遺物番号を付して取り上げた。

〈実測図の作成〉 精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な造り方測量によって図面を作成した。遺構の平面図・断面図は、1/10・1/20の縮尺で作成した。

遺跡全体の土層図は、区域毎に作成した。十層図は1/20の縮尺で、色調・土質・堅さ・混在粒子等の特徴を記載した。

〈写真〉 現場の写真は6×4.5と3.5mm判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムは、モノクロおよびカラーリバーサルの2種類を使用した。撮影コマ数は874である。遺物の写真撮影は35mm判のカメラを使用し、モノクロで行った。

### 3. 遺物整理の方法

〈遺物の整理〉 出土した遺物は55×34×15cmコンテナで80箱である。遺物は素材の種類から大きく土製品と石製品・金属製品・木製品に分けられ、土製品は素焼きの焼き物である土器・須恵器・ロクロ土師器と、わずかな陶磁器である。石製品は石器と石器素材である。金属製品として錢貨が2点ある。木製品には箸の他杭材・棒材・板材がある。

これらの遺物はすべて洗浄した。土器は洗浄後に接合作業を行った。なお土製品と石製品には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。金属製品はプラスチックケース内に、木製品は水没の状態で保管している。

〈土器・石器の実測図作成〉 4分の1以上遺存する土器を1/1で図化した。また主な土器破片と錢貨の拓影をとる。また石製品・木製品もすべて1/1で図化した。

## 第3節 調査日誌

=平成4年=5月11日 ベルトコンベアー他器材の備え付けを行い、調査準備をする。

5月12日 A区のN0.34~36中心杭周辺から粗掘りを開始する。

5月27日 OG81グリッド周辺で注口土器、台付鉢等縄文時代晩期の遺物が出土する。

6月2日 A区の粗掘りと並行してD区の粗掘りを開始。D区から縄文後期の土器が出上する。

6月10日 A区の粗掘りを終える。

6月17日 D区は粗掘りを終える。地山面を精査したが、遺構は検出されず、地形測量を行う。

6月18日 C区の馬の背状の丘陵部の粗掘りを開始する。斜面には幅1~2mのトレンチを入れ、遺物の有無を確認する。丘陵部南東下の平坦地であるB区の粗掘りも開始する。

6月24日 A区の調査を終える。検出された遺構は土坑1基、ピット群である。

7月2日 丘陵上の平坦面で陥し穴遺構3基が検出される。

7月14日 B・C区の粗掘りを終え、遺構の精査を進める。

7月17日 N0.30計画杭より南側のE・F区をあらたに拡張して調査することになった。

- 7月27日 E・F区の粗掘りを開始する。
- 7月30日 F区NC57グリッドより块状耳飾が出上する。
- 8月27日 F区の粗掘りを終え、地山面を精査して行く。
- 9月10日 E区の粗掘りを終え、検出された遺構の精査を行う。
- 9月17日 E区・F区の全景の写真撮影を行う。
- 9月20日 B～E区の遺構の実測図作成を行う。
- 10月9日 遺構の実測、地形測量を終え、現場作業の全工程を終了した。
- =平成5年= 5月11日 G区において調査区内の伐採木除去を開始。ベルトコンベアーを配置。
- 5月17日 G区東側より粗掘りをはじめた。山頂から下の沢へ向けて表土を除去して行く。
- 5月21日 G区東側の沢部で天王山式土器片出土、土器が出土した褐色土層面で精査して行く。
- 5月31日 MAラインのベルトセクションの土層図を作成する。褐色土層面で全面精査を行う。
- 6月10日 KC47・48グリッドで、陥し穴遺構と思われる落ち込みを確認する。
- 6月14日 褐色土層を除去、地山面までの掘り下げを行う。同時に遺構の半截をはじめめる。
- 6月29日 全景写真撮影のため地山面を精査して行く。
- 7月1日 遺構の写真撮影を終え、調査区域をH・I区に移す。遺構の実測作業は継続する。
- 7月6日 ベルトコンベアーの配置を終え、H・I区の南側から粗掘りをはじめめる。
- 7月20日 G区の地形図作成。H区北側中腹部分で古代の住居跡の掘り込みを確認する。
- 8月3日 H区道路際で陥し穴遺構を確認、I区は湿地に近い場所まで掘り進む。
- 8月9日 盛土を取り除いたI区の湿地北側の掘り下げ、H区の尾根上位の粗掘りを行う。
- 8月24日 H区の粗掘りの一部を終え、陥し穴遺構・住居跡の掘り下げをはじめめる。
- 8月30日 I区の湿地上位の粗掘りを終え、湿地のプランを確認する。掘り下げを開始する。
- 9月1日 I区の湿地より上位の斜面部は、遺構確認をかねて精査を行う。
- 9月6日 H区の遺構精査、斜面の精査を終える。南東部分の高台にトレントを設定する。
- 9月10日 湿地の掘り下げを継続しているが、さらに北と西に調査区を拡張していく。
- 9月16日 南東部分の高台のトレント精査を終え、J区の粗掘りを始める。
- 9月24日 I区の掘り下げが進み、下の木材を出して行く。調査区北側斜面の粗掘りを行う。
- 9月28日 I区の木材を出して精査が完了し、写真撮影を行う。
- 10月7日 J区の東西ベルトセクション図を作成して、土層観察用ベルトを除去する。
- 10月8日 I区内の土層図作成のため写真撮影を行う。
- 10月12日 J区内中央窪地の黒褐色土層面で出土遺物の取り上げを行い、周辺を精査して行く。  
また確認していた陥し穴遺構の掘り下げを行う。
- 10月18日 山裾に確認した溝状の落ち込みを掘り下げて行く。

- 10月20日 I区内の材を取り上げて行く。J区内では焼石焼土周辺の精査を行う。
- 10月28日 I区の木材の取り上げ、J区の溝および焼石焼土周辺の掘り下げを終了した。区域内の精査をした後に、写真撮影を行った。
- 10月30日 器材等のあと片付けをすませ、調査を終了した。
- =平成6年= 6月27日 ベルトコンベア-他器材の備え付けを行う。作業員は健康診断を受診。
- 6月28日 刈払い後の灌木や草を片付け、K区南側の急斜面部分ではトレンチ調査を開始する。
- 6月30日 南側斜面では遺物が少量出土しただけであった。黒褐色土の落ち込みが見られた部分はトレンチを拡幅する。南側丘陵上部の粗掘りを開始する。順次北側へ進行する。
- 7月4日 KG18グリッドの中央部において、漸移層で土坑を確認する。
- 7月6日 粗掘りと遺構精査を同時に進めて行く。遺構周辺の出土遺物の記録を取りながら精査して行く。KC18グリッド周辺に天王山系の土器が数点出土。JG17グリッド周辺では縄文中期前半の土器片が多い。丘陵上部で上坑など遺構を確認する。
- 7月12日 精査中の遺構にフラスコ状土坑を確認する。粗掘りは中央沢部に進行する。
- 7月15日 南側丘陵部で、旧地形図を作成する。また随時基本土層図の作成も進めている。
- 7月21日 地山の乾燥、また地山土が埋め込まれた土坑が多いという遺構の特徴により、遺構検出に手間取る。南側丘陵の南東斜面では北陸系の土器片を含めた遺物が出土する。
- 7月27日 南側丘陵の北側斜面に粗掘りを進める。遺物が多く出土する。この後の見通しを得るために、北側丘陵上部のトレンチ調査を開始する。畑造成時の盛土を確認する。
- 8月8日 フラスコ状土坑の断面観察、埋土の由来を検討するため遺構の断ち割りを行う。
- 8月30日 調査の主体を北側丘陵および間の沢部に移すため、ベルトコンベアの再配置を行う。北側丘陵の粗掘りを開始する。沢部の土層図を作成する。
- 9月6日 南側丘陵上部で、地山に40cm程の深さでトレンチを入れる。降雨後、遺構の壁の線が確認される。このため南側丘陵部の遺構になりそうな褐色部分を再精査する。
- 9月7日 北側丘陵の斜面のトレンチ調査を開始する。
- 9月13日 L区・M区のトレンチ調査を開始する。
- 9月27日 K区北側丘陵上部での遺構精査開始。
- 10月3日 晴天に恵まれ航空写真撮影を行う。
- 10月7日 L・M区の粗掘り開始。L区はトレンチ調査で遺物の出土した周辺のみを広げた。
- 10月28日 M区の旧地形図を作成する。K区では掘り下げ後の全景写真撮影を行う。
- 10月31日 遺構図面の補足、旧地形図の補足を行う。器材を撤収し、調査を完了する。

## 第4章 調査の記録

### 第1節 各調査区の地形と層位

調査対象地の範囲が広く、起伏にとんだ地形であることから現況の地形を考慮し、沢を境として各区域に分けて調査を進めた。なお湯西瀬が地形の表層基盤となっており、遺構確認は黒褐色土・暗褐色土の表土を除去して、湯西瀬上面の明黄褐色土層で行った。

＜A区の地形と層位＞A区は、C区の丘陵中腹が北に張り出た舌状部にあたる。東側には深く切り込む沢があり込んでおり、西側にもV字状の沢があり、下の水田に下がる急斜面となっている。沢の影響を受けて平坦面は狭い。平坦面の堆積土は黒褐色土で、50cm前後堆積していた。沢につながる斜面では黒褐色土の堆積が厚く、60cm～80cmであった。

＜B・C区の地形と層位＞西に頂点をもつ馬の背状の丘陵地で、東に向かって下っている。二段の鞍部を経て西側の傾斜が緩やかになっている。丘陵地を覆う堆積土は浅く、暗褐色土が30cm前後堆積していた。B区はC区の裾部にあたり、南には狭く深い沢があり、沢に向って傾斜している。斜面下部には黒褐色土が1m前後堆積していた。

＜D区の地形と層位＞D区は東と西の二つの丘陵地に挟まれた北に抜ける沢の頂部にあり、A区の東側の沢につながっている。調査前は畑として活用されて平坦であったが、丘陵地から流れこんだ黒褐色土が厚く堆積しており、最深部は80cmであった。

＜E区の地形と層位＞E区は北にのびる丘陵中腹の平坦部とD区に下る斜面である。北西に延びる張り出しも含めた。中腹を覆う黒褐色土の厚さは40cm前後であった。

＜F区の地形と層位＞F区はE区の南にある丘陵中腹の平坦部であり、南側が深く入る沢に面している。中央が窪んでおり、堆積していた黒褐色土の厚さは60cm前後であった。

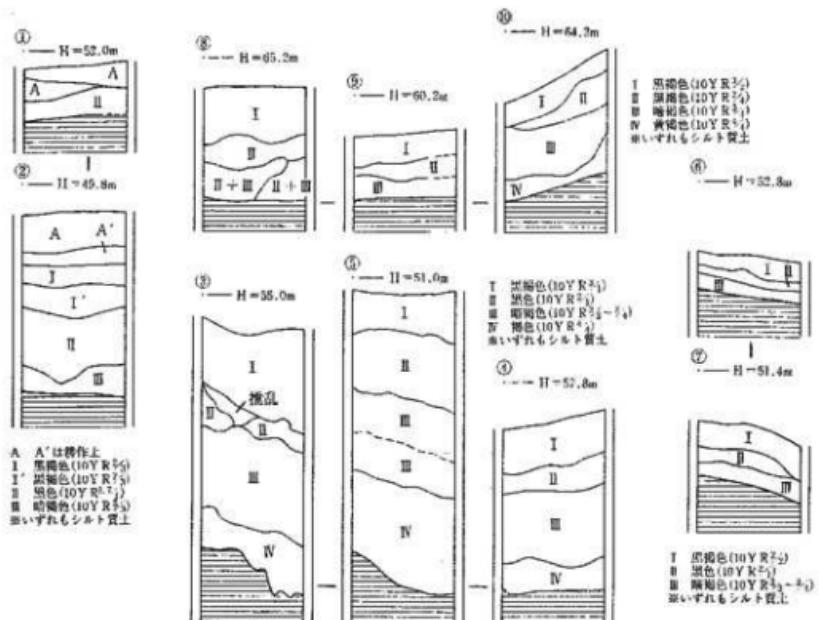
＜G区の地形と層位＞東に張り出す丘陵部の頂上部で小山状を呈している。畠地として開墾されており、表土は浅く暗褐色土が30cm前後堆積していた。

＜H・I区の地形と層位＞東側の沖積地に延びる大きな沢の傾斜地にあたる。H区は斜面の高位部にあり、I区は低位部の窪地にあたる。H区表土の黒色土は浅く、30cm前後で地山に達した。I区では沢の中央に1m前後の盛土があり、盛土を除去した下が昭和30年頃まで耕作されていた水田であった。水田耕作土の黒色土が50cm前後の深さであり、さらに下には深さ1.5mの泥炭層が確認された。

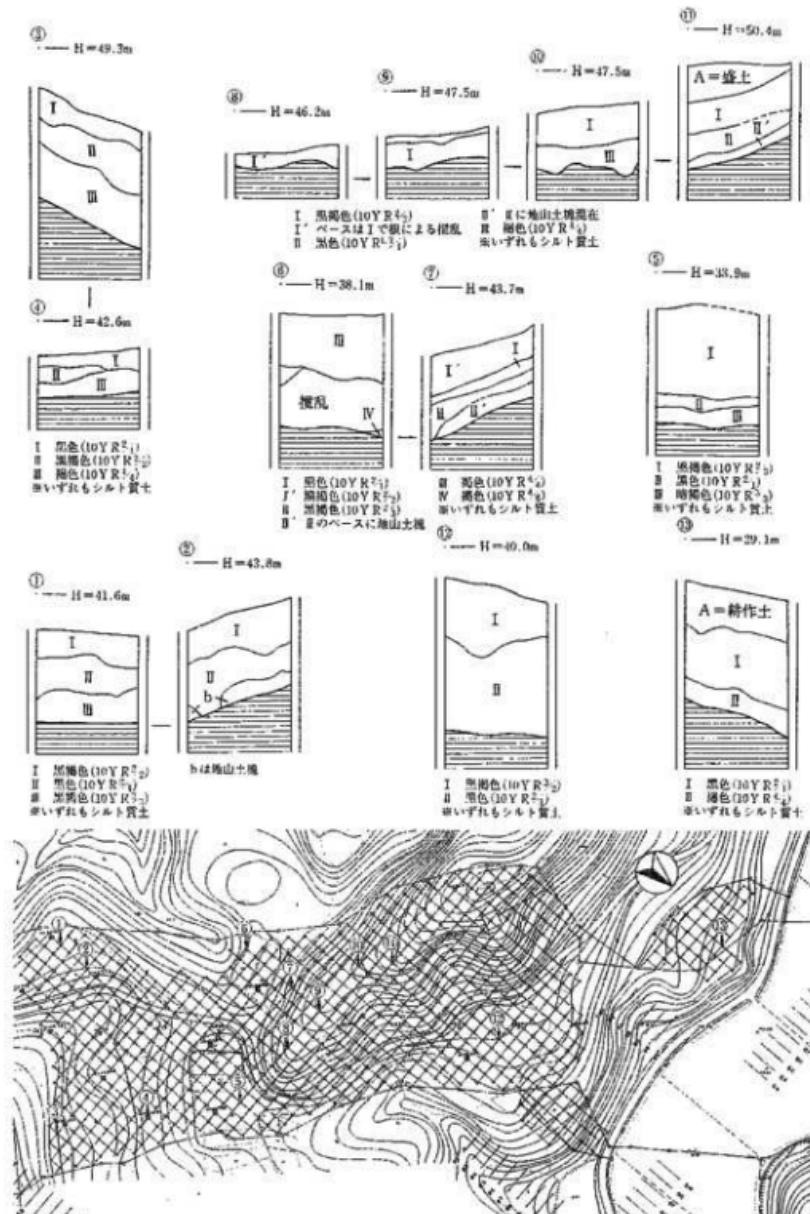
＜J区の地形と層位＞西に下る緩やかな斜面で、南は急斜面で五百刈沢の深い沢で区画されている。窪地が中央にあり、黒褐色土の堆積が50cm前後であった。丘陵の裾を走る溝状の落ち込みがあり、地割れの痕跡とみられた。

＜K区の地形と層位＞西に延びる丘陵地頂上部の中央に浅い沢が入り、二つの小山のようにみ

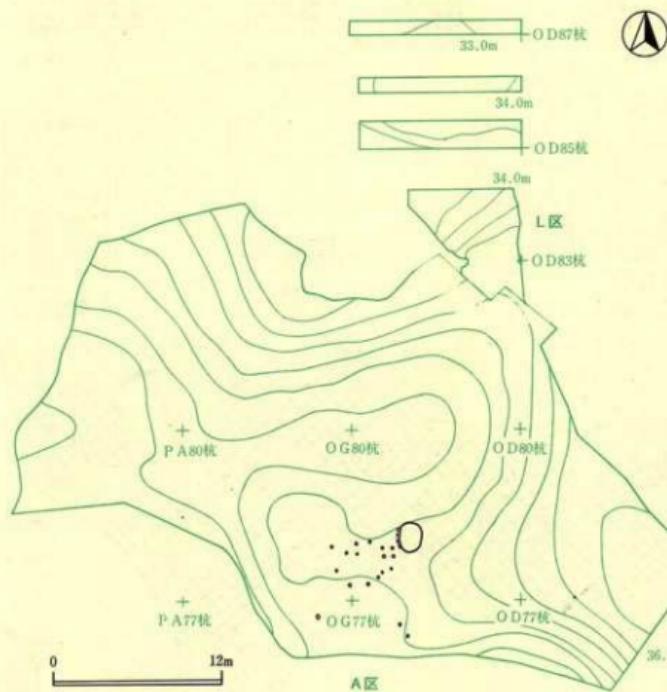
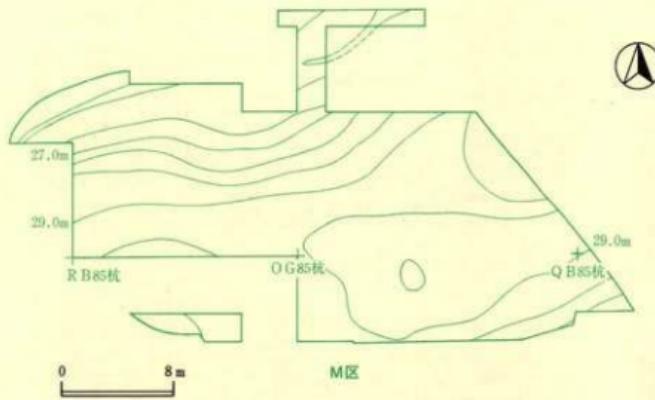
える。頂上部の黒色土の堆積は薄く、20cm前後で地山に達し、沢部は1m前後の堆積があった。  
 <L・M区の地形と層位> L・M区は拡幅計画に伴い調査区域が追加されたものである。L区  
 はA区の北側斜面にあたる。M区はA区の北西にあり、斜面中腹の東西に長い平坦部である。  
 L区の堆積土は黒褐色土で、深さが50cm前後であった。M区では斜面際の堆積が1mであった。



第4図 グリッド配置・土層模式（1）



第5図 グリッド配置・土層模式（2）



第6図 A・L・M区の造構位置

## 第2-1節 A・L・M区の検出遺構と出土遺物

A区の中央高位部から東側に向かう緩やかな沢頭で、小穴群と土坑が確認された。北方向に下がる急斜面と東側に向かう緩やかな斜面で、縄文時代晚期の土器・石器が多量に出土しており、生活用具の廃棄場所として確認された。L・M区で検出された遺構はない。

### 小穴群 第7図-

＜位置・確認状況＞OF77・78、OG77グリッドにまたがって検出された。地山直上の漸移層で、円形に巡るピット群として確認した。

＜平面形・規模＞P2～5・P7～12・P15を結んだ線で直径3.6mの円形、P1・P3～5・P7～14を結んだ線で長径4.1m・短径2.8mの橢円形を呈する。15個を一覧表にしたが、直径19.8～34.2cmであり、確認面からの深さが14～48cmである。

＜埋土の状況＞いずれも黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞いずれもほぼ垂直に落ち込み、箱形を呈する。

＜遺物＞上面に縄文時代晚期の土器破片が散布していたが、ピット内からの出土遺物はない。

### 第1号土坑（SK01） 第7図-

＜位置・確認状況＞OE77・78、OF77・78グリッドにまたがって検出された。地山直上の漸移層で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞開口部はいびつな円形を呈し、長径1m60cmである。確認面から最深部まで34cmである。実測図では南側が垂直に落ち込んでいるが、地山を掘り過ぎたためであり、実際はなだらかに落ち込んでいたものと思われる。

＜埋土の状況＞下位から底面の壁際には褐色土（4層）が堆積し、その上に黒褐色土（3層）が凹レンズ状に入り、上位は暗褐色土（1層）が覆っていた。褐色土と暗褐色土の間には地山ブロックが密に混入する褐色土（2層）が挟まっていた。

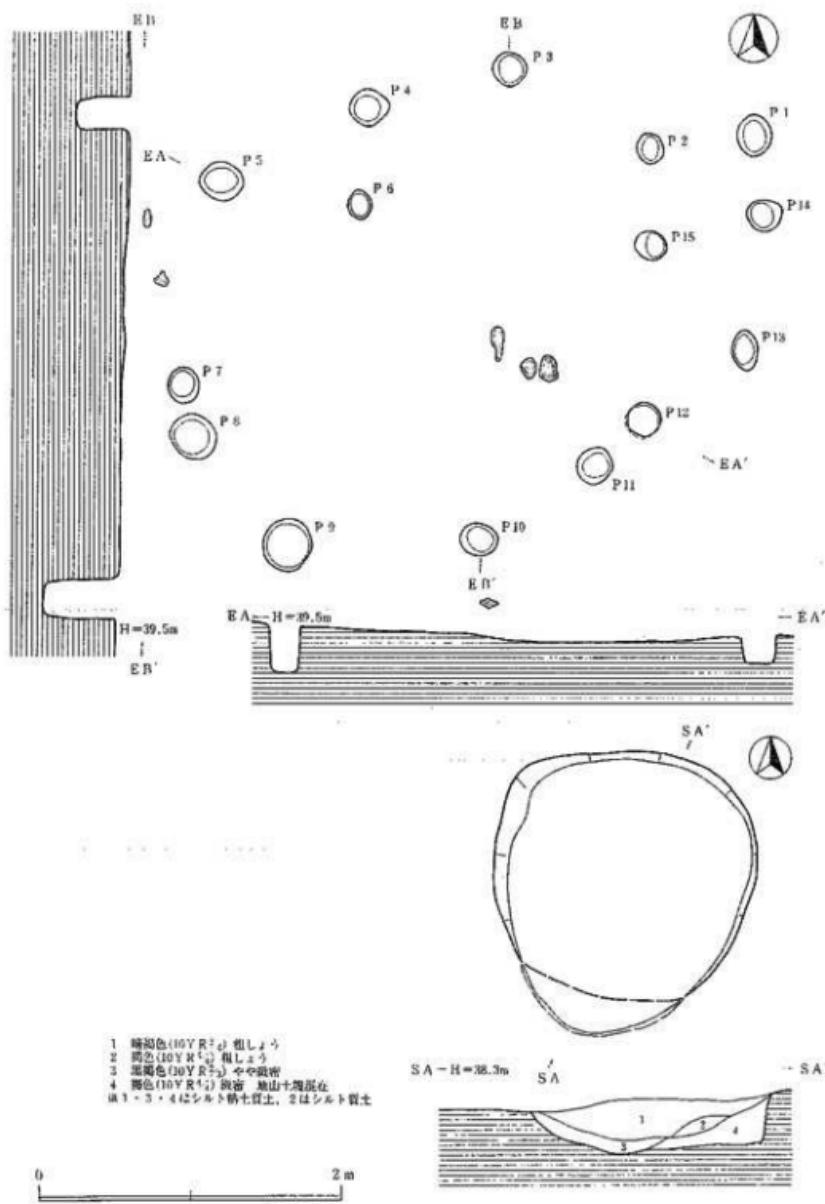
＜断面の形状＞北側の断面は、開口部からほぼ垂直に落ち込みL字状を呈し、南側の断面は、ノの字状を呈していたと推定される。

＜底面の状況＞底面はほぼ平坦であるが、北から南に向かってやや傾斜している。

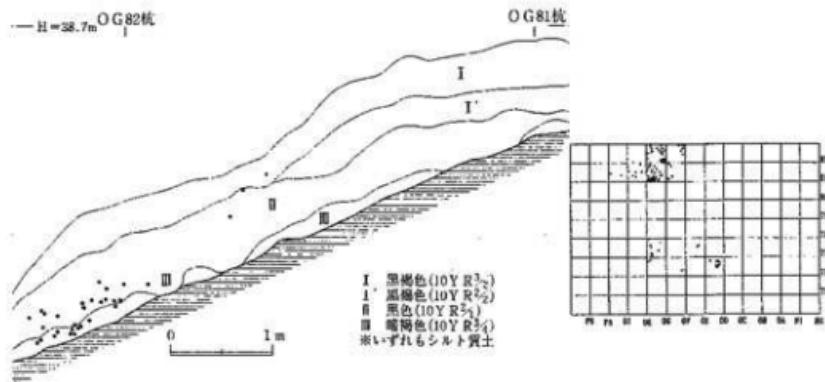
＜遺物・その他＞土坑内からの出土遺物はない。

### 遺物包含層について 第8図-

平坦部の肩部から5m程下の傾斜面で、縄文時代晚期の遺物が多量に出土している。OG81杭からOG82杭にかけての土層図を示したが、遺物はI層とした黒褐色土層からはごく少量であり、II層とした黒色土下層にまとまる傾向が見られた。



第7図 ピット群と第1号土坑



第8図 A区の斜面層位と遺物分布

## 第2-2節 A・L・M区の遺構外出土遺物

A・L・M区は北に向いた丘陵中腹斜面であり、それぞれが近接していることから、出土遺物を一括して土器と石器、土製品と石製品に分けて分類し、説明を加えた。

**=A・L・M区の土器=** 土器は時期で分類し、器形・部位、文様の特徴を記し、最後に型式分類を行った。第10図から第33図まで実測図を掲載し、説明は挿図名と挿図番号で行った。

〔A：縄文時代中期前葉の上器群〕—第10図1・2—

10-1・2は半截竹管による沈線および隆沈線で文様が描かれている。

〔B：縄文時代中期後葉から後期前葉の土器群〕—第10図3・4—

10-3は隆線で区画された無文の文様帯があり、縄文地との境となっている。

10-4は沈線により文様が描かれている。

〔C：縄文時代後期中葉の上器群〕—第10図5—

10-5は口縁部の突起であり、刺突列が付されている。

〔D：縄文時代晚期前葉から後葉の土器群〕—第10図6～9、第11図～第29図—

第II層の黒褐色土から一括して出土した縄文時代晚期の土器群を時期的・型式学的検討を加えるために土器属性を検討した。属性としては出土土器の器種・口縁部の形状、口縁端面の形状、口縁装飾の類型、文様帯における単位文様の類型を取り上げた。復元土器を図化し、破片資料は個体認定のため口縁部を主に取り上げた。

本文では、器形の類型毎に基準を設け、口縁部の形状、口縁部の文様を分類し、二つの特徴を組み合わせて、型式的区分を付記した。なお口縁端面形・口縁装飾の類型等は表にまとめた。

器形の基本枠は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口・香炉形土器があり、これらの内の深鉢・鉢・浅鉢・皿の4種類は、器高と口縁部の最大径との比率の大きさで区分した。

#### <深鉢形土器>

口径に対する高さの比率は0.8以上でいわゆる胴長の土器である。

口縁部の形状は次のように分類される。

A：屈曲をもたず、緩やかに内湾するかあるいは直線的に立ち上がる。

B：口縁部と胴部との境にくびれをもち、外反する口縁部をもつ。

文様帶は口縁部にまとまり、次のような構成のものに分類できた。

a：地文が縄文で、沈線による平行線あるいは弧状線の組み合わせで文様が描かれている。

b：無文帶に沈線で入組三叉文が描かれている。

c：平行線内に点列か截痕列が断続的に刻まれて文様帶が描かれている。

d：口唇に平行な沈線が引かれている。

e：上記に該当する装飾文様をもたない。

\*復元土器の第10図7はB bに分類され、大洞B式に比定される。破片の14-1~4はA aに、14-5~7はA bに分類され、大洞B式に比定される。14-8~11はA cに分類され、大洞B C式に比定される。14-12~15はB cに分類され、大洞B C式に比定される。14-16・17はB dに分類され、14-18はB eに分類され、大洞C 1式に比定される。第23~27図には口縁がAに分類されるいわゆる粗製土器である。第23図で貝殻条痕文、第24・25図で斜縄文、第26・27図で斜縄文であるが横位に結節が入るものと付加条、網目状撚糸文が施されたものを掲載した。

#### <鉢形土器・台付鉢形土器>

口径に対する高さの比率は0.8から0.3の範囲にあり、最大径が口縁部か胴部上位にある。精製土器で復元できた個体数も破片点数も多く、総出土土器の個体数に占める割合が高い。

A：屈曲をもたず、緩やかに内湾するかあるいは直線的に立ち上がる。

B：口縁部と体部との境にくびれをもち、外反する長い口縁部をもつ。

C：口縁部と体部との境にくびれをもち、口縁部が短く外傾あるいは直立する。

D：口縁部と体部との境にくびれをもち、口縁部が内湾気味に外傾する。

文様の構成は口縁部にまとまるものと体部の上半まで下がるものがあり、次のような構成のものに分類される。

a：幅の広い羊齒状文が展開される。

b：幅の狭い羊齒状文が展開される。

- c : 無文帯に沈線でK字状文が描かれている。
  - d : 平行線内に点列か載痕列が連続して付される文様帯がある。
  - e : 口唇に沿って平行線だけが引かれており、断続的に刻みが入っている。
  - f : 口縁部が無文で口唇に隆帯状の飾りが付いている。
- \*先に復元土器について説明していく。口径に対して高さの比率の大きいものであり、第11図1はA aに、11-2はA dに、11-3~5はC b・C dに分類され、大洞BC式に比定される。11-6はA dに分類され、大洞C 1式に比定される。第12図には比率の小さいものを掲載した。12-1はA aに、12-3・4はA d・C dに分類され、大洞BC式に比定される。12-2はA eに分類され、大洞C 1式に比定される。第12図5~7と第13図1~3には台付および台付になると思われるものを掲載した。12-5・6はC bに、12-7はD aに、13-1・2はB cに分類され、大洞BC式に比定される。破片資料の第15図1~3はA aに、15-4~21はA bに、15-22はA cに分類され、大洞BC式に比定される。16-1~19はA eに分類され、大洞C 1式に比定される。第17・18図の破片は復元土器にみられない形状・文様をもった上器群である。17-1はB aに、17-2はB cに分類され、大洞BC式に比定される。17-4はB dに、17-5・6はB fに分類され、大洞BC式に比定される。17-7・8は口縁部が短く立ち上がり、無文帯となっている。7は体部に沈線で文様が描かれ、8は繩文が施されている。器形から大洞BC式に比定される。17-9~11はC bに分類され、大洞BC式に比定される。17-12~14はC dに分類され、大洞C 1式に比定される。17-15は口縁部が直立し、体部との境は明瞭であり、頸部にそって中に刺突列が連続して付された隆帯がある。大洞C 2式に比定される。第18図には口縁部から頸部にかけて羊齒状文が展開されるもの、平行線内に点列か載痕列が連続する文様帯が展開されているものをまとめた。18-1~6は第12図5に、18-7~18は第13図3に器形および文様のタイプが似通っており、大洞BC式から大洞C 1式に比定される。18-19~24は口縁部がわずかに内湾する形状を呈しており、器高の低い鉢になるとみられる。大洞BC式から大洞C 1式に比定される。

#### <浅鉢形土器・皿形土器>

- 口径と器高との比率が3分の1前後のものである。口縁部の形状は次の3類に分類できる。
- A : 口縁部が外傾する。
  - B : 口縁部が内湾する。
  - C : 口縁部が内湾し、端部が短く直立する。
- 文様は口縁部から体部にかけて構成され、次のような構成のものに分類される。
- a : 無文の地に沈線による円弧状の文様を描いている。
  - b : 口唇にそって平行沈線が引かれ、沈線内に載痕列が付されている。体部には沈線で区画さ

- れ、磨消部分と縄文充填部分が分かれており、充填文様の単位幅が広く展開されている。
- c：平行線内に刺突列が付され、体部に縄文が充填された半浮き彫り状の文様帯が展開される。
- d：口唇にそって平行沈線が引かれている。
- e：太い沈線が引かれ、間が浮線状に盛り上がる平行隆線となっている。

\*第19図1はA aに分類され、大洞B式に比定される。19-2の復元土器はB bに分類され、大洞BC式に比定される。19-3~12はB b類に分類され、大洞BC式に比定される。復元土器の19-13は口縁部がB類であり、浮き彫り手法による雲形文が器面に広がっており、大洞C 1式に比定される。20-1~10はB cに分類され、大洞C 1式に比定される。20-11~13はB dに分類され、大洞C 1式に比定される。20-14~16は深みがある無文の浅鉢で、大洞C 1式に比定される。20-17~18は形状がAに、20-19はC cに分類され、大洞C 2式に比定される。20-20~22は皿形土器に分類され、大洞C 2式に比定される。20-23~25はB eに分類され、大洞A式に比定される。

#### <壺形土器>

口縁部の形状は、次の4類に分類できる。

- A：頸部に屈折点をもち、口縁部が内傾する。
- B：口縁部と頸部に屈折点をもち、頸部が立ち上がり、口縁が短く外傾し、広口になる。
- C：頸部に屈折点をもち、緩やかに口縁部が外反する。
- D：長頸細首の口縁部で緩く外反する。

文様の構成は口縁部が無文になるものが多く、分類基準を設けない。

\*復元土器の第13図5はAに、13-6はBに分類され、大洞BC式に比定される。21-3~13はCに分類される。大洞BC式に比定される。13-2はDに分類され、口唇に浮文が付され、21-18~21は頸部に沈線による変形工字文が帯状に展開されており、大洞A式に比定される。第28図2~4に大形の壺になる胴部破片を掲載した。

#### <注口土器>

口縁部の形状は次の2類に分類できる。

- A：内傾する頸部の上に、袋状口縁部が付くものである。
- B：内傾する口縁部であり、袋状口縁部が付かないものである。

文様構成は、口縁部から体部にかけて観察し、次のように分類した。

- a：沈線による大柄な文様が描かれている。
- b：浮き彫り手法により、K字状文が展開されている。

\*復元土器の第13図4はB b類に分類され、大洞BC式に比定される。22-1~4はAに分類され、大洞BC式に比定される。22-3は口縁の形状は不明であるが、文様はaで、大洞BC

式に比定される。22-6-13はB bに分類され、大洞BC式に比定される。22-19は体部の張り出しに刻み目が入る隆起部があり、大洞C 1式に比定される。22-20-23は注口部である。

#### <香炉形土器>

第13図7に示したが、体部下半から台部にかけてのものである。体部の張り出しと台部の文様は平行沈線に点列が刻まれている。13-8は頭部の突起である。

\*13-7は大洞BC式に比定される。

=土製品・石製品= A区で出土した土製品と石製品を、第30図に一括して掲載した。

30-1・2はいずれも中空となる土製品であり、1は亀形を呈する。2には8mm前後の孔が空いている。

30-3は勾玉状土製品で、頭部に孔があり、垂飾品と思われる。細線で文様が描かれている。

30-5-8はミニチュア土器および手すくね土器である。8はコップ状になると思われる。

30-4は土器破片の縁辺を研磨した円盤状土製品である。

30-11は偏平な小石に孔が穿たれており、途中まで貫通していない。

30-9・10は長い石の側面に線状の刻みをいたるものである。

\*円盤状土製品は縄文時代後期に、その他は縄文時代晩期に帰属するものである。

#### [E:弥生時代前期の土器群] — 第30図12-18—

L区の第II層から出土した弥生土器を第30図の下に図示した。

30-12-15は口縁部の破片であり、12は口唇にそって縄文が施され、下は無文部となっている。

13-15は斜縄文が施されている。

16は頭部の破片であり、沈線が横方向に引かれ、下に列点が付されている。

17・18は底部の破片で、17は底辺にそって沈線が引かれている。18は底辺部が張り出している。

#### [F:平安時代の土器群] — 第31-33図—

M区の北斜面でまとめて出土した土器群である。第31-33図に掲載した。

31-1-3は須恵器の蓋であり、1は宝珠状のつまみ部で、2・3の口唇は垂直に下がる。

31-4-8は須恵器の壺である。4-7は底辺部が丸みをもち、口縁部が外傾している。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。8は高台が付いたもので、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

31-10-11は須恵器壺の破片である。外面に平行状叩き目が、内面に円弧状の当て板痕が残っている。

31-9・12・13はロクロ土師器の壺で、口縁部がゆるやかに内済している。13は底部との境が判然としており、底部の切り離しは回転糸切りである。底辺が削り調整されている。

31-14~16は小形の壺であり、回転糸切りあるいは静止糸切りで底部が切り離されている。15・16は底辺部が削り調整されている。

32-1・2は長胴壺の口縁部で、頸部がくの字状にくびれ、口縁部が外傾している。口管が短く立ち上がる。32-3~9は長胴壺の胴部上半の破片であり、33-1~6は砲弾形を呈する底部の破片である。33-7は平底の破片である。

=石器= 打製石器・磨製石器・砾石器で分け、形態的に分類した。第35~58図に実測図を掲載し、説明は通し番号で行った。

[1: 打製石器] -- 第35図~第52図 --

ア: 石鎌 (1~10) 矢の先についたもので、両面を連続細部調整によって三角形状の形を作り出しているものである。9点出土し、a: 基部が突出する有茎鎌、無茎のものは基部の形状によって、b: 平基鎌、c: 凸基鎌、d: 円基鎌に分けられる。

イ: 尖頭器 (11~14) 先端に三角形状の尖頭部を作り出したもので、石鎌より大型のものである。4点出土し、いずれも無茎で平基が3点、凸基が1点である。14は側縁が鋸歯状になっている。

ウ: 石匙 (15~35) 刺片の一端にえぐり込みの調整を両面から施し、つまみ部を作り出したものである。21点出土し、長さと幅の対比からa: 縦型、b: 横型の2種がある。横型のなかでも厚手の刺片に両面から交互に調整を施し、凸レンズ状の断面形を呈するものをc類とした。また全体が幅広いもので、つまみ部も幅があるものをd類とした。

エ: 石錐 (36~42) 穿孔に用いられた錐であり、7点出土している。a: つまみ状の頭部が作り出され、刃部が長いもの、b: つまみ状の頭部があり、刃部が短いもの、c: 棒状がある。オ: 嘴状石器 (43~44) 楕円形の膨らみの一端が嘴状に尖る。2点出土した。

カ: 石範 (45~52) 比較的粗い不連続な両面加工調整によって、整形したものであり、13点出土し、a: 側縁が真っすぐな短冊形を呈するもの、b: 基部に近い側縁が狭まり撮形を呈するもの、c: 側縁が膨らみ靴ヘラ状を呈するものに分けられる。45は基部にえぐり込みが入る。

キ: 刺片石器 不整形であるが、形状と調整加工の状況を加味して分類した。56~64は厚手の刺片に粗い調整加工を施し、台形か楕円を呈する形に整えたものである。

66~73は縦長の刺片の側縁に調整加工が施されており、先端が尖頭状となるものである。74~84は側縁あるいは先端となる一辺に連続する調整剥離を加えているものである。85~94は側縁に連続する調整剥離を加えており、曲線状にえぐり込む一辺をもっている。95~146は縁辺の一部に微調整剥離を加えているものである。146~154は厚手で石核になると思われる。

ク: 鍔状石器 (155~159) 台形状の大形素材を使用し、基部の側縁に粗い加工を施し、細い柄

になる部分を作り出し、幅が広い方の先端を刃部としているものである。5点出土し、a：柄が短く刃部が長方形に近い形のもの、b：柄が長く、刃部が台形状の撮形のものに分けられる。ケ：その他の大形石器（160～163）短冊形と菱形を呈するものである。

## 〔2：磨製石器〕—第53図・第54図—

ア：磨製石斧（165～179）研磨により斧形に整形したもので、15点出土し、刃部の断面形によって、a：両刃になるもの、b：片刃になるものがある。178・179は小形のものである。

イ：石棒（181～183）は5点出土しており、研磨により棒状に作り出したもので、一端が丸くなっているものと、棒状になるものに分かれる。

## 〔3：礫石器〕—第55図—第58図—

礫を素材としており、元の形状をそのまま残し、一部に調整加工痕がある。

ア：凹石（184～190）は礫の片面あるいは両面に細かい敲打による凹があるものである。7点出土した。191は磨面をもつ転用品である。

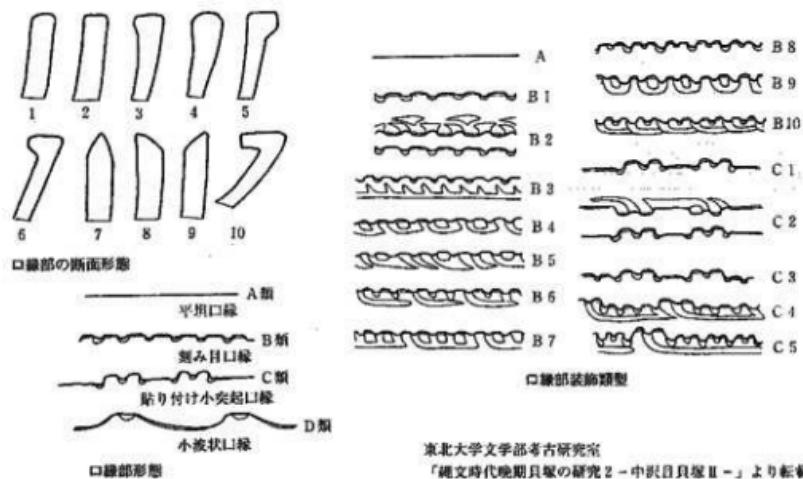
イ：磨石（192～200）礫の片面あるいは両面に磨面があるものであり、9点出土した。

ウ：石皿（201～203）おおきな自然礫の一面を擦りこんでいる。3点出土した。

エ：砥石（204・205）偏平であるが、方形を呈する両面が研磨されている。2点出土した。

オ：敲打石（164）長楕円形の礫の両端に敲打痕跡がある。

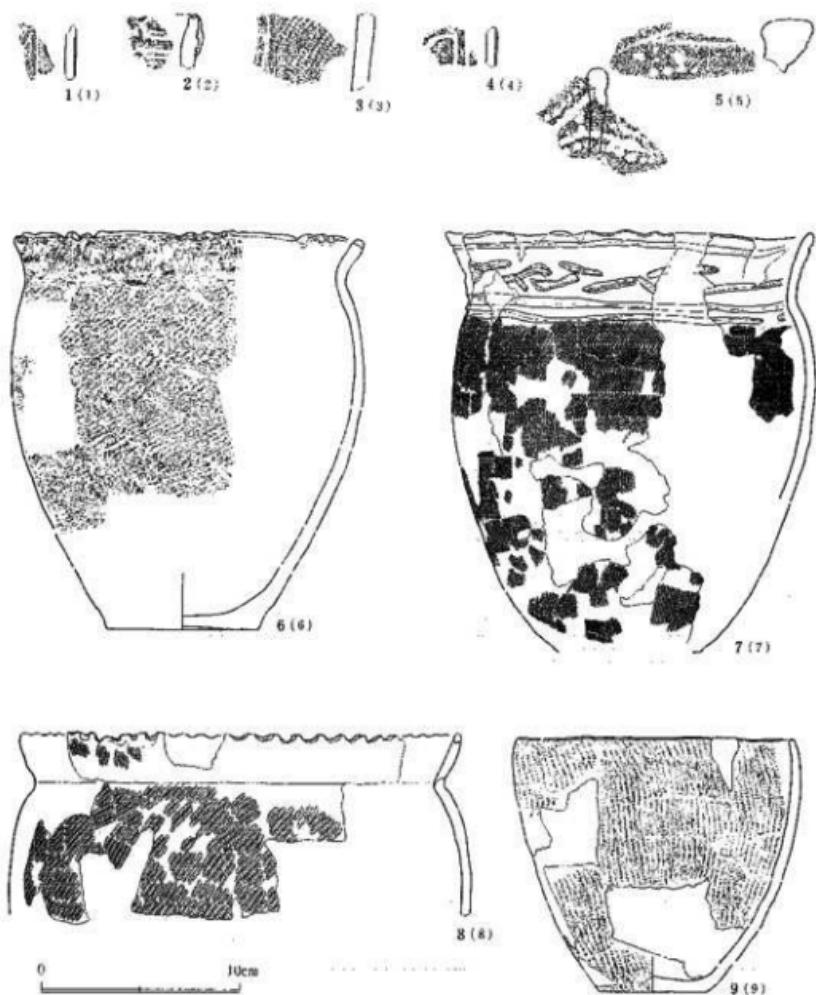
\*砥石は古代以降のものであり、その他は出土土器に対応する縄文時代後期・晩期に帰属時期が推定される。



東北大学文学部考古研究室

「縄文時代晩期貝塚の研究2 - 中沢貝塚II -」より転載

第9図 縄文晩期の土器属性凡例



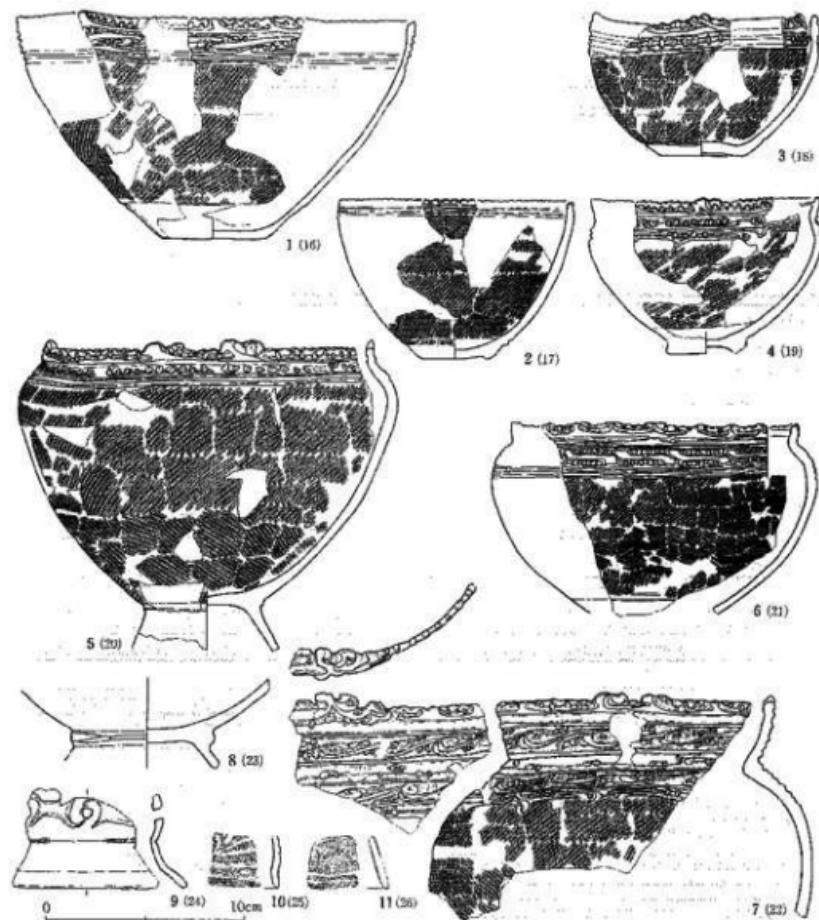
第10図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（1）—

NO	グリッド名・層位	層 位	形 位	端面形	口縁形態	口縁装飾	口縁文様	体部文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
6	OH80 II	泥 付	口ー底部	S	R	B1	無	弦 綱 文	17.6	7.5	(20.0)	内面スス付器
7	OH82 II	泥 付	口ー底部	I	D	B1	入模三叉文	斜 綱 文	16.6	17.0	21.3	
8	OG81 II	泥 付	口ー底部	I	B	B1	無	斜 綱 文	(21.2)	—	—	
9	OG81 II	泥 付	口ー底部	I	A	A	端位綱文	端位綱文	14.0	5.2	13.9	



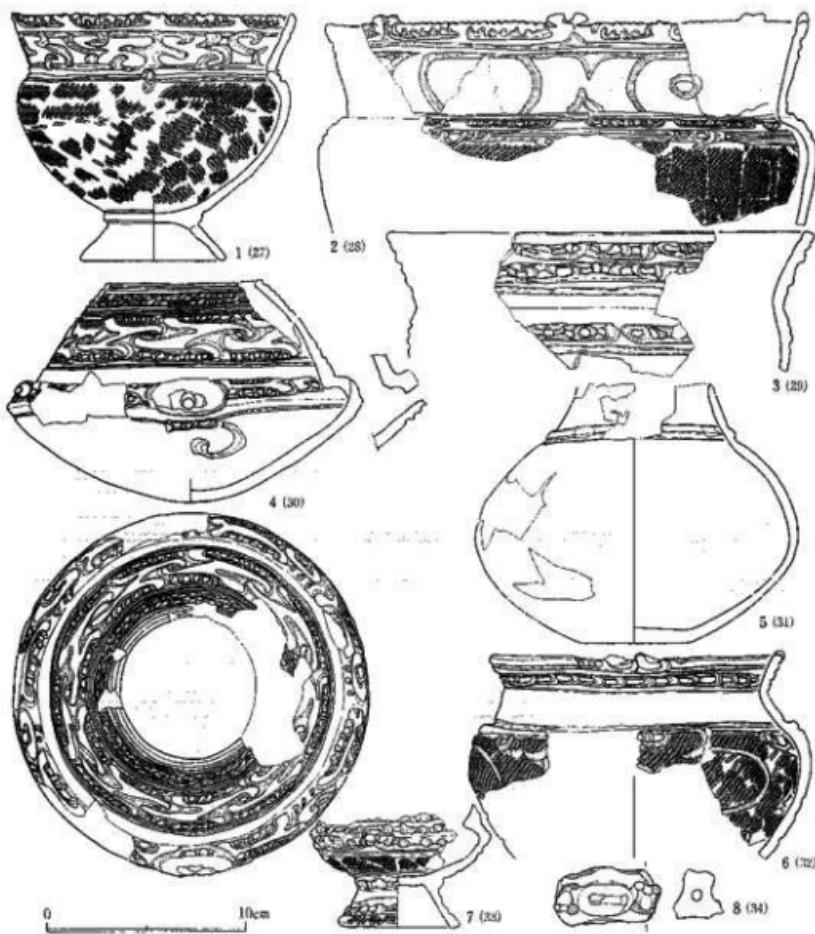
NO	グリット名・時代	器種	部位	造形	上地	下地	上地文様	下地文様	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
1	OG81	II	全体	口～底部	1	B	C4	平曲状文	斜褐色文	(25.6)	-	-
2	OG81	II	全体	口～底部	9	B	C5	螺旋状模印	斜褐色文	16.2	-	-
	OG81-82											
3	OG81	II	全体	口～底部	9	B	C4	平曲状文	羽状模印文	(19.6)	-	-
4	OG81-82	II	全体	口～底部	9	B	C3	横直列	羽状模印文	(19.4)	-	-
5	OG81	II	全体	口～底部	9	B	C4	数直列	斜褐色文	(19.0)	-	-
6	OG81	II	全体	口～底部	1	B	C1	平行波線	羽状模印文	(18.5)	-	-

第11図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（2）—



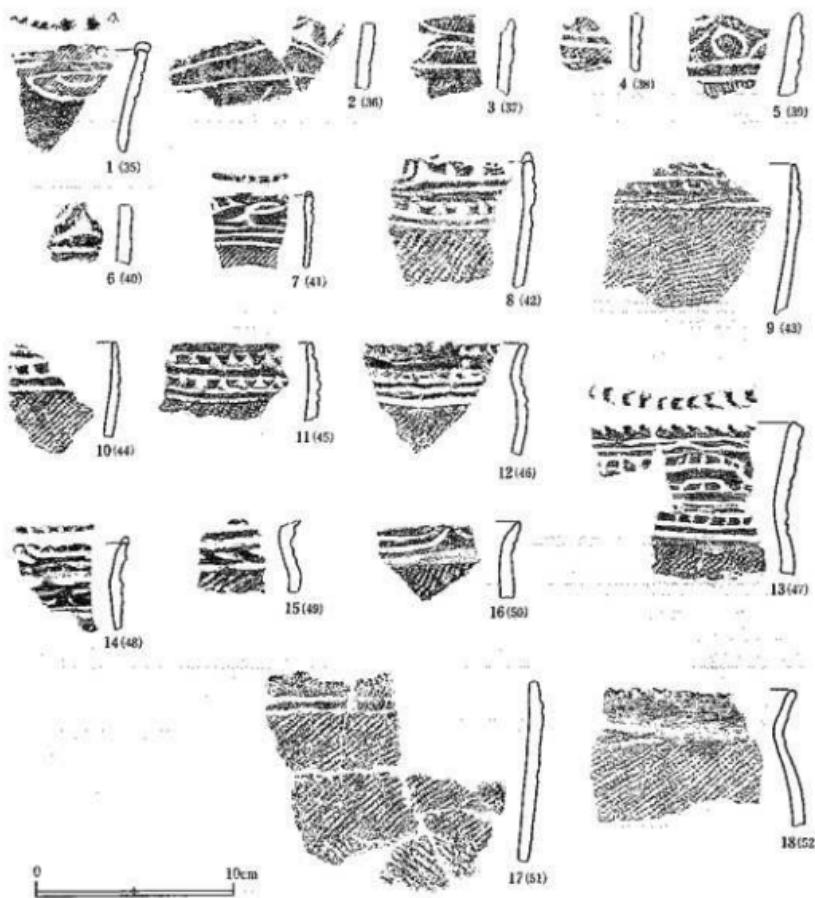
NO	グリッド名・層位	形 態	部 位	底 形	LH形態	LH後傳	口付文様	体部文様	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
1	OG81-II	杯	口-底部	9	B	B7	手ぬ状文	斜縞文	(20.1)	11.1	5.6	
2	OF81, OG81-II	杯	口-底端	1	B	B10	平行丸線	斜縞文	(11.8)	8.0	3.5	
3	OH81-II	杯	口-底部	1	B	C4	縦板列	斜縞文	(11.3)	7.0	4.3	
	OG82											
4	OG82, OH82-II	鉢	II-底部	9	B	C4	斜縞斜	斜縞文	(11.5)	8.0	(3.6)	
5	OH81-II	台付鉢	口-台部	1	B	C4	斜縞斜	斜縞文	(16.0)	-	-	
6	OF81-II	鉢	口-底部	1	D	B6	手ぬ状文	斜縞文	(14.5)	-	-	
7	OG81-II	鉢	口-底部	1	C	C4	手ぬ状文	斜縞文	-	-	-	

第12図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（3）—



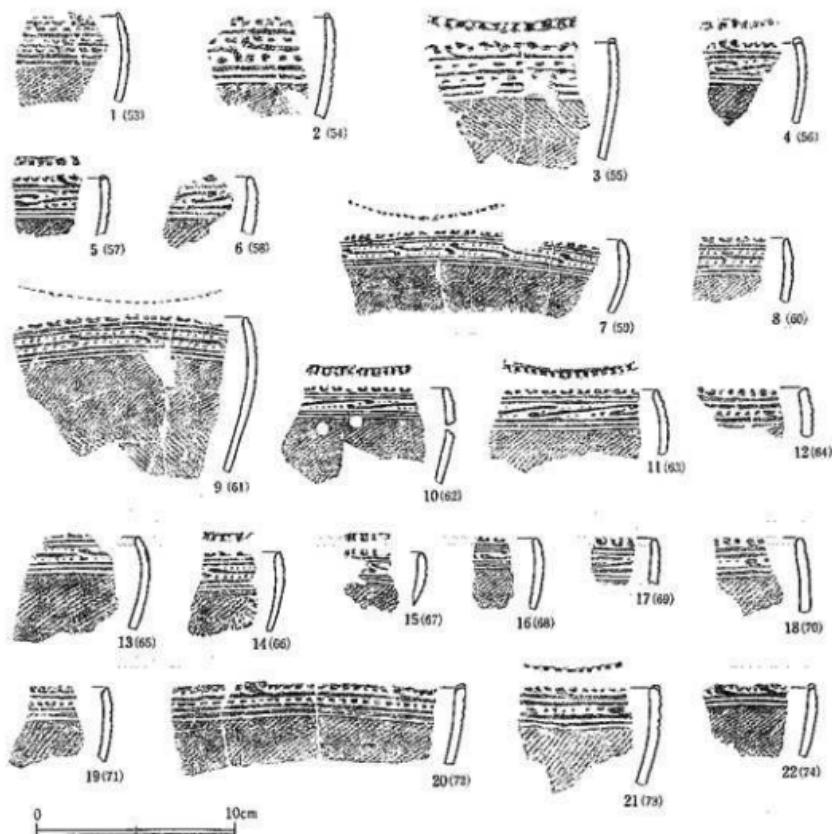
NO	グリッド名・番号	器種	部	型	輪郭形	口縁形態	LH横斜角	口縁文様	体部文様	L径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	UG82	II 台付鉢	口～底部	9	C	B6	式帶X字状	羽状捲文	羽状捲文	14.2	(7.0)	13.0	
2	OG81-H2	II 台付鉢	口～底部	1	B	C4	波	羽状捲文	羽状捲文	(24.3)	—	—	
3	OG82	II 台付鉢	口～底部	1	B	C1	平曲状	—	—	—	—	—	
4	OC82	II 直	口～底部	9	B	A	半曲状	半曲状	半曲状	7.9	—	11.1	
5	OH81	II 直	口～底部	—	—	—	無	無	無	—	5.5	13.0	外腹ミガキ
6	OF81, OG82	壺	口～底部	1	B	炎起	數	直列	波	14.9	—	—	
7	OF81	II 斧	鉢～底部	—	—	—	—	執	執	—	—	—	
8	OF81	II 烧	突	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第13図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（4）—



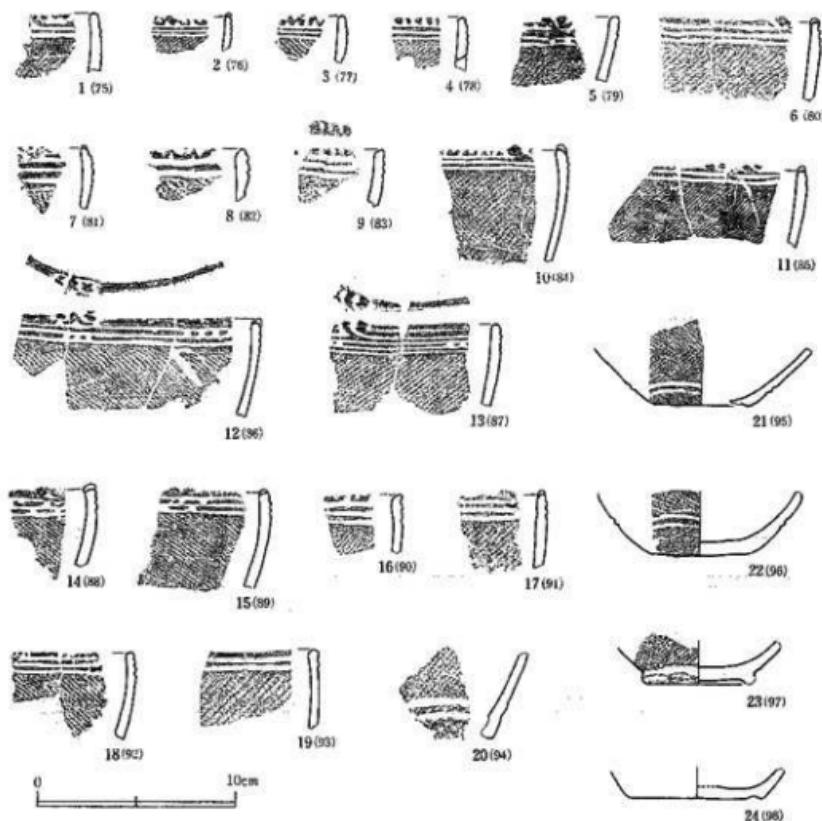
NO	グリッド名	断片	器種	部 位	量(枚)	上縁	下縁	支様(備考)	NO	グリッド名	断片	器種	部 位	量(枚)	上縁	下縁	支様(備考)	文様(備考)
1	O F82	B	深鉢	口縁部	9	C	C 3	滑滑入底文	10	O D76	B	深鉢	口 縁 部	-	-	B 1	波浪列	
2	Q C-Q D73	B	深鉢	口-体部	-	-	-	滑滑入底文	11	O F81	B	深鉢	口 矩 部	9	B	-	波浪列	
3	Q D73	B	深鉢	体 部	-	-	-	滑滑入底文	12	O F81	B	深鉢	口 矩 部	9	B	A	波浪列	
4	Q B74	B	深鉢	体 部	-	-	-	-	13	O H80	B	深鉢	口 矩 部	8	B	B 8	波浪列	
5	O F81	B	深鉢	口 縁 部	9	-	-	人面三文文	14	O H81	B	深鉢	口 矩 部	7	D	B 1	浮雕	
6	Q C74	B	深鉢	口-体部	-	-	-	-	15	O F81	B	深鉢	底 部	-	-	C 4	波浪と花唐草	
7	O E77	B	深鉢	口 縁 部	9	-	-	人面三文文	16	O G81	B	深鉢	口 矩 部	7	B	A	浮雕	
8	O G82	B	深鉢	口 縁 部	1	B	C 1	波浪列	17	O F76	B	深鉢	口 矩 部	-	-	-	波浪	
9	O G81	B	深鉢	口 縁 部	7	B	C 4	点列(内面縦)	18	O G81	B	深鉢	口 矩 部	1	R	B 1	無文	

第14図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（5）—



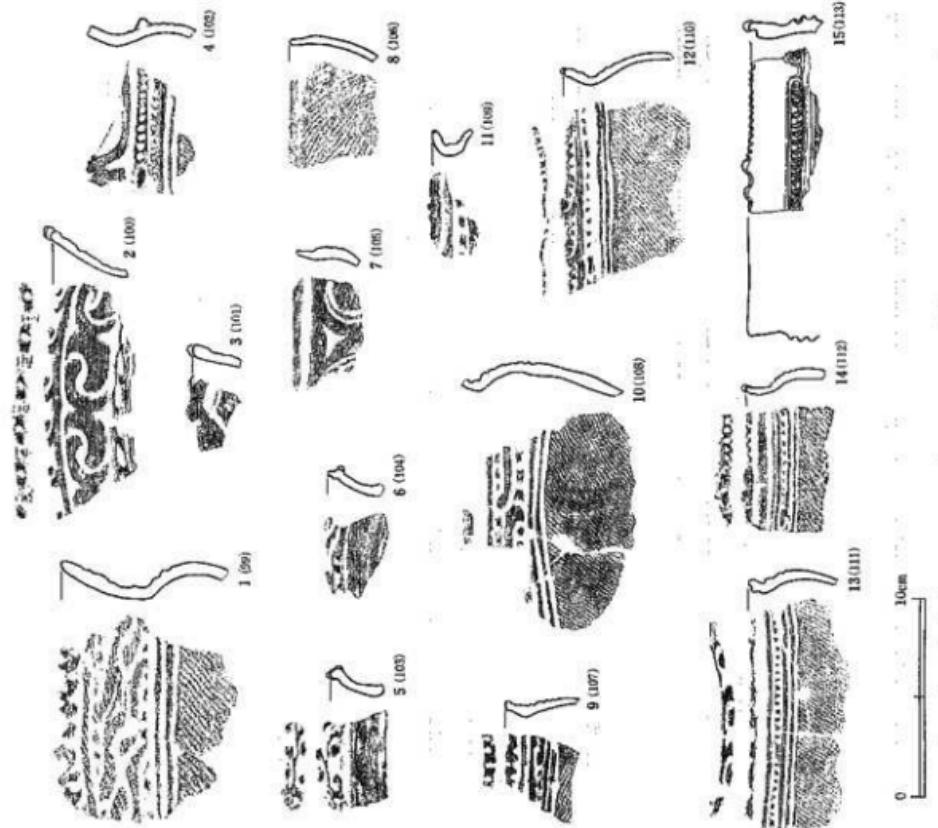
番号	グリッド名	部位	器種	部 級	面形	口部	口縁	文様(備考)	番号	グリッド名	部位	器種	部 級	面形	口部	口縁	文様(備考)
1	OHB1	II	钵	I	横 部	1	B	C 3 半曲状文	12	OG82	II	钵	口 横 部	1	B	H 10	半曲状文
2	OD76	II	钵	口 横 部	1	B	B10	半曲状文	13	OD78	II	钵	口 横 部	1	B	B 10	半曲状文
3	OF81	II	鉢	口 緑 部	1	B	B 8	戳痕列	14	OG83	II	鉢	口 緑 部	9	B	B 10	半曲状文
4	OHB1	II	鉢	口 神 部	1	R	C 4	半曲状文	15	OG82	II	鉢	口 神 部	8	B	B 10	半曲状文
5	OHB3	II	鉢	口 神 部	1	B	C 4	半曲状文	16	OG82	II	鉢	口 神 部	8	B	B 10	半曲状文
6	OHB2	II	鉢	口 横 部	3	-	-	半曲状文	17	OE78	II	鉢	口 横 部	9	B	B 10	半曲状文
7	OG81	II	鉢	口 神 部	8	B	B10	半曲状文	18	OG81	II	鉢	口 神 部	1	B	B 9	半曲状文
8	OG82	II	鉢	口 緑 部	7	B	B10	半曲状文	19	OG82	II	鉢	口 神 部	1	B	B 9	半曲状文
9	OG82	II	鉢	口 横 部	7	B	B10	半曲状文	20	OF82	II	鉢	口 横 部	1	B	C 3	平行沈線 斜底列
10	OG82	II	鉢	口 横 部	9	B	B10	半曲状文(輪挖孔)	21	OG82	II	鉢	口 横 部	1	B	B 7	平行沈線 斜底列
11	OG82	II	鉢	口 緑 部	9	B	B10	半曲状文	22	OG81	II	鉢	口 緑 部	9	B	C 4	平行沈線

第15図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（6）—



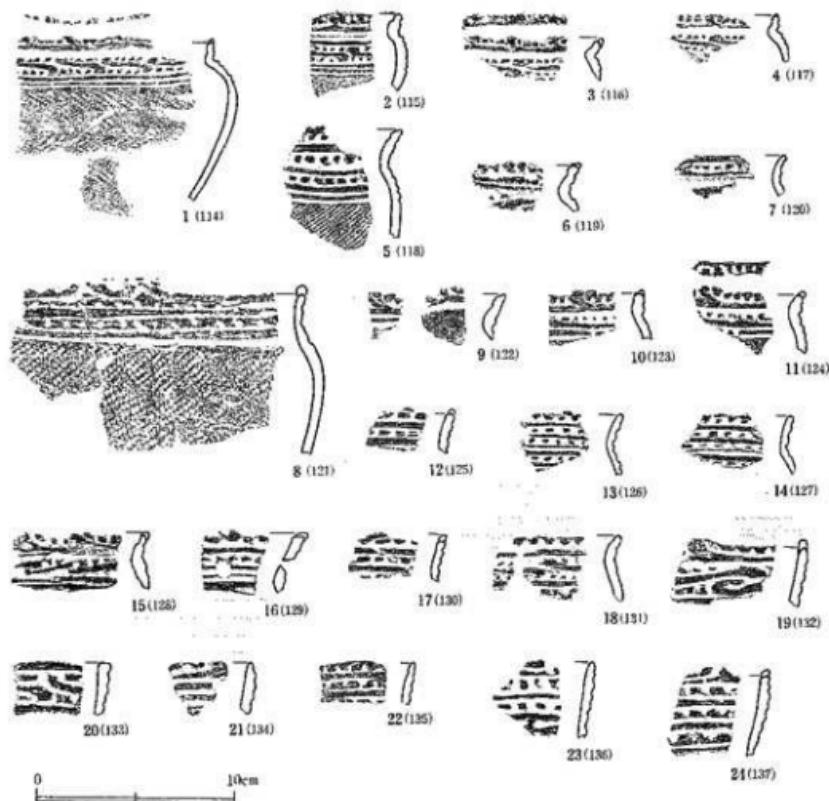
No.	グリッド名	場所	器種	部 位	断面	口縁 形状	口縁 断面	文様(備考)	No.	グリッド名	場所	器種	部 位	断面	口縁 形状	口縁 断面	文様(備考)
1	O H81	II	鉢	口 縁 高	1	B	B 9	平行沈線	13	O G81	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線+削刃
2	O G81	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 3	平行沈線	14	O E77	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線+削刃
3	O G82	II	鉢	口 縁 高	1	B	B 3	平行沈線	15	O E77	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線+削刃
4	O G83	II	鉢	口 縁 高	1	B	A	平行沈線(補修孔)	16	O C79	II	鉢	口 縁 高	9	B	B 8	平行沈線
5	O G81	II	鉢	口 縁 高	1	R	C 1	平行沈線+削刃	17	O G82	II	鉢	口 縁 高	9	B	C 1	平行沈線
6	O H82	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線	18	O H81	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線
7	O E77	II	鉢	口 縁 高	8	B	B 2	平行沈線+削刃	19	O H82	II	鉢	口 縁 高	9	B	C 1	平行沈線
8	O H81	II	鉢	口 縁 高	9	B	B 8	平行沈線	20	O C77	II	鉢	口 縁 高	-	-	-	-
9	O G77	II	鉢	口 縁 高	9	H	B 9	平行沈線	21	D H80-S1	II	鉢	底	断面	-	-	-
10	O G82	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 3	平行沈線	22	O D77	II	鉢	底	断面	-	-	-
11	O G83	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線	23	O E76	II	鉢	底	断面	-	-	-
12	O F81	II	鉢	口 縁 高	1	B	C 1	平行沈線+削刃	24	O E76	II	鉢	底	断面	-	-	-

第16図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（7）—



図版番号	器名	器種	形	表面	縁部	内面	外縁部	文部(調査)	文部(測定)
1 ODS8	鉢	口縁部	2	D C5	平縁化火	9 OGS8	I	井	井
2 OG77	鉢	口縁部	9	B C1	浅縁火	10 OGS8	II	井	井
3 OH81	鉢	口縁部	-	D	-	11 OG79	II	井	井
4 OH77	鉢	口縁部	-	-	-	12 OGS8	II	井	井
5 OG62	鉢	口縁部	5	B C3	無文	13 OG77	II	井	井
6 OG82	鉢	口縁部	5	B C3	無文	14 OG82	II	井	井
7 OG27	鉢	口縁部	-	-	無文	15 OG81	II	井	井
8 OG81	鉢	口縁部	4	B A	無文				

第17図 A・L・M区の遺構外出土遺物 (8) —



No	グリッド名	層位	形種	部 位	縦幅	横幅	厚さ	文様(備考)	No	グリッド名	層位	形種	部 位	縦幅	横幅	厚さ	文様(備考)
1	O G81	Ⅲ	鉢	口・底部	9	C	C 4	下曲状文	13	O G82	Ⅱ	鉢	口 部	9	B	B 2	波痕列
2	O F81	Ⅲ	鉢	口・底部	1	C	C 4	半曲状文	14	O H81	Ⅱ	鉢	口 部	9	C	B 8	波痕列
3	O G82	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	C	C 4	半曲状文	15	O C81-B2	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	C	C 4	半曲状文(炭化物付着)
4	O G81	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	C	C 4	半曲状文	16	O H81	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	C	C 1	波痕列(縫隙孔)
5	P A81	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	-	縫隙孔	孰痕列(内訌化物付着)	17	O E77	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	C	C 3	波痕列
6	O G81	Ⅲ	鉢	口 縦部	1	C	C 3	T曲状文	18	O G81	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	B	B 3	半曲状文
7	O G81	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	B	A	半曲状文	19	O F82	Ⅱ	鉢	口 縦部	1	B	C 1	半曲状文
8	O G81	Ⅲ	鉢	口・底部	3	C	C 3	沈底→点列	20	O H81	Ⅱ	鉢	口 縦部	2	B	A	半曲状文
9	O G82	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	-	C 3	波痕	21	O G81	Ⅱ	鉢	口 縦部	8	C	B 6	-
10	O G82	Ⅲ	鉢	口 縦部	1	C	C 4	波痕列	22	O E79	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	C	B 8	波痕列
11	O G82	Ⅲ	鉢	口 縦部	9	C	C 4	波痕列	23	O H81	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	B	C 1	波痕列
12	O E77	Ⅲ	鉢	口 縦部	1	B	-	波痕列	24	O H80-B1	Ⅱ	鉢	口 縦部	9	C	C 1	波痕列

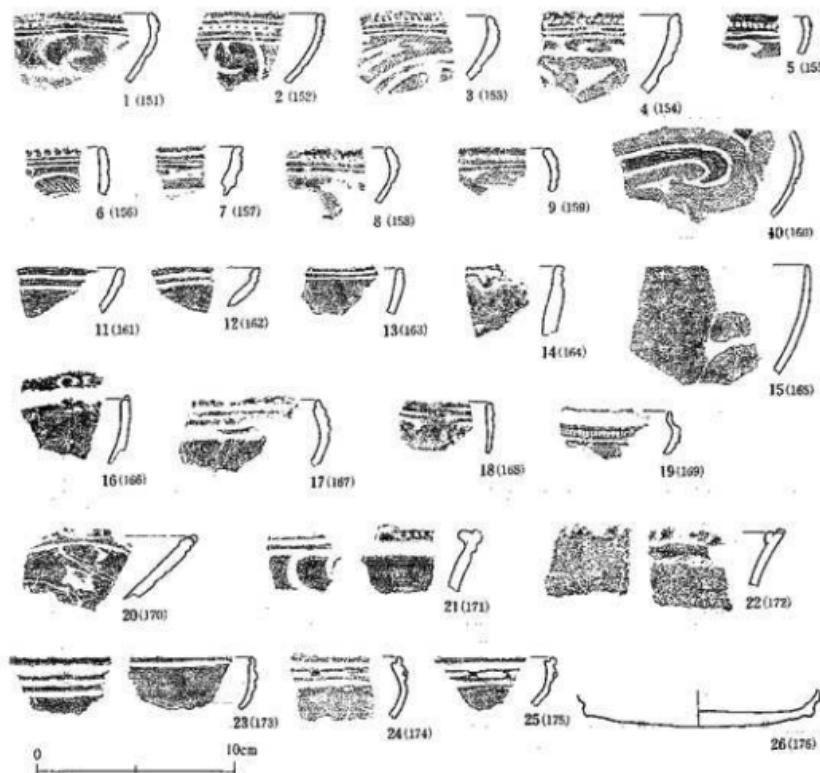
第18図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（9）—



No.	グリッド名	層級	遺構	部	位	遺物名	目次	記述	文様(箇所)	No.	グリッド名	層級	部	位	遺物名	目次	記述	文様(箇所)	
1	OG82	I	浅鉢	口	縁	縁	1	C	C 3	8	OG77	—	浅鉢	口	縁	9	A	A	波状縁
2	OG81-82	I	浅鉢	口	縁	縁	1	A	A	9	OG83	II	浅鉢	口	縁	1	A	A	斜状文
3	OE77	I	浅鉢	口	縁	縁	3	A	A	10	OG81	II	浅鉢	口	縁	9	A	A	斜状文
4	OH81	I	浅鉢	口	縁	縁	2	A	(波)	11	OG81	II	浅鉢	口	縁	1	A	A	波状文
5	OG81	I	浅鉢	口	縁	縁	9	A	A	12	OG82	II	浅鉢	口	縁	—	—	—	(波)
6	OG81	I	浅鉢	口	縁	縁	9	A	A	13	OII81	II	浅鉢	口	縁	9	A	A	斜状文
7	OG81	I	浅鉢	口	縁	縁	1	A	A	14	OG81	II	浅鉢	口	縁	—	—	—	斜状文

第19図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (10) -

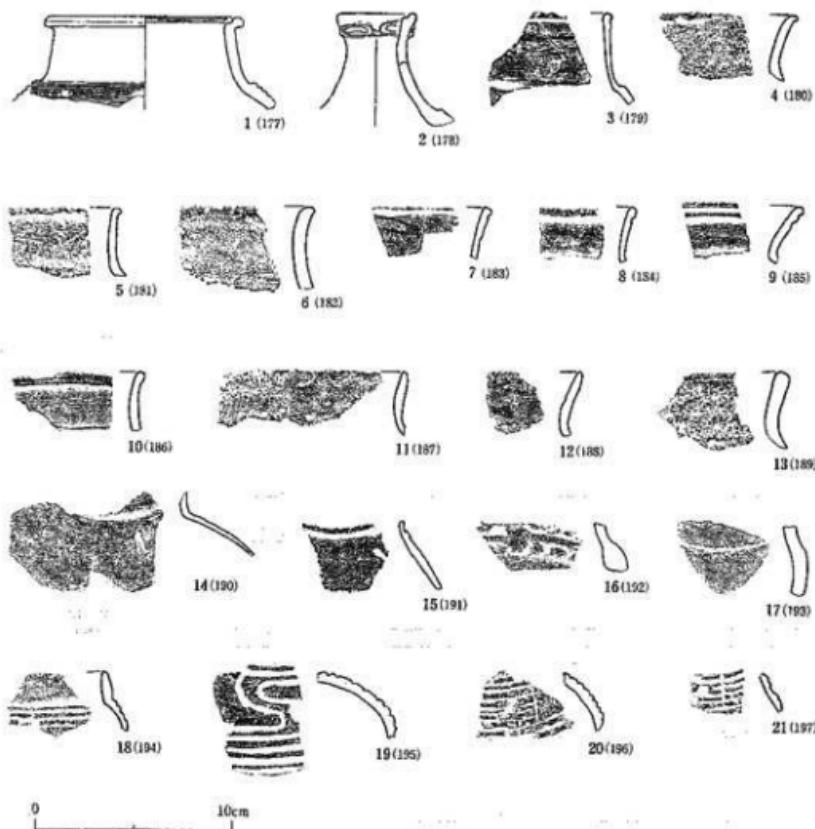
第4章 調査の記録



No.	グリッド名	層位	形質	部 位	基準	目 標	文 緯 (備 考)	No.	グリッド名	層位	形質	部 位	基準	目 標	文 緯 (備 考)		
1	O-G85	II	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	点列 細密網文 (透底)	14	D-H81	II	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	透底
2	O-G81	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	散乱 純縞	15	D-G81	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	純縞
3	O-G82	II	浅鉢	口 縁 部	8	A	A	点列 純縞齊文	16	D-H81	II	浅鉢	口 縁 部	1	C	C1	無文 (複製)
4	O-G82	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	散乱 純縞齊文	17	D-G72	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	散乱縞と純縞
5	O-G83	II	浅鉢	口 縁 部	8	A	A	点列 鮫形 印刷	18	D-D83	II	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	純縞
6	O-H80-A1	II	浅鉢	口 縁 部	1	B	A	平行沈縞 斜縞	19	D-G81	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	斜縞部に散乱縞
7	O-H81	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	点列 鮫形 印刷	20	D-G81	II	直	口 縁 部	9	D	C1	純縞
8	O-G82	II	浅鉢	口 縁 部	8	A	A	点列 沈縞 斜縞	21	D-G77	II	直	口 縁 部	6	-	-	斜縞
9	O-G82	-	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	点列 周縞	22	D-G82	II	直	口 縁 部	6	-	C1	純縞 (複製)
10	O-G82	II	浅鉢	体 部	9	-	-	織痕 純縞文 (透底)	23	O-D80-B1	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	透底状
11	O-G77	II	浅鉢	口 縁 部	8	A	A	平行沈縞 (複製)	24	D-G71	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	複複状
12	O-G81	II	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	平行沈縞	25	D-E79	II	浅鉢	口 縁 部	9	A	A	複縞状
13	O-D77	II	浅鉢	口 縁 部	1	A	A	平行沈縞 (複製)	26	D-G82	II	直	部	-	-	-	-

第20図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (11) —

第2-2節 A・L・M区の遺構外出土遺物

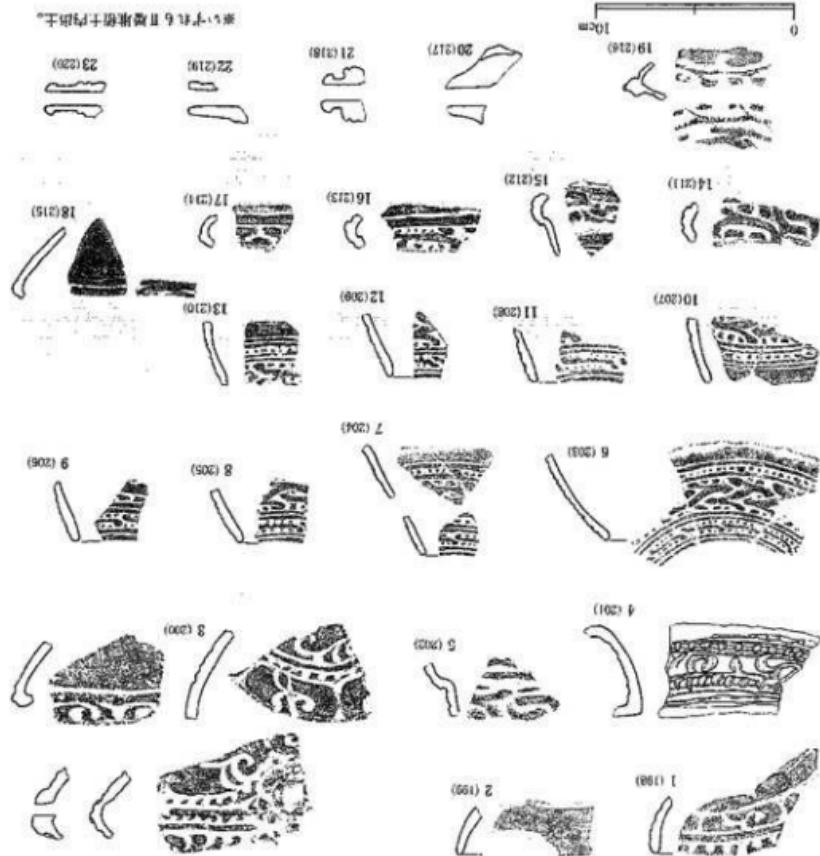


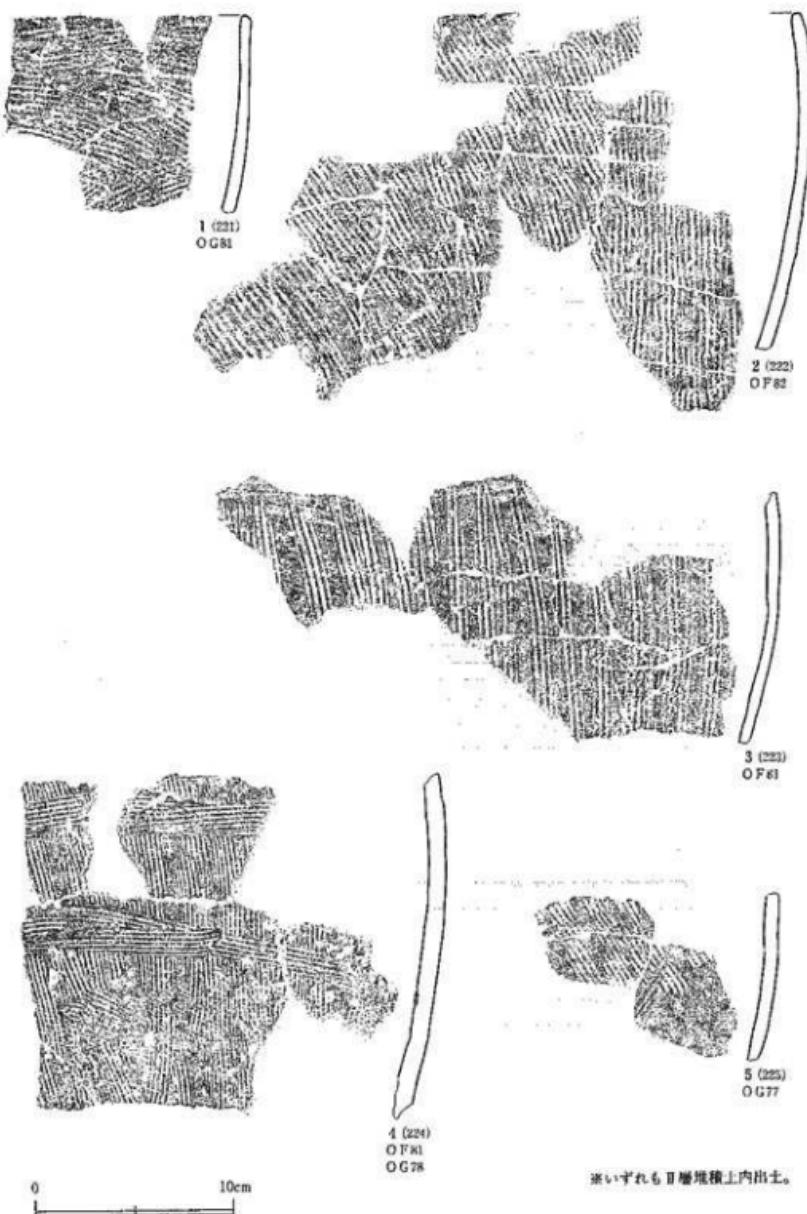
No.	グリッド名	番号	部位	部位	断面	口縁形	口縁部	文様(施 署)	No.	グリッド名	番号	部位	部位	断面	口縁形	口縁部	文様(施 署)
1	OGR1-R2	II	裏	口縁部	5	A	A	圓形部に幾段列	12	OGR2	II	裏	口縁部	1	A	A	
2	OGR2	II	裏	口縁部	1	A	A	無文	13	OGR2	II	裏	口縁部	4	A	A	無文(粗綫)
3	OGR2	II	裏	口縁部	5	A	A	波紋	14	OGR1	II	裏	体	部	-	-	-
4	OGR1	II	裏	口縁部	5	A	A	無文	15	OGR1	II	裏	体	部	-	-	無文
5	OGR2	II	裏	口縁部	5	A	A	無文(横綫)	16	OET7	II	裏	体	部	-	-	無文
6	OGR1	II	裏	口縁部	1	A	A	無文	17	OIT9	II	裏	各	部	-	-	沈縞
7	OIIH-LUG1	II	裏	口縁部	1	A	A	沈縞	18	OCT7	II	裏	口縁部	8	A	A	浮彫
8	OFR2	II	裏	口縁部	1	A	A	沈縞	19	OHB1	II	裏	体	部	-	-	無文
9	OCT7	II	裏	口縁部	1	A	A	沈縞	20	OG79	II	裏	体	部	-	-	頭部平行沈縞
10	OGR1	II	裏	口縁部	5	A	A	無文	21	OG82	II	裏	体	部	-	-	沈縞
11	OGR1	II	裏	口縁部	1	A	A	無文(横綫)									

第21図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (12) —

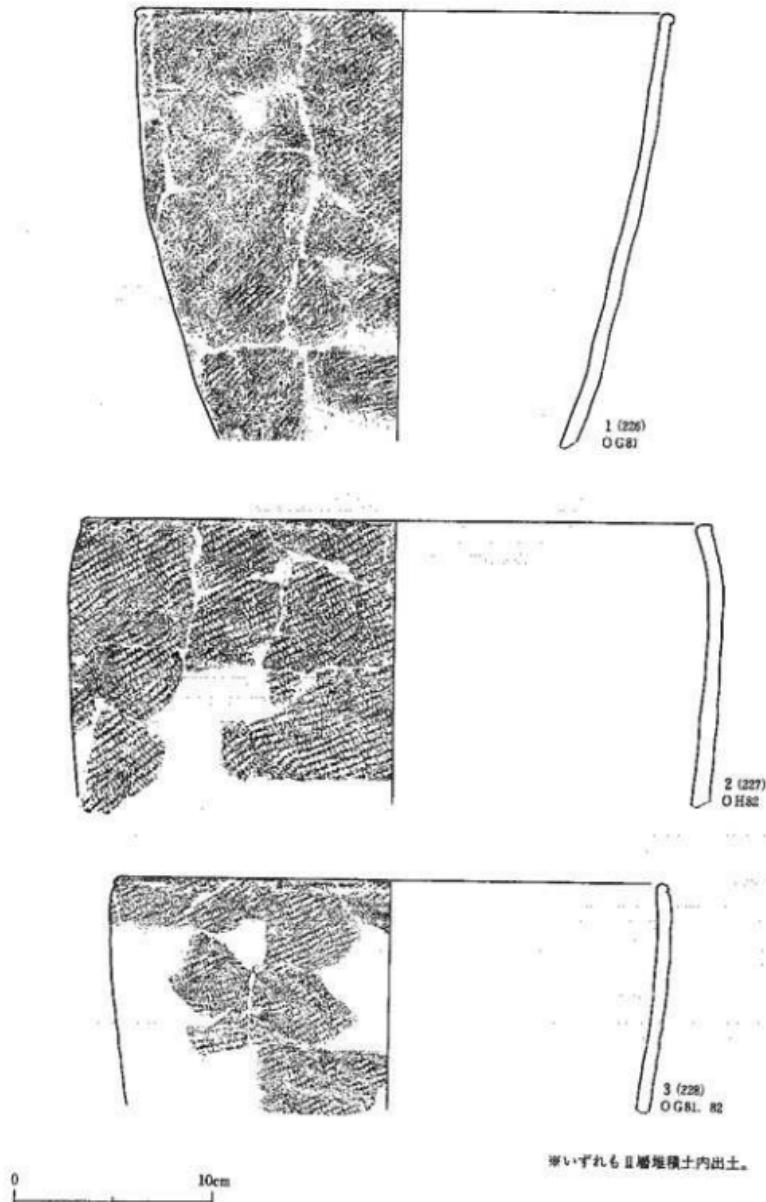
圖 1-7：M区の過渡形王蟲類（13）

東方文化研究會



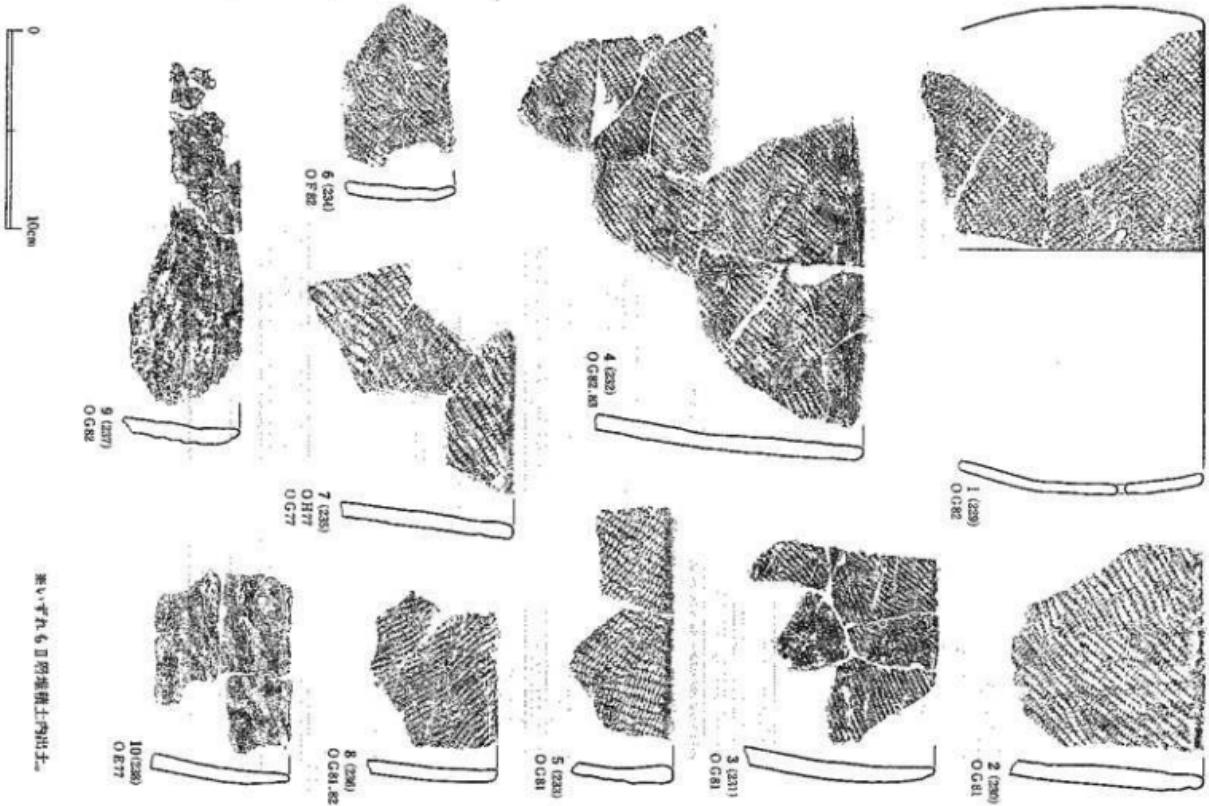


第23図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (14) —



第24図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (15) —

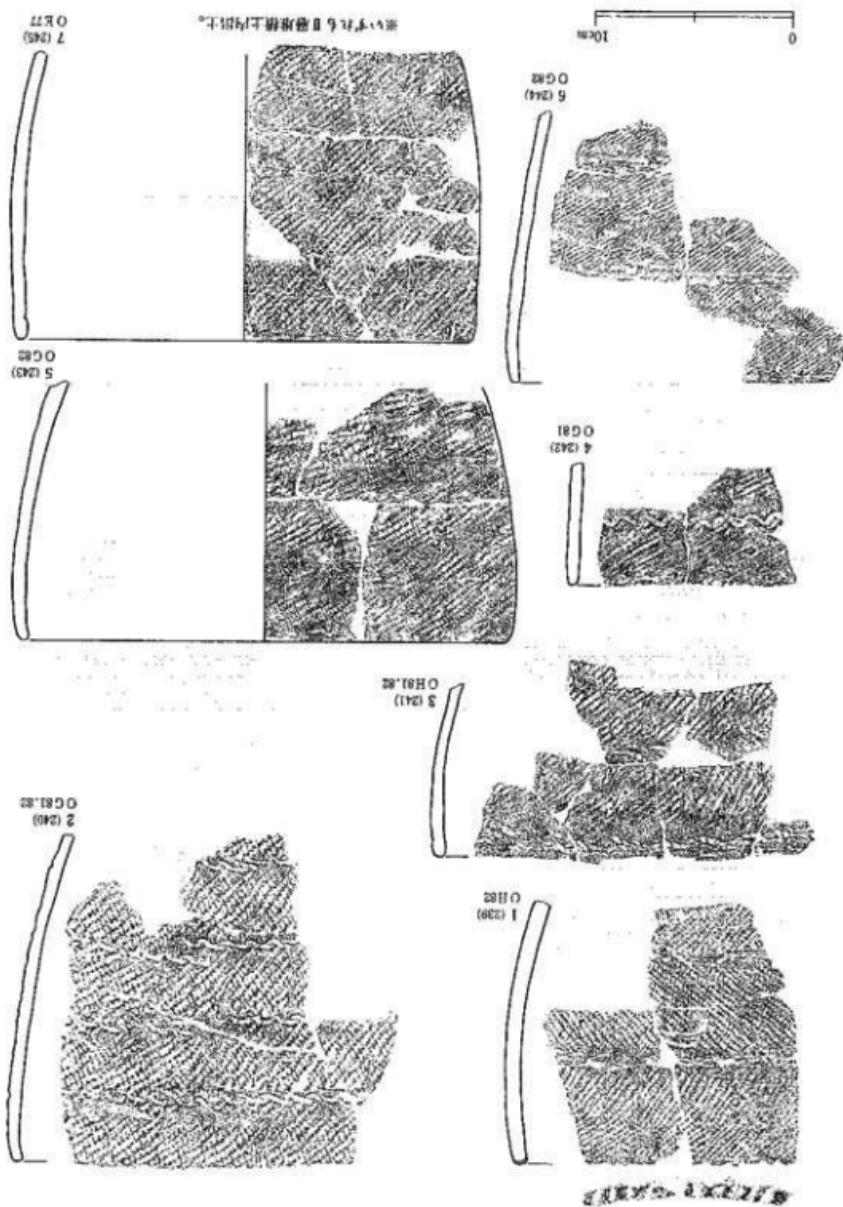
第2-2節 A・L・M区の遺構外出土遺物



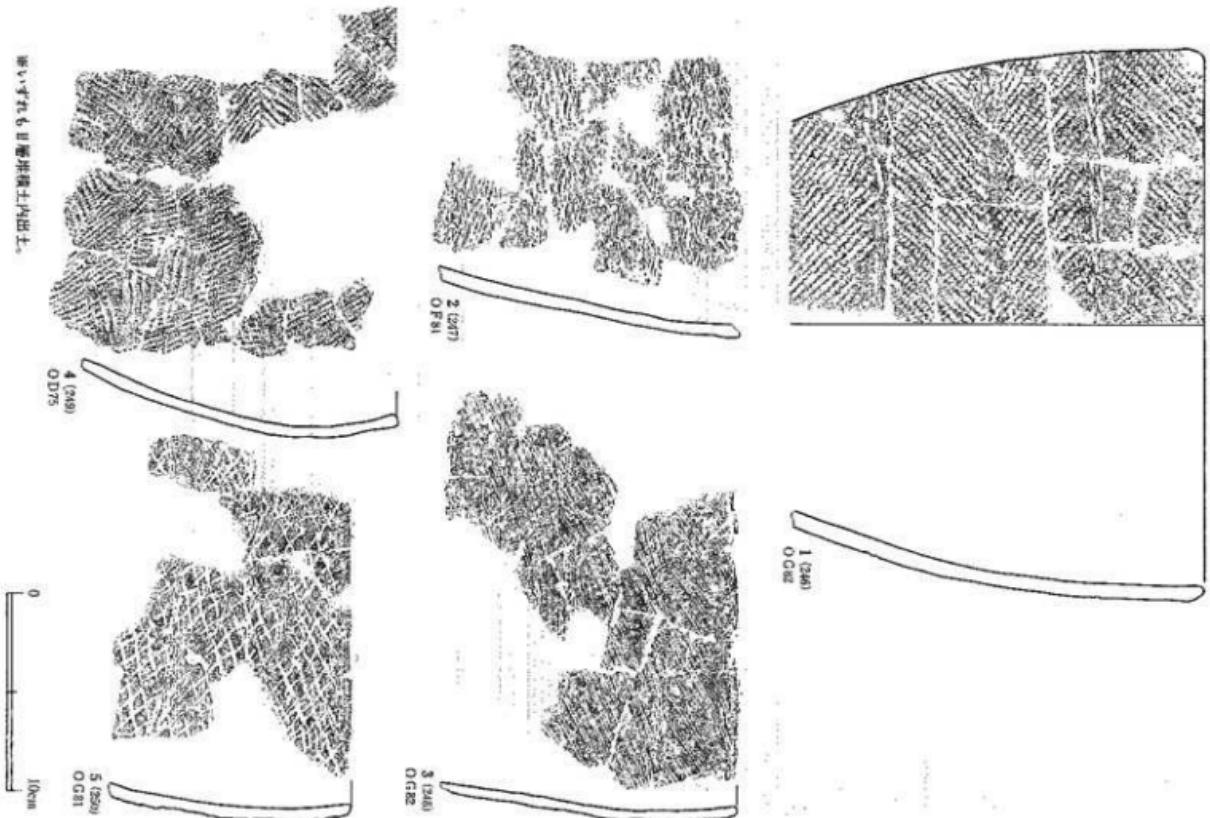
\*いづれもⅡ層堆積土内出土。

第25図 A・L・M区の遺構外出土遺物(16) —

第26図 A・L・M区の遺物出土場所一土器(17) -



第2-2節 A・L・M区の遺構外出土+遺物



第27図 A・L・M区の遺構外出土遺物(18) —

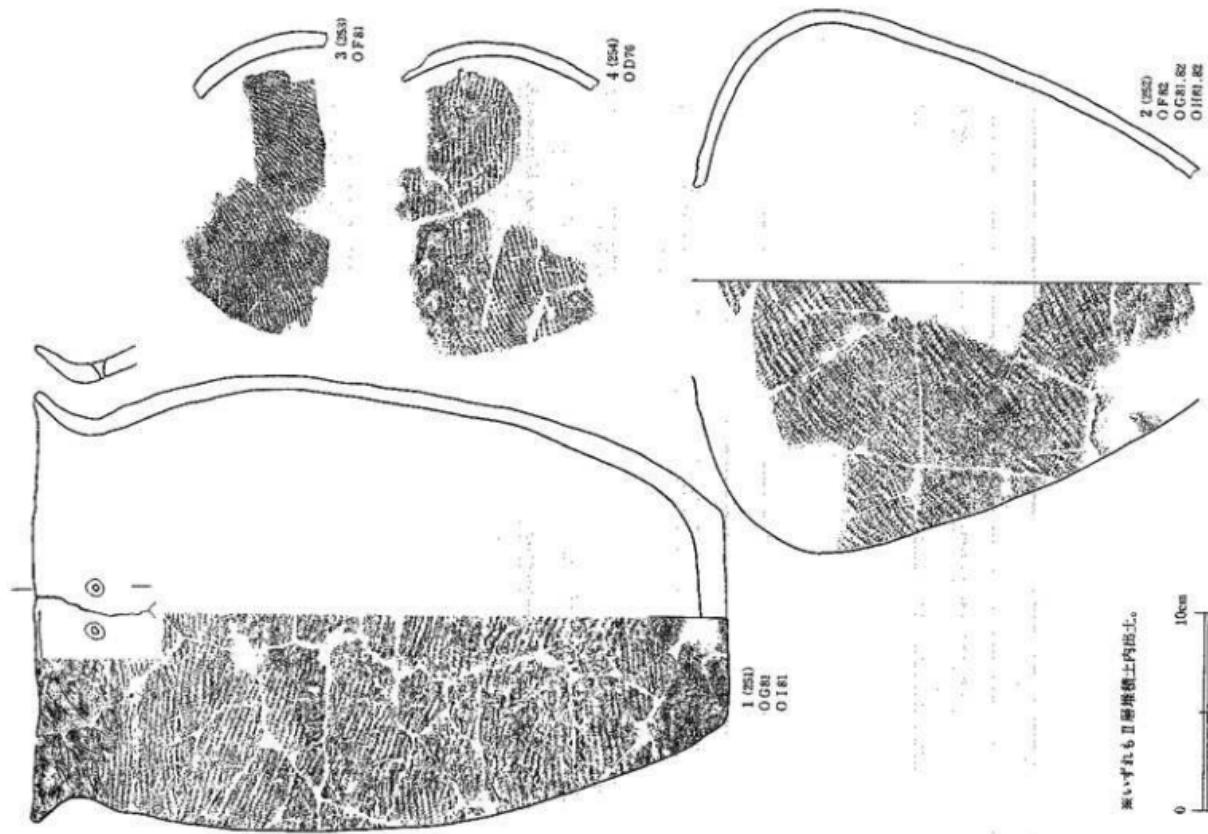
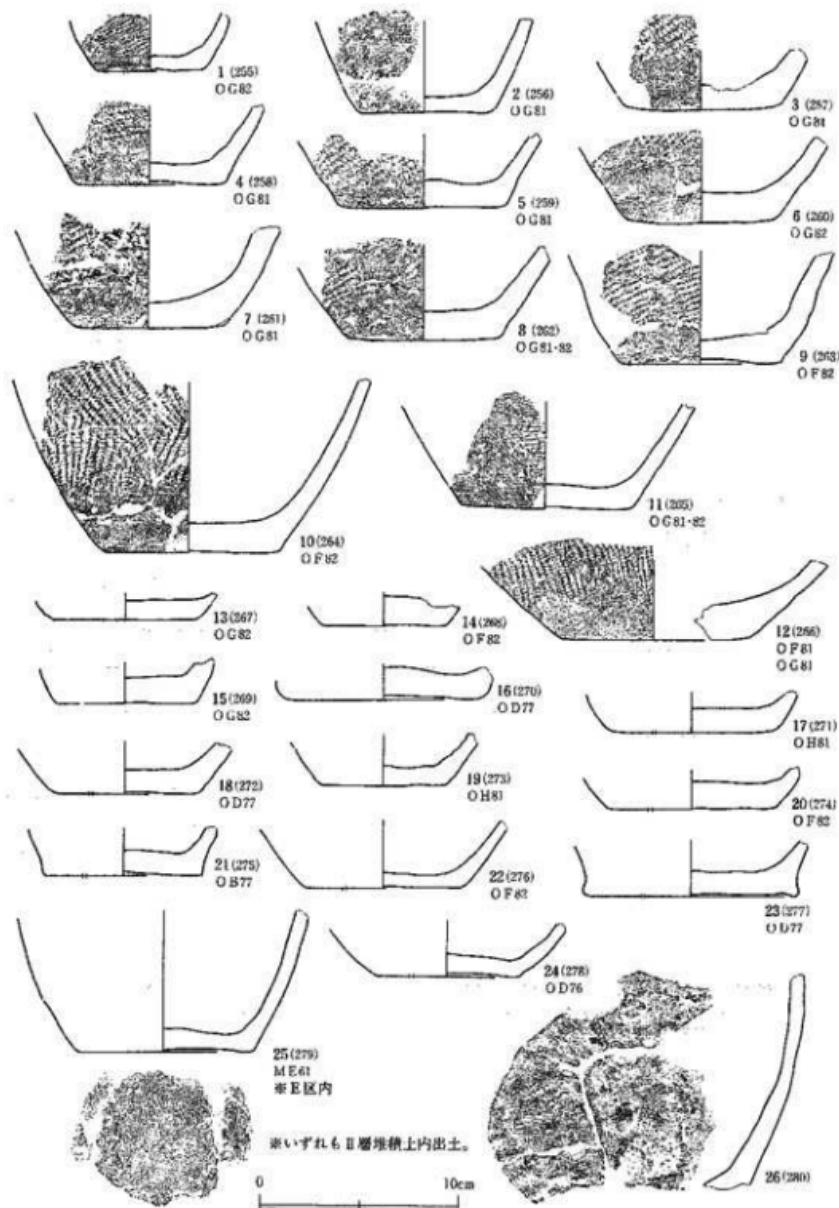
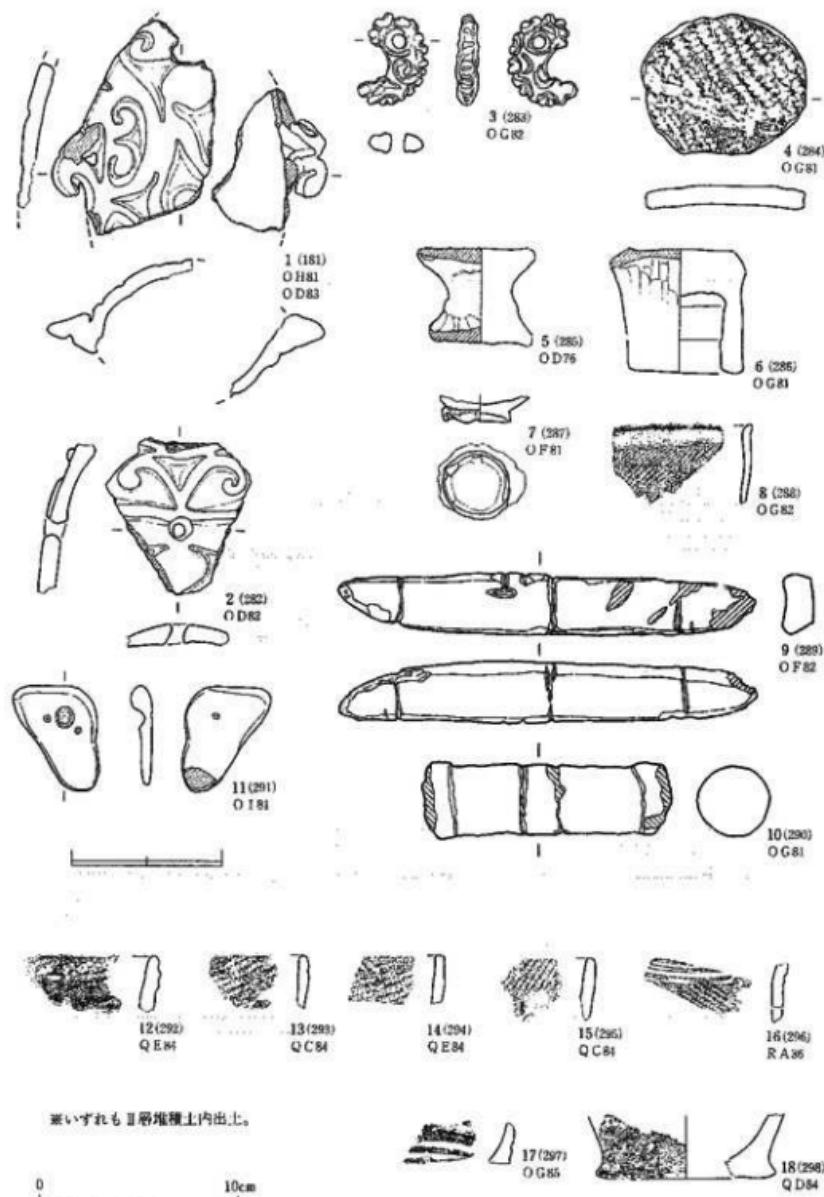


図28 図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器 (19) —

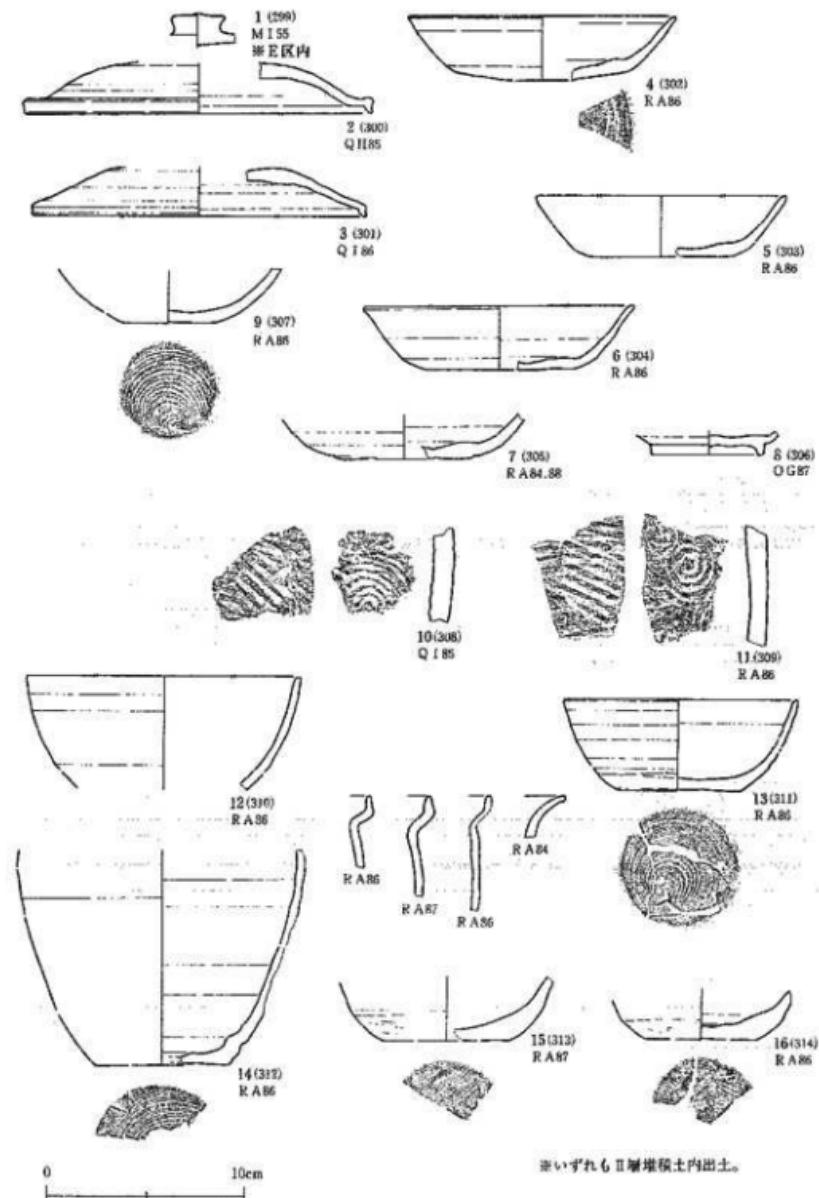
第2-2節 A・L・M区の造構外出土遺物



第29図 A・L・M区の造構外出土遺物—土器（20）—

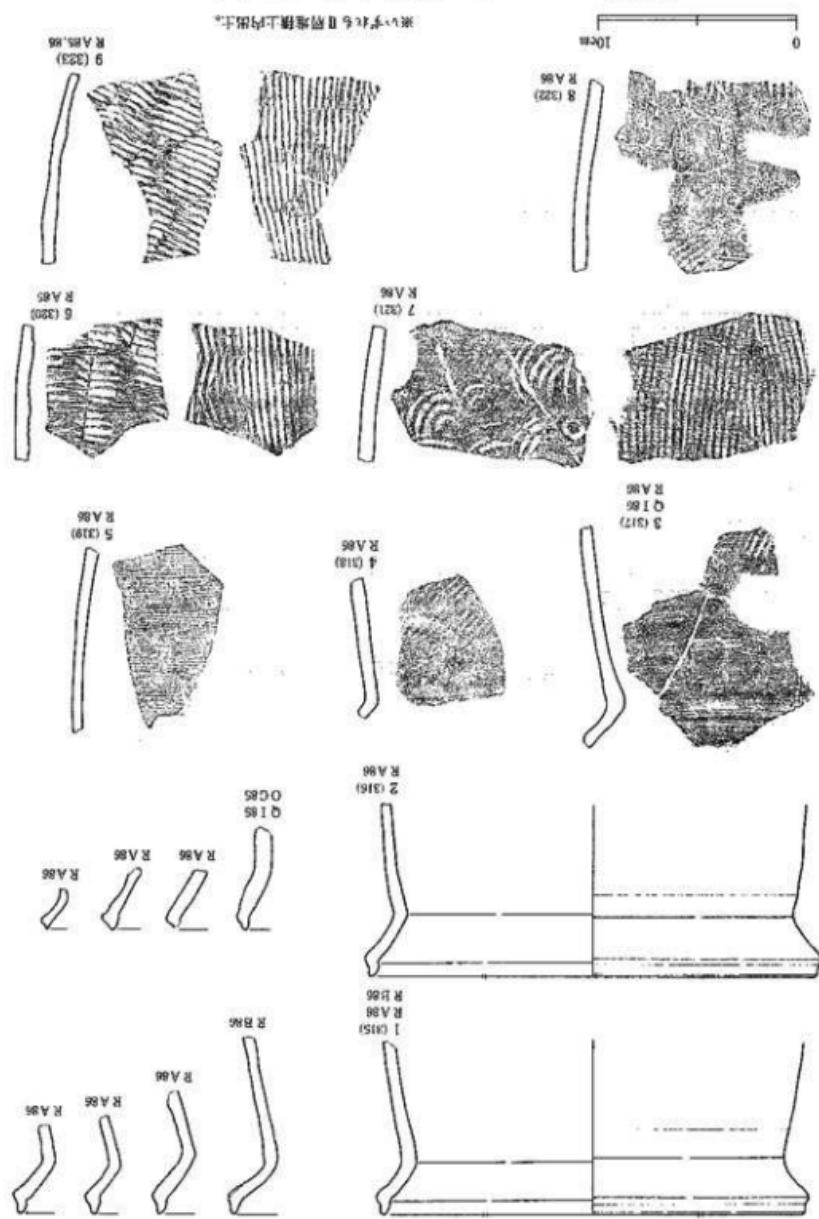


第30図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器・土製品・石製品 (21) —

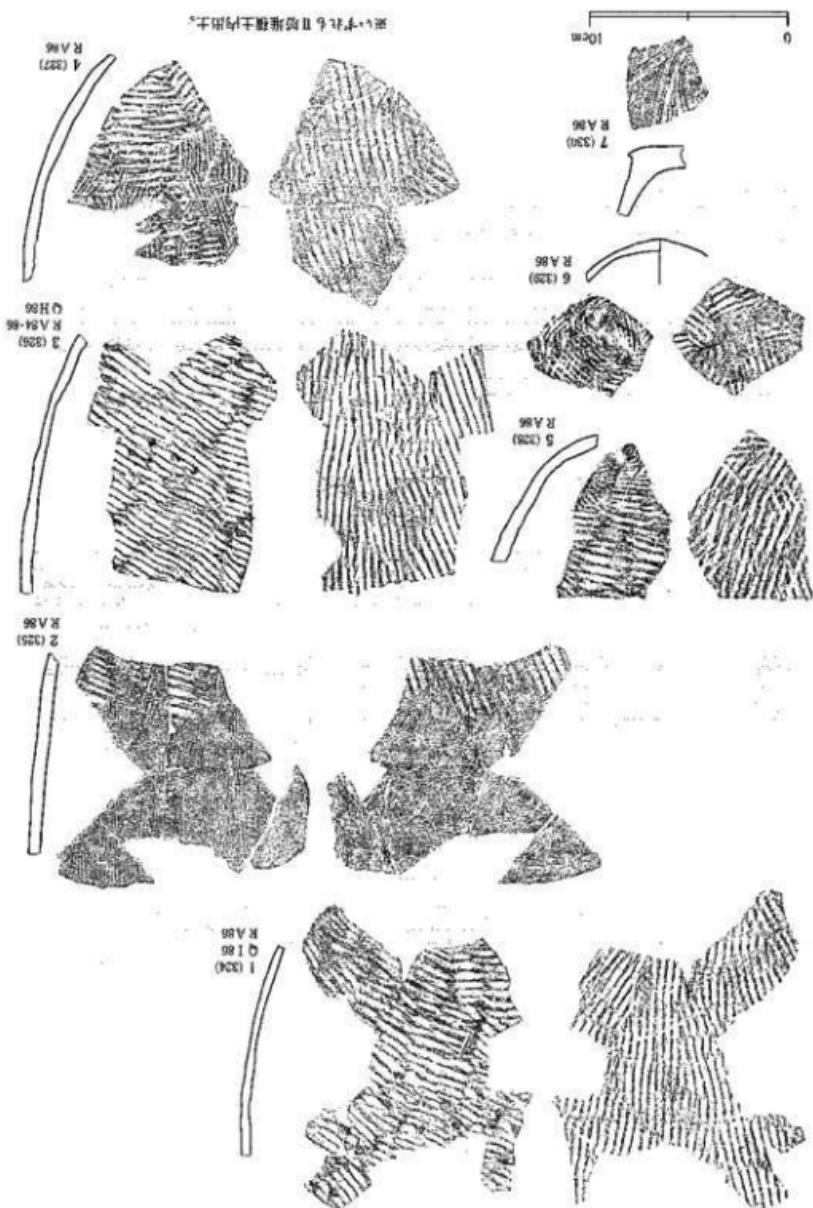


第31図 A・L・M区の遺構外出土遺物—土器（22）—

第32図 A・L・M区の遺構外出土遺物一土器 (23) -



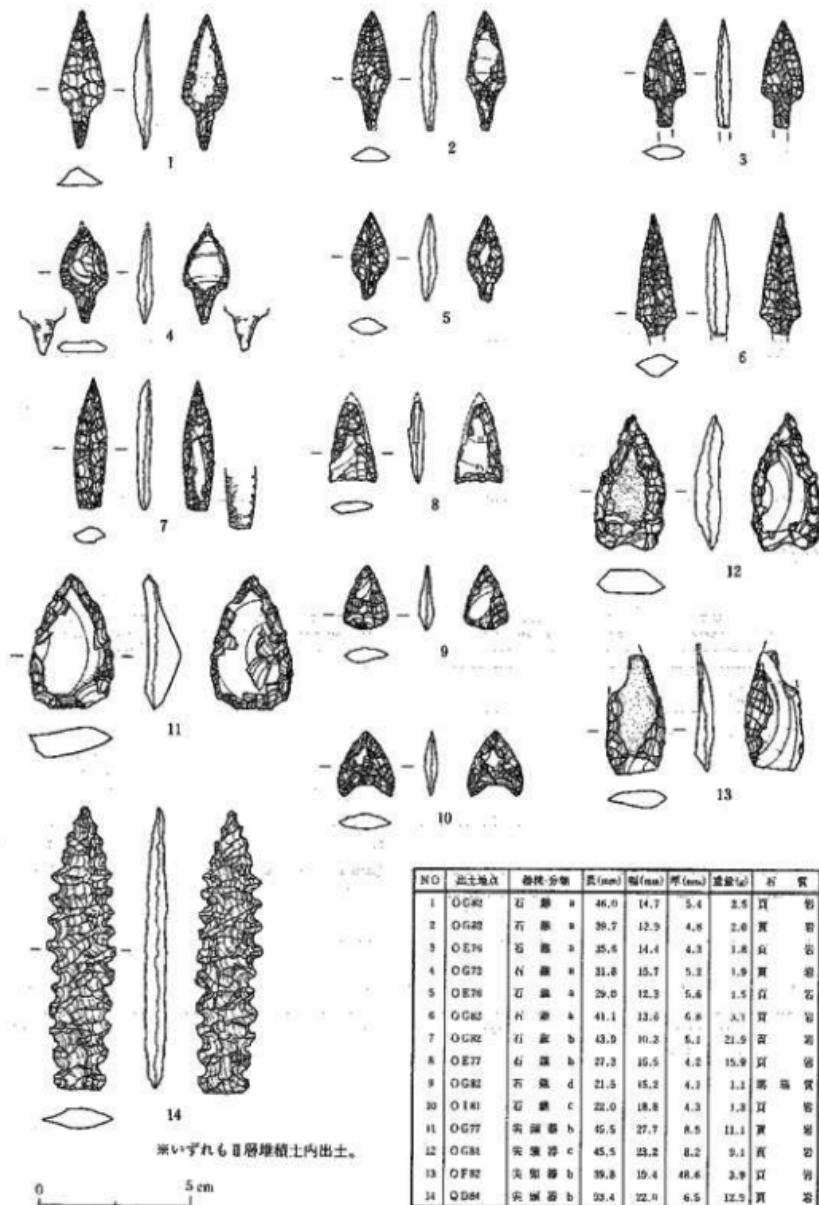
第三圖 A · L · M區之遺物出土遺物一工具 (24) -



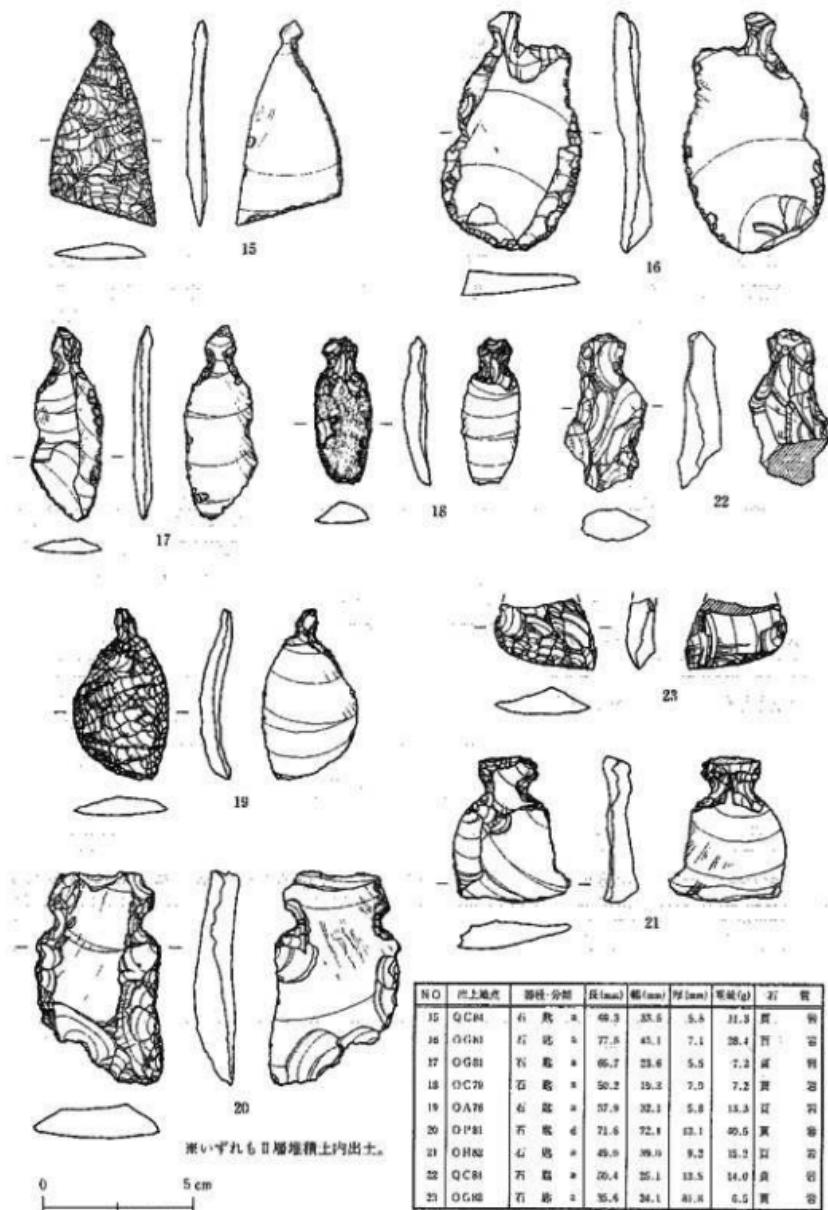
第4章 調査の記録



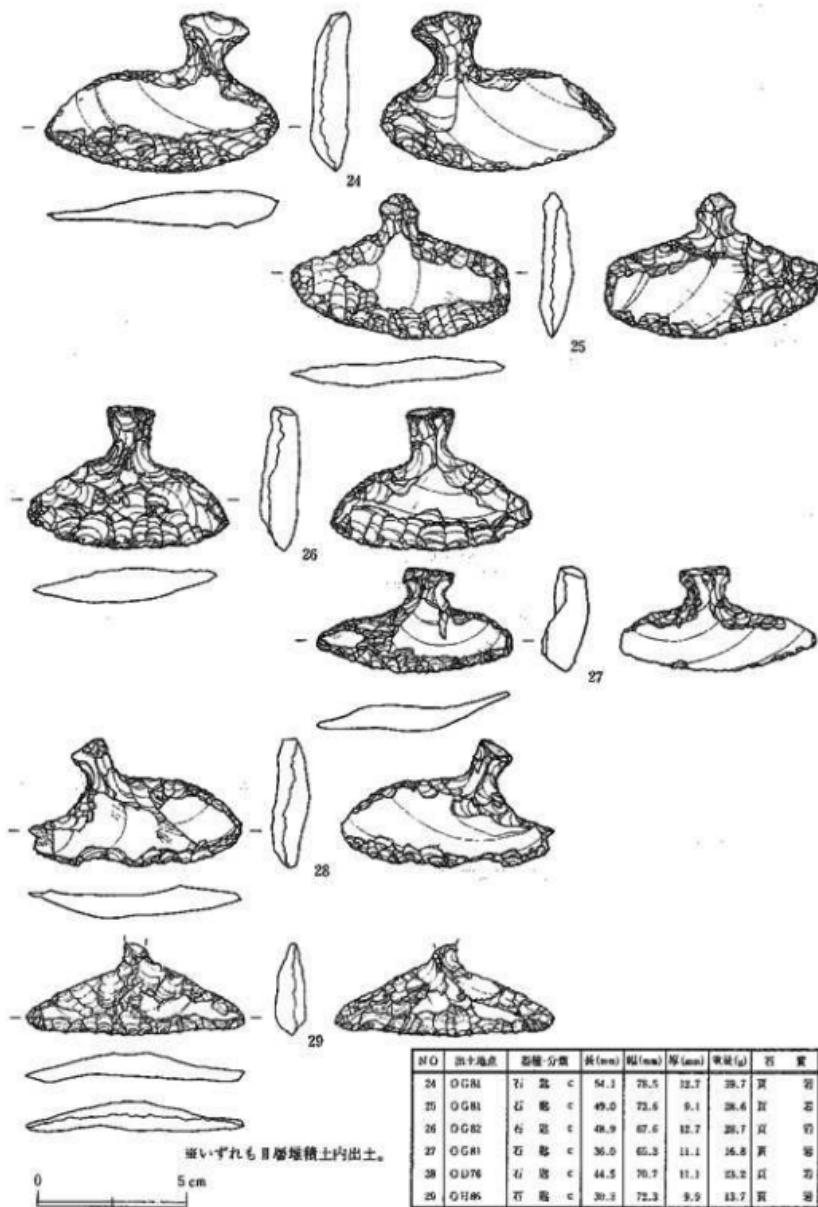
第34図 A・L・M区の石器分類と計測基準



第35図 A・L・M区の遺構外出土遺物（1）-

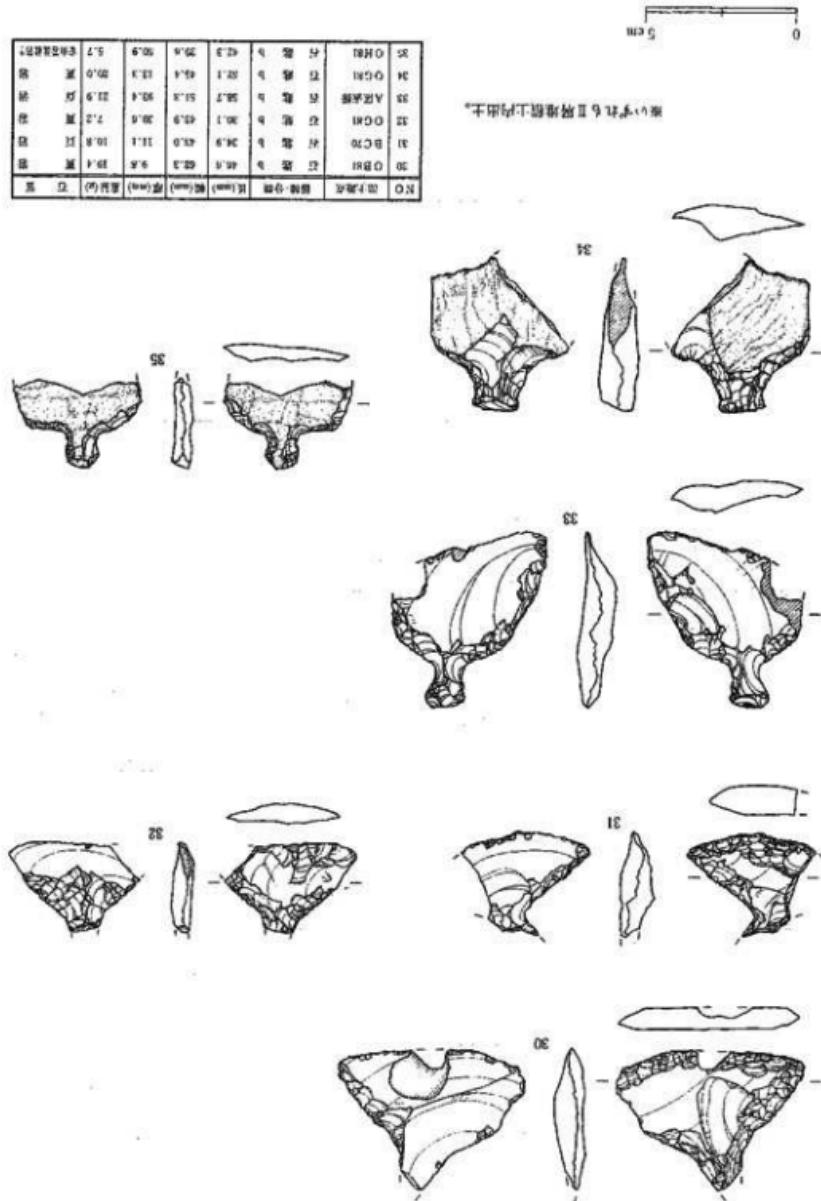


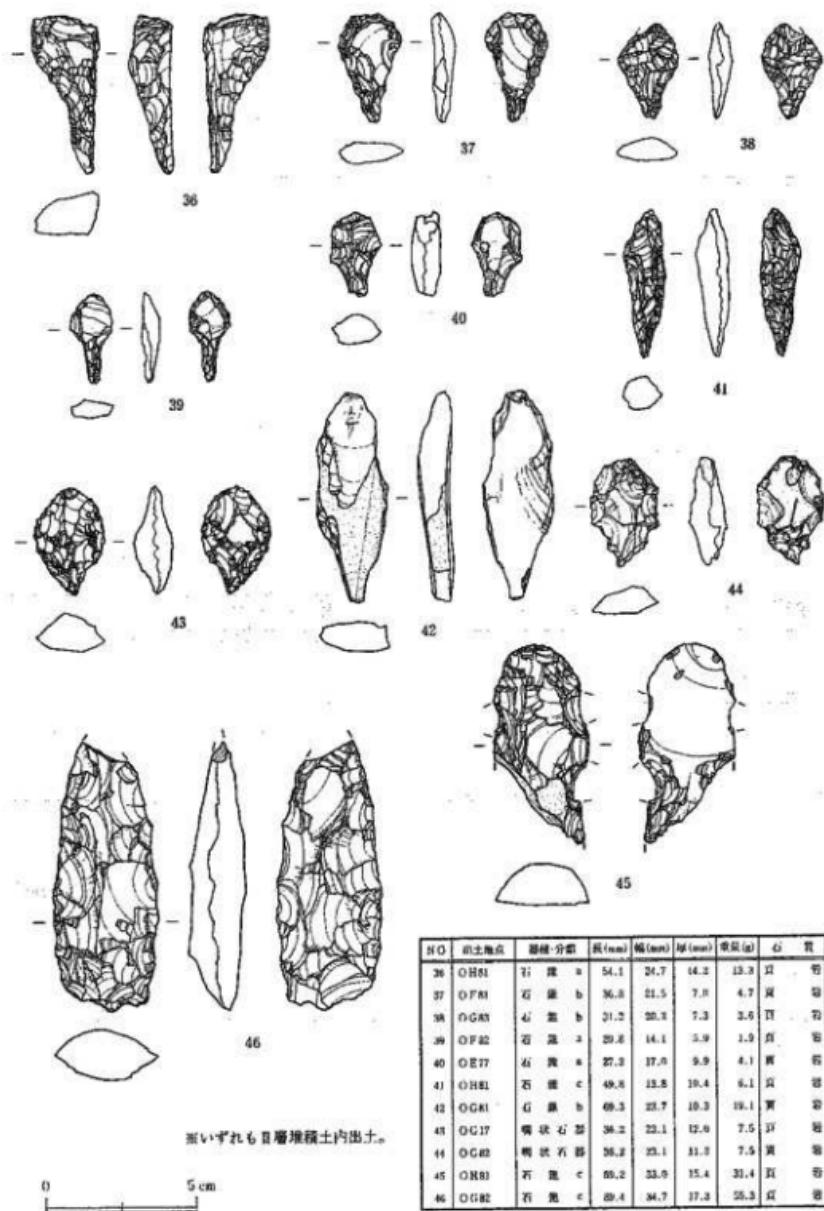
第36図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器(2)—



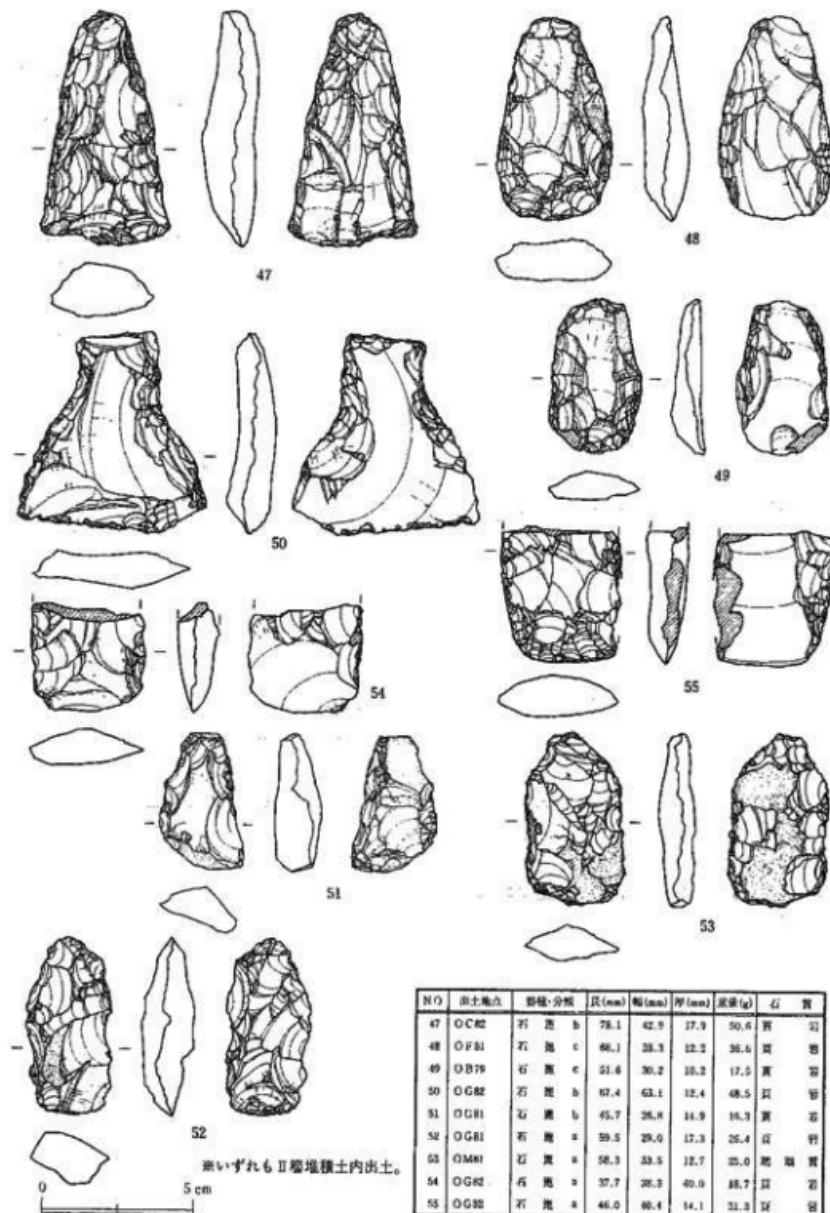
第37図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（3）—

第38図 A・L・M区の遺構外出土遺物一石器(4) -



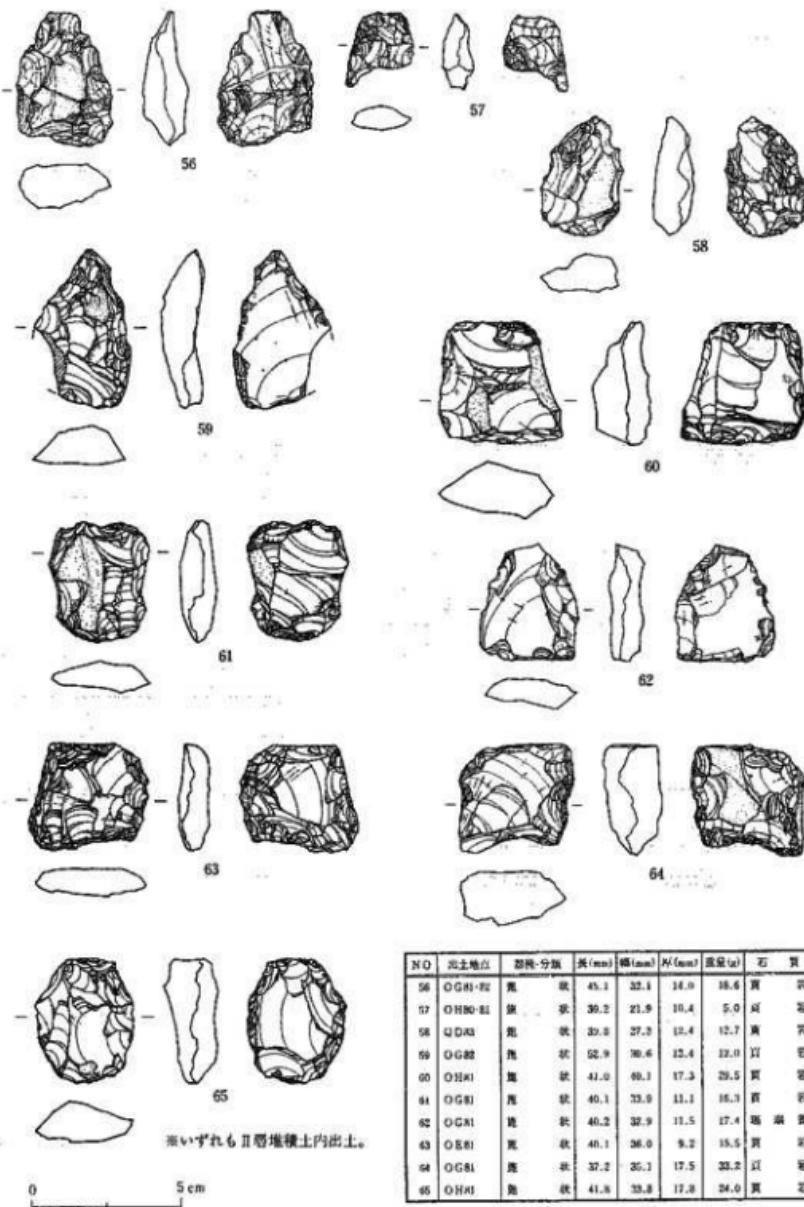


第39図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（5）—

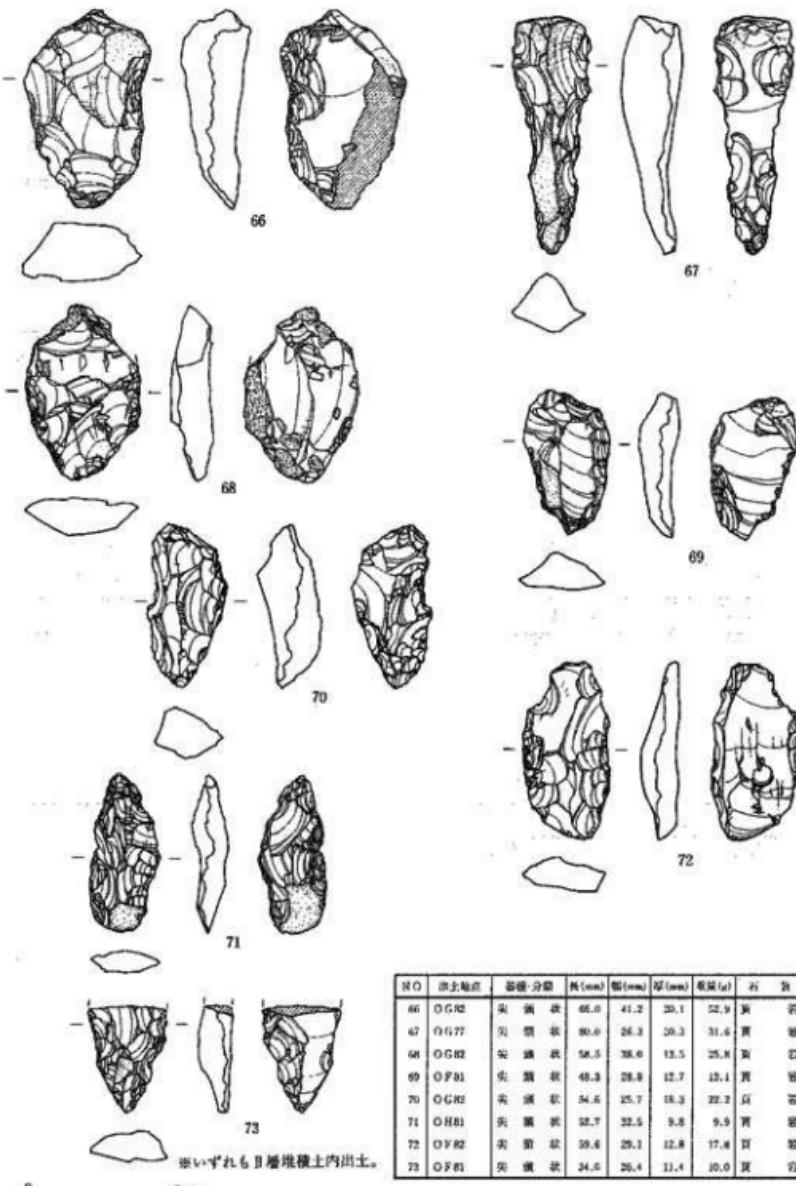


第40図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（6）—

NO	出土地点	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質
47	OCE2	石 週 b	78.1	42.9	17.9	50.6	青
48	OFB1	石 週 c	66.1	38.3	12.2	36.6	青
49	OB79	石 週 e	51.6	30.2	10.2	17.5	青
50	OG82	石 週 b	67.4	63.1	12.4	48.5	青
51	OGH1	石 週 b	45.7	26.8	11.9	16.1	青
52	OGH1	石 週 z	59.5	29.0	17.3	26.4	青
53	OMH1	石 週 z	58.3	33.5	12.7	35.0	青
54	OGH2	石 週 z	37.7	28.5	40.0	18.7	青
55	OGH2	石 週 z	46.0	60.4	14.1	31.3	青

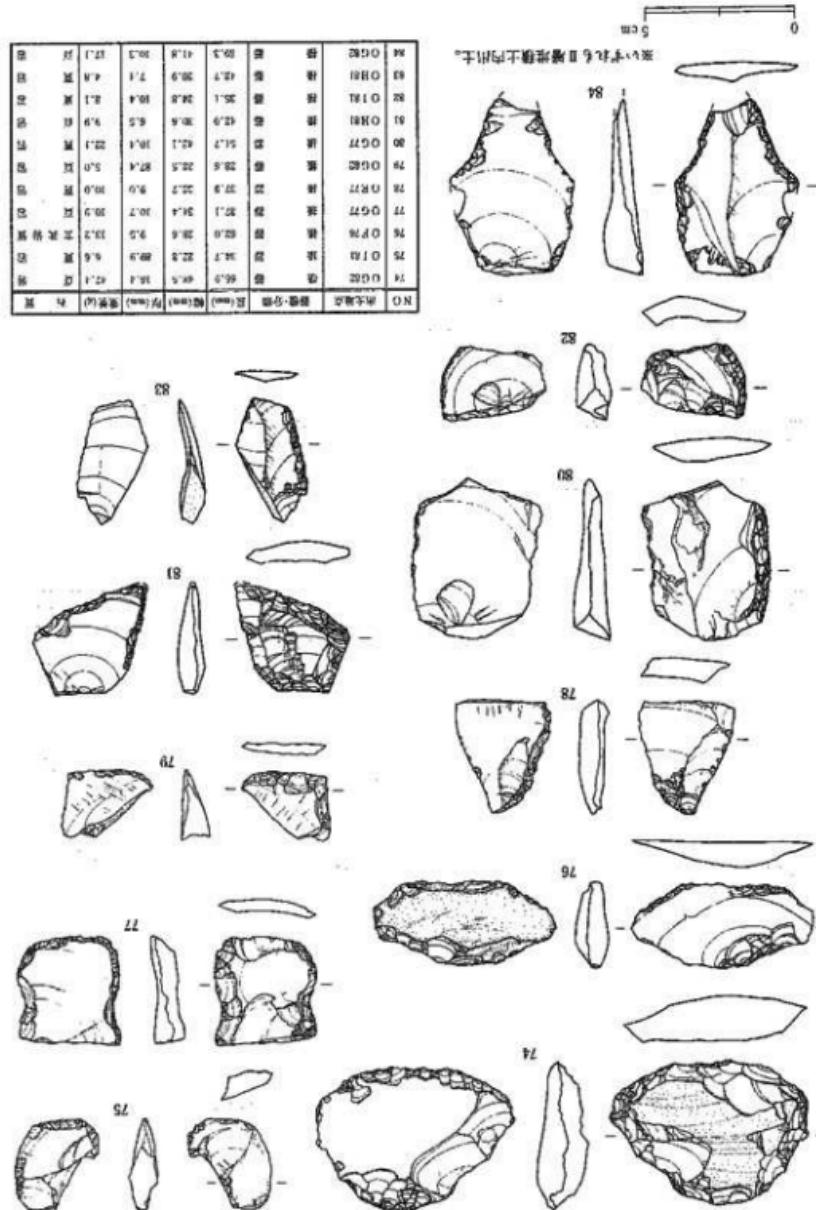


第41図 A・L・M区の造構外出土遺物—石器（7）—

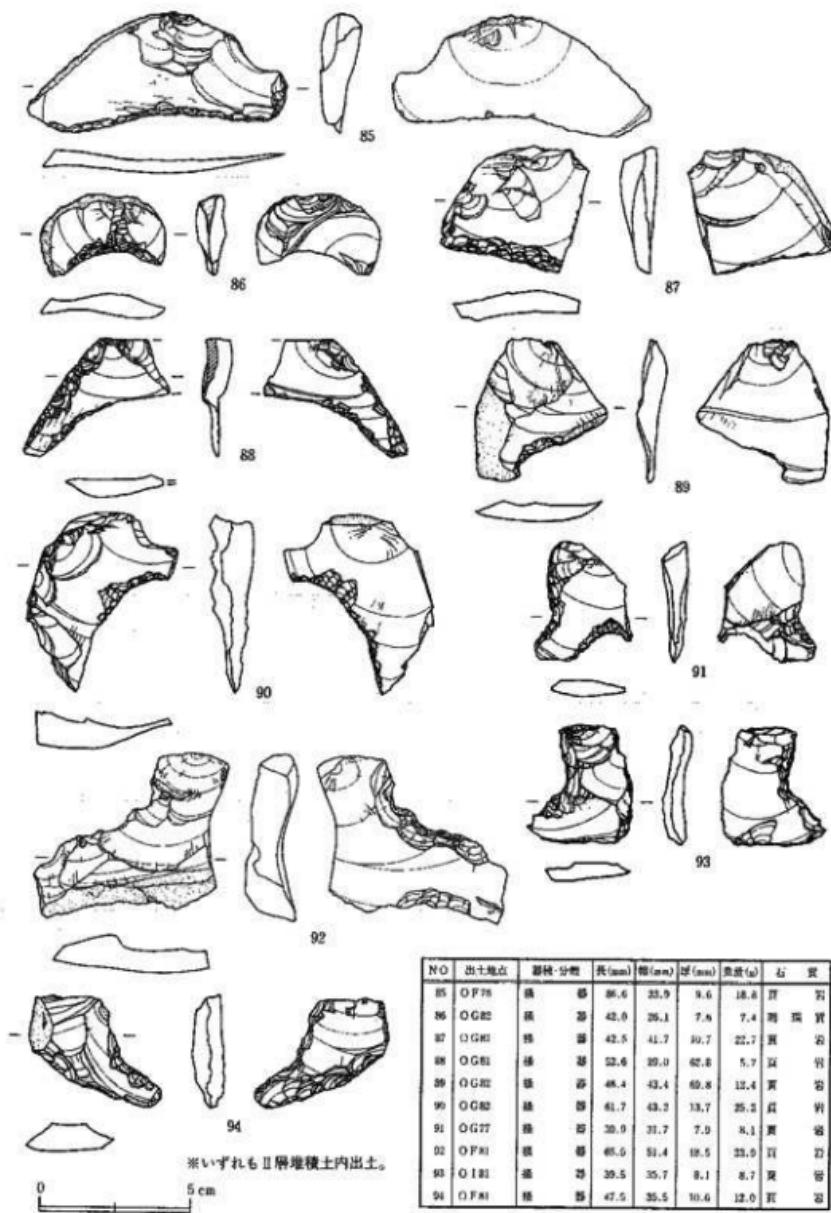


第42図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（8）—

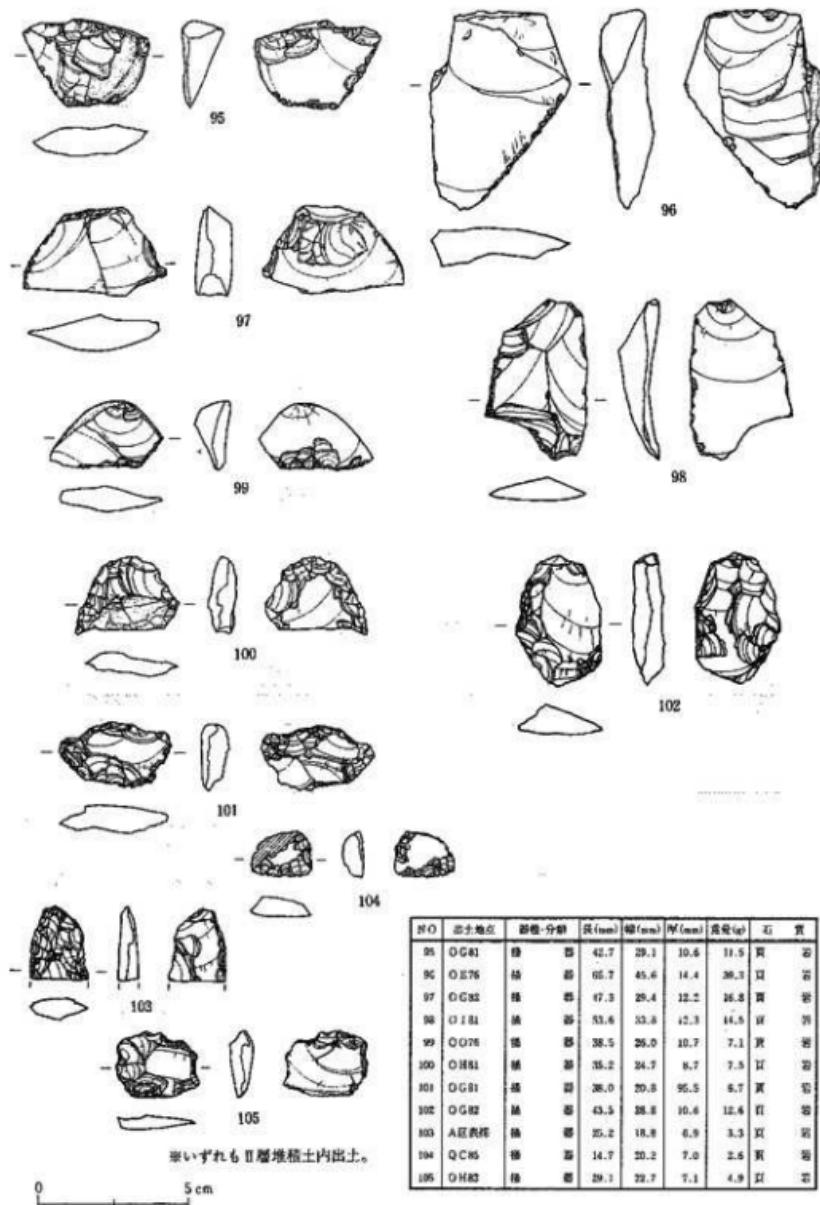
第43図 A・L・M区の遺跡外出土遺物一石器(9)一



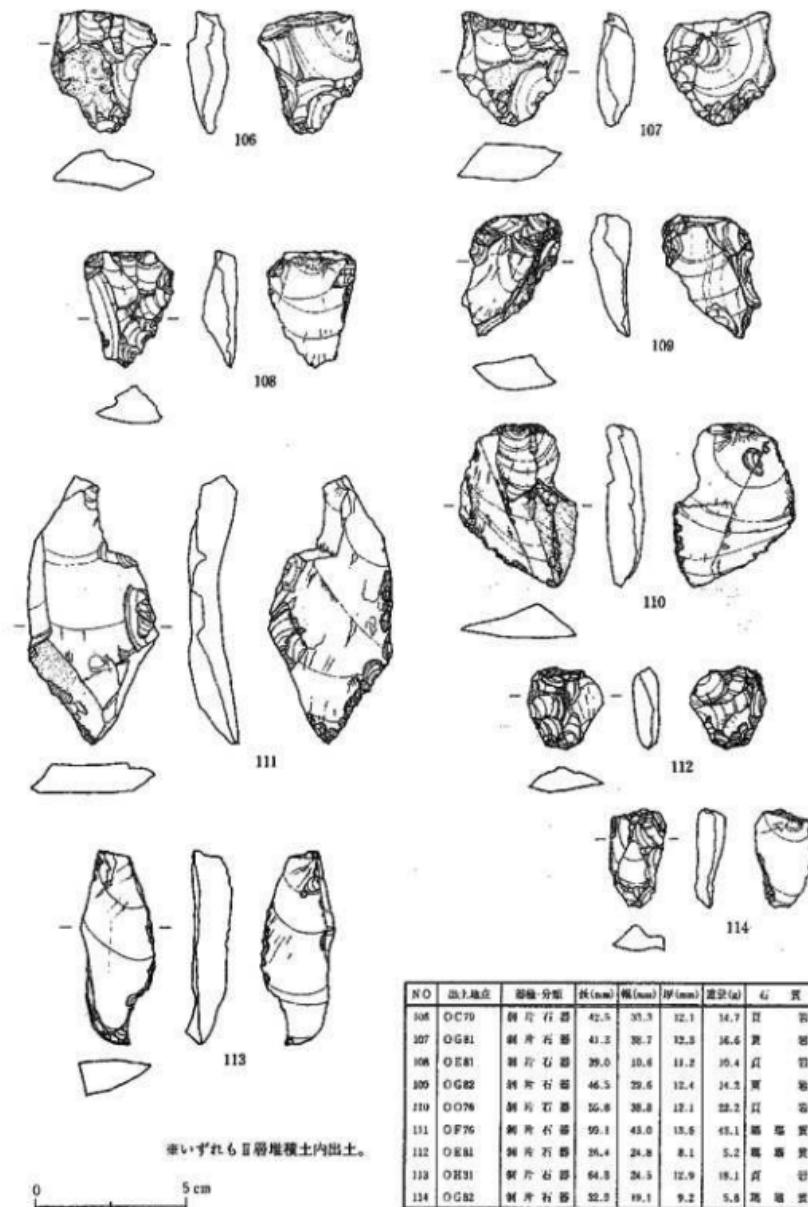
第2-2版 A・L・M区の遺跡外出土遺物



第44図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（10）—



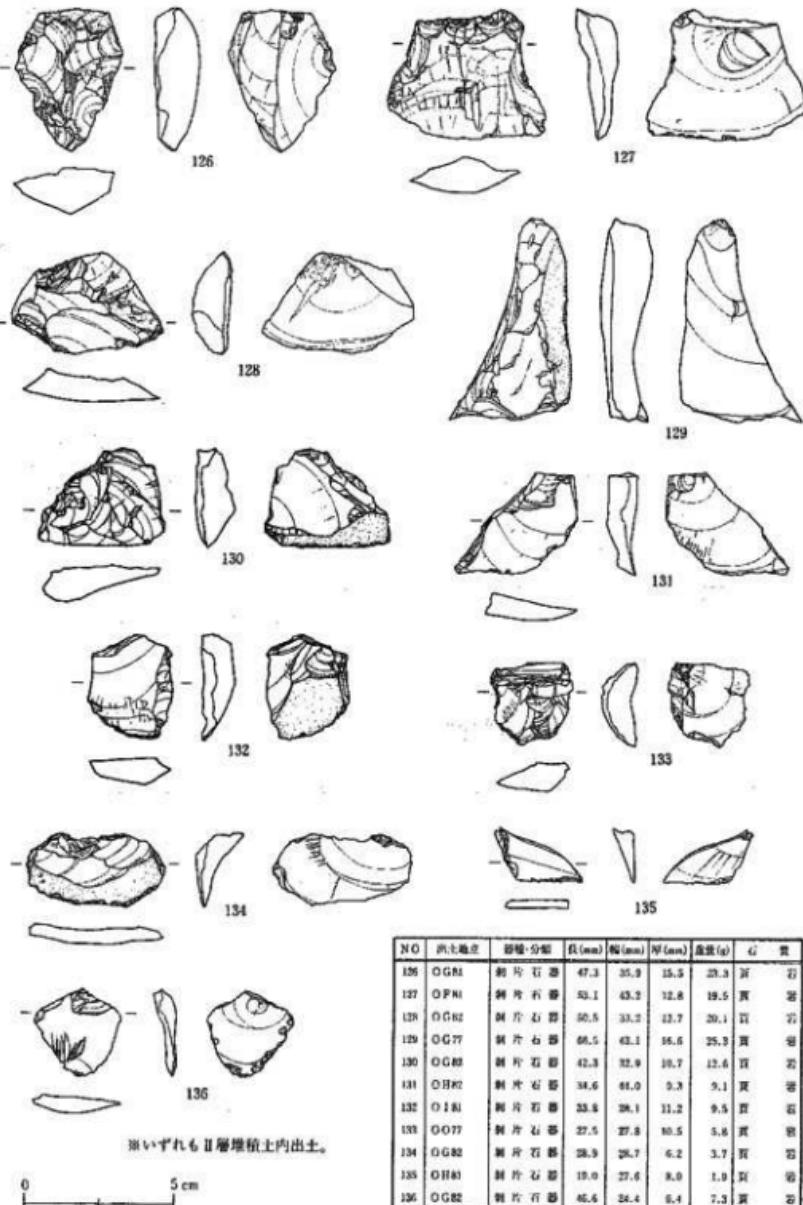
第45図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（11）—



第46図 A・L・M区の造構外出土遺物—石器 (12) —



第47図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（13）—



第48図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器 (14) —

圖49 A · L · M區①遺構外出土遺物—石器 (15) —

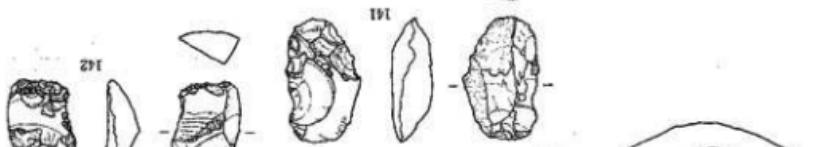
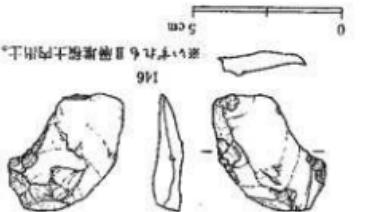
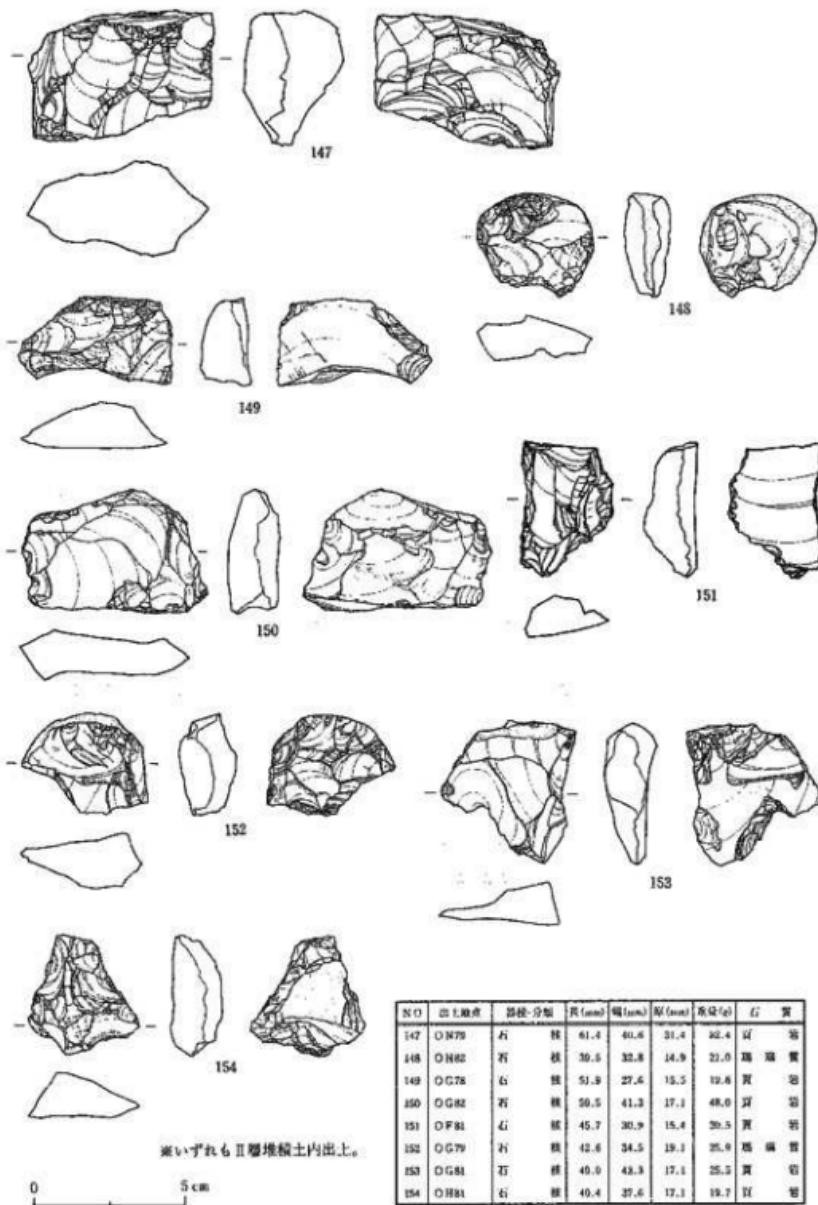
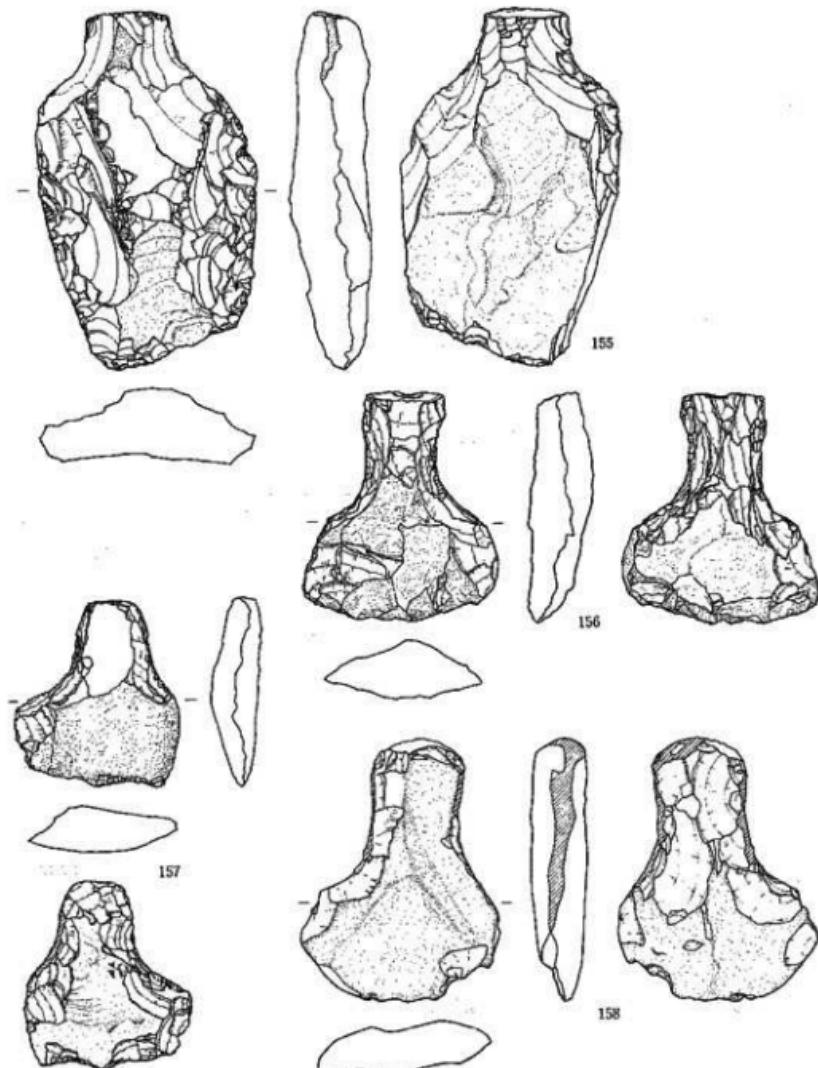


图 2-28 A-L·M区的土壤剖面出土植物



第50図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器 (16) —

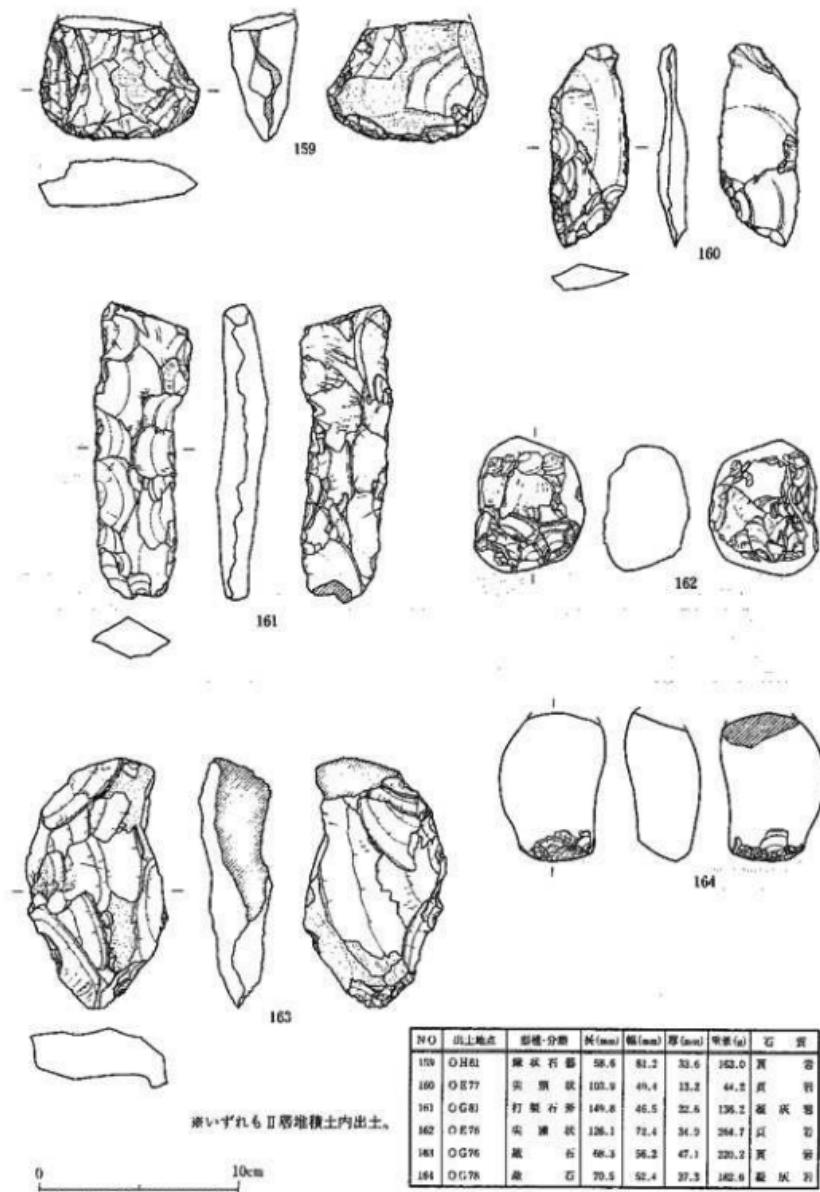


いずれもⅡ層堆積土内出土。

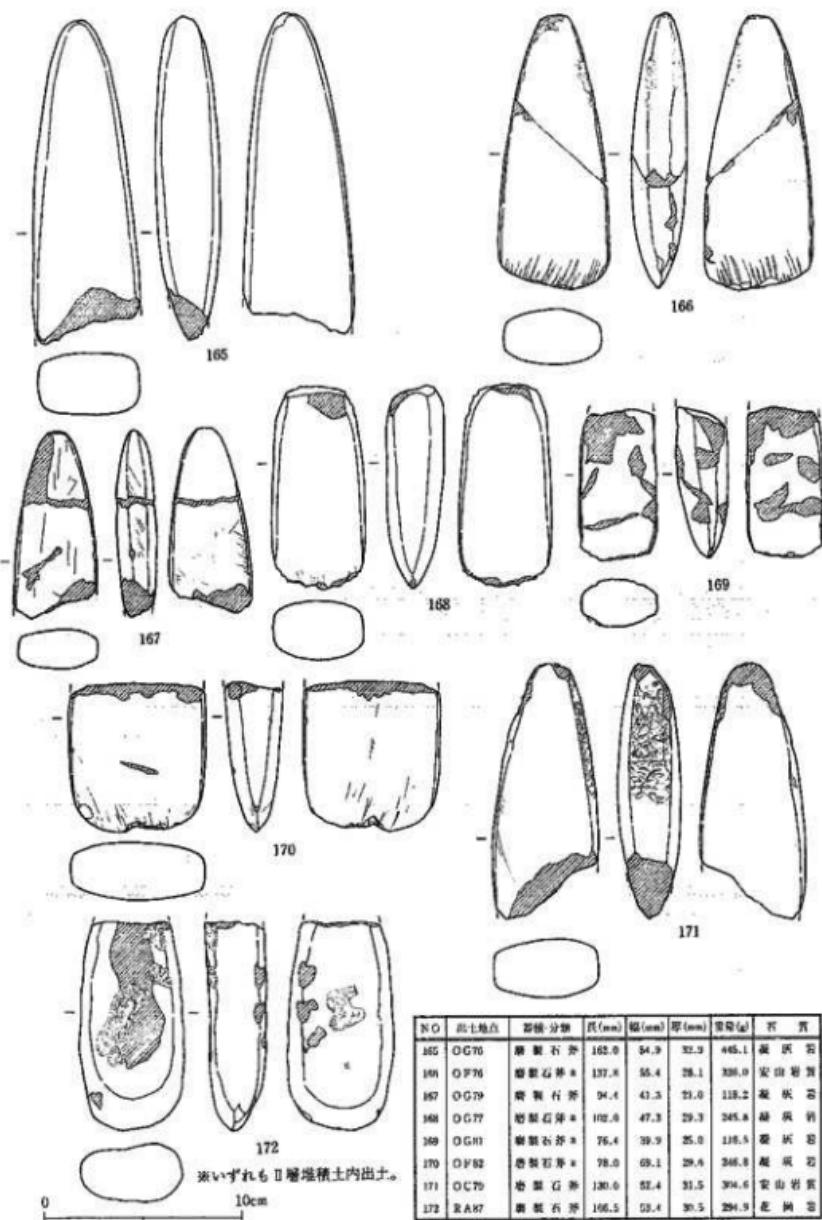
0                          100

Nº	出土地点	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質
150	Q-G76	狀 石 瓶	178.5	112.0	40.2	620.3	頁
156	Q-G77	狀 石 瓶	116.7	99.8	32.5	236.1	泰山 黃岩
157	Q-G77	狀 石 瓶	94.9	85.5	24.1	142.3	碧 玉
158	Q-181	狀 石 瓶	183.9	101.7	27.8	233.3	辰 正玉

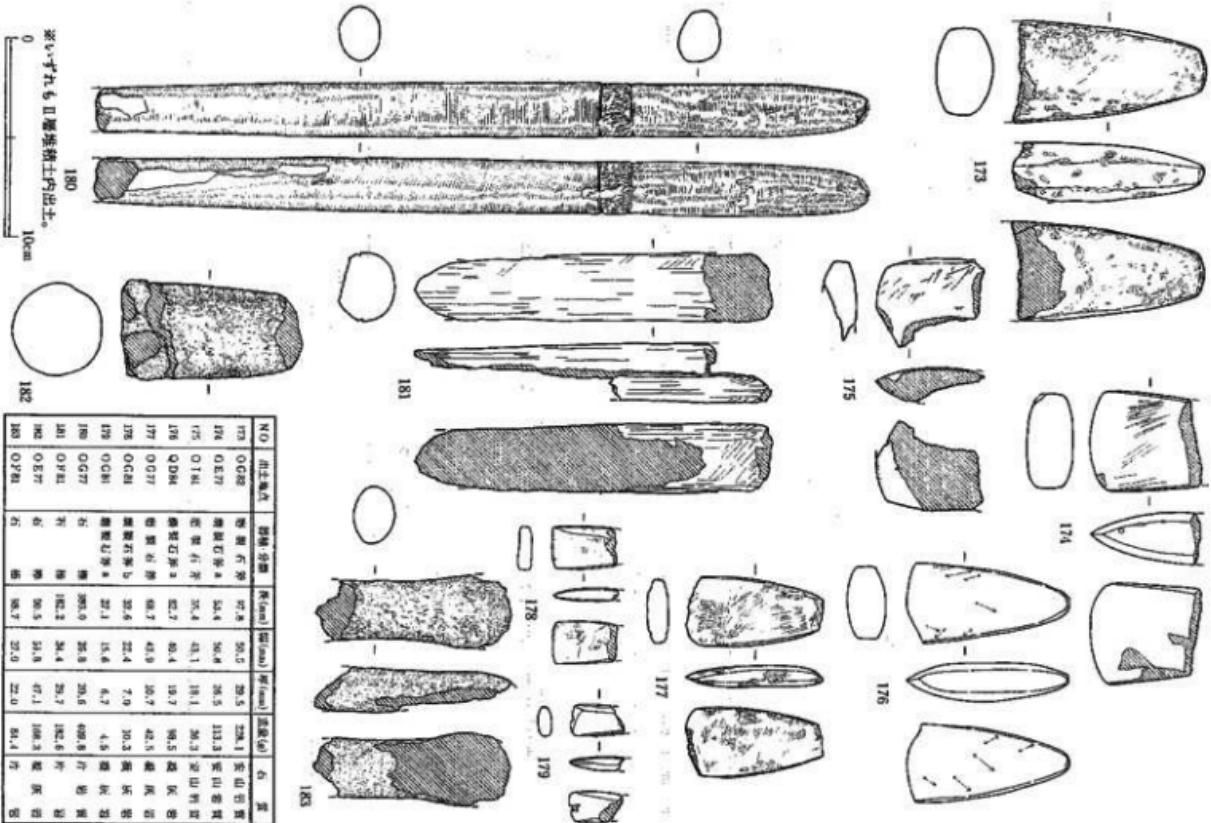
第51図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（17）—



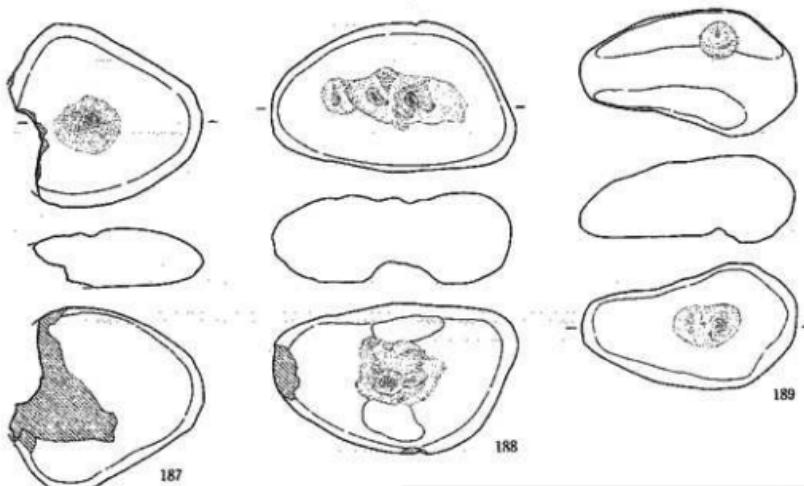
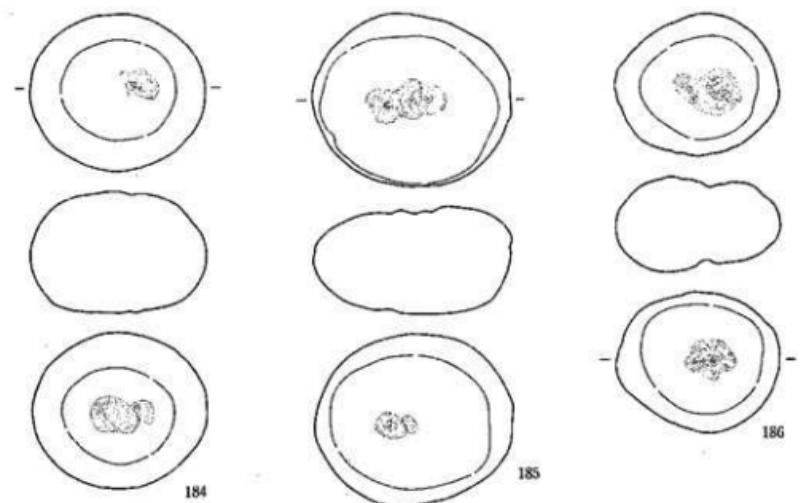
第52図 A・L・M区の造構外出土遺物一石器 (18) -



第53図 A・L・M区の造構外出土遺物一石器 (19) -



第54図 A・L・M区の遺構外出土遺物-石器 (20) —



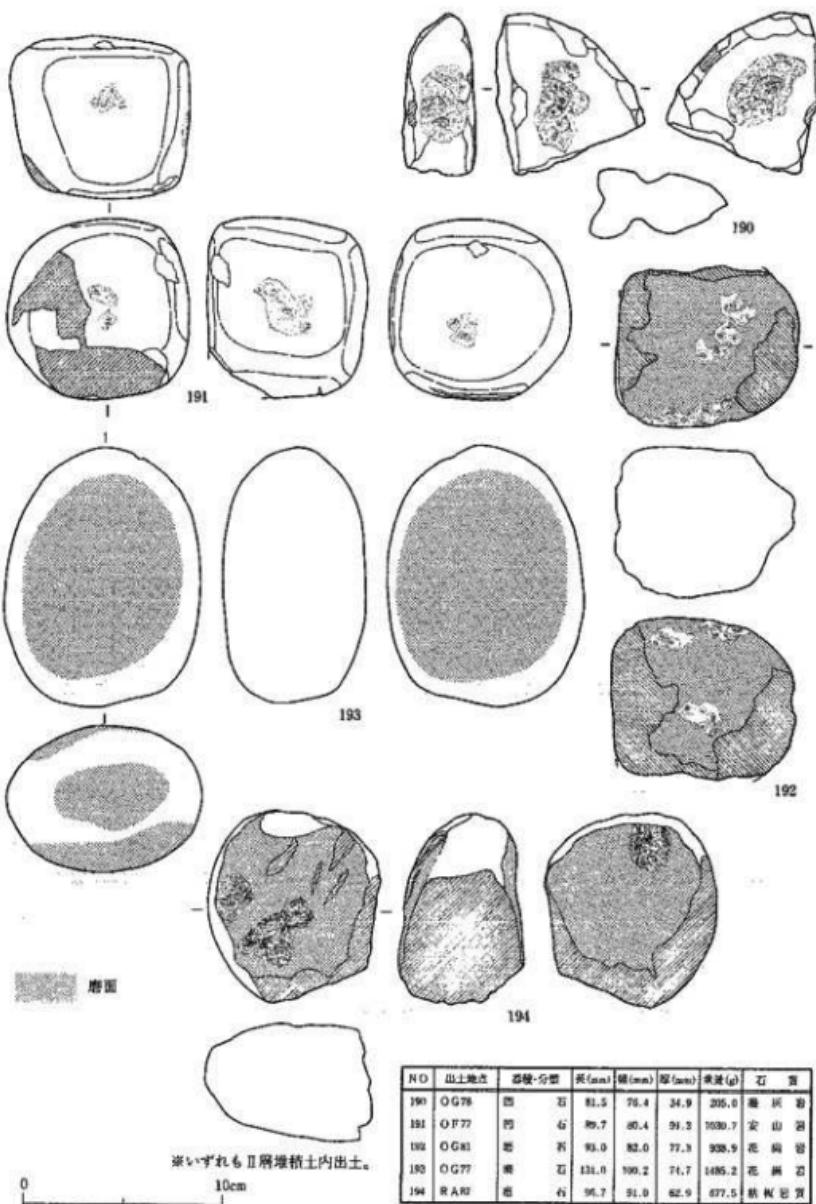
※いずれもⅡ層堆積土内出土。

0

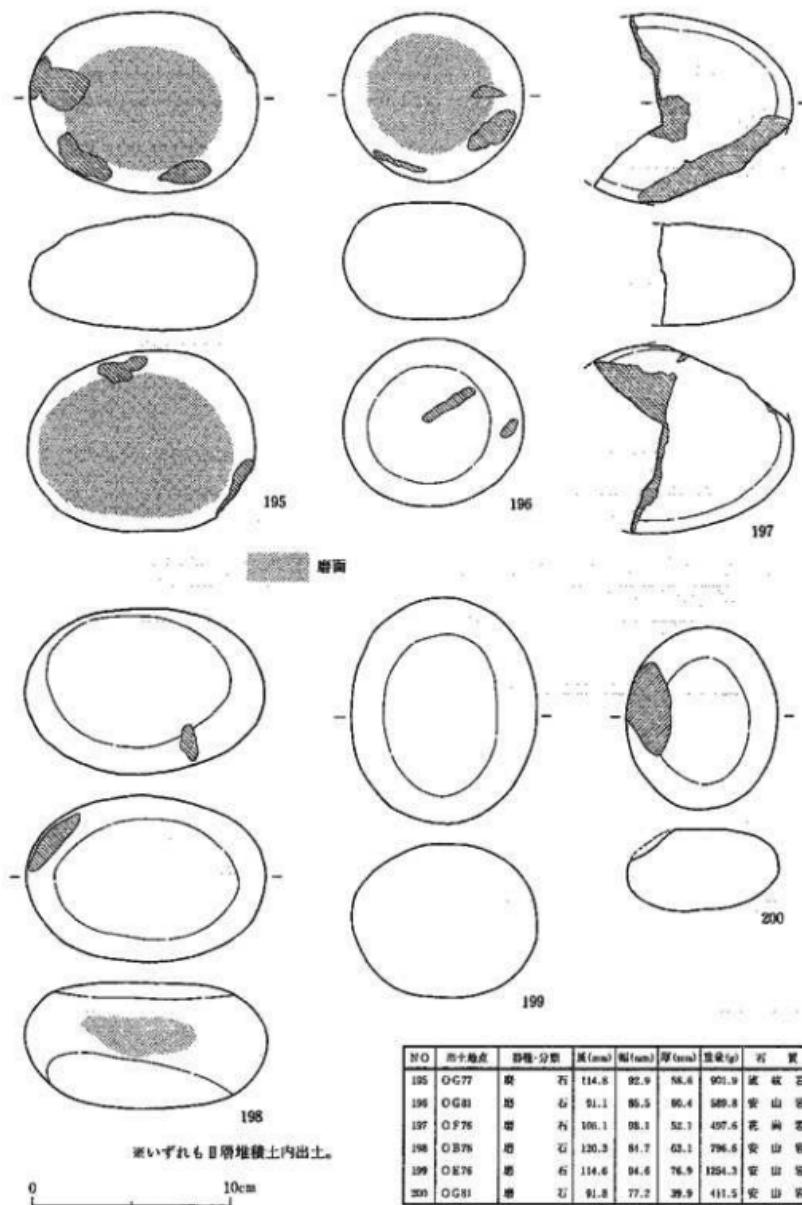
10cm

NO	出土地点	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質
184	OF79	円	37.5	79.1	63.1	666.9	安山岩
185	OF76	円	36.7	66.2	56.2	679.1	安山岩
186	OG82	円	82.8	71.6	48.4	366.7	花崗岩
187	OF82	円	96.2	92.8	39.8	290.6	綠灰岩
188	OC81	円	123.9	76.6	48.9	358.4	安山岩
189	OD77	円	108.3	63.0	44.0	299.8	安山岩

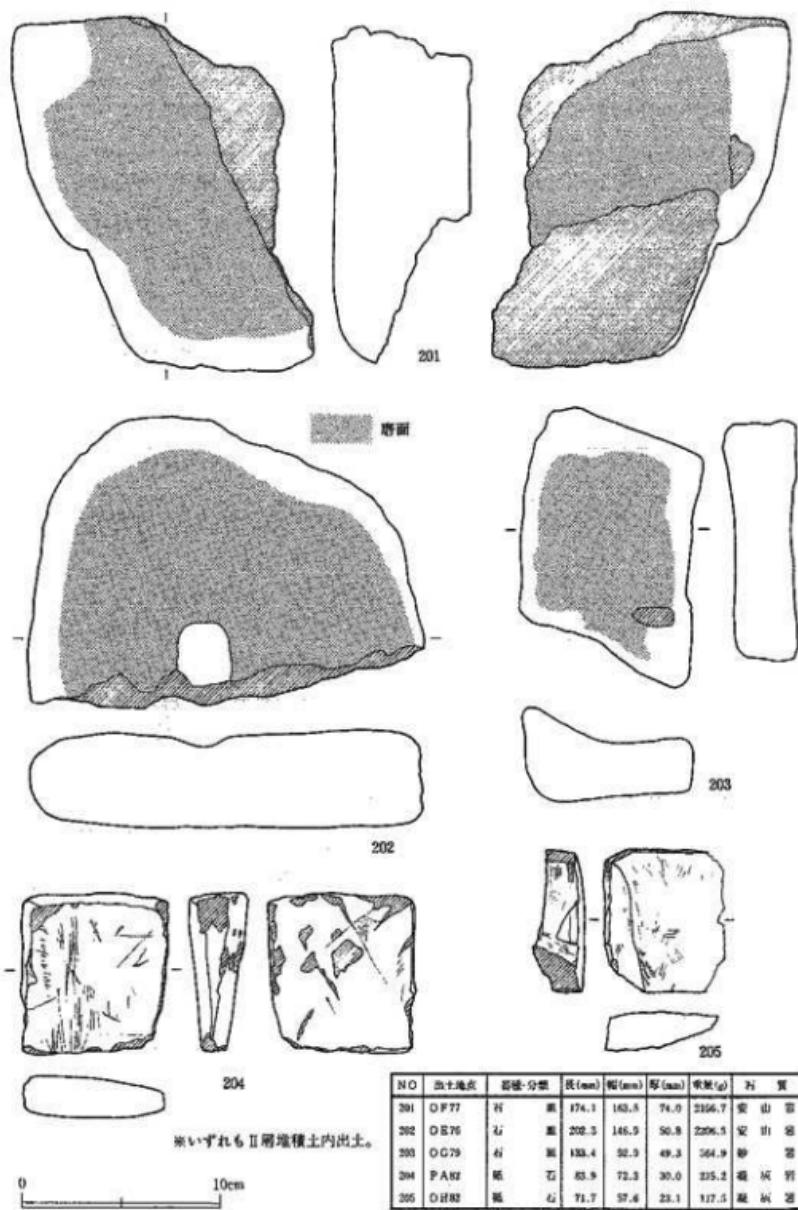
第55図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器 (21) —



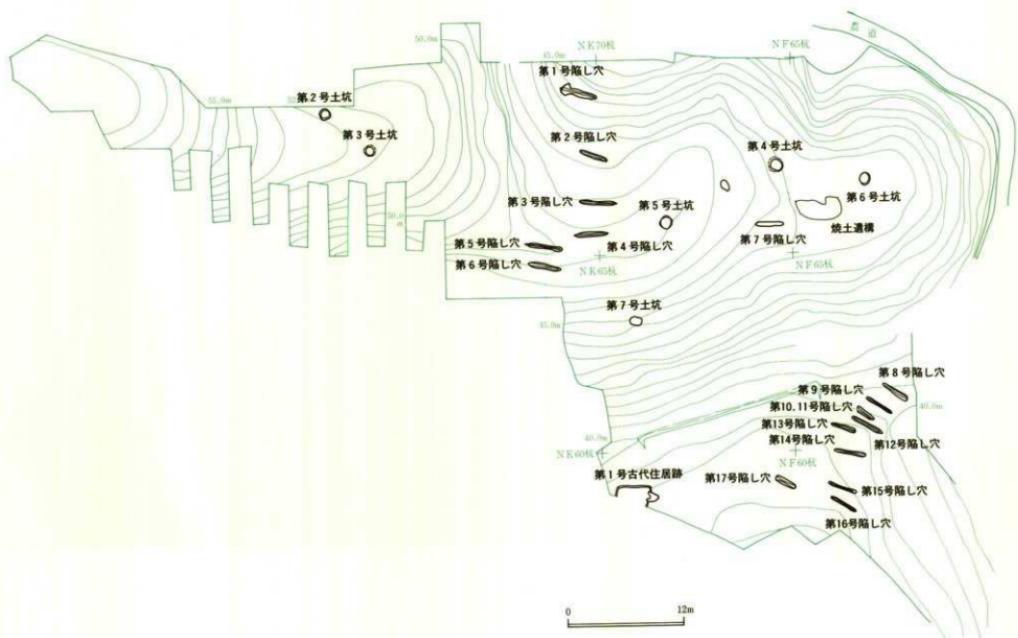
第56図 A・L・M区の造構外出土遺物—石器 (22) —



第57図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器 (23) —



第58図 A・L・M区の遺構外出土遺物—石器（24）—



第59図 B・C区の遺構位置

### 第3-1節 B・C区の検出遺構と出土遺物

馬の背状の丘陵部とその下の南斜面が調査対象地であり、A区とは東の沢で、D・E・F区とは、南に入る沢で区画されている。丘陵頂上部では、遺構密度が低いながら焼土遺構を伴う落ち込み1基、土坑6基、陥し穴遺構7基が検出された。丘陵下斜面では陥し穴遺構10基、古代の住居跡1軒が検出された。

丘陵部から順に検出遺構の説明をし、また遺構毎に遺構内出土遺物の説明も加えた。

#### 焼土遺構を伴う落ち込み—第60図—

〈位置・確認状況〉N E 66グリッド内に検出された。表土を除去した段階で焼土遺構をみつけ周辺を精査して確認した。掘り込みの確認面は地山の明黄褐色土層面である。

〈平面形・規模〉北西に倒木痕跡があったこと、掘り込みが浅かったことからはっきりしたプランをつかむことができなかったが、橢円形を呈すると考えられる。長径南北4mを測る。

〈堆積土の状況〉焼土遺構が確認されたのは暗褐色土で、同じ面で土器・石器が出土した。

〈壁・床面の状況〉掘り込みが浅く、判然としない。床面は緩い凹凸があった。

〈柱穴〉確認されなかった。

〈焼土遺構〉ほぼ中央に位置する。焼土面の広さは直径が1m20cm程度である。

〈遺物出土状況〉焼土遺構周辺に深鉢形土器（第61図1）の破片が散在していた。落ち込み内から磨製石斧・石匙・円盤状土製品等が出土した。

〈年代・その他〉出土土器から縄文時代中期末葉の遺構と推定される。住居跡とも考えられたが、焼土遺構が地山面より浮いて確認されたこと、プランが判然としないこと、遺構内から土器片を転用した円盤状土製品が多く出土していることから住居跡以外の遺構と考えた。

#### 【焼土遺構を伴う落ち込み内出土遺物】（第60図・第61図に図示、説明は挿図の通し番号）

1～8は土器片の縁辺を研磨し、円形に加工した円盤状土製品である。

9は底部から直線的に外傾し、胴部中位でふくらみ、口縁部が外反する深鉢である。口縁部は四単位の突起が付き、波状を呈している。胴部の地文は縄文であるが、口縁の突起から下にS字状に沈線で区画され、無文とした文様帯が展開される。大木10式に比定される。

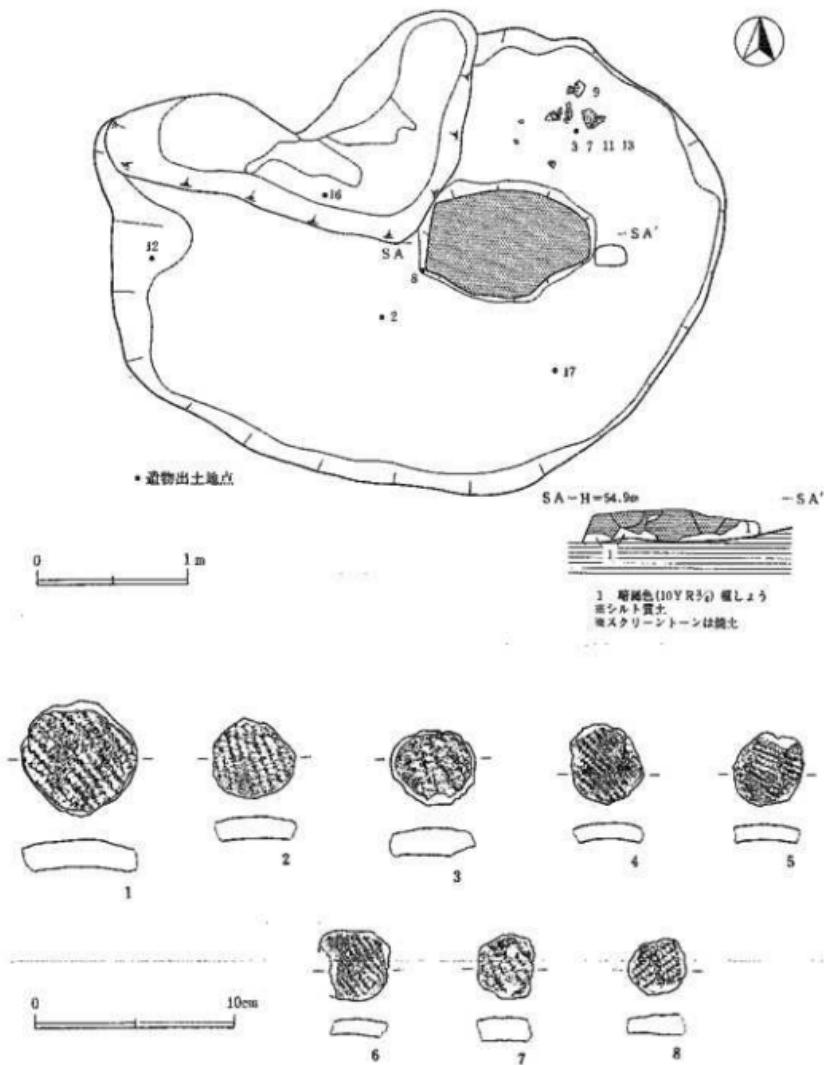
10は口縁部から頸部の破片であり、口縁は平坦である。沈線で区画され、縄文が充填された文様帯が展開される。大木10式に比定される。

11～13は口縁部から頸部の破片であり、粘土紐の隆線にそって刺突列が付されている。

14は小形土器の底部破片であり、斜縄文が施されている。15は底部の破片である。

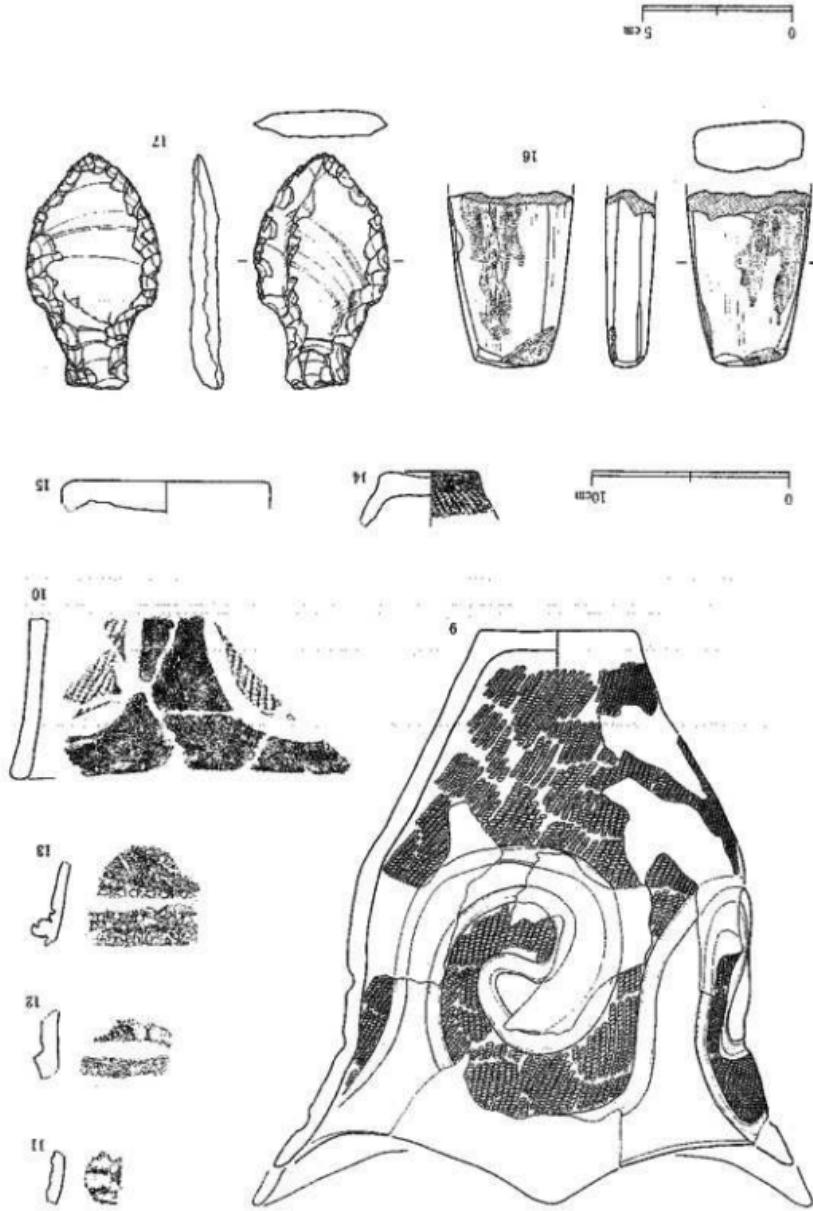
16は磨製石斧の刃部が欠損したものである。原石面のへこみが縱方向に残っている。

17は幅1cmの刺片の縁辺を調整し、先端が尖んがり、基部がくびれた形状を作り出している。



第60図 焼土造構を伴う落ち込みと出土遺物（1）

第61圖 條土遺物之件數及出土遺物 (2)



第2号土坑（SK02）－第62図－

＜位置・確認状況＞O I 68グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。直径1m5cmで、確認面から最深部まで75cmである。

＜埋土の状況＞下位の底面から壁際にかけて褐色土ないし黄褐色土が堆積し、上位の中央に黒褐色土が入り込む。

＜断面の形状＞開口部からいくぶんすぼまって底部にいたる。

＜底面の状況＞底面は中央が凹み、鍋底状を呈する。〈遺物・その他〉出土遺物はない。

第3号土坑（SK03）－第62図－

＜位置・確認状況＞O H 67グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈し、底部は同心円状に外に広がる。開口部の直径が92cmで、底部の直径は1m28cmで、確認面から最深部まで77cmである。

＜埋土の状況＞底部から中位にかけて褐色土が堆積し、上をレンズ状に黒褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞開口部が狭いが、底部に向けてハの字に大きくひろがり台形状を呈する。

＜底面の状況＞掘り込みは軟い岩盤まで達している。底面は中央が凹み、鍋底状を呈する。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第4号土坑（SK04）－第62図－

＜位置・確認状況＞N F 67グリッド中央で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈し、底部は同心円状に外に広がる。開口部の直径は1m6cmで、底部の直径は1m45cm、確認面から最深部まで80cmである。

＜埋土の状況＞底辺際には壁の崩落による地山土塊が混在した褐色土が堆積し、中央に厚く黒褐色土が覆っていた。

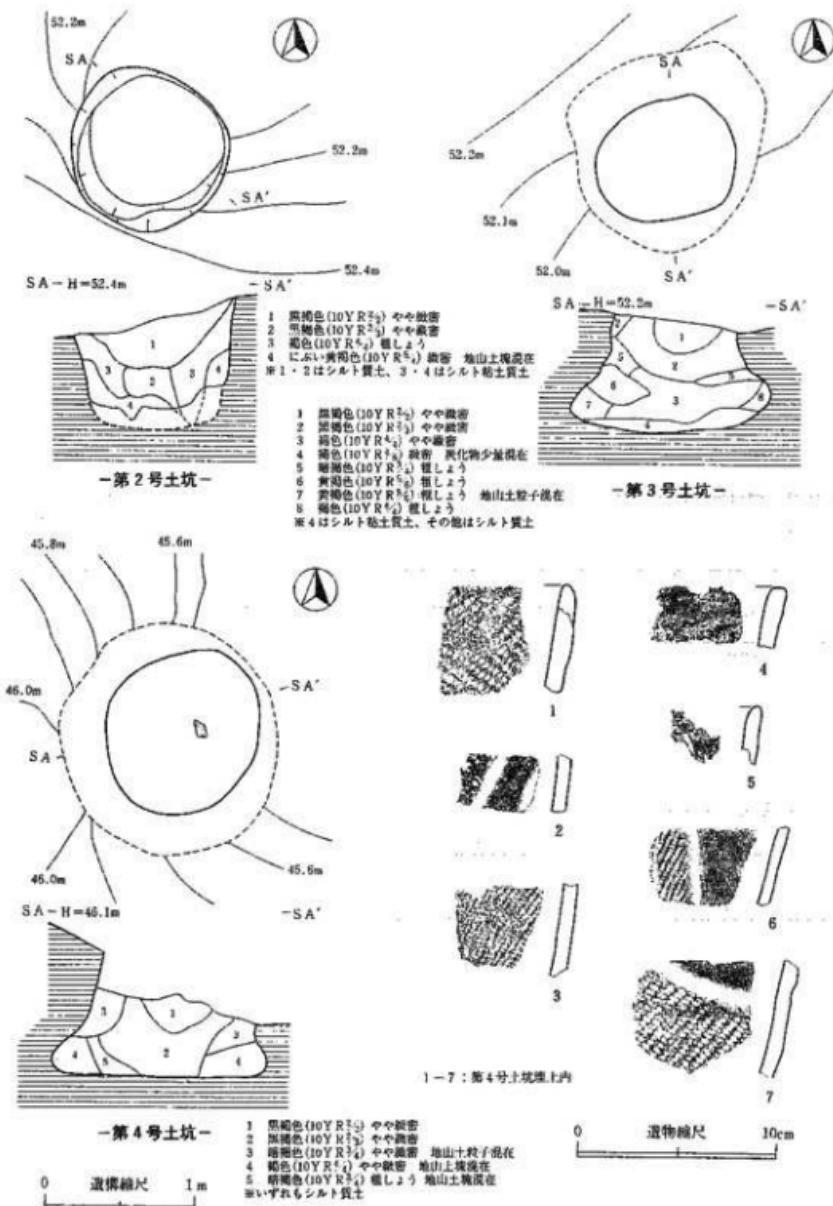
＜断面の形状＞開口部が狭いが、底辺に向けてハの字状に広がり台形状を呈する。

＜底面の状況＞掘り込みは軟い岩盤まで達している。底面は平坦である。

＜遺物・その他＞底面から土器片が出土している。第62図に示した。1は厚手の口縁部破片であり、羽状縄文が施されている。2・3は無文の口縁部である。4～7は胴部の破片であり、縄文の地に沈線で区画された無文帯か縄文充填による文様が描かれている。

＜年代＞出土土器から縄文時代中期末葉の時期に構築されたものと推定される。

第3-1節 B・C区の検出構造と出土遺物



第62図 第2号・第3号・第4号土坑

第5号土坑（SK05）－第63図－

＜位置・確認状況＞ND64グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈している。直径1m20cmで、確認面から最深部まで80cmである。

＜埋土の状況＞黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞開口部が狭く、底部が広い袋状を呈する。

＜壁・底面の状況＞傾斜が均一な斜めの掘り込みで、底面は平坦である。

＜遺物・その他＞底面から第63図に示した土器片が出土している。1は厚手の深鉢の胴部破片であり、縄文地に縦の結節が走っている。2は単軸の撫糸文が施され、沈線が縁にみえる。

第6号土坑（SK06）－第63図－

＜位置・確認状況＞ND67グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈している。直径1mで、確認面から最深部まで42cmである。

＜埋土の状況＞壁にそって褐色土が堆積し、中央に厚く黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞中央がふくらみ袋状を呈する。

＜壁・底面の状況＞底面はわずかにくぼむ。

＜遺物・その他＞底面近くからの土器小片が出土している。第63図の3は縄文が施されている。

第7号土坑（SR01）－第63図－

＜位置・確認状況＞伏せた状態の深鉢形土器をみつけ周辺を精査して、斜面上位に掘り込みをみつけ確認した。

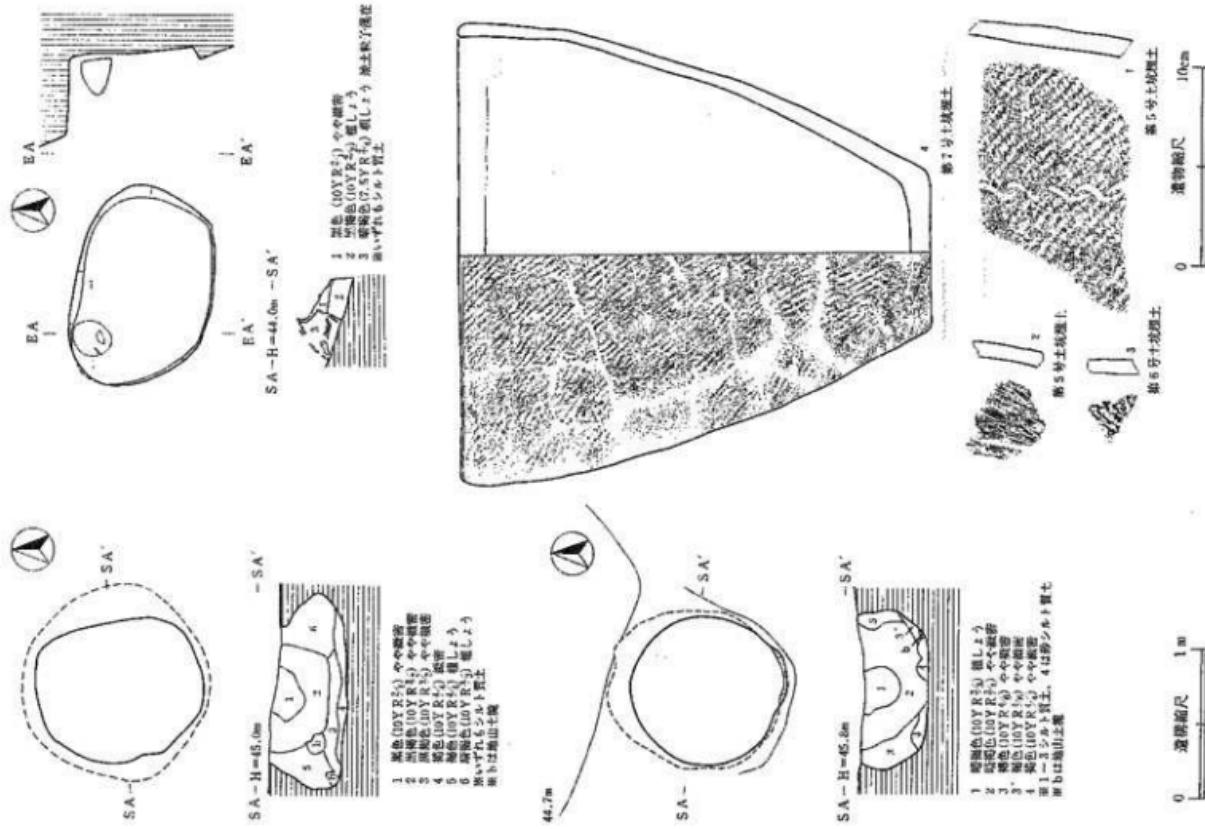
＜平面形・規模＞椭円形を呈している。長径1m37cmで、確認面から最深部まで50cmである。

＜埋土の状況＞底面には褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞浅い掘り込みがあるが、底面に対して垂直である。

＜壁・底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞土坑底面からは幾分浮いて、口縁部を下にした状態で第63図4に示した深鉢が出土した。深鉢は底部から直線的に外傾しており、口縁部が立ち上がる。外面は一様に斜縄文が施されている。



第63圖 第5号・第6号・第7号土坑

頂上部の陥し穴遺構を第1号から第7号まで番号を付して説明する。

### 第1号陥し穴遺構 (SKT01) - 第64図-

<位置・確認状況>丘陵尾根の北斜面にあたるN J 69グリッド南側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>西側は倒木痕により壊されているが、細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m50cm、底部長軸幅2m98cmと推定され、開口部短軸幅48cm、底部短軸幅8cmである。確認面から最深部まで90cmである。

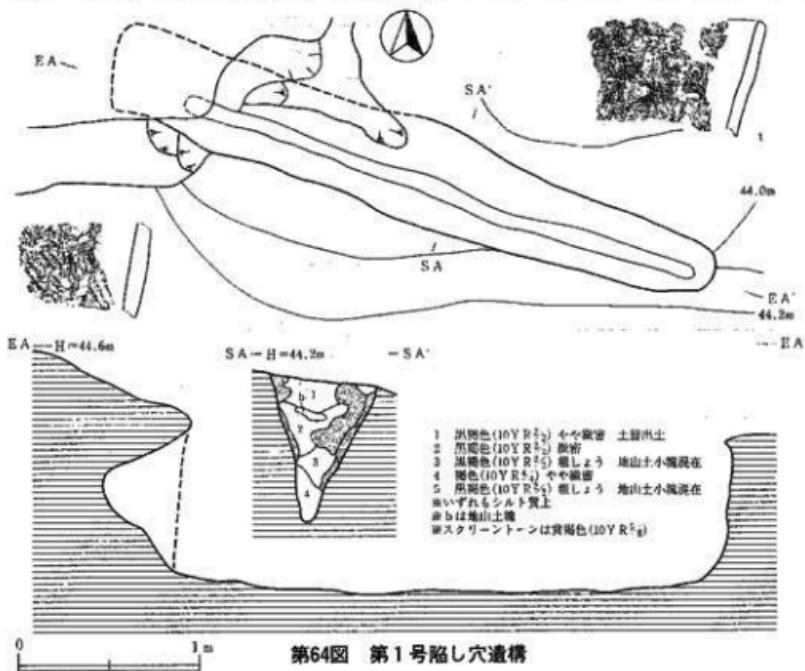
<長軸方向>N-70°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には褐色土が充填しており、中位にはやわらかな黒褐色土が、上位にはしまりのよい黒褐色土が覆っていた。はじめに斜面上位から褐色土の流れ込みがあり、その上に黒褐色土が自然堆積していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、東壁でみるとかぎり開口部から底面にかけて、ほぼ垂直に下がる。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>埋土上位から縄文土器片が出土している。1は口縁部の破片で無文である。



第64図 第1号陥し穴遺構

## 第2号陥し穴遺構 (SKT02) - 第65図-

＜位置・確認状況＞丘陵尾根の北斜面にあたるOA67グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m93cm・短軸幅38cm、底部長軸幅2m87cm・短軸幅8cmである。確認面から最深部まで96cmである。

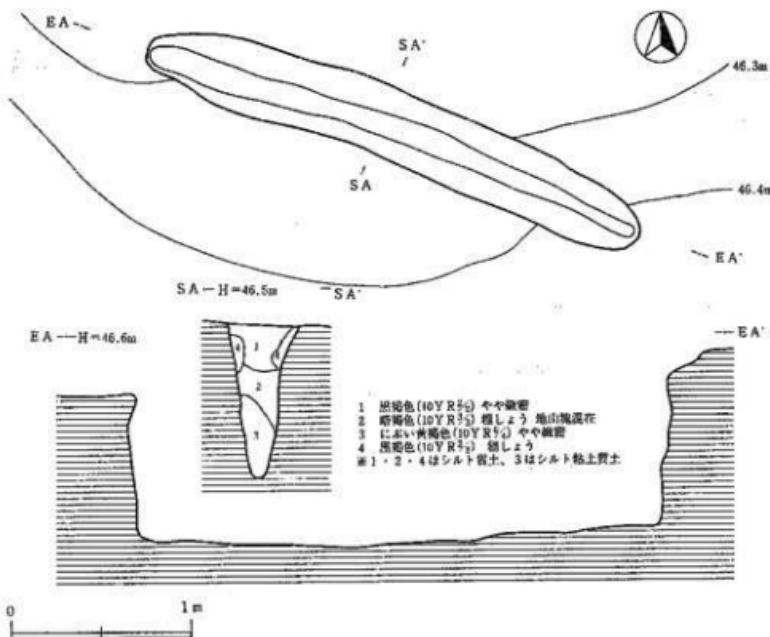
＜長軸方向＞N-68°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ3層に分けられる。下位にはにぶい黄褐色土が充填しており、中位には暗褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。中位には壁の崩落土とみられる地山土塊が混在している。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底面にかけてほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第65図 第2号陥し穴遺構

## 第3号陥し穴構造 (SKT03) - 第66図 -

<位置・確認状況>丘陵の尾根すじにあたるOA66グリット西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m60cm・短軸幅58cm、底部長軸幅4m4cm・短軸幅15cmである。確認面から最深部まで1m17cmである。

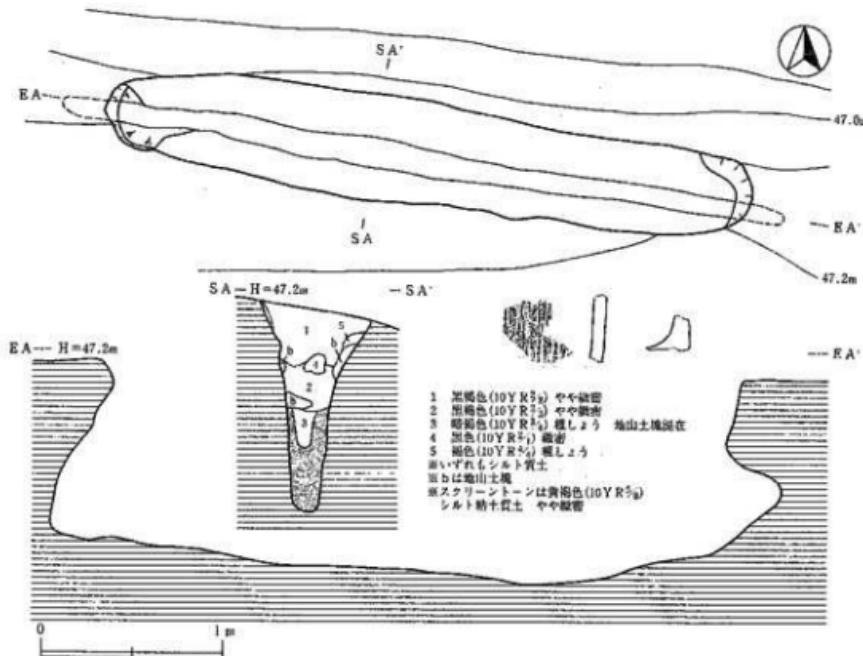
<長軸方向>N-80°-Nを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には黄褐色土が充填しており、中位には暗褐色土と褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。下位の埋土は地山土と近似しており、掘り上げた土が流れ込んだものとみられ、中位まで埋まった後に壁が崩落し、黒褐色土が堆積していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、外方へ袋状に広がる。短軸の断面形は、開口部から中位までが一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

<壁・底面の状況>底面は弓なりにくぼむ。

<遺物・その他>埋土上位から縄文土器片が出土している。



第66図 第3号陥し穴構造

## 第4号陥し穴遺構 (SKT04) - 第67図 -

＜位置・確認状況＞丘陵尾根すじにあたるO A65グリッド西側、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞幅が広く梢円形に近い形状を呈している。開口部長軸幅3m19cm・短軸幅69cm、底部長軸幅3m42cm・短軸幅9cmである。確認面から最深部まで1m4cmである。

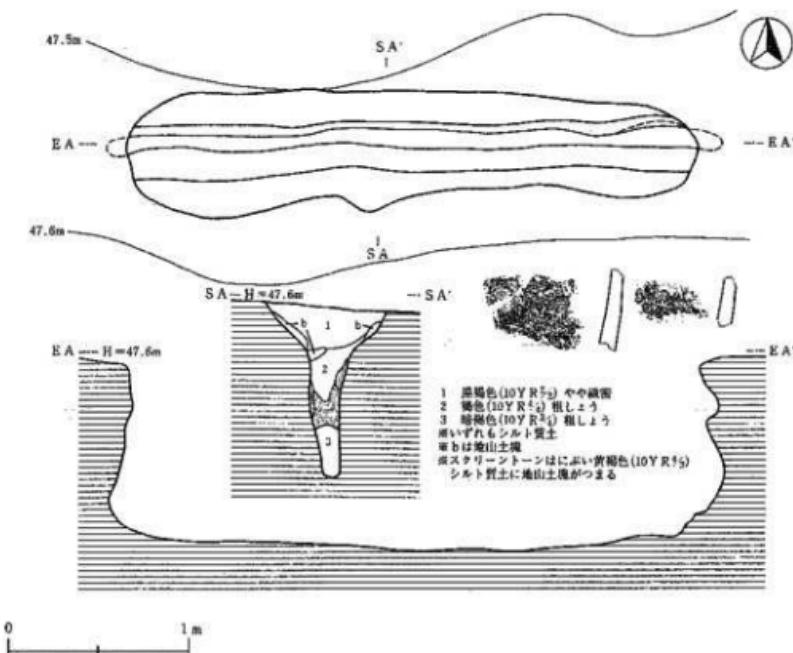
＜長軸方向＞N-90°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には暗褐色土が充填しており、中位には黒褐色土が、上位は黒褐色土が覆っていた。中位の黒褐色土の下に地山土塊がつまっていた。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で外方へ袋状に広がる。短軸の断面形は、開口部から中位までが一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土中位より縄文土器片が出土している。



第67図 第4号陥し穴遺構

## 第5号陥し穴遺構 (SKT05) - 第68図 -

<位置・確認状況>丘陵尾根すじにあたるOC65グリッド南側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m94cm・短軸幅48cm、底部長軸幅3m8cm・短軸幅9cmである。確認面から最深部まで1m4cmである。

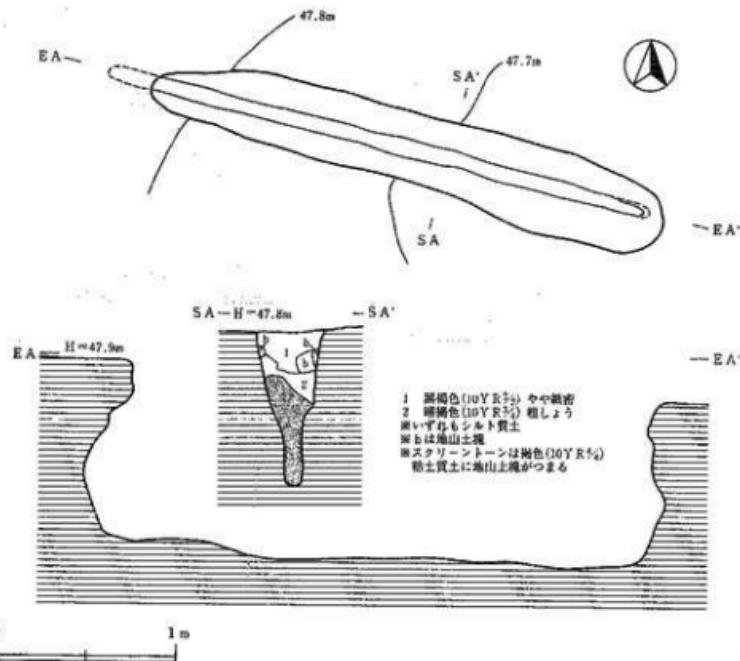
<長軸方向>N-75°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況>埋土はおよそ4層に分けられる。下位には黄褐色の地山土塊が充填しており、中位には暗褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。下位の黄褐色土塊は掘り上げた土が流れ込み、短い時間で埋没していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、外方へ袋状に広がる。短軸の断面形は、開口部から中位が一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第68図 第5号陥し穴遺構

## 第6号陥し穴遺構 (S K T06) —第69図—

〈位置・確認状況〉丘陵尾根すじにあたるOC64グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

〈平面形・規模〉細長い溝状であるが、緩やかな弧状を呈する。開口部長軸幅2m63cm・短軸幅43cm、底部長軸幅2m67cm・短軸幅19cmである。確認面から最深部まで1m18cmである。

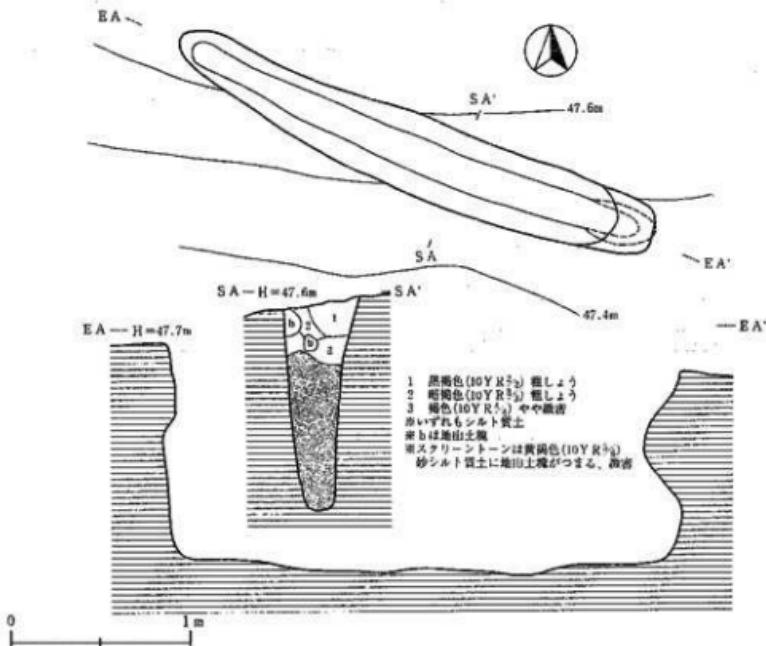
〈長軸方向〉N-78°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

〈埋土の状況〉埋土はおよそ3層に分けられる。下位には地山土塊がつまた黄褐色土が充填しており、中位には暗褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。下位の黄褐色土は掘り上げた土が流れ込み、短い時間で埋没していったものとみられる。

〈断面の形状〉長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、外方へ袋状に広がる。東西でふくらみ具合が異なり、東側では中位より下位にかけて大きくふくらむ。短軸の断面形は開口部から底部まで垂直に下がるU字状を呈する。

〈底面の状況〉底面はいくぶん波打っている。

〈遺物・その他〉埋土中位より縄文土器片が出土している。



第69図 第6号陥し穴遺構

## 第7号陥し穴遺構 (SKT09) - 第70図-

<位置・確認状況>丘陵の尾根すじにあたるNE65グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>幅が広く橢円形に近い形状を呈している。開口部長軸幅2m94cm・短軸幅57cm、底部長軸幅3m5cm・短軸幅17cmである。確認面から最深部まで91cmである。

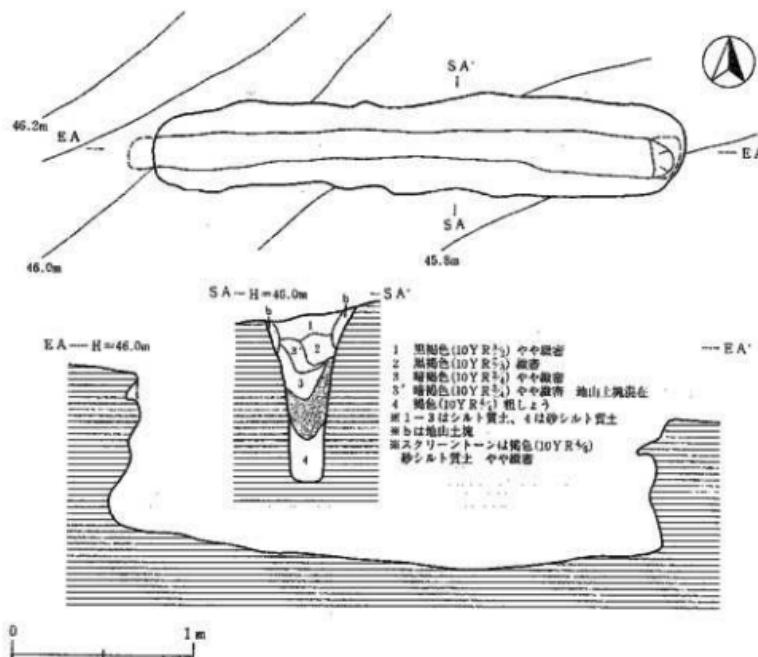
<長軸方向>N-90°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ4層に分けられる。下位には褐色土が充填しており、中位には暗褐色・褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。下位の褐色土には地山土塊が混在しており、地山を掘り上げた土が、流れ込んだものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、外方へ袋状に広がる。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は弓なりにくぼむ。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第70図 第7号陥し穴遺構

丘下のB区に検出した第8号から第17号までの陥し穴遺構と、古代の住居跡について説明する。

#### 第8号陥し穴遺構 (SKT23) - 第71図-

<位置・確認状況>谷部上位にあたるNC61グリッド中央で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈しているが東側の幅が広く、西側は狭い。開口部長軸幅3m7cm・短軸幅最大で42cm・最小で26cmである。底部長軸幅3m21cm・短軸幅18cmである。確認面から最深部まで1m10cmである。

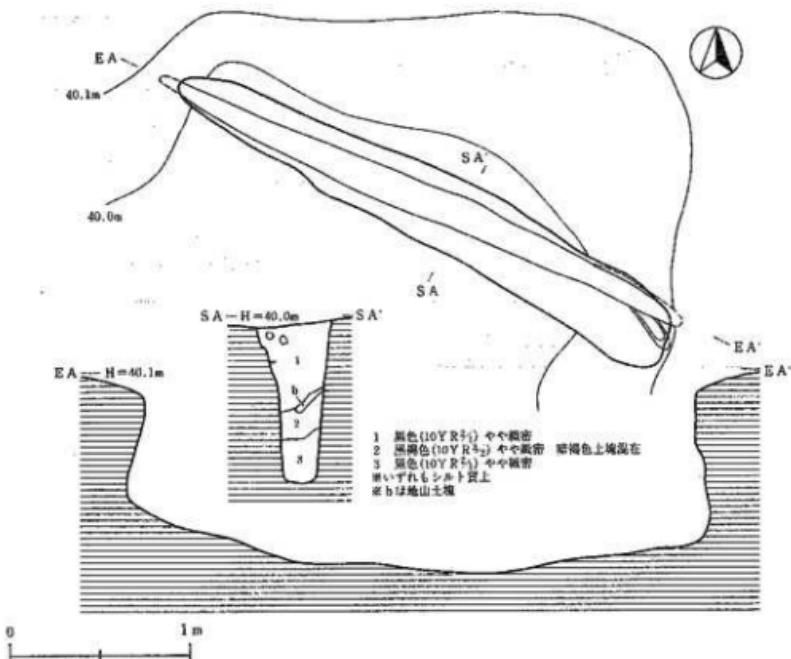
<長軸方向>N-64°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>開口部から中位にかけて谷に堆積した暗褐色土を掘り込んでいる。埋土は3層に分けられ、下位には黒色土が充填し、中位には黒褐色土が、上位には黒色土が覆っていた。

<断面の形状>長軸の断面形は、壁の中位から外に張り出す台形状を呈する。短軸の断面形は開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<壁・底面の状況>底面は弓なりに大きくくぼむ。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第71図 第8号陥し穴遺構

## 第9号陥し穴遺構（S K T11）－第72図－

＜位置・確認状況＞谷部上位にあたるNC61グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m20cm・短軸幅40cm、底部長軸幅3m40cm・短軸幅17cmである。確認面から最深部まで80cmである。

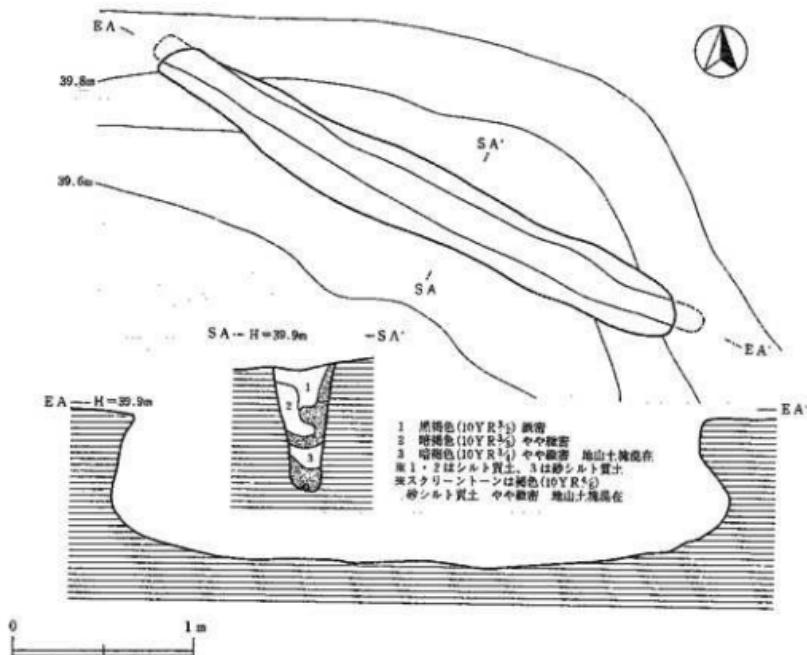
＜長軸方向＞N-65°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおよそ4層に分けられる。下位には地山土塊の混在した褐色土が充填し、中位には褐色土と暗褐色土が交互に堆積した後に、上位を黒褐色土が覆っていた。下位の褐色土は壁の崩落土とみられる。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で外方へ大きくふくらみ、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜壁・底面の状況＞底面は弓なりに大きくくぼむ。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第72図 第9号陥し穴遺構

## 第10号・第11号陥し穴遺構 (SKT 10・16) — 第73図—

〈位置・確認状況〉谷の中位にあたるND61グリッド杭の西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

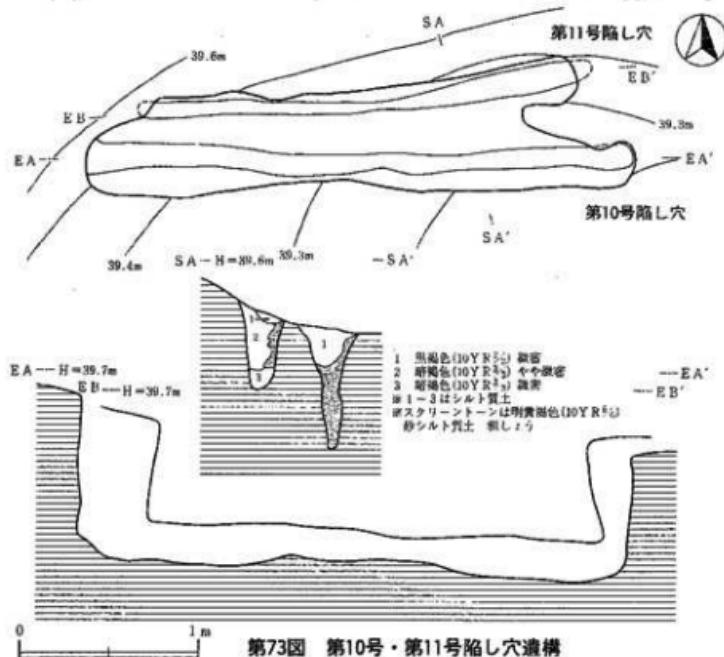
〈平面形・規模〉いずれも細長い溝状を呈している。第10号は開口部長軸幅3m6cm・短軸幅30cm前後、底部長軸幅3m3cm・短軸幅8~15cmを測る。確認面から最深部まで90cmである。第11号は開口部長軸幅2m37cm・短軸幅25cm前後、底部長軸幅2m53cm・短軸幅5~15cmである。確認面から最深部まで60cmである。

〈長軸方向〉N-90°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

〈埋土の状況〉第10号の埋土は2層に分けられる。下位から中位には明黄褐色土が充填しており、上位は黒褐色土が覆っていた。第11号の埋土は3層に分けられる。黒褐色土が底面に一様に堆積した後に、暗褐色土の堆積と壁の崩落があったものとみられる。

〈断面の形状〉第10号の長軸の断面形は、開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。第11号の長軸の断面形は、台形状を呈する。短軸の断面形は、V字状を呈する。

〈底面の状況〉11号の底面は平坦で、10号は波打っている。〈出土遺物〉出土遺物はない。



## 第12号陥し穴遺構 (S K T12) - 第74図 -

〈位置・確認状況〉谷の中位にあたる N D60グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

〈平面形・規模〉細長い溝状を呈している。開口部長軸幅 3m 55cm・短軸幅 35cm、底部長軸幅 3m 70cm・短軸幅 10~18cm である。確認面から最深部まで 80cm である。

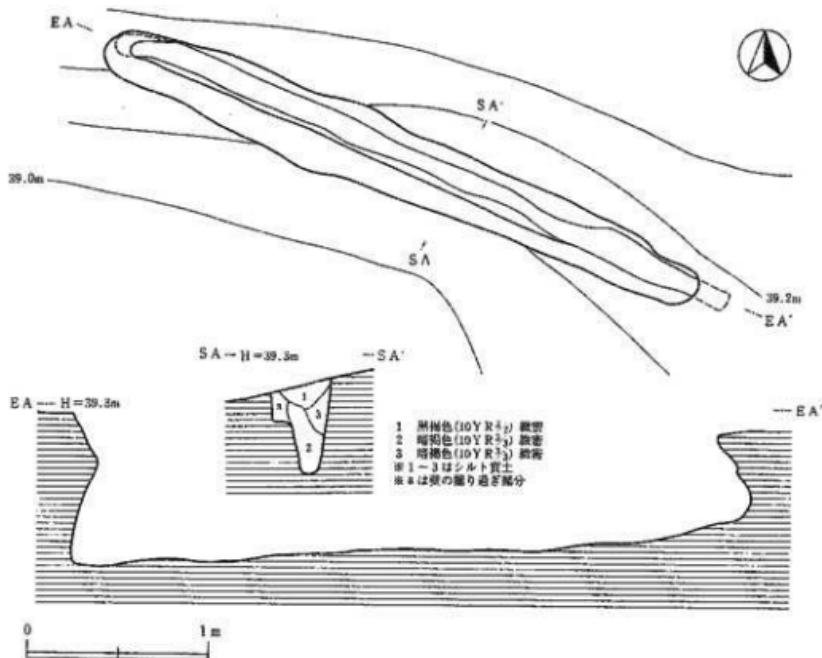
〈長軸方向〉N-70°-E を向き、地山面の等高線に平行する。

〈埋土の状況〉埋土はおよそ 3 層に分けられる。中位から下位には暗褐色土が充填しており、上位は黒褐色土が覆っていた。

〈断面の形状〉長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、外方へふくらみ袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

〈底面の状況〉底面は平坦であるが、西に斜面する。

〈遺物・その他〉出土遺物はない。



第74図 第12号陥し穴遺構

## 第13号A・B陥し穴遺構 (SKT13) - 第75図-

<位置・確認状況>谷の中位にあたる ND60グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面に暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。埋土を取り除き、壁および底面の精査をしていった段階で、A遺構とわずかに長軸方向がずれていたが、B遺構が構築されていたことが確認された。

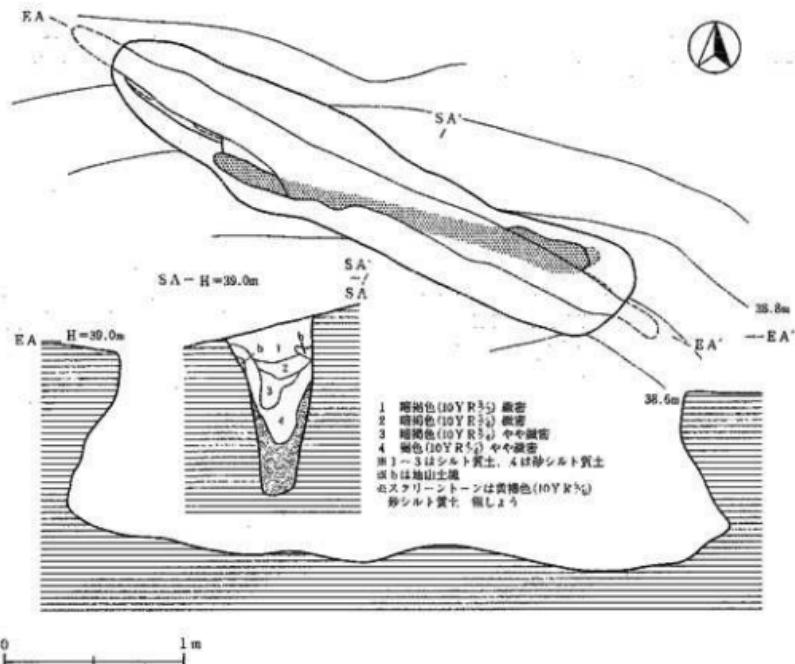
<平面形・規模>いずれも細長い溝状を呈している。Aの開口部長軸幅3m16cm・短軸幅65cm、底部長軸幅3m67cm・短軸幅10-20cmである。確認面から最深部まで90cmである。Bの底部長軸幅2m20cm・短軸幅10cmである。確認面から最深部まで90cmである。

<長軸方向>AはN-65°-W、BはN-75°-Wを向き、いずれも地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおよそ5層に分けられる。土層図の1-3層が凹んだ堆積をしていることからBが埋没した後に、Aが構築されたものと判断した。Aでは下位にぶい黄褐色土が充填しており、中位は黒褐色土が、上位は黒色土が覆っていた。

<断面の形状>Aの長軸の断面形は壁の中位から、外方へふくらむ袋状を呈する。短軸の断面形は開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は大きく波打っている。<遺物・その他>出土遺物はない。



第75図 第13号陥し穴遺構

## 第14号陥し穴遺構 (SK T14) - 第76図 -

＜位置・確認状況＞谷の中位にあたる N E 60グリッド杭の東側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅 3m37cm・短軸幅42cm、底部長軸幅 4m20cm・短軸幅12cmである。確認面から最深部まで 1m10cmである。

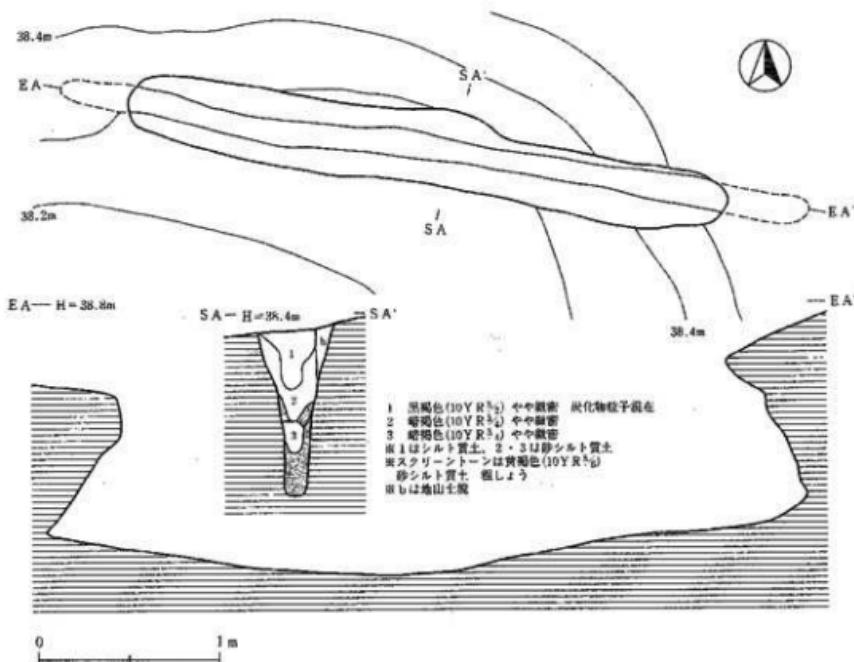
＜長軸方向＞N-81°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおよそ 4 層に分けられる。中位から下位には暗褐色土が充填しており、上位は黒褐色土が覆っていた。暗褐色土が底部に一様に堆積した後に、壁の崩落があったとみられる。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から外方へ張り出し台形状を呈する。短軸の断面形は開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は弓なりに大きくくぼみ、波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第76図 第14号陥し穴遺構

## 第15号陥し穴遺構（S K T 8）—第77図—

＜位置・確認状況＞谷の下位にあたるN D59グリッド杭の西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m90cm・短軸幅26cm、底部長軸幅2m85cm・短軸幅10cmである。確認面から最深部まで53cmである。

＜長軸方向＞N-68°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

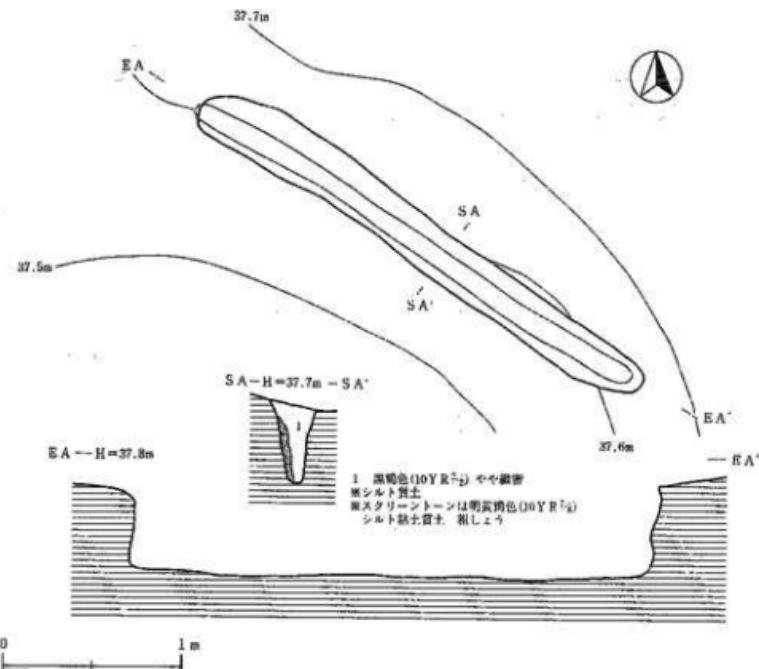
＜埋土の状況＞掘り込みが浅く、一様に黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。

短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第77図 第15号陥し穴遺構

第16号陥し穴遺構 (SKT7) - 第78図-

<位置・確認状況>谷の下位にあたるND58グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m88cm・短軸幅30cm、底部長軸幅2m74cm・短軸幅10cm前後である。確認面から最深部まで72cmである。

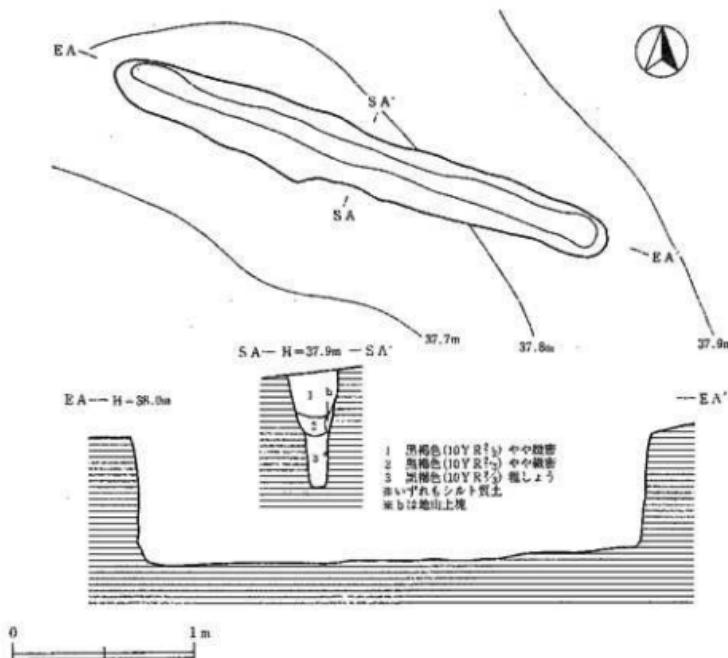
<長軸方向>N-70°-Wを向き、地表面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には黒褐色土が充填し、中位には地山粒子が混在した黒褐色土が、さらに上位には黒褐色土が覆っていた。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第78図 第16号陥し穴遺構

## 第17号陥し穴遺構 (SK T15) - 第79図-

〈位置・確認状況〉谷の下位にあたるN F59グリッド杭北側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

〈平面形・規模〉細長い溝状を呈している。幅が広く梢円形に近い形状を呈している。開口部長軸幅2m7cm、短軸幅56cm、底部長軸幅2m20cm、短軸中央で16cmあり、両側がふくらみ30~40cmである。確認面から最深部まで72cmである。

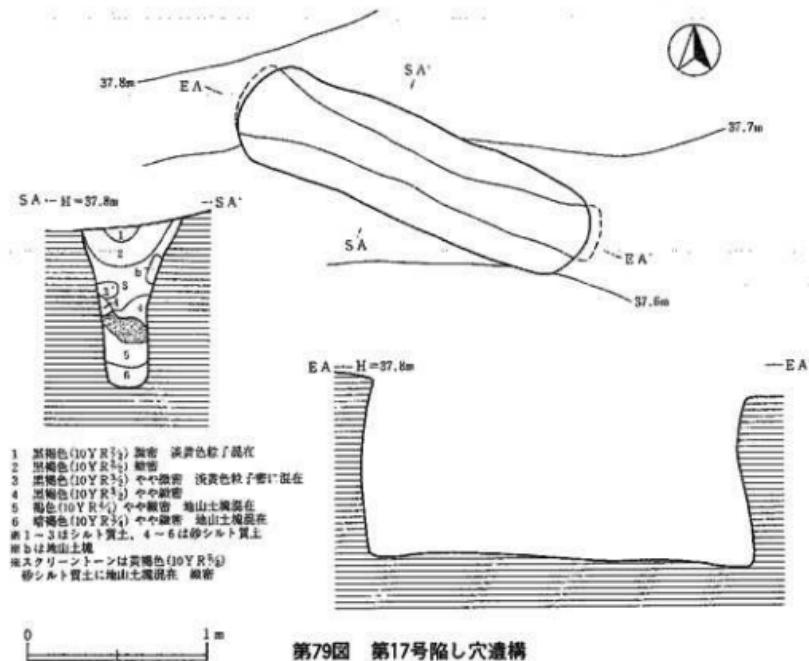
〈長軸方向〉N-63°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

〈埋土の状況〉埋土はおよそ5層に分けられる。下位には褐色土と暗褐色土が充填しており、中位は黄褐色土が、上位は黒褐色土が覆っていた。同様な遺構を比較すると土質がこまかく分かれ、比較的時間をへて埋没していったものとみえる。

〈断面の形状〉長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位で、わずかに外方へふくらみをもち、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から中位までが一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

〈底面の状況〉底面は平坦であるが、地山の傾斜にそって東側に傾斜している。

〈遺物・その他〉出土遺物はない。



第79図 第17号陥し穴遺構

第1号古代住居跡（S 102）－第80図－

＜位置・確認状況＞表土除去した後、N J 59グリッドの黒褐色土層面でカマド上面におかれた土師器をみつけ、周辺を地山の明黄褐色土層まで掘り下げてプランを確認した。

＜平面形・規模＞隅が角張り、長方形を呈すると考えられる。北辺の長さは3.4mである。

＜堆積土の状況＞南東に下る斜面に構築されており、北半分は黒褐色土が、南は暗褐色土が覆っていた。

＜壁・床面の状況＞壁は、北辺では垂直に立ち上がり、確認面から床面までは25cmである。床面は平坦である。

＜柱穴・周溝＞柱穴は確認されず、壁にそって周溝が巡っていた。

＜カマド＞東辺の北寄りに構築されている。黒褐色土の上に厚い焼土面があり、地山上に堆積していた黒褐色土をかためてカマドを構築したと考えられる。火床面は60cm<sup>2</sup>の広さがあった。

＜遺物出土状況＞カマドおよびその周辺から出土したものが多いが、カマド内からは第81・82図に図示した長胴甕はじめ小形甕・須恵器壺などが出土地した。その他の須恵器壺は床面から浮いて広範囲から出土した。

【古代第1号住居跡内出土遺物】（第81・82図に図示した。通し番号で説明する。）

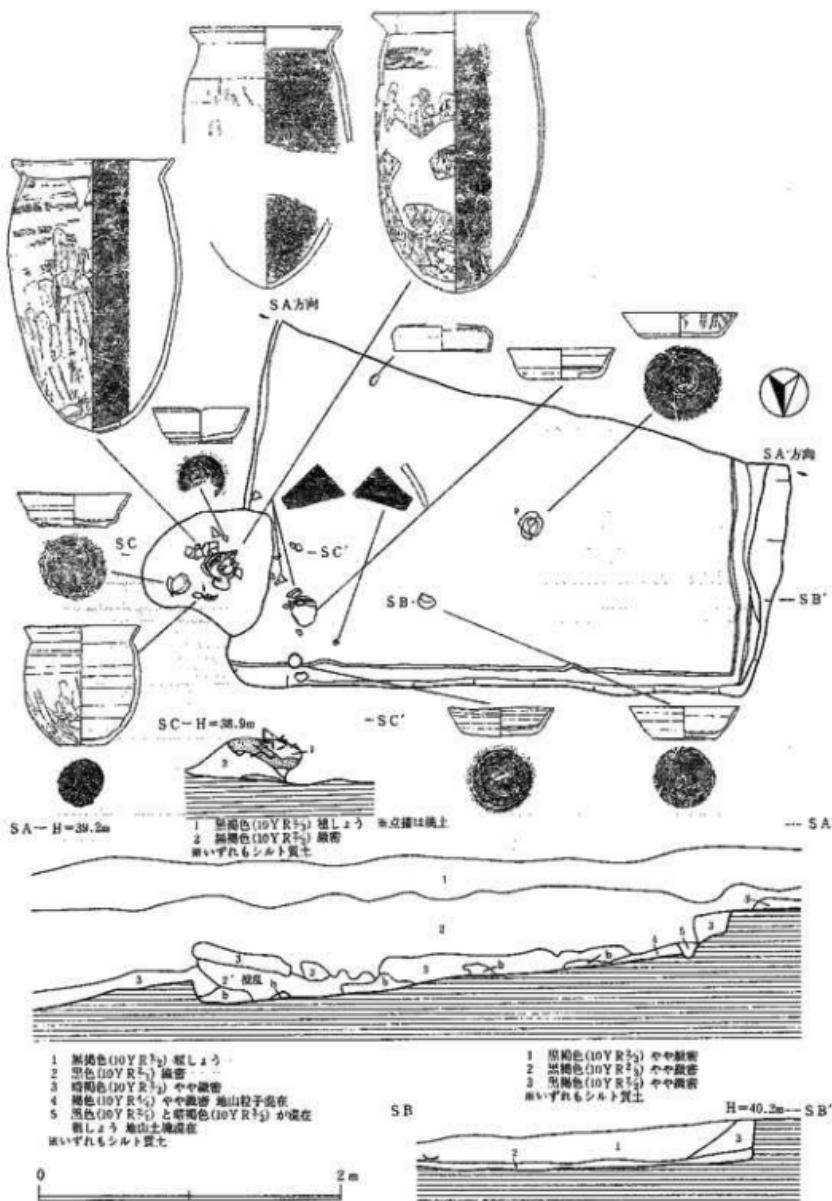
1・2・3はいわゆる砲弾形を呈する甕形土器である。丸底の底部からわずかにふくらみをもって立ち上がり、頸部がくの字状にくびれ、口縁部が短く外傾している。口唇部は1と3が角張るのに対し、3はやや丸みをもっている。最大径は口縁部と胴部上半にある。外面底部から胴部上半にかけて長い単位のヘラ削り調整をしており、胴部上半から口縁部はロクロナデ調整されている。内面は刷毛状痕跡を残す工具で底部は放射状に、胴部上半は横方向に調整されている。

4・5は小形の甕形土器である。平底の底部からふくらみをもって立ち上がり、頸部がくの字状にくびれ、口縁部が短く外傾している。最大径は口縁部と胴部上半にある。4はロクロナデ整形しただけであるが、5では外面底部から胴部上半にかけてヘラ削り調整をしている。

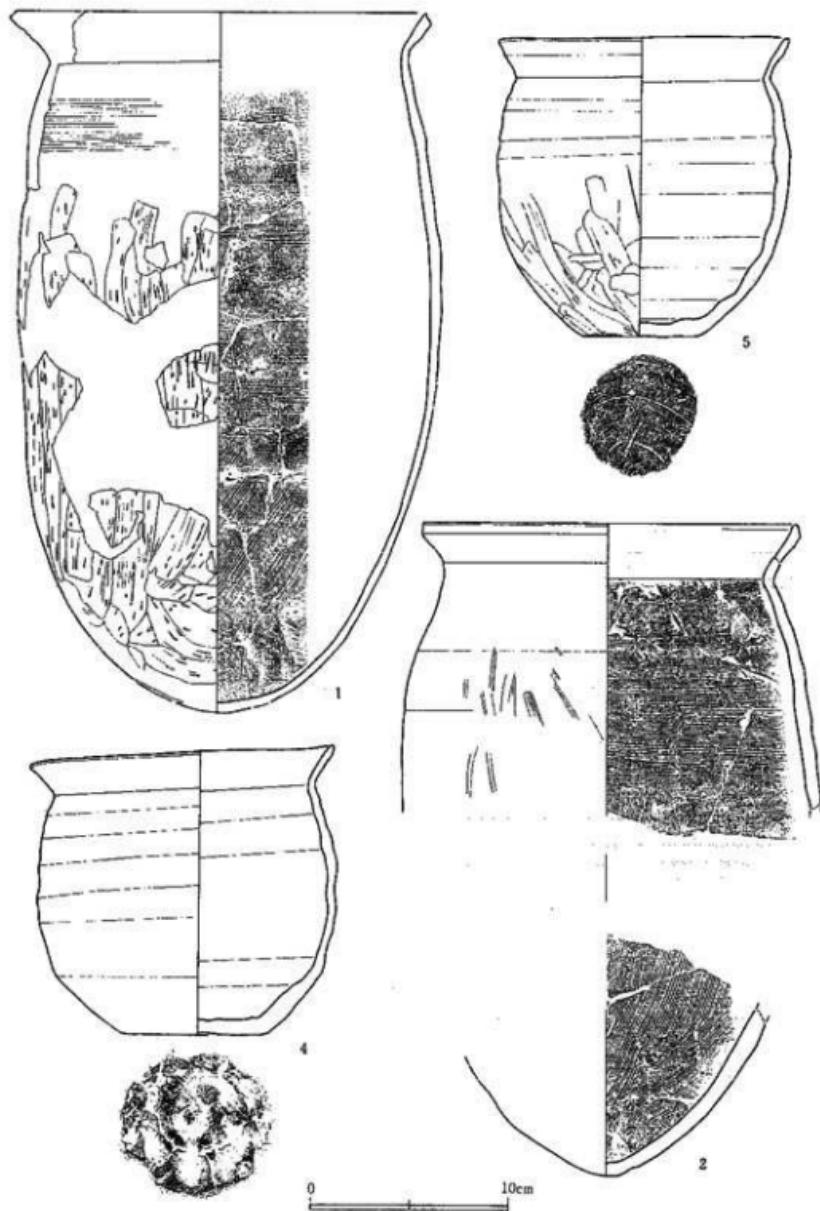
6は須恵器甕の頸部破片であり、外面に布目状のナデがみえる。

7は須恵器の蓋である。上は平坦であるが、肩から丸みをもって下がっている。

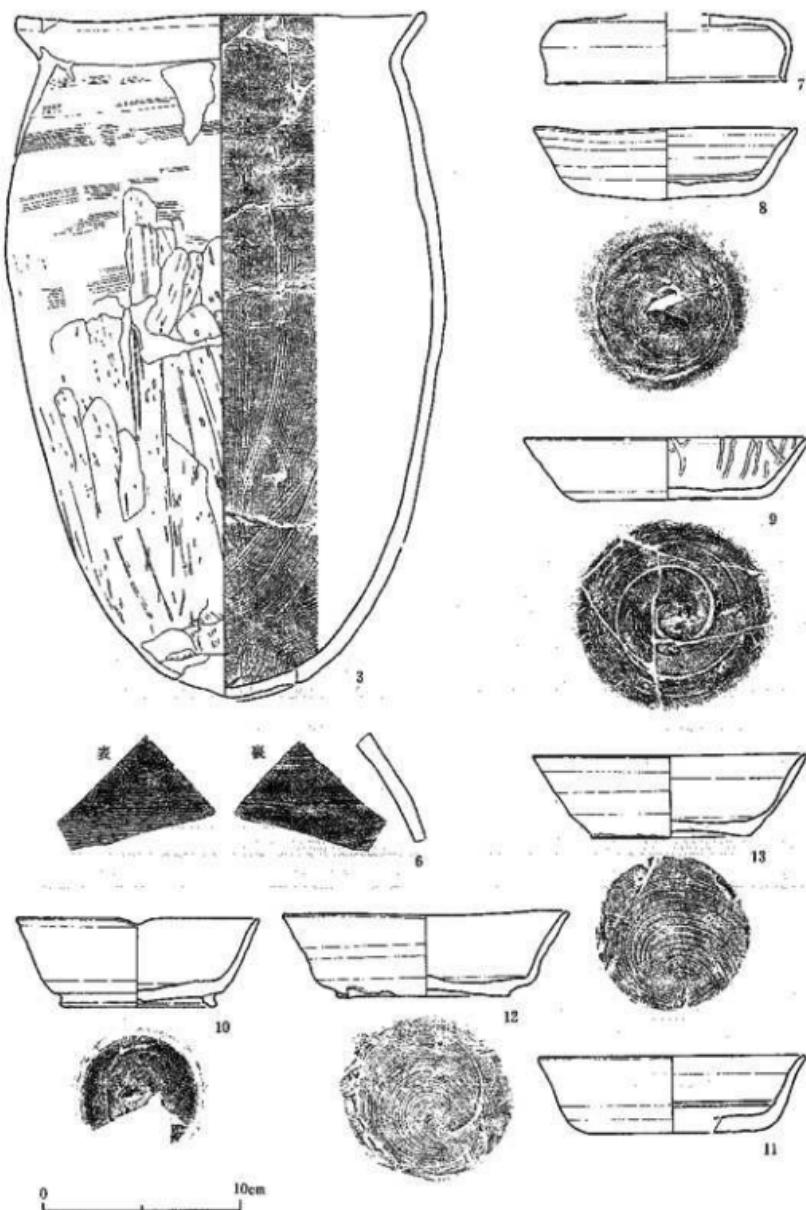
8～13は須恵器の壺である。底部の切り離しに2種類があり、8・9・10・11は回転ヘラ切りで、12・13は回転糸切りで切り離されている。形状に違いがみられ、ヘラ切りのものが体部下半に丸みをもっているのに対して、糸切りのものは底部がやや上げ底気味であり、底部との境は判然としている。10の高台をもつものには口縁部に極小さい片口状の突き出しがある。



第80図 第1号古代住居跡



第81図 第1号古代住居跡内出土遺物（1）



第82図 第1号古代住居跡内出土遺物（2）

### 第3－2節 B・C区の遺構外出土遺物

C区の丘陵地の北側斜面と、B区の南に向いた沢の落ち際に遺物がまとまって出土した。土器と石器に分類し、説明を加えた。

=土 器= 稚属時期で分類し、器形・部位、文様の特徴を説明し、最後に型式上の分類を付記した。第83図から第87図まで実測図を掲載した。説明の番号は図に付した通し番号である。

[A : 繩文時代中期後葉から後期前葉の土器群] - 第83図1・2、第85図5～25、第86図26～47  
1は鉢である。底部より強く外傾し、口縁部が内湾している。口縁には四つの突起が付いており、肥厚している。外面には斜繩文が施されている。

2は深鉢で、器高が高いわりに底部が小さい。底部から強く外傾し、口縁部はわずかに外反している。外面には斜繩文が施されている。

5は深鉢の口縁部で沈線で区画された梢円の中に、刺突文を充填した文様がある。

6は深鉢の胴部上位の破片であり、内湾気味に立ち上がる。横位に展開する隆沈線で区画された中に繩文が充填されている。

7は深鉢の口縁部で隆線で区画された中に、繩文を充填した文様がある。

8は口縁が二重になり、波状の高まりから隆線がカーブを描いて取り付いている。

9・10は外反する口縁が無文帯であり、波状の突起から降線が縫におりている。

11は波状口縁を呈し、胴部との境が肥厚している。口縁部に刺突列が付されている。

12・13は口縁と突起である。12は隆線の中に、13は円形の突起の内面に刺突が付されている。

14・15は口縁の突起である。ひねりこんだ隆帯に連続する刺突列が付されている。

16は隆線にそって刺突列が付されている。

17は波状口縁を呈する深鉢の口縁から胴部上位である。口縁部が内湾している。間隔の広い網目状撚糸文が胴部に施され、口縁部に近いところに隆線と刺突が認められる。

18は波状口縁を呈する深鉢の口縁から胴部上位である。口縁は無文帯であり、波状の頂点の下に円形の凹みが付されている。胴部は地文に撚糸文を施し、斜め方向に沈線で区画された磨消手法による文様が展開する。文様帯の頂点に沈線による渦巻文が描かれている。

19は波状口縁を呈し、波状の頂部から沈線文が展開され、胴部に網目状撚糸文が施されている。

20は口縁部破片で地文が繩文であり、口唇より1cm下にそって沈線が引かれている。

21は口縁部破片で、口縁にそって繩文帯があり、下は沈線で区画された無文帯がある。

22は口縁部破片で、上位は無文であり、下に押圧繩文で区画し繩文が充填された文様帯がある。

23は口縁端部が短く外反する。撚糸文が施されている。

24は口縁が内湾しており、横方向に爪形文が施されている。

25は体部の破片であり、無文の地に2条の沈線で文様が描かれている。

26-38は縄文・撫糸文が施された口縁部破片であり、39-47は底部である。41の底部外面に網代痕がみられる。以上は胎土と施文の状態から中期後葉から後期前葉の時期に当てはまる。

\* 5は中期後葉の大木9式に、6・7は中期末葉の大木10式に比定される。14・15は後期初頭の門前式に、18は弥榮平2式に、25は後期前葉の十腰内1A式に比定される。

【B：縄文時代晚期前葉の土器群】—第84図3・4、第87図48—

3・4は深鉢である。胸部が長く底部と口縁部の差が小さく、いわばずん胴形を呈する。外面には筋節が横に走る縄文が施されている。

48は鉢で口縁部には沈線による三叉文様が展開されている。

\*48は大洞BC式に比定され、3・4も晚期前葉の粗製土器と思われる。

【C：統縄文・弥生時代前期の土器群】—第87図49~54—

49は短く外反する口縁部で、口唇に縄文が巡り、その下に刷毛目状痕が横位に引かれている。

50・51も短く外反する口縁部破片で、頸部に細い沈線が引かれている。

52は壺の胸部破片で外面に斜縄文が施され、短い単位で斜めに引かれた刷毛目状痕が所々に見える。内面は平滑に磨かれている。53は小形の土器の底部で外面に綾走縄文が施されている。

54は弧状に列をなす刺突文が外面に付されている。

\*49~53は砂沢式に比定され、54は江別式に類似している。

【D：平安時代の土器群】—第87図55—

55とした須恵器壺の胸部破片が1点出土している。外面は平行叩き目が、内面には同心円状の当て板痕がみられる。9世紀後半から10世紀前半の年代が推定される。

=石 器= 形態分類は、A区の石器分類にしたがった。説明の番号は第88図から第90図に付した、通し番号である。

1~10は縦型の石匙であり、d類としたつまみ部の大きなものが2点ある。

11は石箒の刃部が欠損したものである。12・13は縁辺に調整加工が施された搔器である。

14~16は剥片でわずかに調整加工がみられる。

17~19は磨製石斧で、いずれも一部が欠損している。

20は片手で握ることが可能な大きさの石の先端に、加工によるV字状の刃部がある。

21は長方体の大きい石で、長方形の広い二面に磨面とした痕跡をもっている。

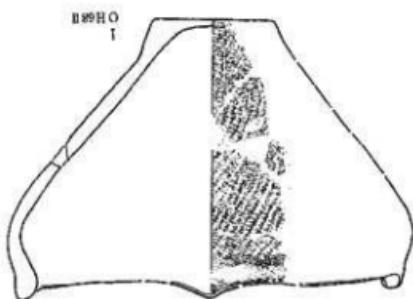
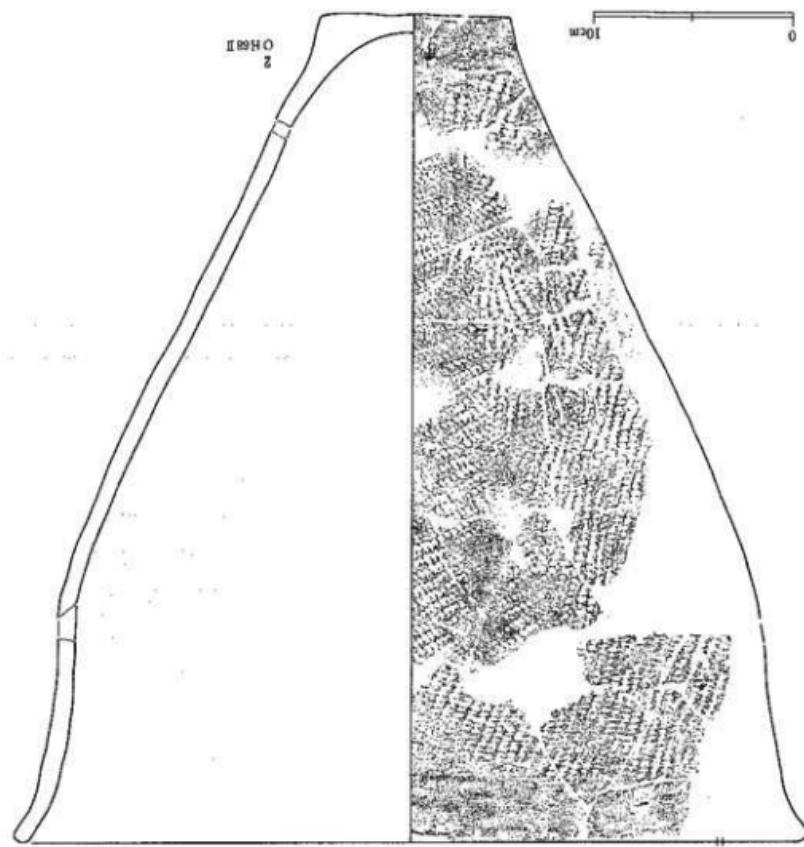
22・23は磨石で、礫の広い片面ないし両面が磨られている。

24・25は凹石で、楕円形の礫の両面に深さ5mm前後の凹部をもっている。

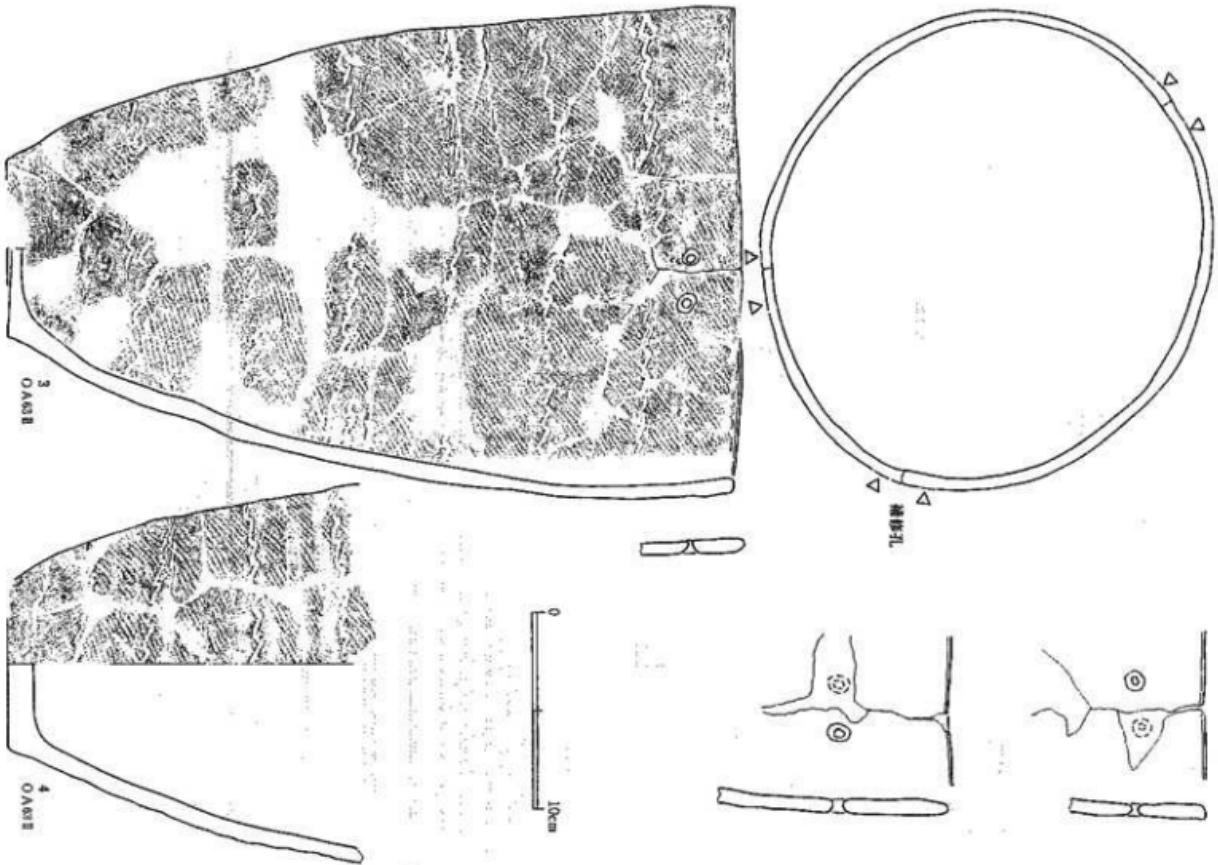
26は砥石で、長方形を呈し、長方形の4面を研磨面として使用している。

\*砥石は古代以降のもので、その他の石器はすべて縄文時代に属する。

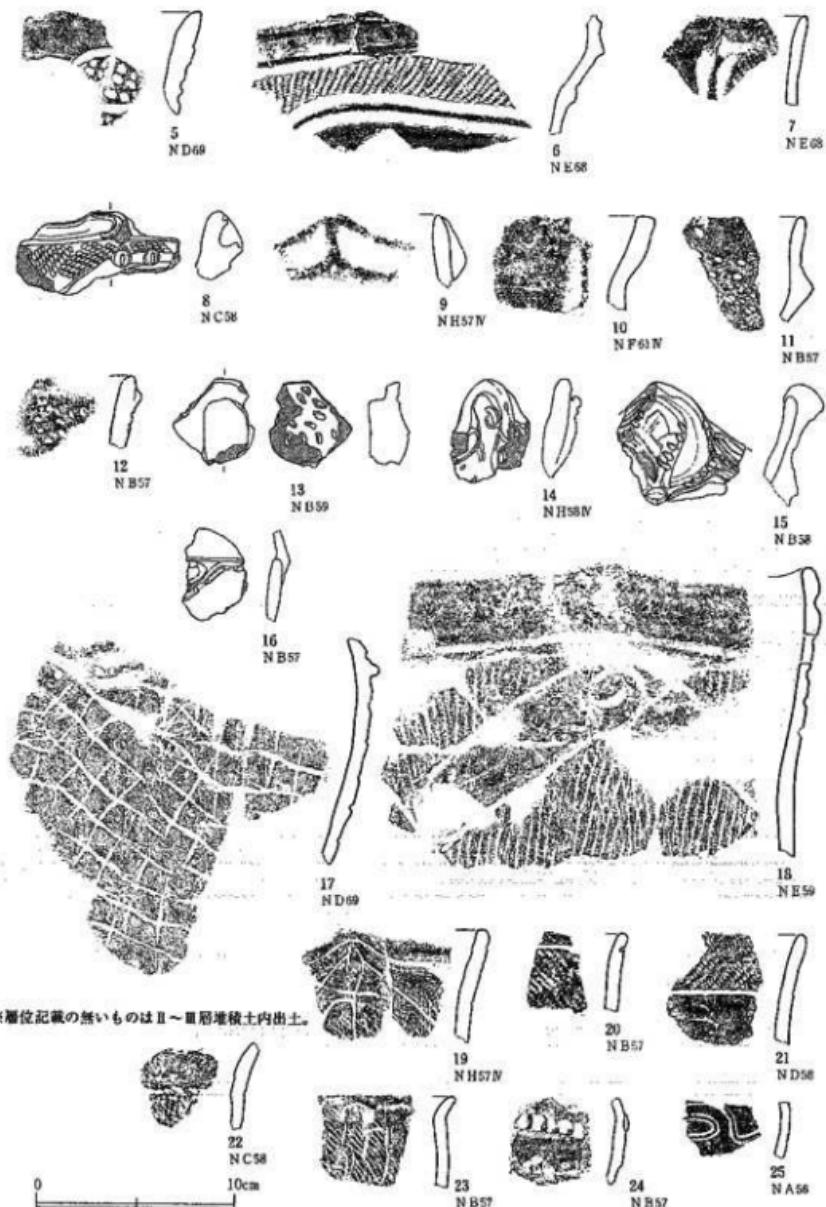
第83図 B・C区の遺構外出土遺物一土器(1) -



第3-2節 B・C区の遺構外出土遺物



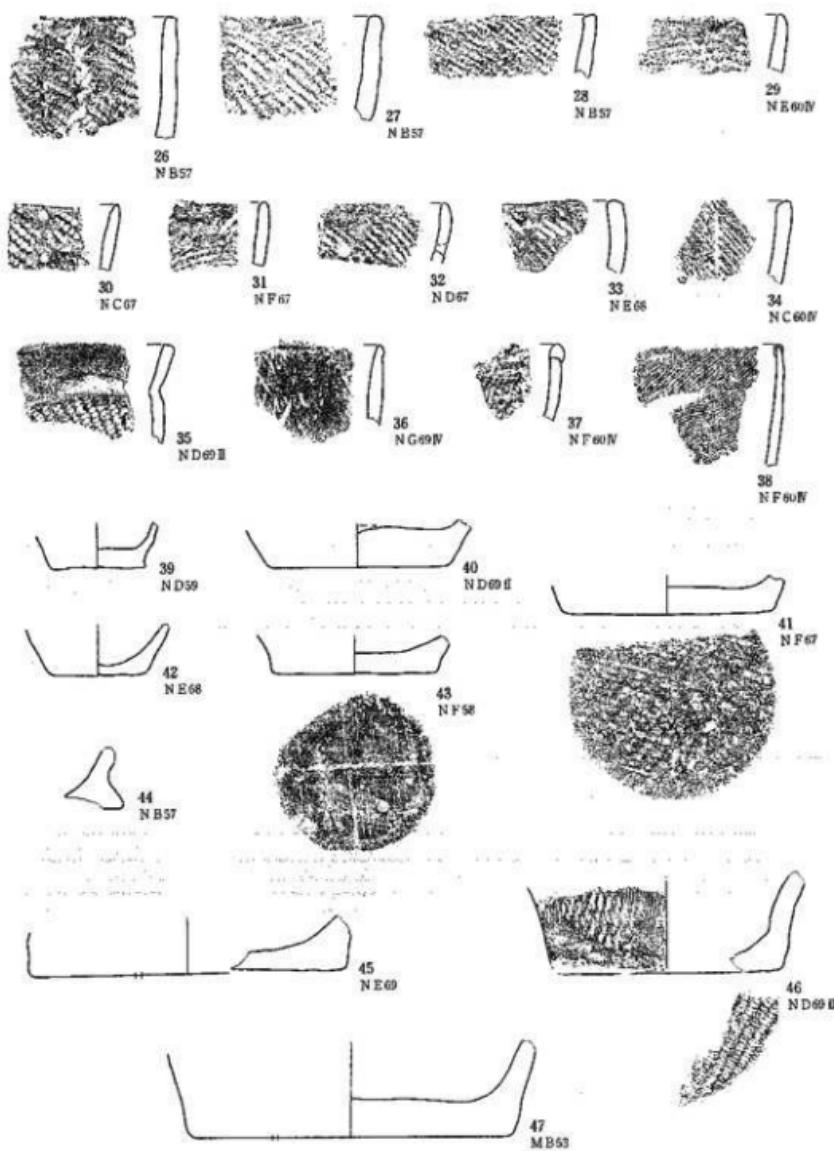
第84図 B・C区の遺構外出土遺物—土器（2）—



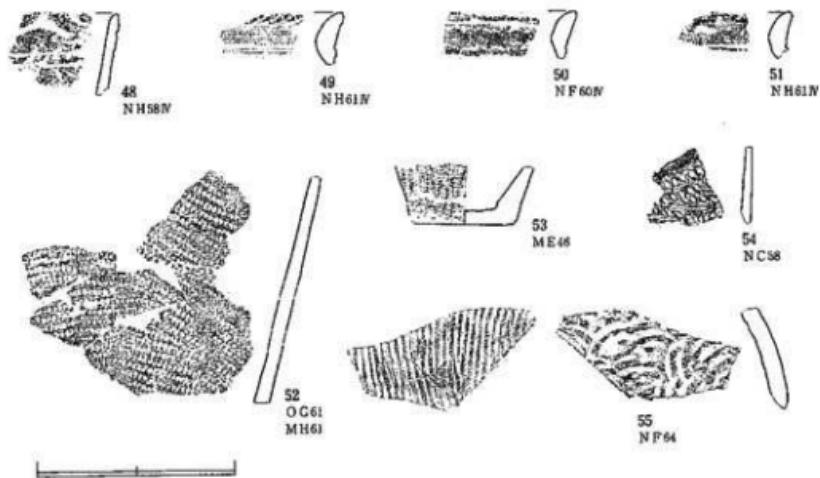
\*番位記載の無いものはⅡ～Ⅲ層堆積土内出土。

第85図 B・C区の遺構外出土遺物一土器(3) -

第3-2節 B・C区の遺構外出土遺物



第86図 B・C区の遺構外出土遺物 -土器（4）-



## =石製品・土製品= - 第87図-

56は块状耳飾りである。長さ39.3mm幅35.9mm厚さ6.4mm重さ14.9gであり、中央に直径9.7mmの孔があり、その孔に向って外縁から一筋の切れ目が入れられている。孔および切れ目の縁辺は面取りされている。57は土偶の胸部であり、扁平で厚さ9mm前後である。

58・59は土器片の縁辺を研磨して円形にした円盤状土製品である。58は土器の底部を、59は土器の腹部を利用している。

## =金属製品= - 第87図-

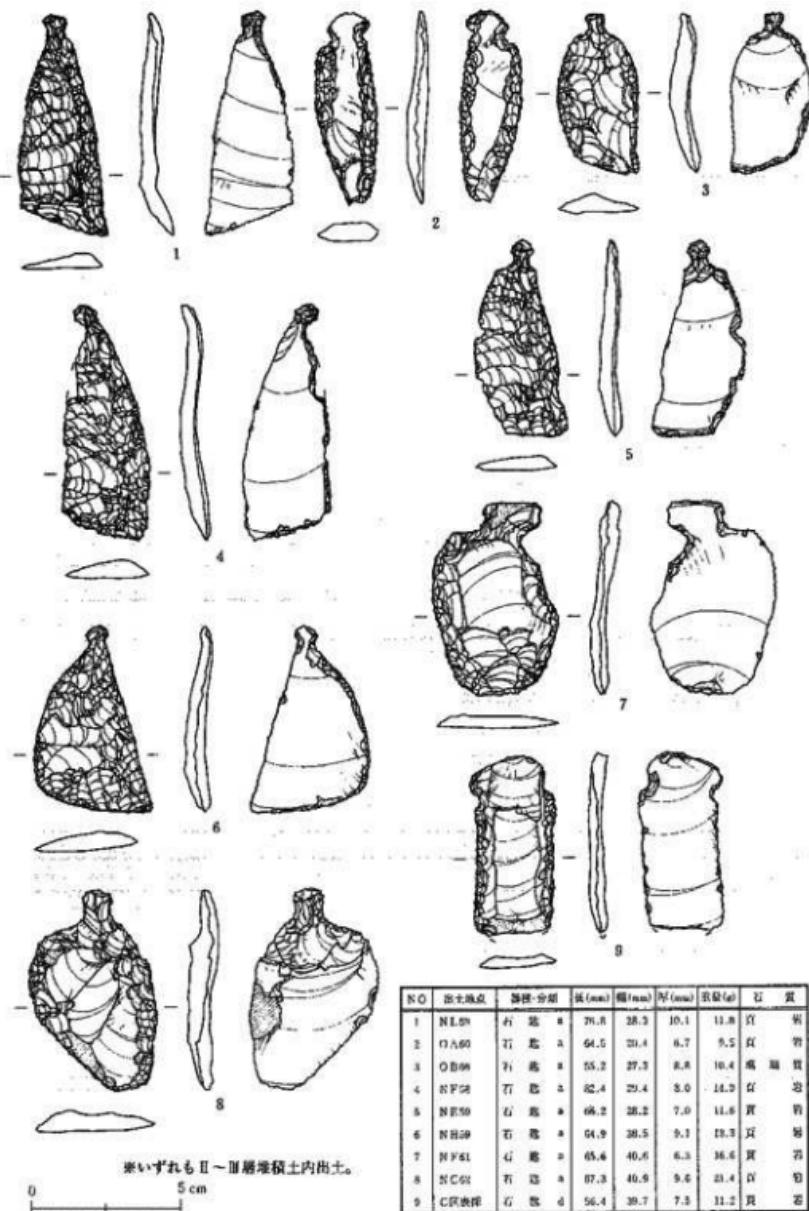
錢貨の寛永通宝が1点出土した。直径28.1mmである。



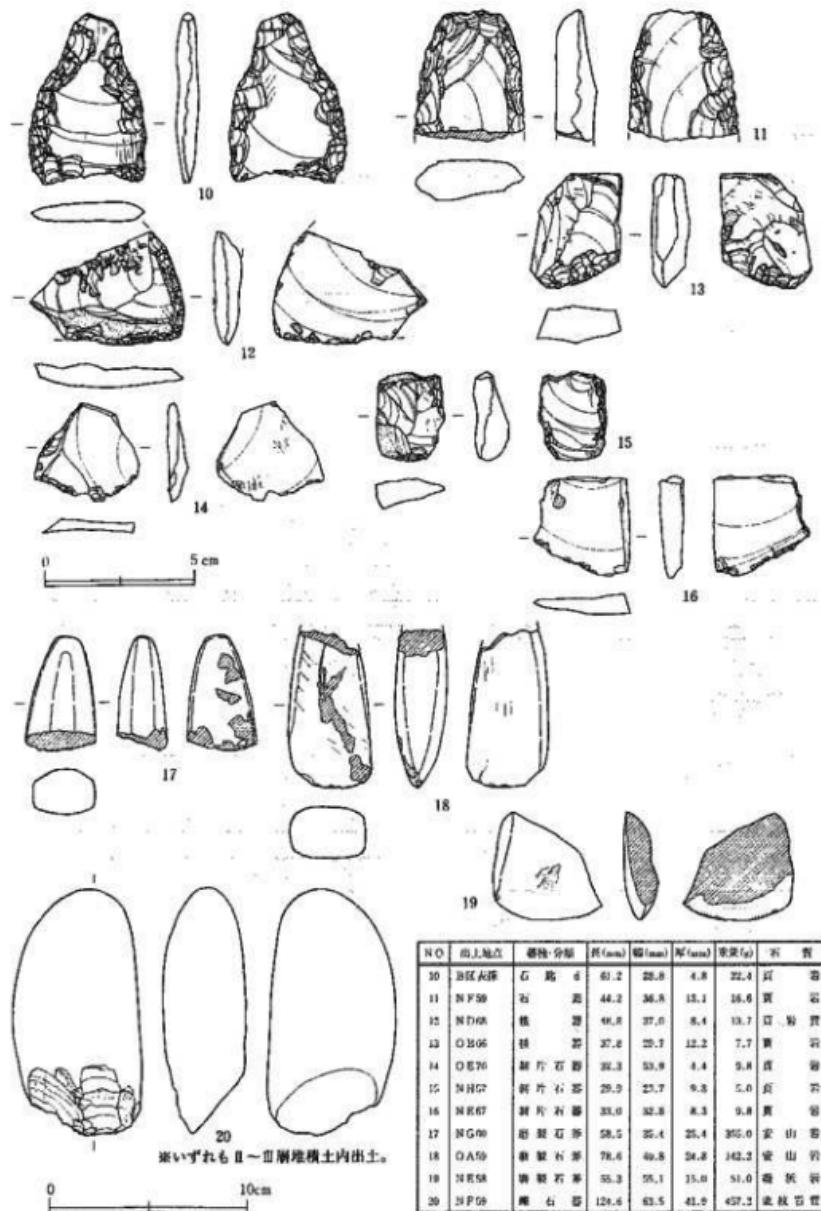
未層位記載の無いものはII~III層堆積土内出土。

第87図 B・C区の遺構外出土遺物 - 土器 (5)・土製品・石製品・金属製品-

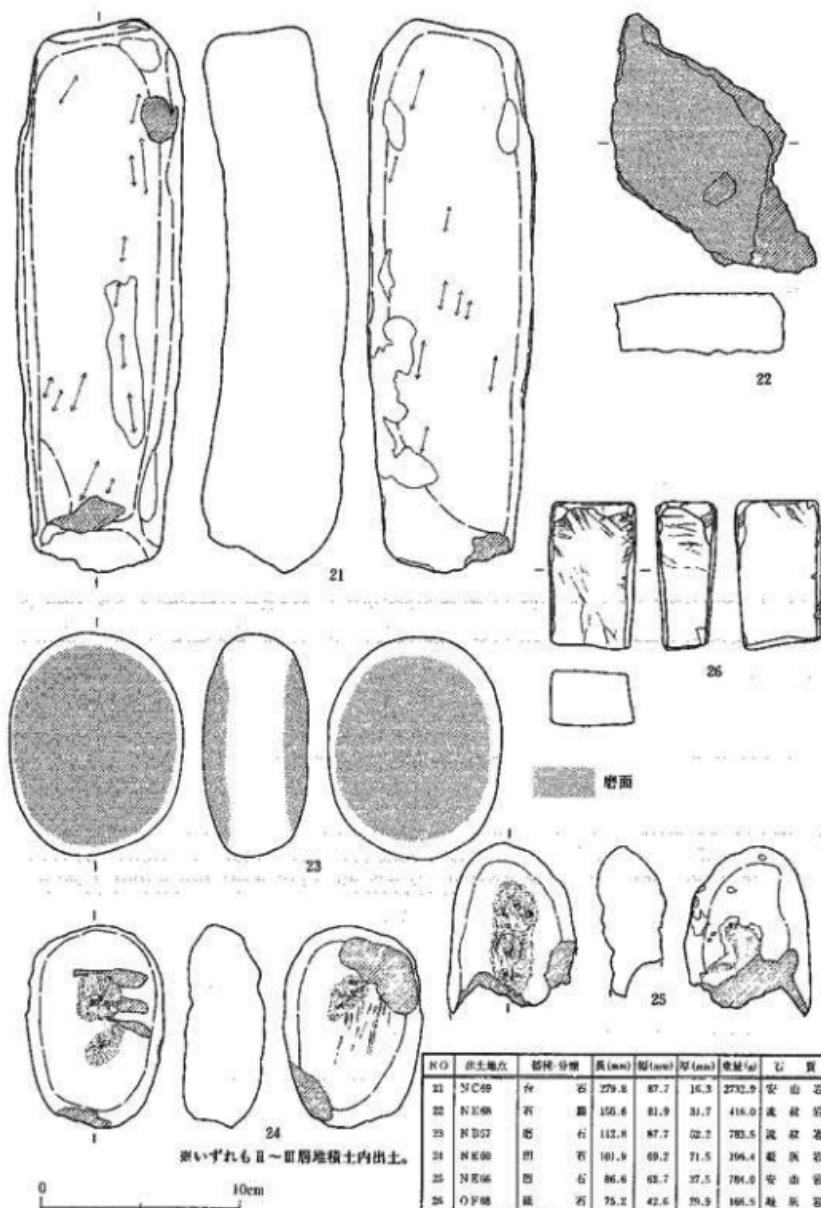
第3-2節 B・C区の遺構外出土遺物



第88図 B・C区の遺構外出土遺物 一石器(1)一



第89図 B・C区の遺構外出土遺物 一石器(2)一



第90図 B・C区の遺構外出土遺物 一石器(3)一

#### 第4-1節 D・E・F区の検出遺構と出土遺物

北方向へ張り出した丘陵の中腹に土坑7基と陥し穴遺構6基が検出された。

##### 第8号土坑（SK08）—第92図—

＜位置・確認状況＞MD50グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の円形の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈し、底部は同心円状に広がる。開口部の直径は87cmで、確認面から最深部まで50cmである。

＜埋土の状況＞黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞壁の中位がふくらみ、袋状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。＜遺物・その他＞出土遺物はない。

##### 第9号土坑（SK09）—第92図—

＜位置・確認状況＞MD50グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の円形の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈し、直径1m10cmで、確認面から最深部まで90cmである。

＜埋土の状況＞底面の壁に沿って地山土塊と褐色土が混在した層が厚く堆積しており、その上に黒色土が中位まで覆っていた。開口部縁辺が大きくくずれたものとみえる。

＜断面の形状＞開口部からほぼ垂直に落ち込み、箱形を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。＜遺物・その他＞出土遺物はない。

##### 第10号土坑（SK10）—第92図—

＜位置・確認状況＞ME51グリッド杭東側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の円形の落ち込みをみつけ確認した。堆積土のちがいから2基の遺構が重なりあっているものと考えられ、上をA土坑、下をB土坑とした。

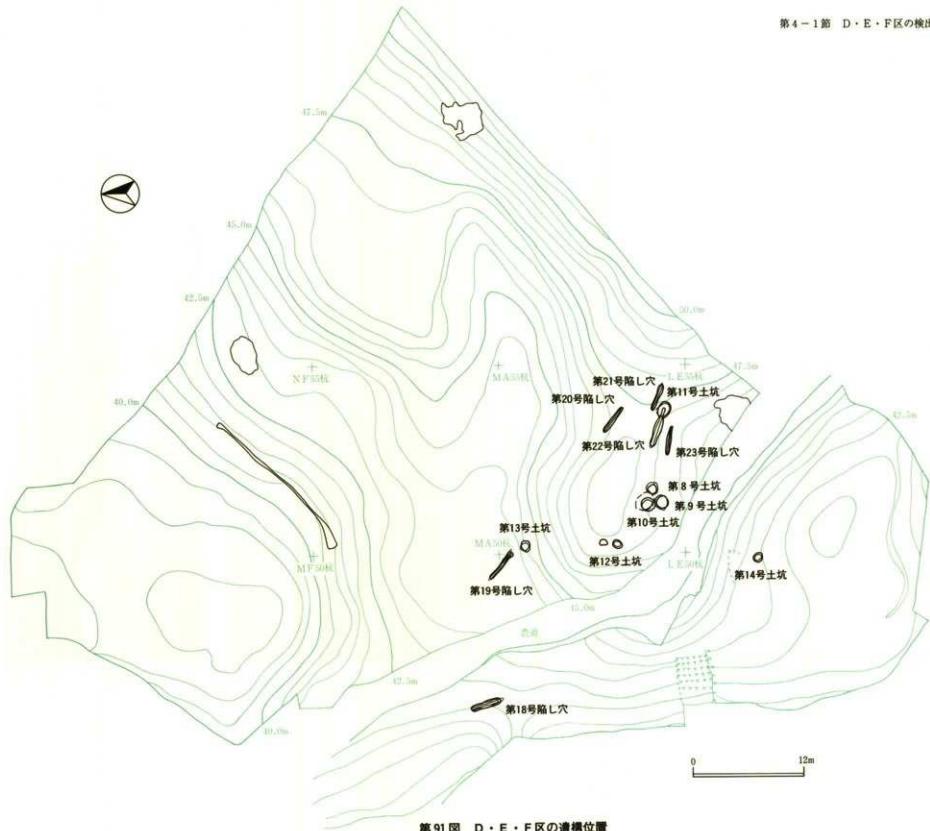
＜平面形・規模＞Aは円形を呈し、直径1m55cmで、確認面から最深部まで52cmである。Bは楕円形を呈し、底面の長径が最大で2m30cmである。底面までの深さは1m20cmである。

＜埋土の状況＞Aは凹レンズ状に、Bは凸レンズ状に自然堆積している。

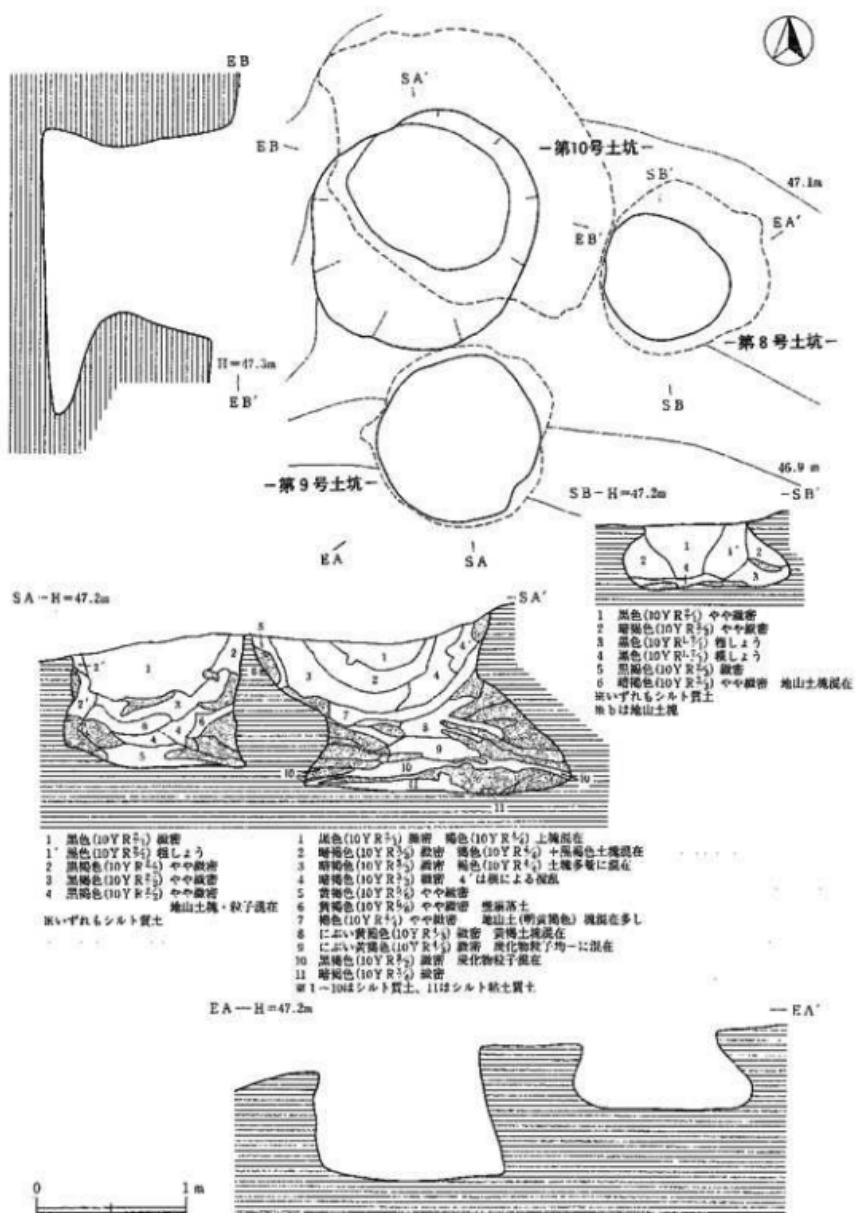
＜断面の形状＞Aは鍋底状を呈している。Bは開口部が狭く、底部が広い袋状を呈する。

＜底面の状況＞B土坑の底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第91図 D・E・F区の遺構位置



第92図 第8号・第9号・第10号土坑

第12号土坑（SK12）—第93図—

＜位置・確認状況＞ME51グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。直径1m2cmで、確認面から最深部まで20cmである。

＜埋土の状況＞黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞開口部から底辺に向かって緩やかに落ち込み、鍋底状を呈する。

＜底面の状況＞底面は中央がわずかにくぼむ。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第13号土坑（SK13）—第93図—

＜位置・確認状況＞ME54グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。直径1m13cmで、確認面から最深部まで22cmである。

＜埋土の状況＞底面にうすく暗褐色土が堆積し、上を黒褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞開口部から底辺に向かって緩やかに落ち込み、鍋底状を呈する。

＜底面の状況＞中央がわずかにくぼむ。

＜遺物・その他＞埋土上位で縄文土器片が出土している。

第14号土坑（SK14）—第93図—

＜位置・確認状況＞MF48グリッド杭付近で、地山の明黄褐色土層面で黒色ないし黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

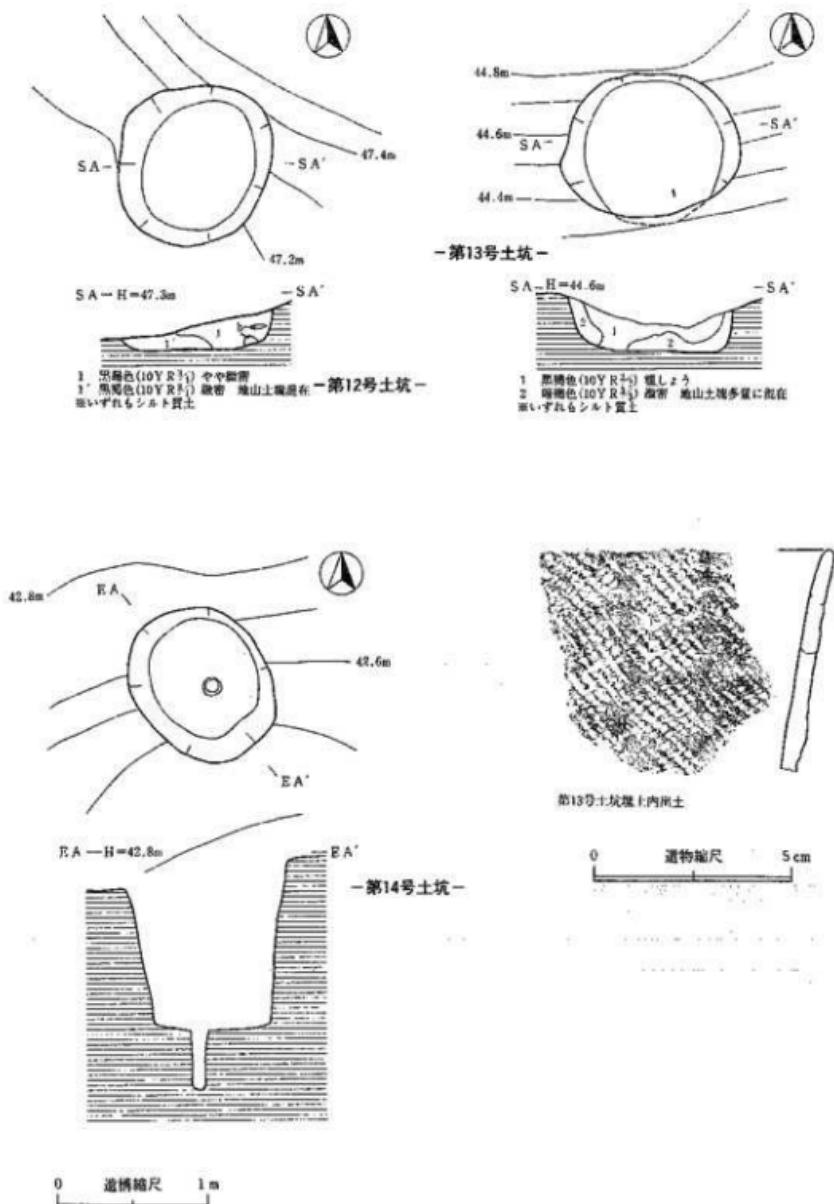
＜平面形・規模＞開口部は稍円形を呈している。長径1m7cmで、確認面から最深部まで1m5cmである。

＜埋土の状況＞上位から下位まで黒褐色土が厚く充填していた。

＜断面の形状＞開口部からいくぶん内側にすぼまっており、逆台形状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。中心から南東にいくぶんずれて、直径10cm・深さ40cmの小ピットがある。

＜遺物・その他＞埋土上位で縄文土器片が出土している。



小さく張り出した中腹部で、土坑および陥し穴遺構が重なり合って検出された。陥し穴遺構は規模の小さなものの（B）の上に大きなもの（A）が構築され、そのA・Bの陥し穴遺構の北側を切って第11号土坑が構築されていた。

第11号土坑（SK11）－第94図－

＜位置・確認状況＞MB50グリッド北東側で、地山の明黄褐色土層面に暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。直径1m18cmで、確認面から最深部まで40cmである。

＜埋土の状況＞暗褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞開口部から底部にかけてすばまる逆台形状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。第22号陥し穴遺構の北側を切って構築されていた。

第22A・B号陥し穴遺構（SKT19）－第94図－

＜位置・確認状況＞MB50グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。遺構を掘り込んで、壁のえぐり込みを検証した結果、2基の陥し穴遺構が重なりあっていたものと考えた。

＜平面形・規模＞いずれも細長い溝状を呈している。Aは開口部長軸幅3m40cm・短軸幅43cm、底部長軸幅3m45cm・短軸幅18cmである。確認面から最深部まで1m10cmである。Bは底部長軸幅が2m前後と推定され、短軸幅は10cm前後である。Bの深さは土坑で切られたところで確認でき、80cmである。したがってAによって西側が30cm程掘り込まれている。

＜長軸方向＞AはN-75°-Wを向き、Bは北側にわずかに向きを変えている。いずれも地山面の等高線に平行する。

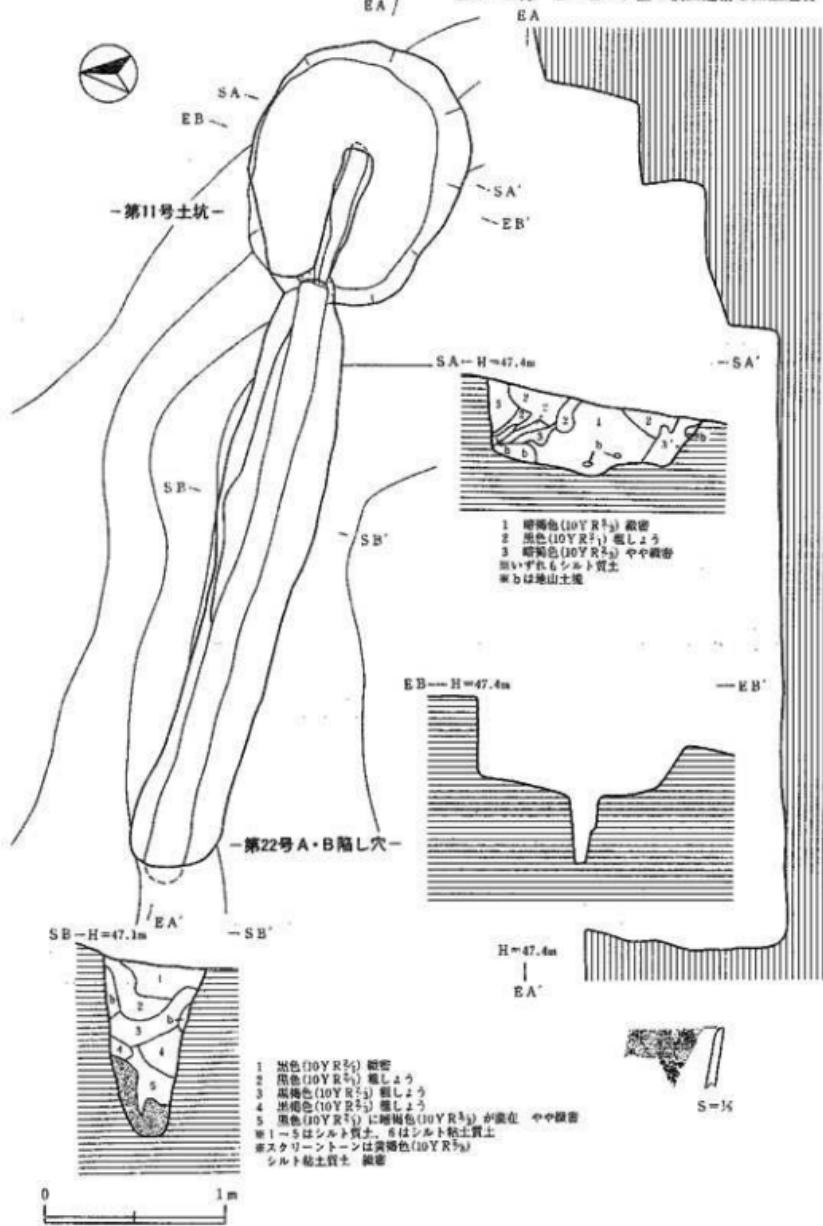
＜埋土の状況＞Aの埋土はおよそ6層に分けられる。下位には地山土塊のつまた黄褐色土が充填し、中位には黒褐色土と黒色土が、上位には黒色土が覆っていた。下位の黄褐色土は地山を掘り込んだ土が流れ込んだもので、短い時間に埋没していったものとみられる。

＜断面の形状＞Aの長軸の断面形は遺存していた南壁をみると、開口部から外方へわずかにふくらみ、袋状を呈する。Aの短軸の断面形は開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。Bの長軸の断面形は遺存していた北壁をみると、開口部から外方へわずかにふくらみ、袋状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第4-1節 D・E・F区の検出遺構と出土遺物



第94図 第11号土坑、第22号陥し穴遺構

## 第18号陥し穴遺構（S K T24）－第95図－

＜位置・確認状況＞谷際の傾斜面にあるNA55グリッド杭北側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

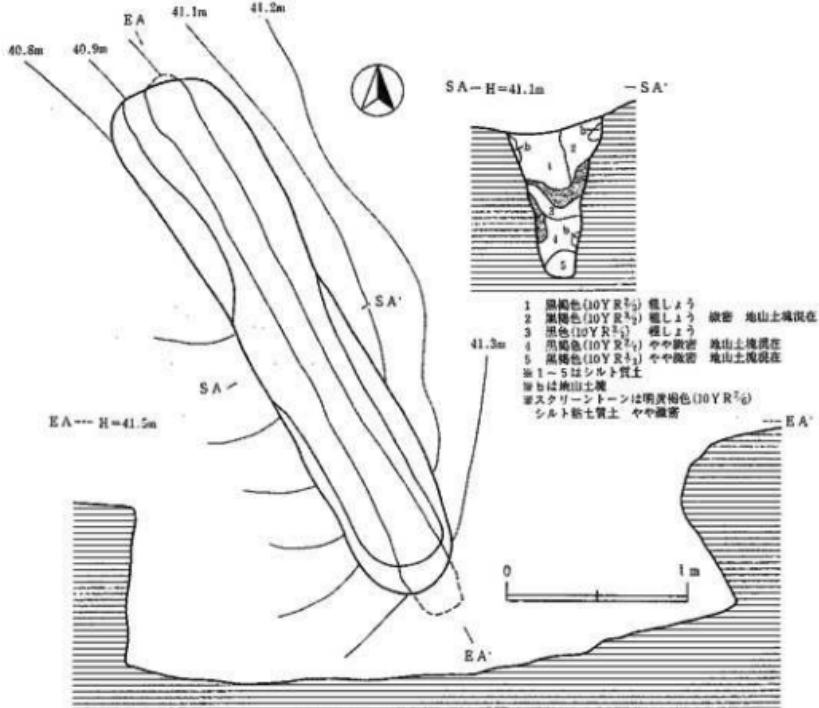
＜平面形・規模＞幅が広く梢円形に近い形状を呈している。開口部長軸幅3m20cm・短軸幅58cm、底部長軸幅3m36cmであり、底部短軸幅は真中が狭く16cm、両側が広く27cmである。確認面から最深部まで1mである。

＜長軸方向＞N-29°-Wを向き、地表面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞下位には明黄褐色土の地山土塊が混在した黒褐色土が厚く堆積していた。中位には黒色土の上に地山土塊がつまり、上位には黒褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞西側長軸の断面は、開口部から底部にかけてほぼ垂直に下がる。東側長軸の断面は、中位で外方へ直線的に張り出す。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は弓なりに大きくくぼむ。＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第95図 第18号陥し穴遺構

## 第19号陥し穴遺構（SKT22）—第96図—

＜位置・確認状況＞谷にはり出す傾斜面のMF56グリッド杭南側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈しているが、中央はいくぶんへこむ。開口部長軸幅3m43cm・短軸幅35~20cm、底部長軸幅3m79cm・短軸幅10cmである。確認面から最深部まで82cmである。

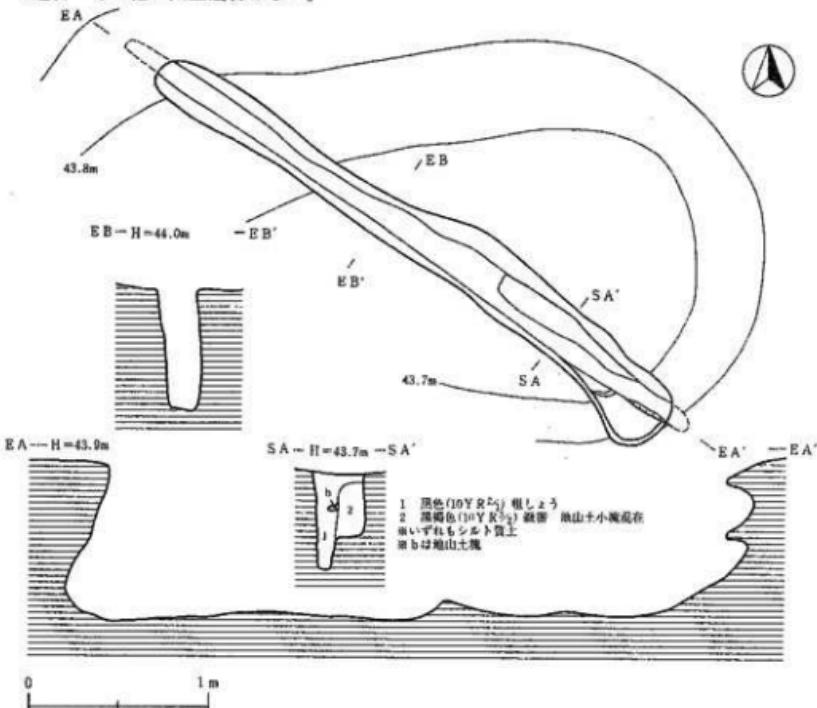
＜長軸方向＞N-55°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

＜埋土の状況＞埋土は2層に分けられる。下位から中位には地山土塊が混在した黒褐色土が充填しており、上位には黒褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部下位および壁の中位から、外方へまるみをもってふくらみ、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで垂直に下がるU字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は大きく波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第96図 第19号陥し穴遺構

## 第20号陥し穴遺構（SKT21）—第97図—

＜位置・確認状況＞小さく張り出した中腹部の高まりとなるMB52グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m33cm・短軸幅40cm、底部長軸幅3m30cm・短軸幅8cmである。確認面から最深部まで1m25cmである。

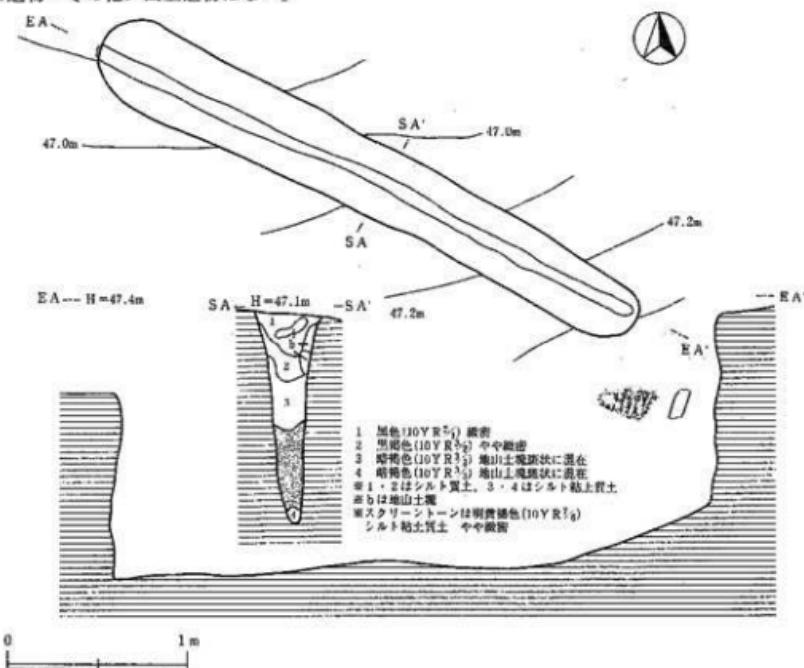
＜長軸方向＞N-64°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ5層に分けられる。底面には地山土塊が混在した暗褐色土が充填しており、中位まで厚く明黄褐色の地山土塊が堆積し、中位から上には地山土塊の混在した暗褐色土が、上位には黒褐色土・黒色土の順に覆っていた。下位から中位にかけて地山土塊の堆積割合が高く、地山を掘り上げた土が短い時間に堆積していったものとみられる。

＜断面の形状＞長軸断面形は、開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は大きく波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第97図 第20号陥し穴遺構

## 第21号陥し穴遺構 (SKT18) - 第98図-

<位置・確認状況>小さく張り出した中腹の高まりとなるMA50グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m16cm・短軸幅24cm、底部長軸幅3m18cm・短軸幅8cmである。確認面から最深部まで80cmである。

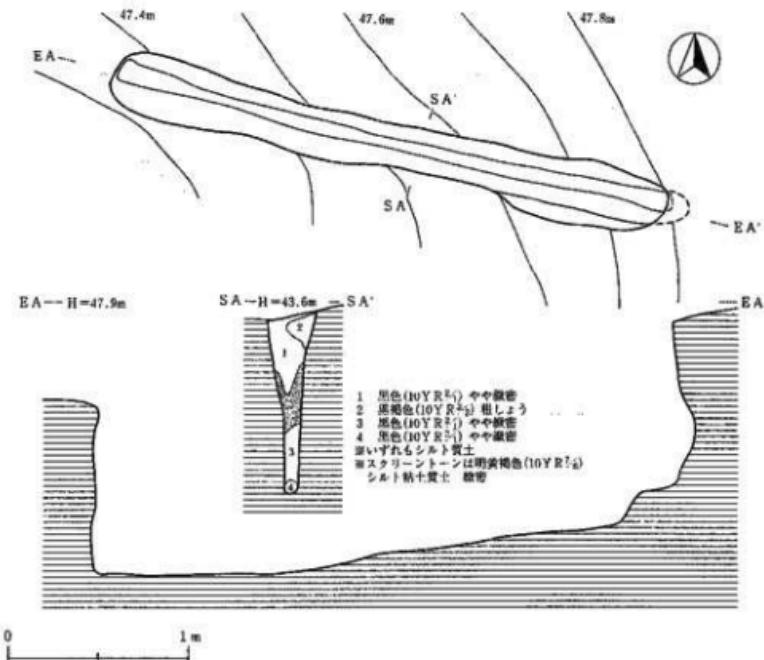
<長軸方向>N-71°-W向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ5層に分けられる。下位に黒褐色土が一様に堆積した後に、中位で壁の崩落によるとみられる明黄褐色の地山土塊がつまっており、その上に黒色土が堆積していた。したがって時間をかけて自然に埋没していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面をみると、西壁で開口部から底面にかけて垂直に下っているが、東壁の中位で、外方へわずかにふくらみをもっている。短軸断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は西側に傾斜している。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第98図 第21号陥し穴遺構

## 第23号陥し穴遺構 (S K T 20) - 第99図-

<位置・確認状況>小さく張り出した中腹の高まりとなるMB50グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈しているが、中央がふくらんでいる。開口部長軸幅3m 13cm・中央短軸幅44cm、底部長軸幅3m 53cm・短軸幅8~17cmである。確認面から最深部まで80cmである。

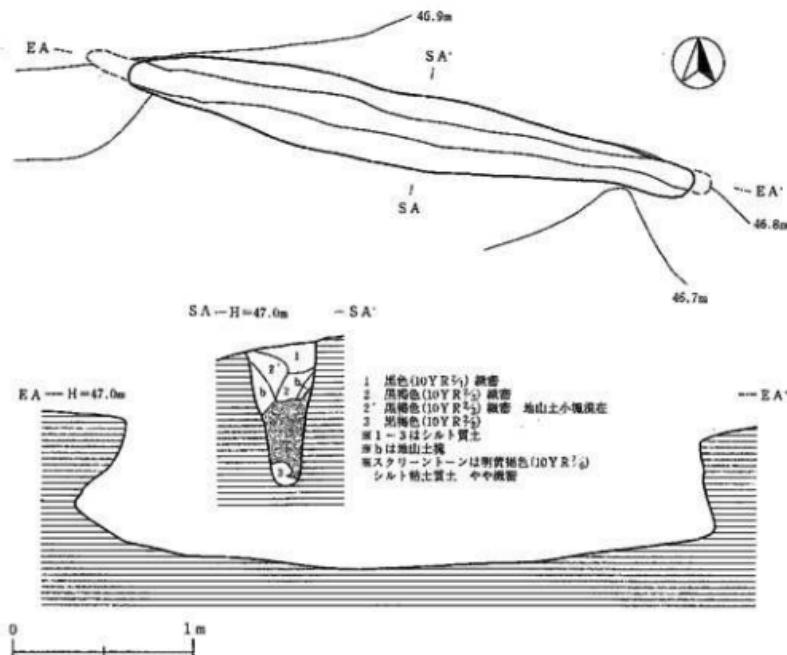
<長軸方向> N-80°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ4層に分けられる。底面に黒褐色土が薄く一様に堆積した後に、明黄褐色地山土塊が中位まで厚く堆積していた。さらに中位には黒褐色土が、上位には黑色土が覆っていた。したがって時間をかけて自然に埋没していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、壁の中位で外方へ張り出し袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は弓なりに大きくへこむ。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第99図 第23号陥し穴遺構

## 第4-2節 D・E・F区の遺構外出土遺物

D・E区の斜面の出土遺物とF区の舌状部の出土遺物に分け、土器・石器の類に説明する。  
 = (1) D・E区の土器=帰属時期により分類し、器形・部位、文様の特徴を説明し、型式上の分類を最後に付記した。D・E区の土器は第100~102図に、F区の土器は第103図にまとめた。各区域毎に通し番号を付し、説明は通し番号で行った。

### 〔A：縄文時代中期前葉の土器群〕 第100図1・2

1は厚手の土器片で、深鉢の口縁部である。口縁部と胴部は隆帯によって区画されている。口縁部の文様は縦状体圧痕文を口唇に平行に押圧している。

2は厚手の土器片で、突起をもつ深鉢の口縁部である。突起は切り込みがはいりM字状を呈する。突起の下には隆線による文様が付されている。

\* 1・2は円筒上層a式に比定される。

### 〔B：縄文時代中期後葉から後期前葉の土器群〕 第100図3~15、第101図16~26

3~6は深鉢の胴部破片であり、粘土紐の隆線で渦巻文が描かれている。

7~8は深鉢の口縁部破片であり、7は粘土紐の隆線で渦巻文が描かれている。8は隆沈線による区画の中に縄文が充填されている。

9~10は深鉢の口縁部および胴部破片で、9は無文の口縁部が内傾しており、10の口縁は二重となっている。口縁の下に縦に走る文様があり、隆線で区画した中に縄文を充填している。

11~12は深鉢の胴部破片であり、9~10と同様の文様が展開されている。

13は肥厚した頸部の破片で、横位に刺突列が付されている。

14は波状を呈する鉢の口縁部破片で、口唇にそって点列があり、その下は沈線で区画された中に縄文を充填している。

15は波状を呈する深鉢の口縁部の突起部分である。頸部で屈曲し、口縁部が外反している。突起の中央に円形の孔があいており、突起から隆線が弧状に下っている。

16は口縁から下に走る隆線があり、頸部には指頭による圧痕が横列に付されている。

17~18は波状を呈する口縁部で、突起の下に円形貼付文が付され、横位に沈線が引かれている。

19は緩やかに波状を呈する深鉢の口縁部で、口縁の頂点に円形貼付文が付され、貼付文から横位に平行沈線が引かれている。沈線の下に撚糸文が施されている。

20は波状を呈する口縁部で突起部が肥厚している。縦に3個の円形の刺突が付され、そこから横位に沈線が引かれている。胴部には撚糸文が施されている。

21は口縁部を区画する隆線が巡り、下に刺突列が付されている。胴部は撚糸文が施されている。

22は口縁端部から下に走る隆線にそって刺突列が付されている。

23は口縁部には横位の刺突列があり、胴部は縦の隆線にそって刺突列が付されている。

24は口縁部の破片で、無文の地に縦に2列の刺突が付されている。

25は鉢の体部であり、2条の沈線が引かれている。

26は口縁にそって沈線が引かれている。

\* 3~8は中期後葉の大木9式に、9~14・21・22は大木10式に比定される。15~20は後期初頭の門前式に比定される。

〔C：縄文時代後期中葉の土器群〕－第101図27~32－

27は沈線区画の中に刺突列と縄文とが充填されている。

28は大きな波状を呈する口縁の一部とみられ、沈線で区画された中に縄文が充填されている。

29は大きく開く鉢の頸部とみられ、L字状の沈線で区画された文様が展開されている。

30は器面が丁寧に磨かれ、磨消縄文手法による文様が展開されている。

31・32は土器の把手である。

第102図で後期前葉から中葉に入ると思われる土器群をまとめて掲載した。33は口縁部から胴部まで斜縄文が施された深鉢である。34は口縁部に縄文が、35~39は撚糸文が施されている。

40・41は無文で口縁部が外反する。42は土製品の縁の部分である。43~50は土器の底部である。

〔D：古代の土器〕－第101図51－

51は須恵器坏の底部で、回転ヘラ切りで切り離され、底辺は丸みをもっている。

\* 9世紀代に年代が推定される。

= (2) F区の土器=第103図に実測図を示し、説明は通し番号で行った。

〔A：縄文時代後期前葉から後期中葉の土器群〕－第103図1~12－

1は内傾する深鉢の口縁部で、口縁部は無文でくびれより下の胴部に縄文が施されている。

2は直立する深鉢の口縁である。縦における隆線があり、無文地に沈線文が横方向に展開する。

3は深鉢の外反する口縁に、沈線での字状文様を描いている。

4は突起に円形の孔が空いている。

5は縄文の地に沈線が引かれている。

6は撚糸文の地に沈線の文様が展開される。

7は口縁部に縄文を施している。

8は深鉢の口縁部から胴部であり、網目状撚糸文が施されている。

9は鉢の体部破片であり、内面に沈線で区画した重層文を描き、縄文を充填している。

10~12は土器の底部破片である。

〔B：弥生時代前期の土器群〕－第103図13~21－

13は波状を呈する鉢の口縁部破片で、口唇にそった内外面とくびれ部に細沈線が引かれている。

14は外傾する鉢の体部で、器面がよく磨かれており、外面に沈線で変形工字文が描かれている。

15・16は外面は無文で内面に平行沈線が引かれている。15の口唇に刻み目がついている。

17・18は頸部に数条の平行線が引かれ、周辺は刷毛目状痕が施されている。

19は沈線の下に刻み列点が付されている。

20・21は地文が縱走繩文であり、頸部に集合沈線と連弧文が展開される。

\*13・14は砂沢式に、20・21は田舎館式に比定される。

= (3) D・E区の石器= 第104~108図に実測図を示し、説明は図の通し番号で行った。

1は石鎌で、無茎の基部は平らである。

2はつまみをもつが、細みで先端が尖る小形の槍先状を呈している。両面加工により断面は凸レンズ状を呈しており、したがって尖頭器として分類した。

3~8は縦型の石匙であり、凸となる面の縁辺に調整加工が施され、片面は剥離の広い面が残る。8は基部が欠損し、先端だけである。

9~11は横型の石匙であり、9は片面に剥離の広い面が残り、10は縁辺を両面から調整して刃部を作り出している。11はつまみ部が大きく、フラットな面の縁辺に調整加工されている。

12~14は剝片石器である。縁辺に調整加工されている。

15・16は大型の剝片石器である。縁辺に調整加工されており、斧状を呈する。

17~19は磨製石斧で、18には擦り切りの痕跡が残っている。

20は凹石で、片面に凹部がある。21・23・27・28は丸石の片面あるいは両面が磨られている。

22・24~26は平らな石の片面が磨られている。

29~31は砥石であり、長方体を呈し、縁辺まで磨面が入る。

= (4) F区の石器= 第109・110図に実測図を示し、説明は通し番号で行った。

1は石鎌であり、無茎の基部が凸を呈する。

2~5は石匙である。2・3・4は縦型の石匙であり、凸を呈する表面の縁辺の調整加工が行われ、片面は剥離面の広い面が残る。5は横型で、縁辺を調整している。

6は石箆の基部が欠損したものである。

7・8は剝片石器であり、両面から縁辺を調整加工し、尖頭状・梢円形に作り出している。

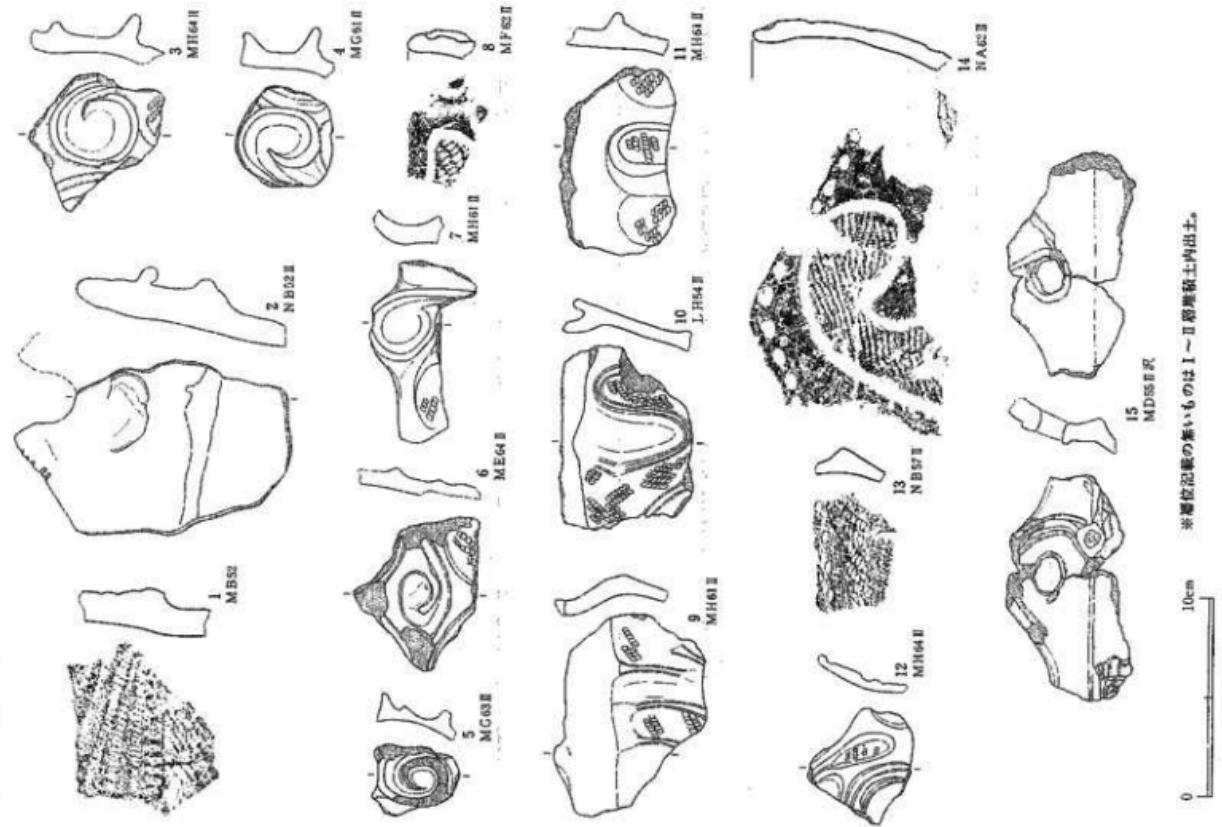
9~12は剝片石器であり、片面から縁辺を調整加工しており、不定形である。

13は磨製石斧で、擦り切りの痕跡が残っている。

14は凹石で、両面に凹部がある。15は磨石で平らな両面が研磨されている。

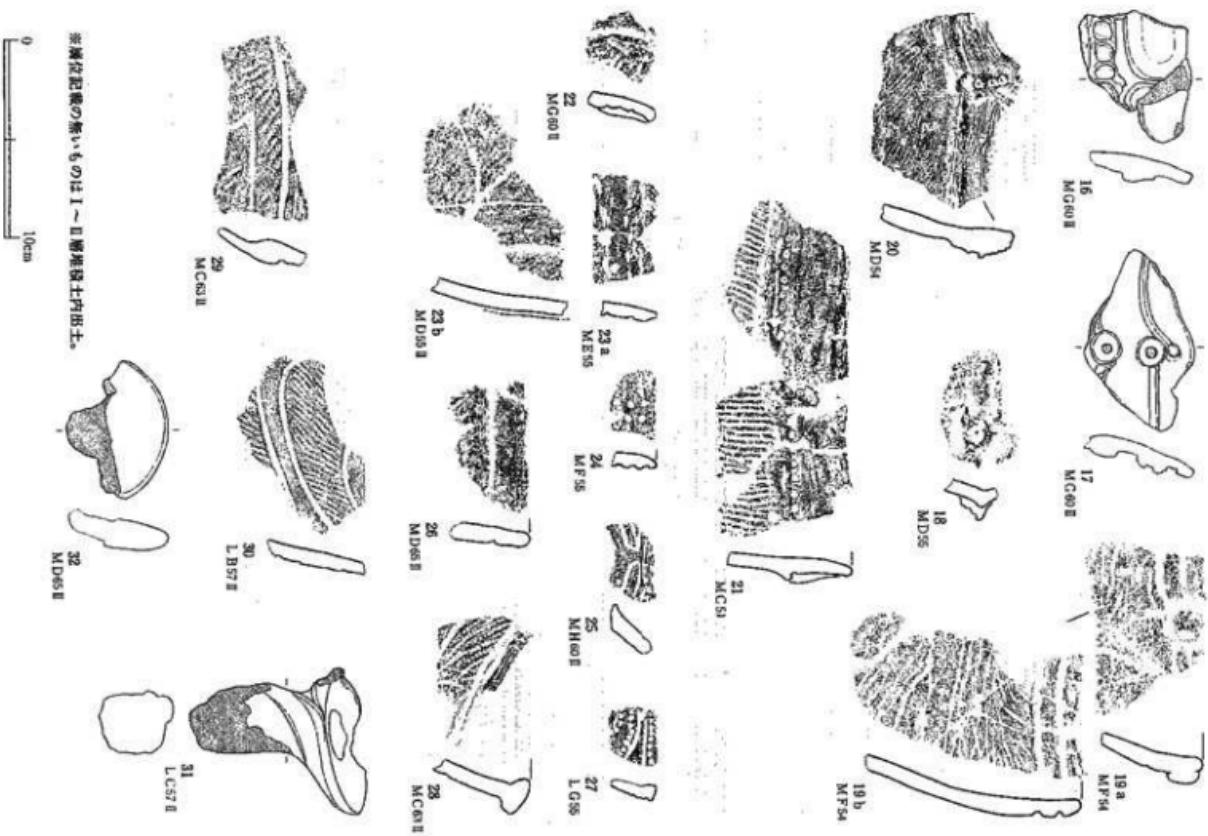
16は石皿の破片とみられる。

\*D・E区の砥石は古代以降のものであり、その他は繩文時代中期から後期ものと推定される。



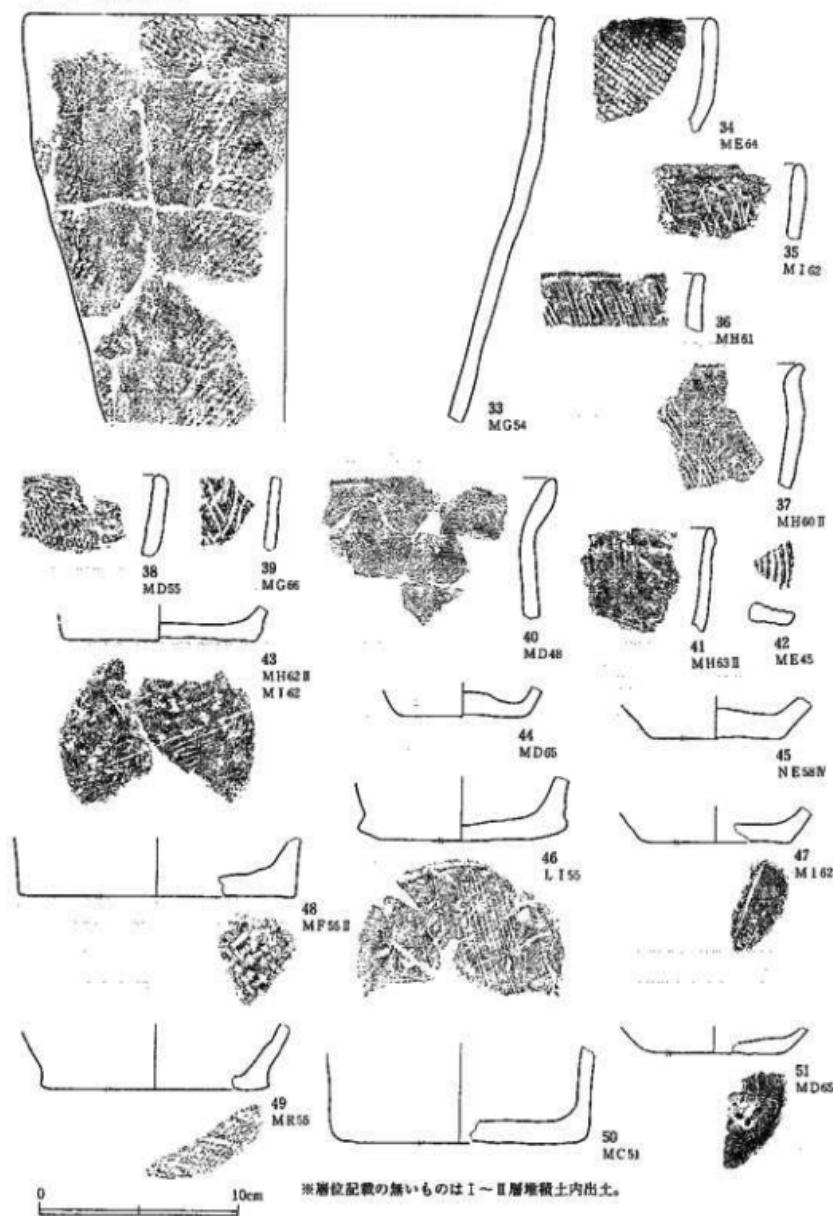
第100図 D・E区の遺構外出土遺物—土器(1) —

第4-2節 D・E・F区の遺構外出土遺物

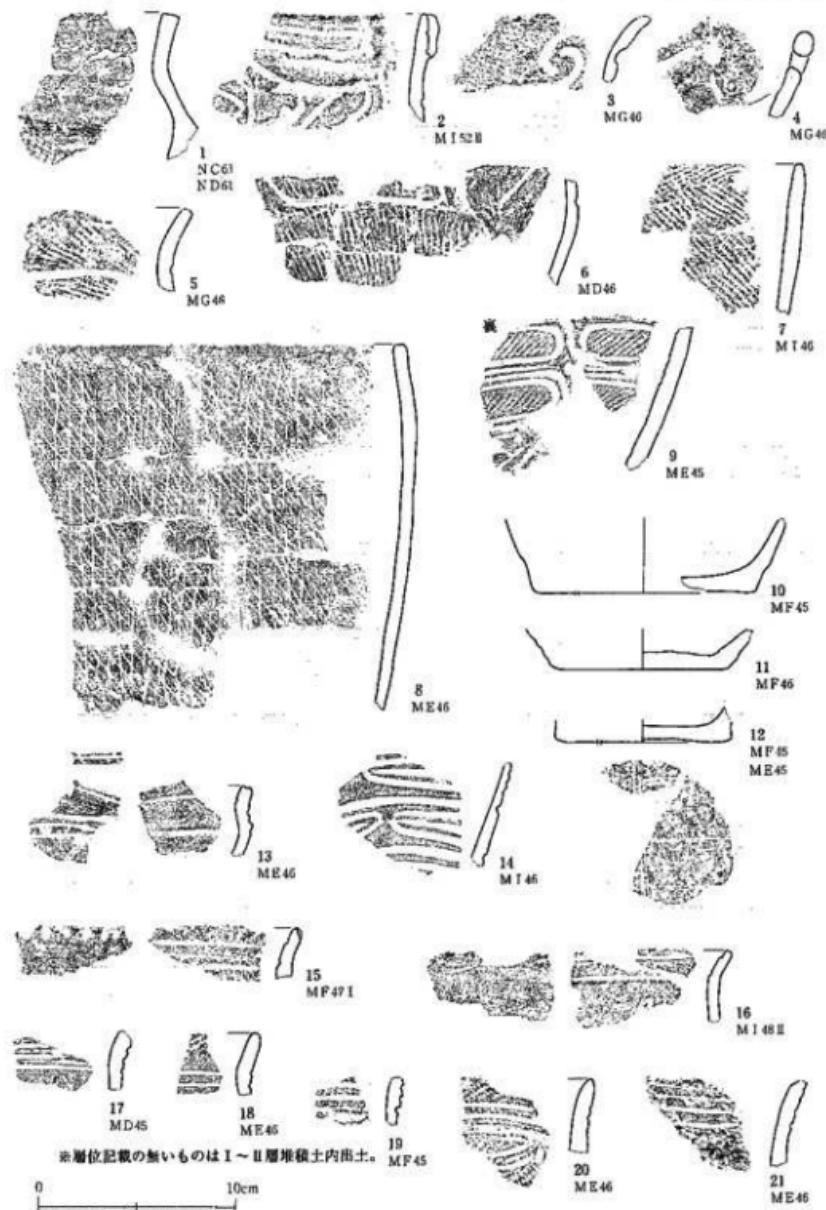


\*補佐記載の無いものはI~III層地盤内出土。

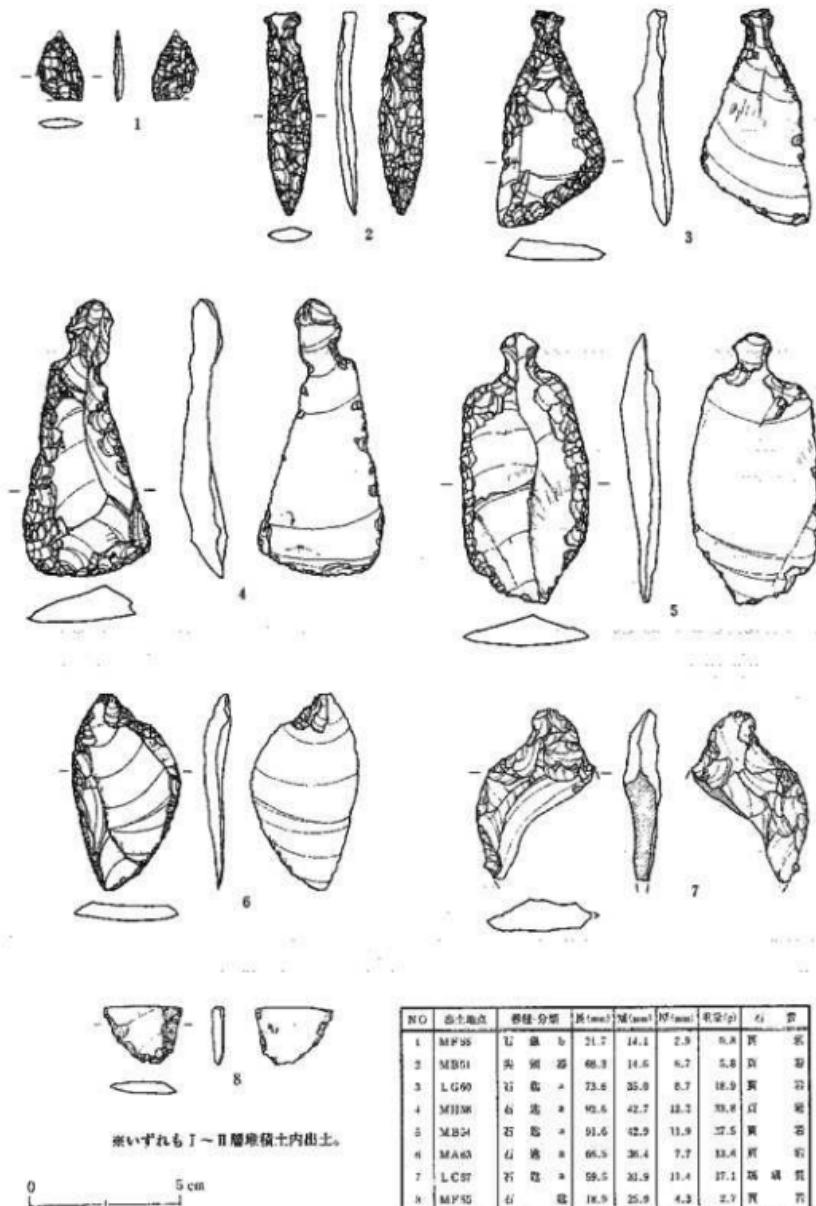
第101図 D・E区の遺構外出土遺物－土器（2）－



第102図 D・E区の造構外出土遺物 - 土器 (3) -



第103図 F区の遺構外出土遺物—土器—

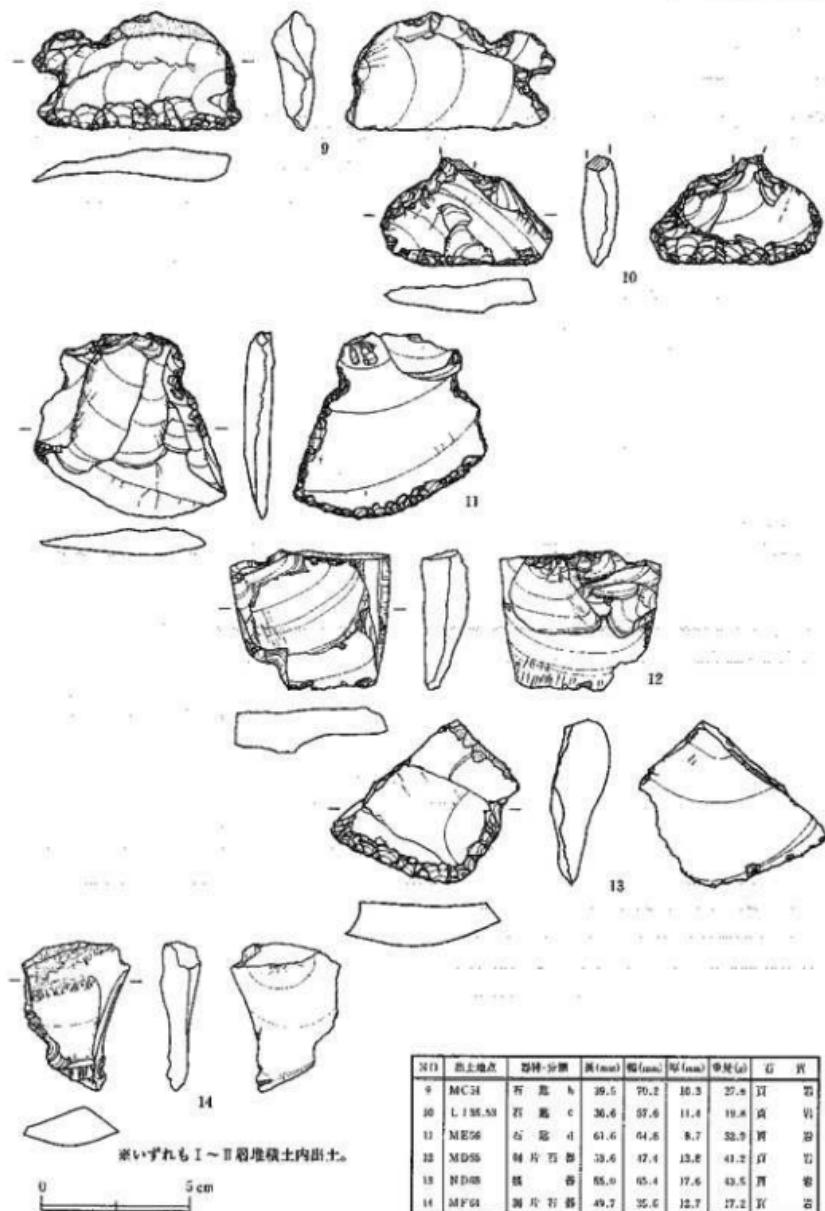


素いすれも丁一層堆積土内出土。

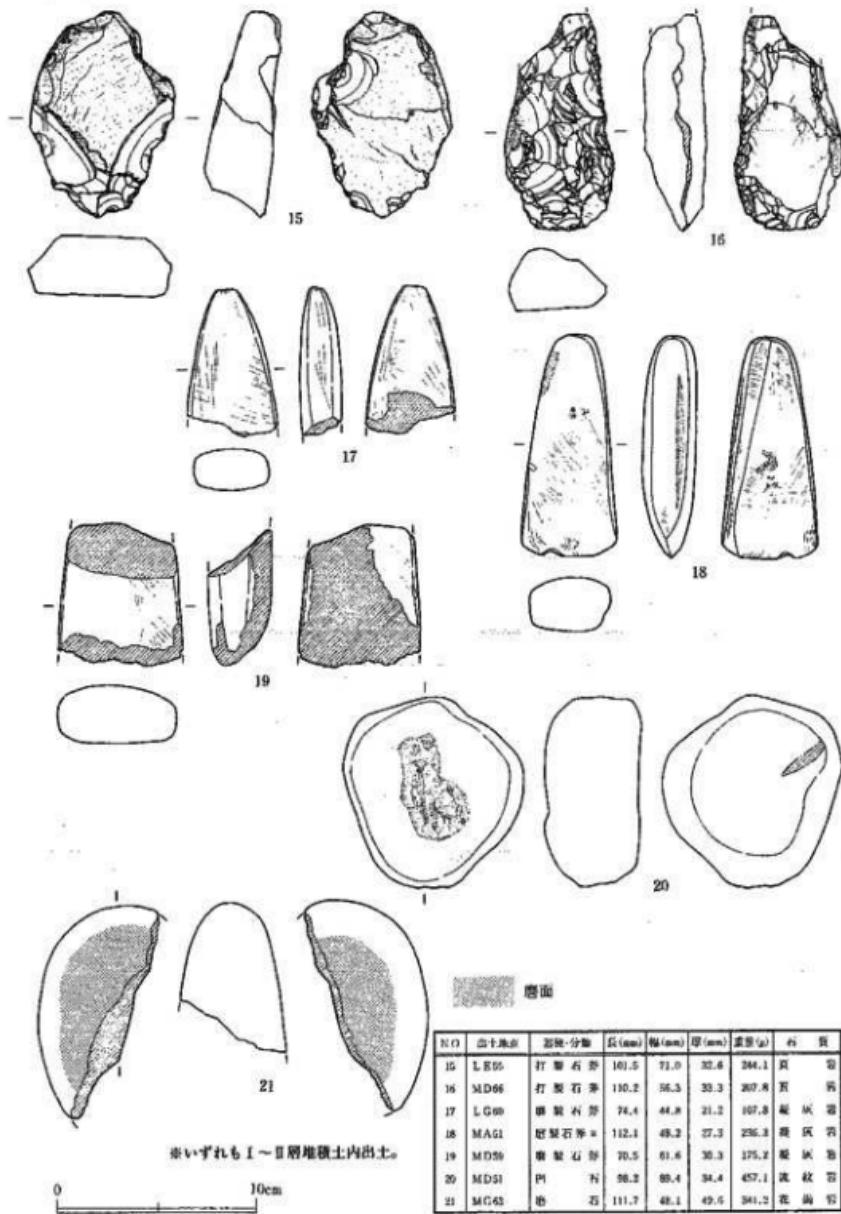
0 5 cm

NO.	出土地点	器種・分類	L(mm)	W(mm)	H(mm)	重量(g)	石種	質
1	MF55	石 鋸 刃	21.7	14.1	2.9	8.8	碧玉	良
2	MB51	尖頭 砥	68.3	14.6	6.7	5.8	碧玉	良
3	LG60	石 鋸 刃	73.6	35.0	8.7	18.9	碧玉	良
4	MH36	石 鋸 刃	92.6	42.7	13.3	33.8	碧玉	良
5	MB34	石 鋸 刃	91.6	42.9	11.9	37.5	碧玉	良
6	MA63	石 鋸 刃	66.3	36.4	7.7	13.4	碧玉	良
7	LC57	石 鋸 刃	59.5	31.9	11.4	17.1	瑪瑙	良
8	MF55	石 鋸 刃	18.9	25.9	4.2	2.7	碧玉	良

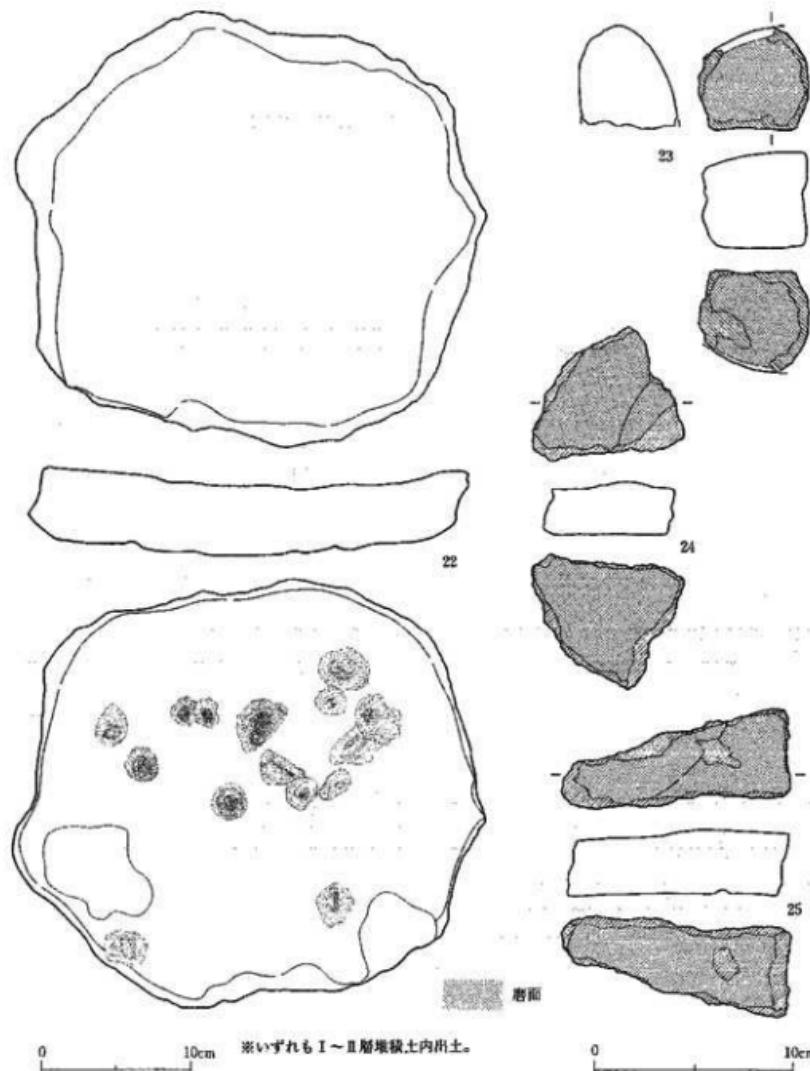
第104図 D・E区の造構外出土遺物－石器（1）－



第105図 D・E区の造構外出土遺物－石器（2）－



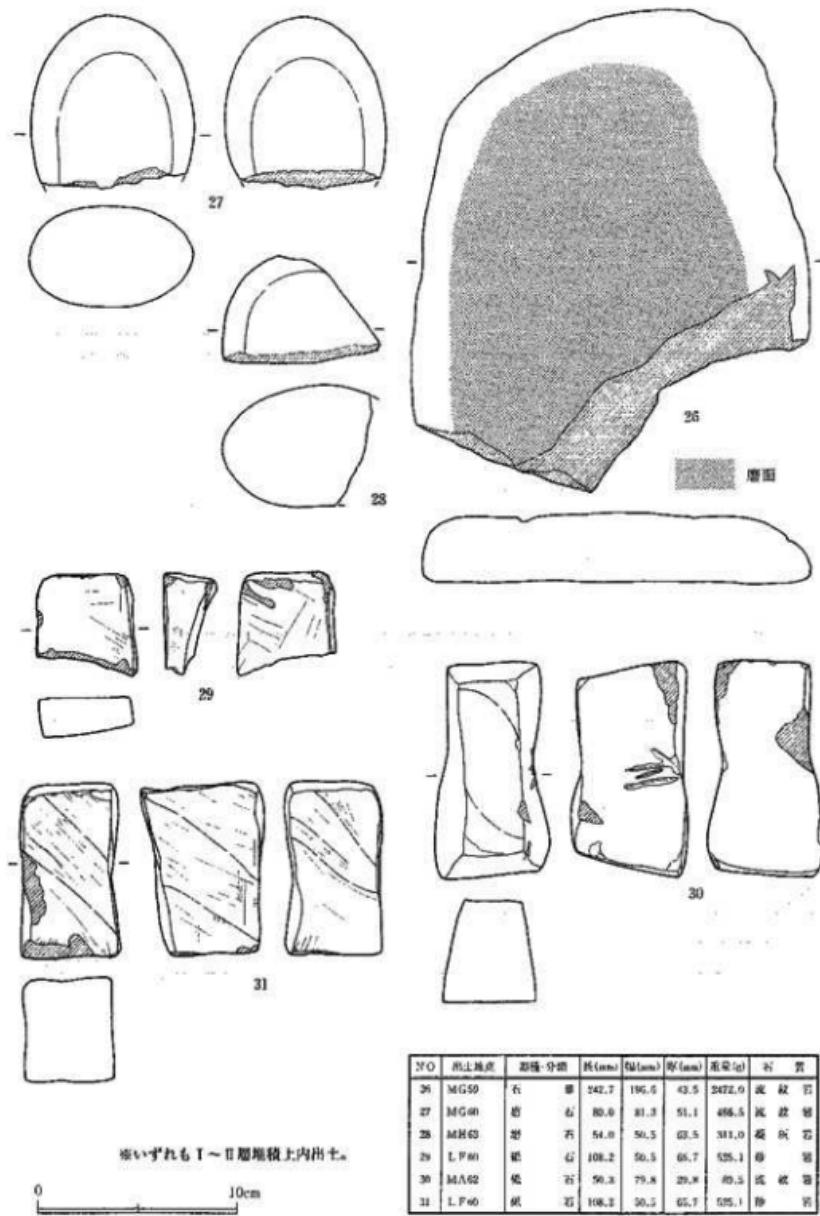
第106図 D・E区の遺構外出土遺物－石器（3）－



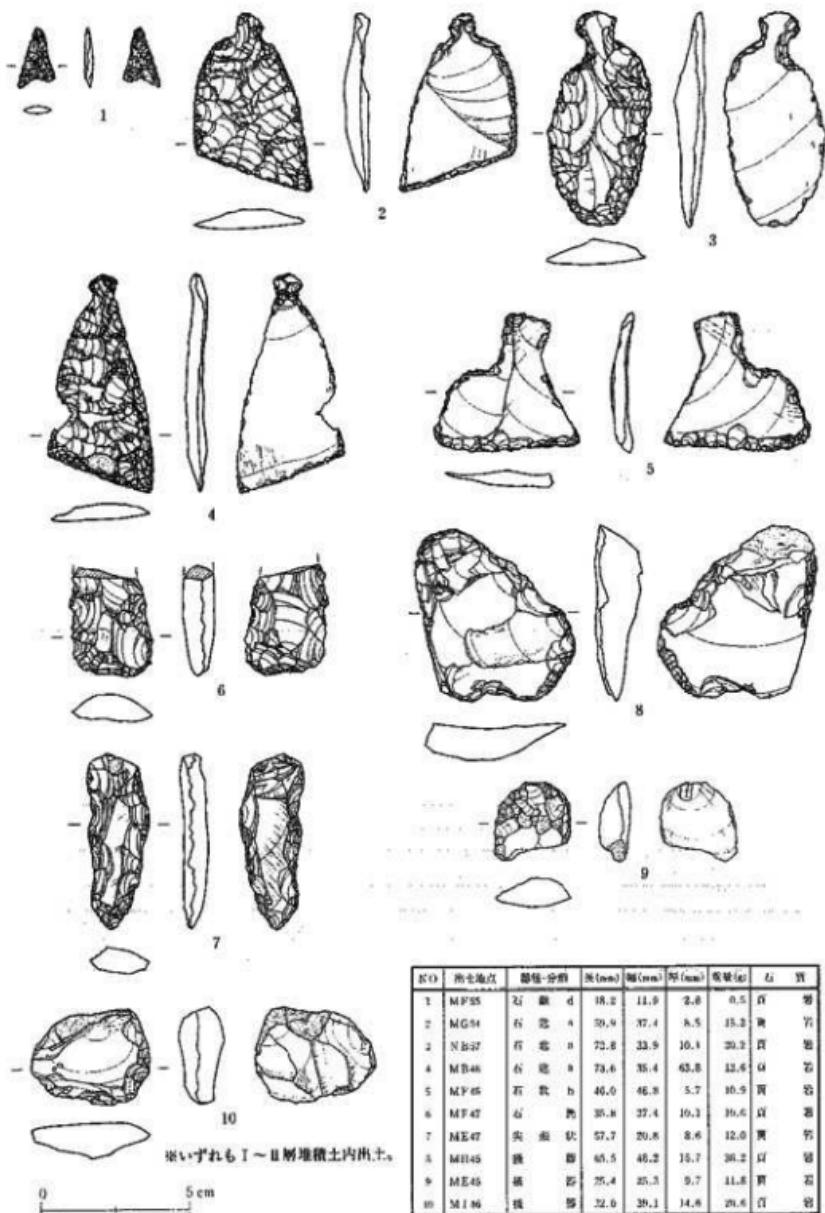
※いずれもI~II層堆積土内出土。

NO.	出土場所	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質
22	NB58	石 壴	310.0	395.0	95.0	4820.0	泥岩質
23	ME55	石 壴	53.0	55.5	49.0	227.0	安山岩
24	MG43	石 壴	64.6	76.3	28.1	139.7	安山岩
25	MF61	石 壴	44.7	114.9	11.8	201.5	安山岩

第107図 D・E区の遺構外出土遺物－石器（4）－

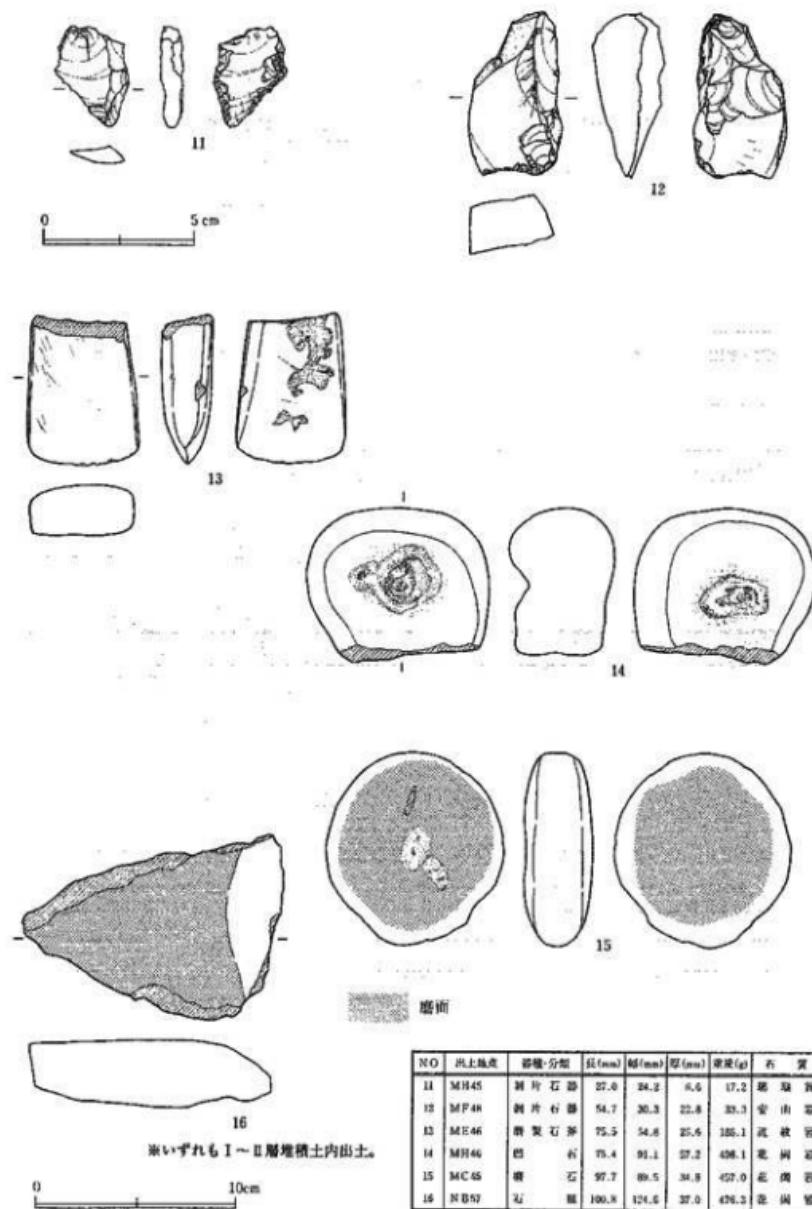


第108図 D・E区の遺構外出土遺物－石器（5）－



第109図 F区の遺構外出土遺物－石器（1）－

No.	出土地点	器種-分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質
1	MF55	石 砕 d	18.2	11.9	2.8	0.5	頁岩
2	MG54	石 砕 a	29.9	37.4	8.5	35.2	頁岩
3	NB47	石 砕 b	72.8	33.9	10.1	20.2	頁岩
4	MB48	石 砕 a	73.6	35.4	63.8	12.5	石
5	MF45	石 砕 b	46.0	46.8	5.7	10.5	頁岩
6	MT47	石 砕 c	35.8	27.4	10.1	10.6	頁岩
7	ME47	尖 砕 狹	57.7	20.6	8.6	12.0	頁岩
8	MR45	石 砕	45.5	46.2	15.7	30.2	頁岩
9	ME45	石 砕	27.4	25.3	9.7	11.8	頁岩
10	M146	石 砕	32.6	20.1	14.6	20.6	頁岩



第110図 F区の造構外出土遺物—石器(2)—



第111図 G区の遺構位置

## 第5-1節 G区の検出遺構と出土遺物

丘陵地頂上部で焼土遺構3基とピット群、土坑1基を検出した。西側斜面で土坑4基と疊群のまとまりを検出した。また東側の沢では、東西に長軸方向をもち並列してならんだ陥し穴遺構8基を検出した。

## 焼土遺構

褐色土層面を精査して3基の焼土遺構を確認した。焼土面の広さは狭く、直径40cm前後である。なお同じ面で弥生時代後期の土器片が出土しており、同時期の遺構と考えられた。

## 第1号縄文住居跡（S102）—第113図—

<位置・確認状況>褐色土層面を精査して3基の焼土遺構を確認した後、周辺を地山面まで掘り下げたところ、小さいピットが周辺の4グリッド内に多数検出された。

<平面形・規模>明黄褐色土の地山に検出された炉跡と思われる火床を中心として推定すると、橢円形を呈すると考えられる。範囲は南北7m・東西5mである。

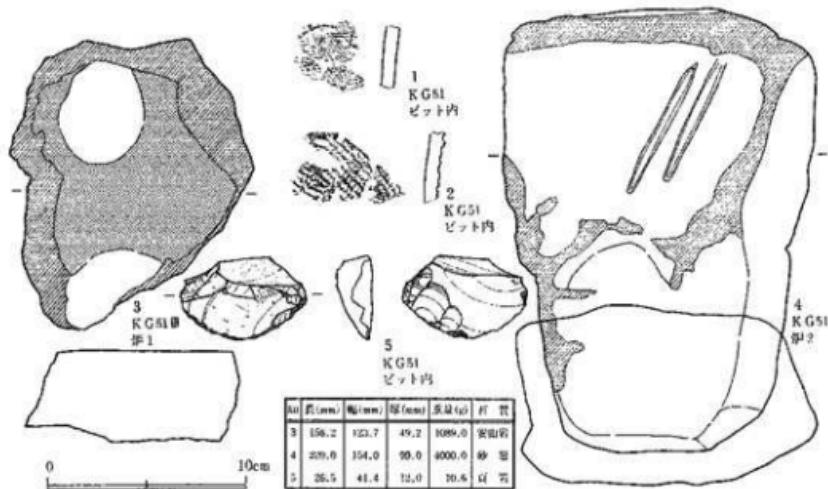
<堆積土の状況>上を覆っていた褐色土層の堆積は20cm前後であった。

<壁・床面の状況>壁は確認されなかった。平坦であり、他の部分より堅さがあった。

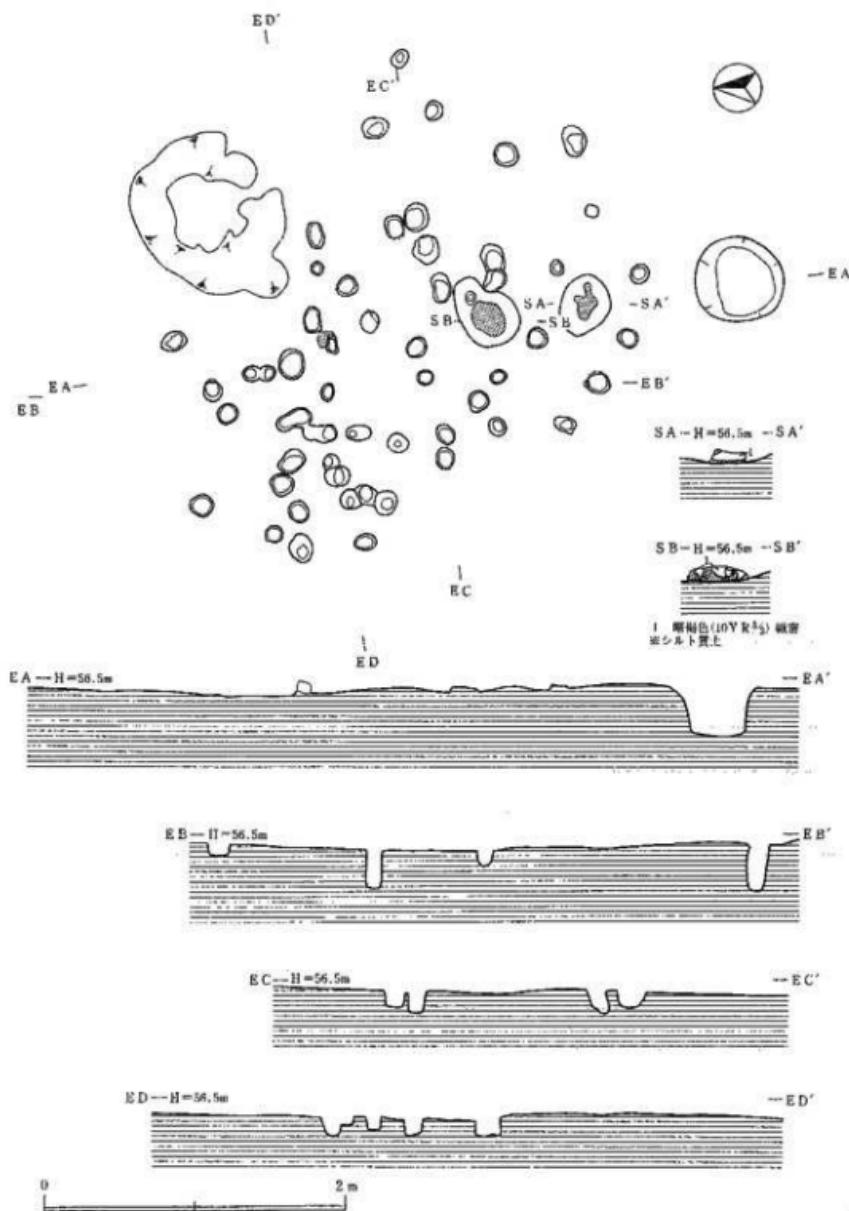
<柱穴>30個確認され、深さが40~20cmと規模の違いがある。

<炉跡>ほぼ中央に位置する。火床面は長径60cmの広さがある。

<遺物出土状況>ピット上面から縄文時代前期末葉の土器片が出土した。磨面をもつ石が焼土面から出土した。



第112図 第1号縄文住居跡内出土遺物



第113図 第1号绳文住居跡

第15号土坑（S K16）－第114図－

＜位置・確認状況＞K F50グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈している。直径1m13cmで、確認面から最深部まで72cmである。

＜埋土の状況＞黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞開口部から底部に向けてすばまり逆台形状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞石鏃2点と剝片石器2点が出土し、こまかい頁岩の剝片が埋土中に混在していた。石鏃は無茎で、基部は凸を呈する。

第16号土坑（S K15）－第114図－

＜位置・確認状況＞L C53グリッド南東側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。第17号土坑の北側を切って構築されている。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。直径1m42cmで、確認面から最深部まで44cmである。

＜埋土の状況＞底面にそって褐色土が薄く堆積し、上に凸レンズ状に黒褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞開口部から底辺に向かって緩やかにすばまり、鍋底状を呈する。

＜底面の状況＞底面は中央がいくぶんくぼむ。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第17号土坑（S K19）－第114図－

＜位置・確認状況＞L C53グリッド杭西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈している。底部が同心円状にひろがる。開口部直径1m52cmで、確認面から最深部まで1m20cmである。

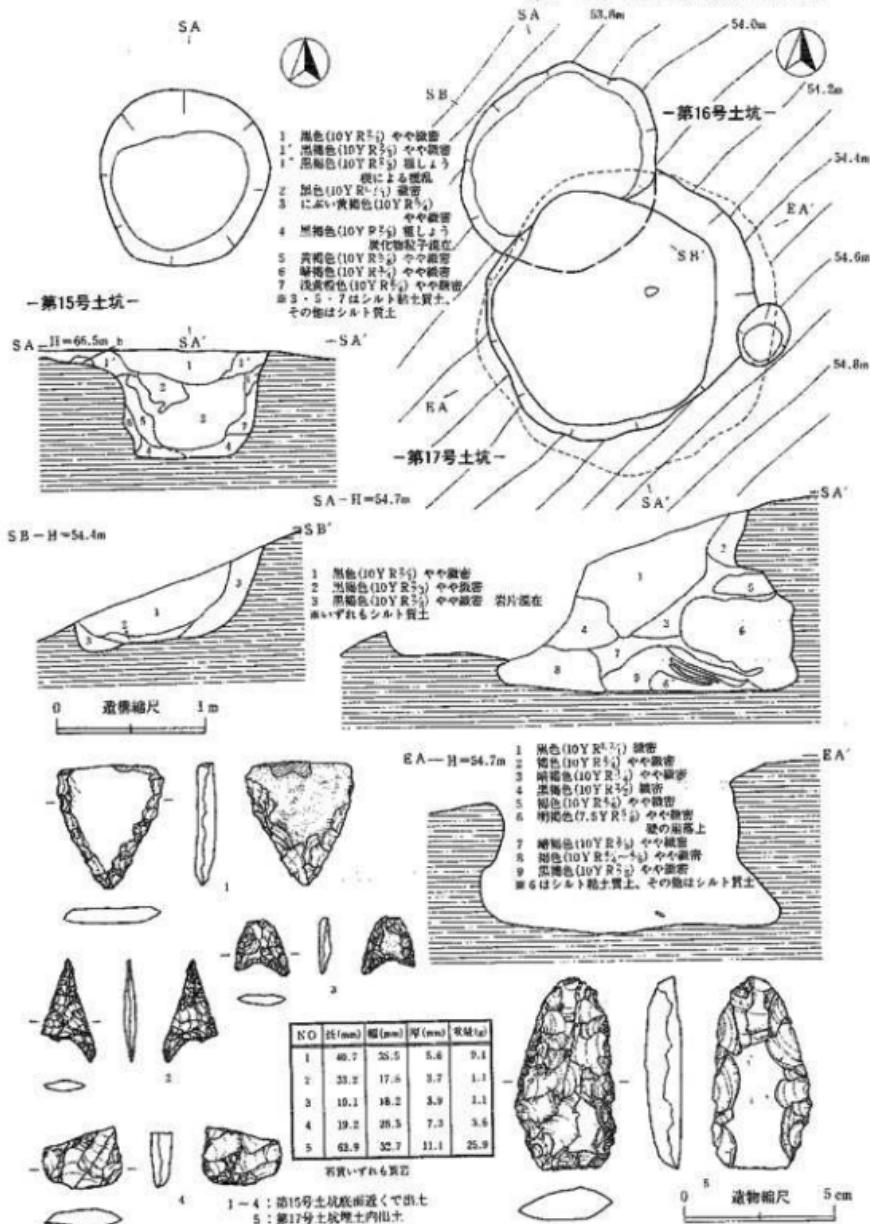
＜埋土の状況＞黒褐色土が充填していた。

＜断面の形状＞開口部が狭く、壁の中位からふくらみをもち、袋状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞底面近くより石鏃が1点出土した。

### 第5－1節 G区の検出遺構と出土遺物



### 第114図 第15号・第16号・第17号土坑

第18号土坑（S K18）－第115図－

＜位置・確認状況＞L C51グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈している。長径1m7cmで、確認面から最深部まで58cmである。

＜埋土の状況＞層の乱れはあるが、レンズ状の堆積とみられる。

＜断面の形状＞開口部から底部まではほぼ垂直に落ち込み箱形を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第19号土坑（S K20）－第115図－

＜位置・確認状況＞K G48グリッド南側で、地山の明黄褐色土層面に褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈している。長径2m14cmで、確認面から最深部まで1m45cmである。

＜埋土の状況＞下位では黒褐色土ないし暗褐色土が、帯状に連続する地山土塊の層と交互に凹レンズ状の堆積をくり返し、上位には褐色土が厚く覆っていた。

＜断面の形状＞開口部から底部にかけてせばまり、逆台形状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。中心から西寄りにずれて直径20cm・深さ30cmの小穴がある。

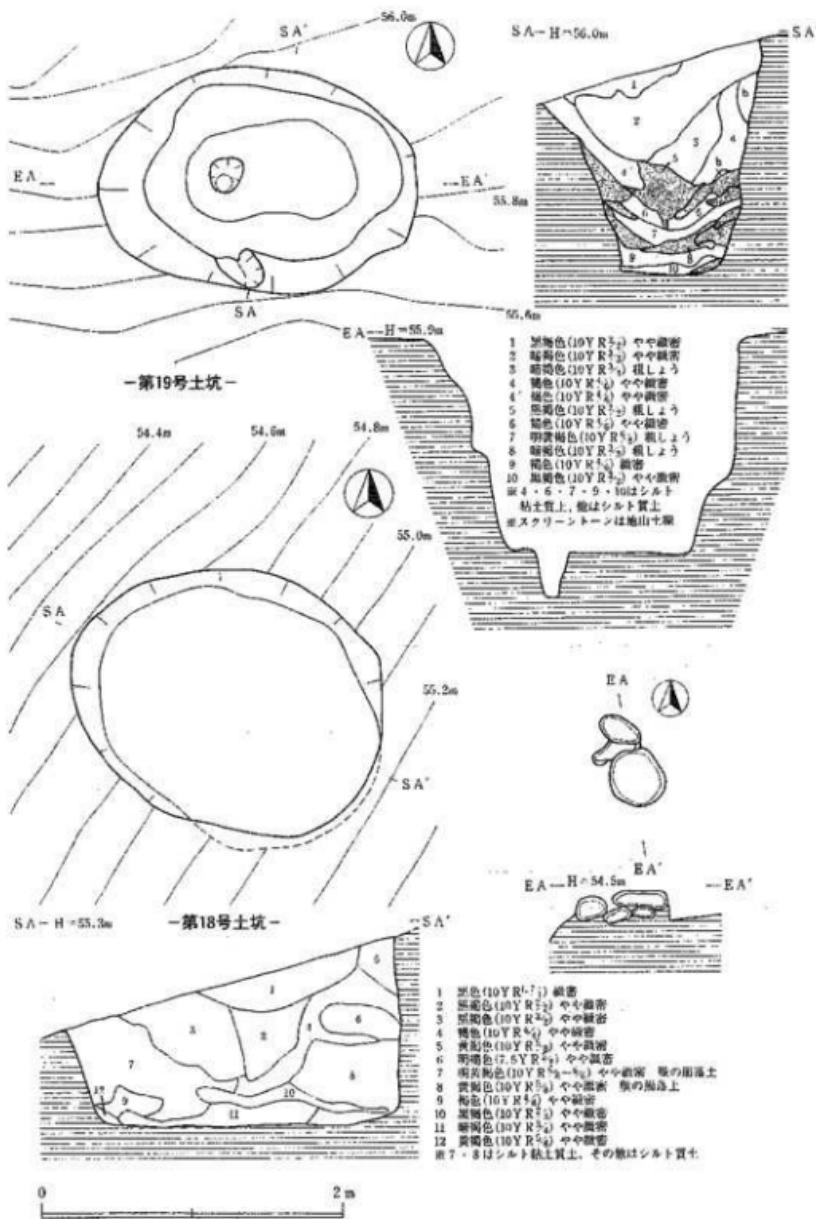
＜遺物・その他＞出土遺物はない。

礫のまとまり（S Q01）－第115図－

＜位置・確認状況＞L D52グリッド杭近くで、地山の明黄褐色土層面直上で確認した。

＜規模＞4個の礫がまとまっており、直径15cmから20cmの小さい3個の石があり、下の2個に接して、大きな長径36cmの石が上を覆っていた。

＜埋土の状況＞礫群を黒褐色土が覆っていた。



第115図 第18号・第19号土坑、砾群

## 第24号陥し穴遺構 (SKT24) - 第116図-

<位置・確認状況> 谷の上位にあたるKB49グリッドの北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模> 細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m40cm・短軸幅30~50cm、底部長軸幅3m90cm・短軸幅8~16cmである。確認面から最深部まで1m10cmである。

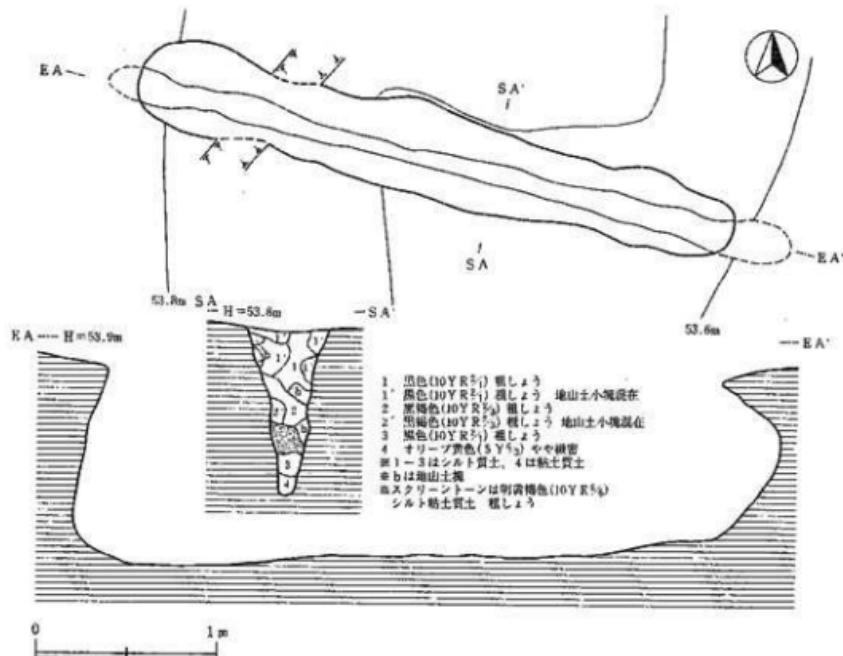
<長軸方向> N-76°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況> 埋土はおよそ5層に分けられる。下位には地山土塊が混在した黄褐色土と黒褐色土が充填し、中位には壁の崩落とみえる明黄褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。

<断面の形状> 長軸の断面形をみると、東壁は開口部から中位にかけて大きくふくらみ、袋状を呈し、西壁は開口部から外方へ張り出している。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況> 底面は平坦である。

<遺物・その他> 出土遺物はない。



第116図 第24号陥し穴遺構

## 第25号陥し穴遺構（S K T 25）－第117図－

＜位置・確認状況＞谷の上位にあたるK C 49グリッドの北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m50cm・短軸幅43cm、底部長軸幅4m30cm・短軸幅10cmである。確認面から最深部まで1m15cmである。

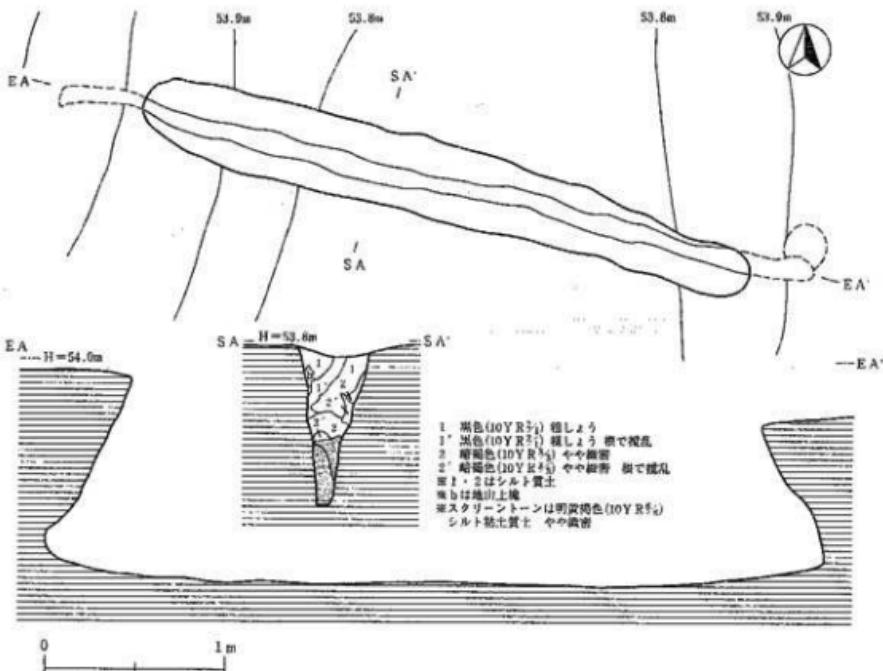
＜長軸方向＞N-76°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には明黄褐色の地山土塊が充填しており、中位には暗褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。下位の明黄褐色の地山土塊は、掘り上げた土ともみられることから、短い時間で埋没していった可能性がある。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から斜めに外方にはり出す台形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第117図 第25号陥し穴遺構

## 第26号陥し穴遺構 (SKT26) - 第118図-

<位置・確認状況>谷部上位にあたるKC47グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈しているが、西側の幅が広く東側が極端に狭い。開口部長軸幅3m5cm、短軸幅は最大で50cm、最小で18cmである。底部長軸幅3m24cm・短軸幅10cmである。確認面から最深部まで1m15cmである。

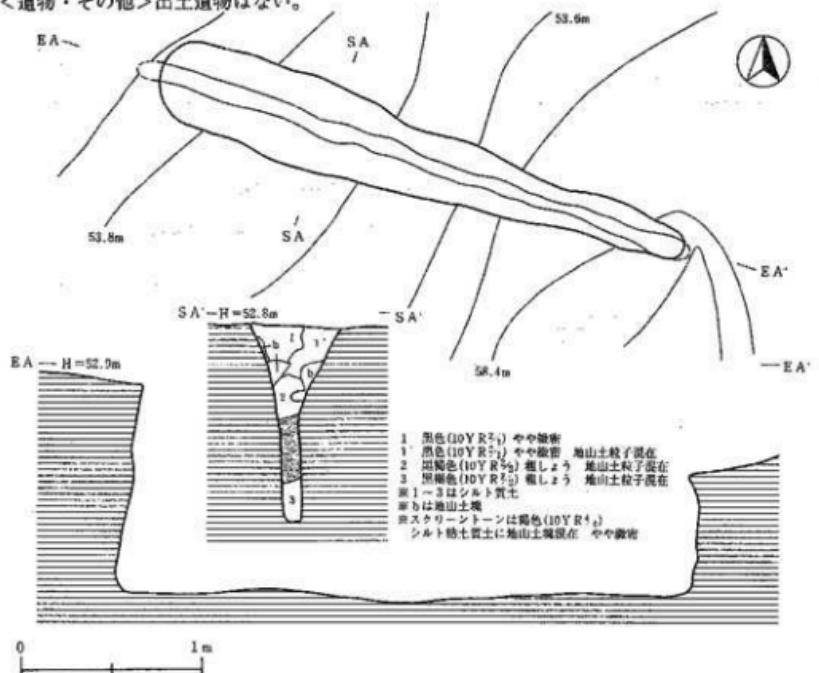
<長軸方向>N-71°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況>埋土はおよそ4層に分けられる。下位には黒褐色土が充填しており、中位に地山土塊が混在した褐色土が、上位には黒褐色土と黒色土が覆っていた。比較的時間をかけて自然に埋没していくものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部から垂直に落ち込み箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から中位が一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

<底面の状況>底面はほぼ平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第118図 第26号陥し穴遺構

**第27号陥し穴遺構 (S K T 27) - 第119図-**

＜位置・確認状況＞谷部中腹にあたるKC47杭からKD47杭の間で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈しているが、西側の幅が広く東側が狭い。開口部長軸幅3m2cm、短軸幅は最大で38cm・最小で25cm、底部長軸幅3m12cm・短軸幅7cmである。確認面から最深部まで1m12cmである。

＜長軸方向＞N-78°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ6層に分けられる。下位には明黄褐色の地山土塊が充填しており、中位には暗褐色土が、上位には黒色土が覆っていた。下位に堆積する明黄褐色土は掘り上げた地山土ともみられることから、短い時間で埋没していった可能性がある。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底面にかけてほぼ垂直に下がる箱形を呈する。ただし西側はわずかにふくらみをもつ。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

**第28号陥し穴遺構 (S K T 28) - 第119図-**

＜位置・確認状況＞谷部中腹にあたるKC46グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面に暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈しているが、西側の幅が広く東側が狭い。開口部長軸幅3m5cm、短軸幅は最大で40cm・最小で22cm、底部長軸幅3m55cm・短軸幅11cmである。確認面から最深部まで1m7cmである。

＜長軸方向＞N-78°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

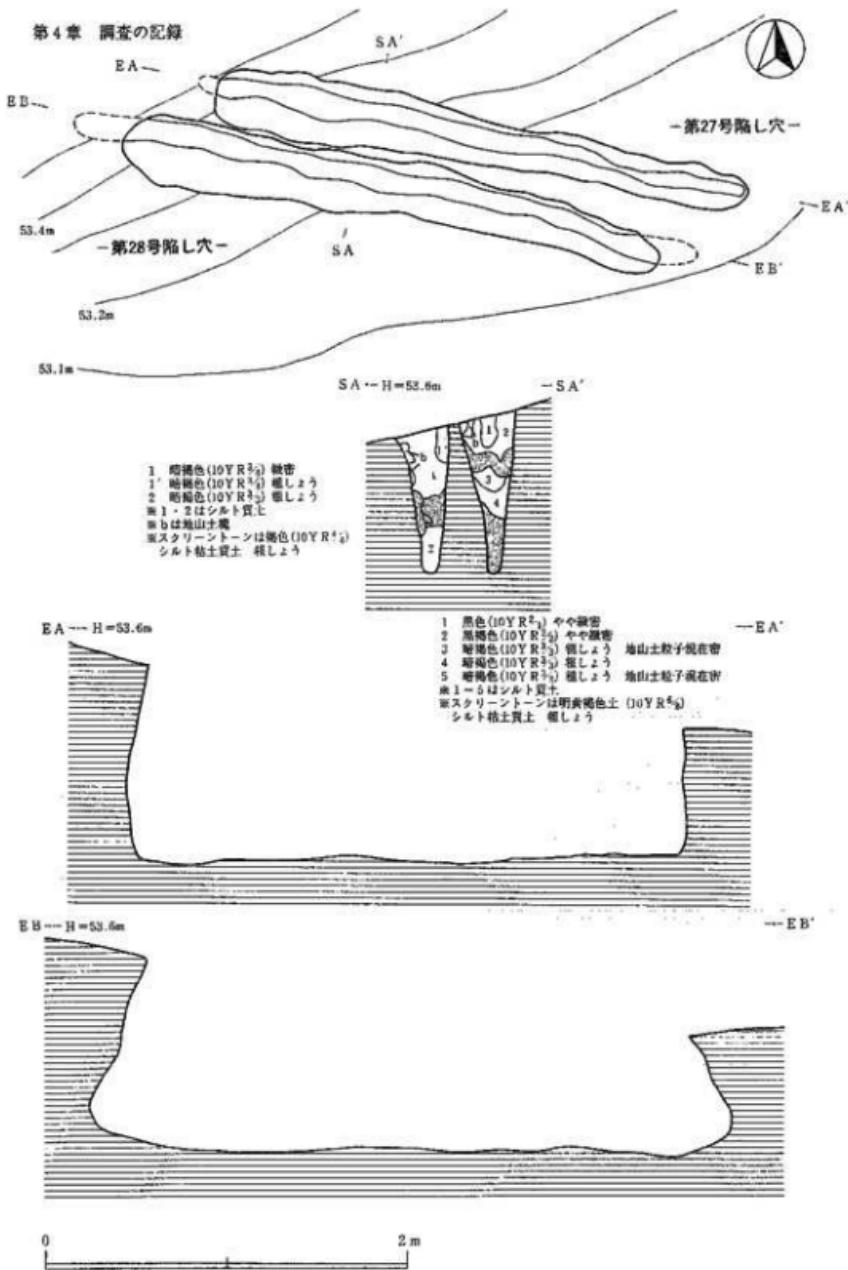
＜埋土の状況＞埋土はおおよそ3層に分けられる。暗褐色土が底面に堆積した後に壁の崩落土である明黄褐色土塊が覆い、その上に褐色土が堆積していた。比較的時間をかけて自然に埋没していったものとみられる。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から斜めに外方へはり出す台形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第4章 調査の記録



第119図 第27号・第28号陥し穴遺構

## 第29号陥し穴遺構 (S K T 29) - 第120図-

＜位置・確認状況＞谷部中腹にあたるKC46グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m50cm・短軸幅は最大で60cm、底部長軸幅3m68cm・短軸幅10~20cmである。確認面から最深部まで1m10cmである。

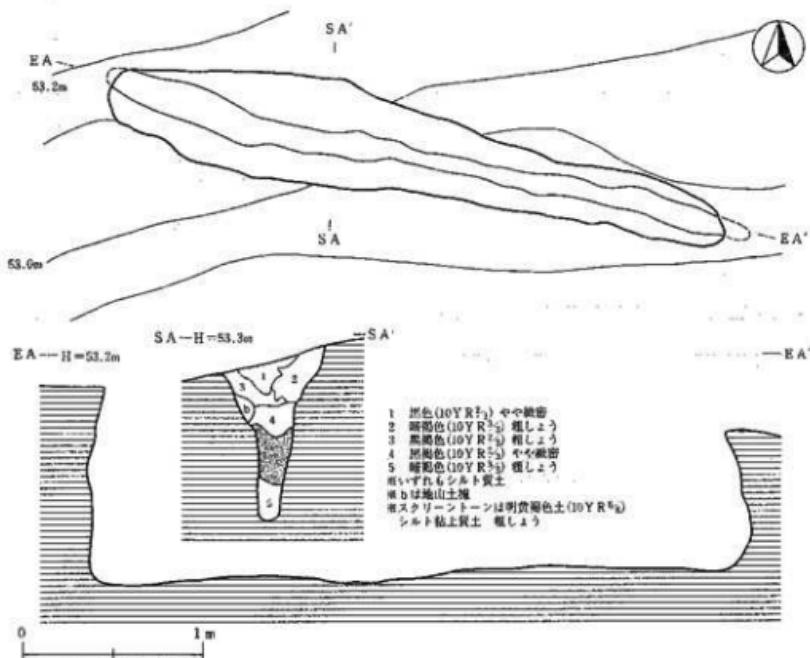
＜長軸方向＞N-75°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ6層に分けられる。暗褐色土が底面に一様に堆積した後に、壁の崩落土である明黄褐色土塊が覆い、その上に黒褐色土および暗褐色土が堆積していた。比較的時間をかけて自然に埋没していったものとみられる。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から斜め外方へはり出す台形状を呈するが、東側のふくらみが大きい。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は波打っている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第120図 第29号陥し穴遺構

## 第30号陥し穴遺構 (S K T 30) - 第121図-

<位置・確認状況>谷部中腹にあたるK D46グリッド杭北側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>幅が広い溝状を呈している。開口部長軸幅2m98cm・短軸幅は最大で52cm、底部長軸幅3m38cm・短軸幅20~10cmである。確認面から最深部まで1m24cmである。

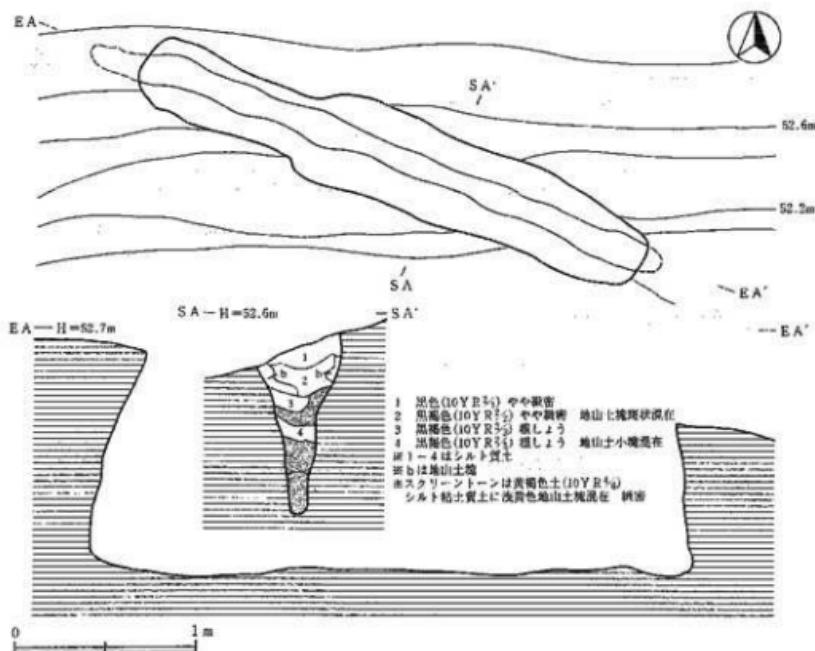
<長軸方向>N-70°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ7層に分けられる。下位には浅黄色の地山土塊が充填しており、中位には黒褐色土が覆い、上位には黒色土が覆っていた。底面に厚く堆積する黄褐色土は地山を掘り上げた土とみられることから、短い時間で埋没していった可能性がある。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部から外方へ張り出し、台形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第121図 第30号陥し穴遺構

第31号陥し穴遺構（S K T 31）—第122図—

＜位置・確認状況＞谷部南側斜面にあたるK D45グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

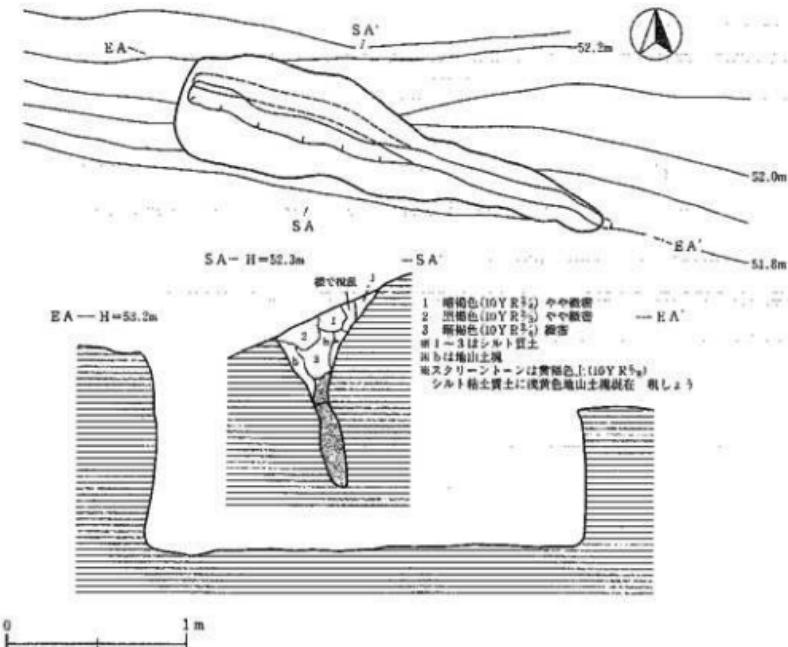
〈平面形・規模〉細長い溝状を呈しているが、西側の幅が広く、東側が極端にせまい。開口部長軸幅2m45cm、短軸幅は最大で62cm、最小で17cmである。底部長軸幅2m50cm・短軸幅10cmを測る。確認面から最深部まで1m10cmである。

〈長軸方向〉N-70°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況> 埋土はおおよそ4層に分けられる。下位から中位には浅黄色の地山土塊が混在した黄褐色土が充填しており、上に暗褐色土と黒褐色土が覆っていた。底面から中位にかけて堆積する黄褐色土は地山土に似ており、掘り上げた土ともみられることから、短い時間で埋没していった可能性がある。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底面にかけて垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から中位まで一様な傾斜をもち、下部が垂直に落ち込むY字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第122図 第31号脇し穴遺構

## 第5-2節 G区の遺構外出土遺物

丘陵地の高位部から東側の斜面で多くの遺物が出土し、西側斜面は散布する程度であった。出土遺物を土器と石器に分類し、説明を加えた。

=土器= 帰属時期で分類し、器形・部位、文様の特徴を説明し、最後に型式上の分類を付記した。第123-127図に実測図を示し、説明は図の通し番号で行った。

### 【A：縄文時代前期末葉の土器群】—第123図1～3—

1は深鉢の口縁部で、強く外傾している。隆線の上に半截竹管で押し引きをくり返している。

2は胴部破片で半截竹管により隆沈線が引かれている。

3は深鉢の口縁部で、口唇に平行に絡状体圧痕を押圧した下に、細い隆帯を巡らせていている。

\* 1は朝日下層式に、3は円筒下層d式に比定される。

### 【B：縄文中期前葉から後葉の土器群】—第123図4～7—

4は深鉢の頸部から口縁部の破片であり、頸部に太い半截竹管の隆沈線を引き、口縁には半截竹管の押し引きで文様を描いている。

5は深鉢の口縁部で内済気味に立ち上がる。地文は縄文で頸部に沈線が引かれており、口縁には隆線が波状に貼付されている。

6は深鉢の口縁部で外反している。口縁の波頂部に隆帯の渦巻き文が付いている。

7は胴部の破片で、隆沈線によって渦巻き文が描かれている。

\* 4は新崎式に、5は大木7b式に、6・7は大木9式に比定される。

### 【C：縄文時代後期前葉の土器群】—第123図8～22、第124図23～25—

8は口縁部に円形の突起が付き、突起を取り巻くように隆線でS字状の文様が付されている。

9は口縁部の破片で、弧状の沈線が付されている。

10は外反する口縁部の破片で、頸部に巡る隆線の脇にそって刺突が付されている。

11は胴部の破片で、縄文が施された上に刺突が付されている。

12は深鉢の胴部で、地文は単軸撚糸文であり、地文の上に2条の沈線で文様が描かれている。

13～16は口縁部の破片で、13～15には縄文が、16には撚糸文が施されている。

17～22は胴部の破片で、縄文が施されている。

23・24は底部破片であり、25はミニチュア土器の底部とみられる。

### 【D：弥生時代前期から中期の土器群】—第124図26～37—

26は口縁部の破片で、口唇に連続する刻みが付され、外面に沈線文様がみられる。

27は鉢の突起部で、くびれの下にある張りコブから横方向に沈線文様が展開される。

28は胴部破片であり、沈線の下に列点が付されている。

29は深鉢で口縁部から底部まで3分の1が残っていた。胴部中位が膨らみ、頭部が真っすぐに

立ち上がり、波状を呈する口縁部は短く外傾している。頸部が広く無文帯をはさんで上下に集合沈線が巡り、下端に山形文が引かれ、口縁に斜繩文が、胴部には縱走繩文が施されている。30は直立する口縁部であり、口唇にそって繩文が施され、下に沈線で区画された無文帯がある。31は外反する口縁部で、繩文の上に沈線で平行線と山形文が引かれている。

32・33は口縁の破片で、口唇にそって繩文が施され、下には沈線で区画された無文帯がみえる。34は口縁部の破片で、口唇にそって沈線が巡り、下に横位の繩文が施される。

35～37は胴部の破片で、35・36は横位の繩文が施され、37は短い単位の刷毛目状痕がみられる。

\*29～31は田舎館式に比定される。

[E：弥生時代後期の土器群] - 第125図38～48、第126図49～80、第127図81～111-

38は頸部がくびれ、口縁部が外反する深鉢である。胴部下半から外傾し、胴部上半に最大径をもつ。口縁部の文様は無文の地に2条の交互刺突文が巡り、頸部から胴部上位には沈線で不整重菱形あるいは長楕円文が描かれ、胴部は撚糸文が縦位に施される。

39は胴部上位がくびれ、口縁が内湾気味に立ち上がり、口唇にわずかなへこみがある。口唇にそって平行沈線内には間隔をおいて点列があり、口縁部下端では隆帯の上に交互刺突文が押されており、胴部との境となっている。下は無文帯をへて横位から縦位へ撚糸文が施されている。

40～45は口唇にそって交互刺突文を施しており、2条が平行するものである。

46～48は口縁上位が無文か撚糸文であり、間をおいて下に交互刺突文を施したものである。

49～51は口縁部で、連弧状の沈線文に刺突列が加えられ、51は連弧文の下に刺突列が付く。

52は緩く外反する深鉢の口縁部から頸部の破片である。頸部より上は沈線で文様が描かれ、上位は連弧文を下位は変形工字文となっている。胴部は縦位の撚糸文が施されている。

53～55は口縁上位が無文で下に沈線が引かれている。

56・57は外反する口縁部破片で、集合沈線の下に横位から縦位の撚糸文が施されている。

58～66は沈線がある破片で、58～62は無文帯に沈線が、63～65は繩文地に沈線が引かれている。

67～75は口縁上位に斜め方向の撚糸文が施されている。

76～94は深鉢あるいは鉢の胴部破片である。縦位に走る撚糸文が施されている。

95～111は底部の破片であり、底辺の撚糸文は横方向に施されている。

\* 器壁が薄く、口縁部には細い沈線文による文様が描かれ、胴部には撚糸文が施されている。

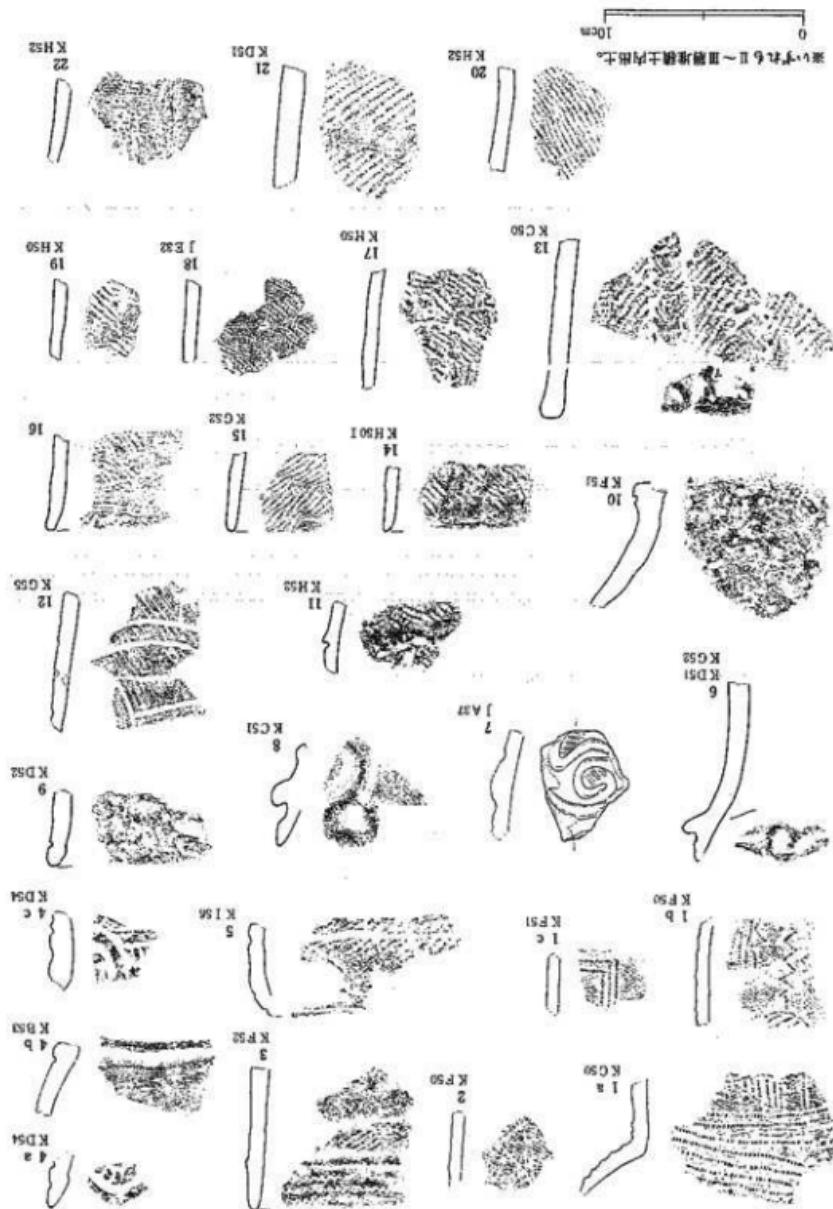
以上の特徴から38～48は天王山式に比定される。

[F：平安時代の土器群] - 第127図112～115-

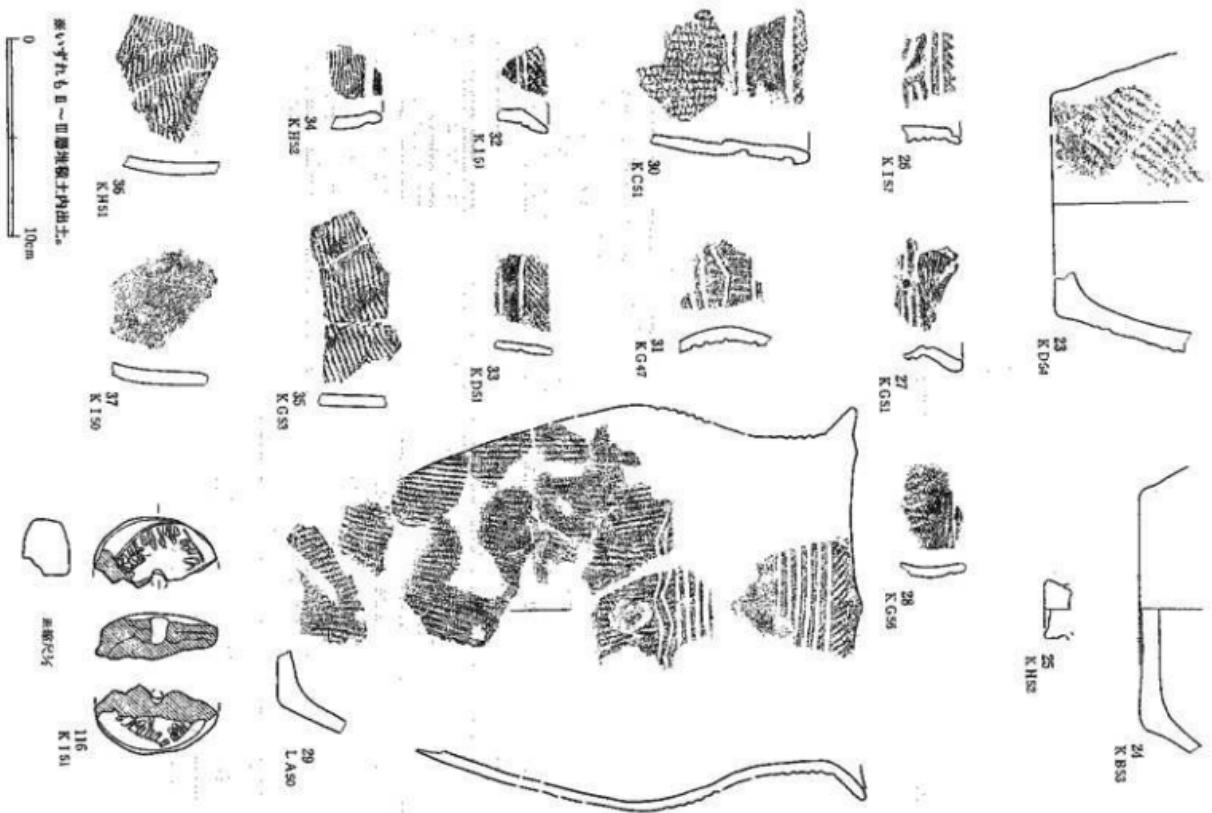
112～114はロクロ土師器の壺の胴部破片であり、115はロクロ土師器の壺の底部である。

\* 9世紀後半代の製作年代が推定される。

第123図 Q区の遺物外出土遺物一土器(1) -

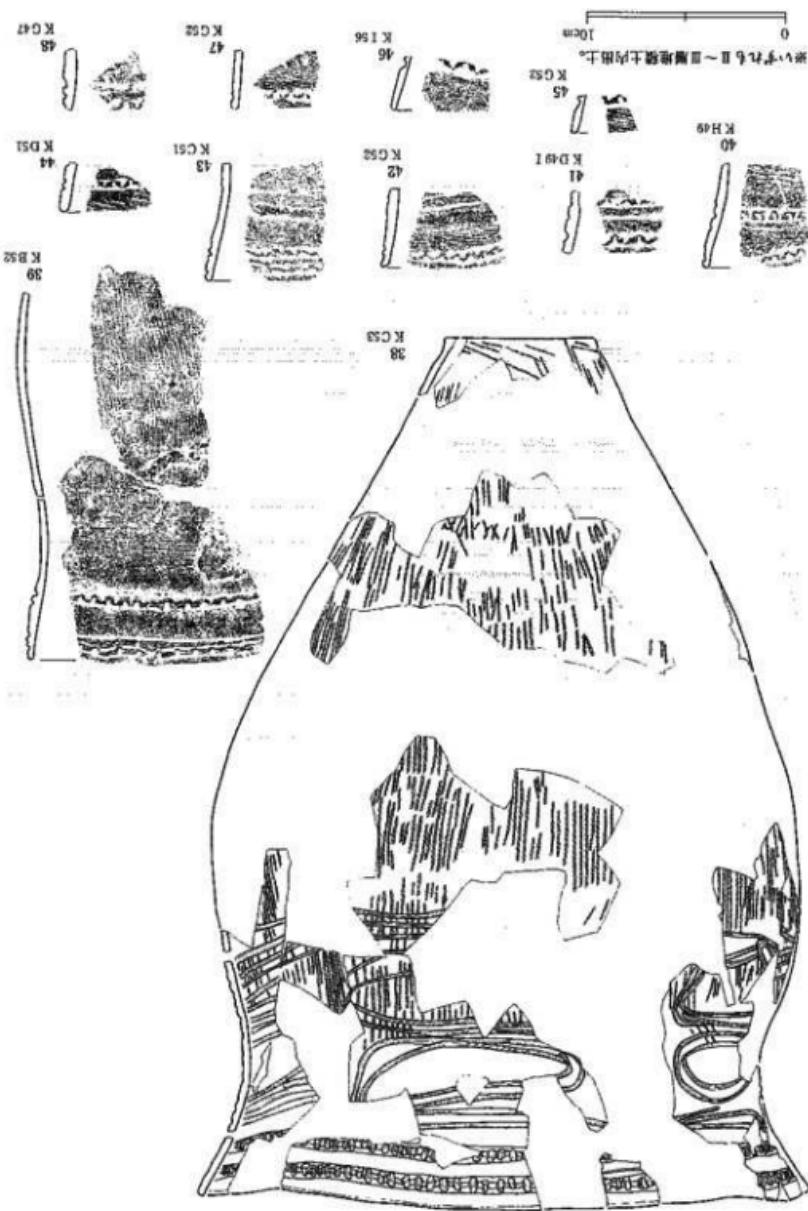


第5-2節 G区の遺構外出土遺物

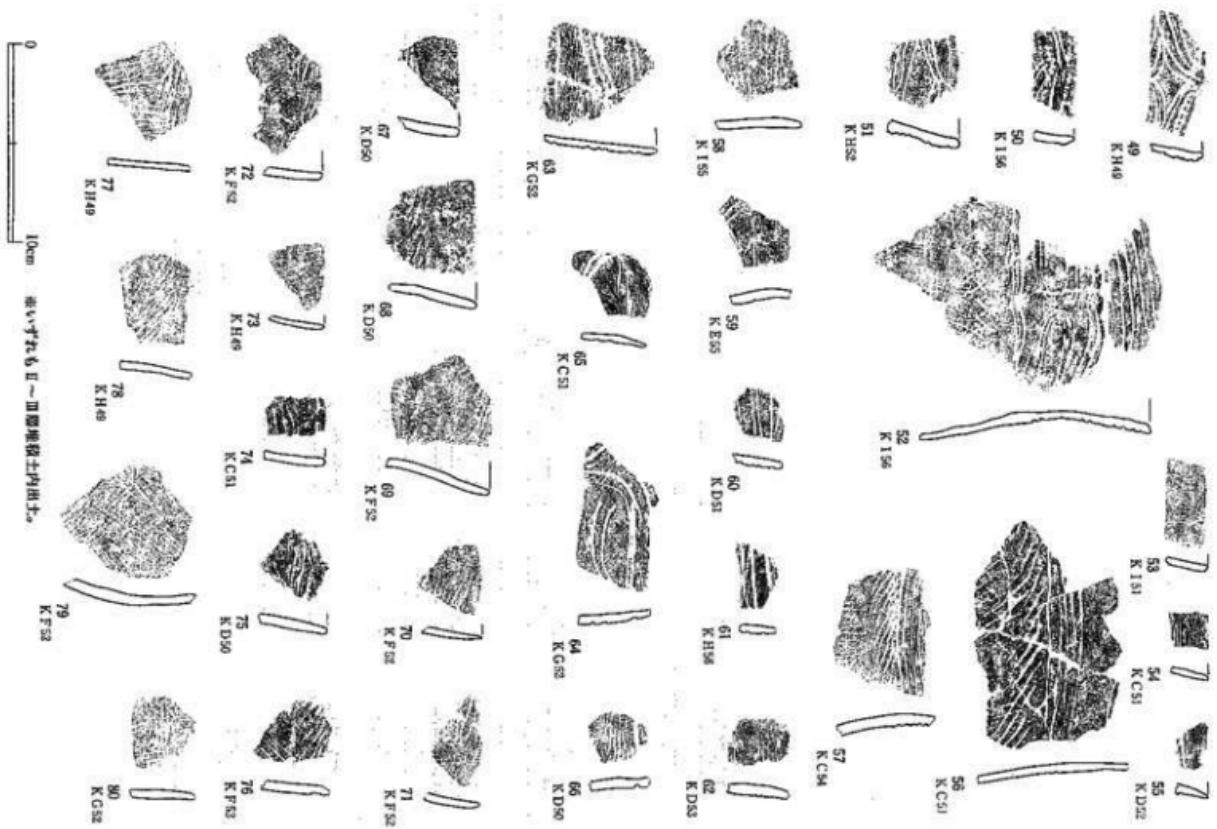


第124図 G区の遺構外出土遺物—土器(2)—

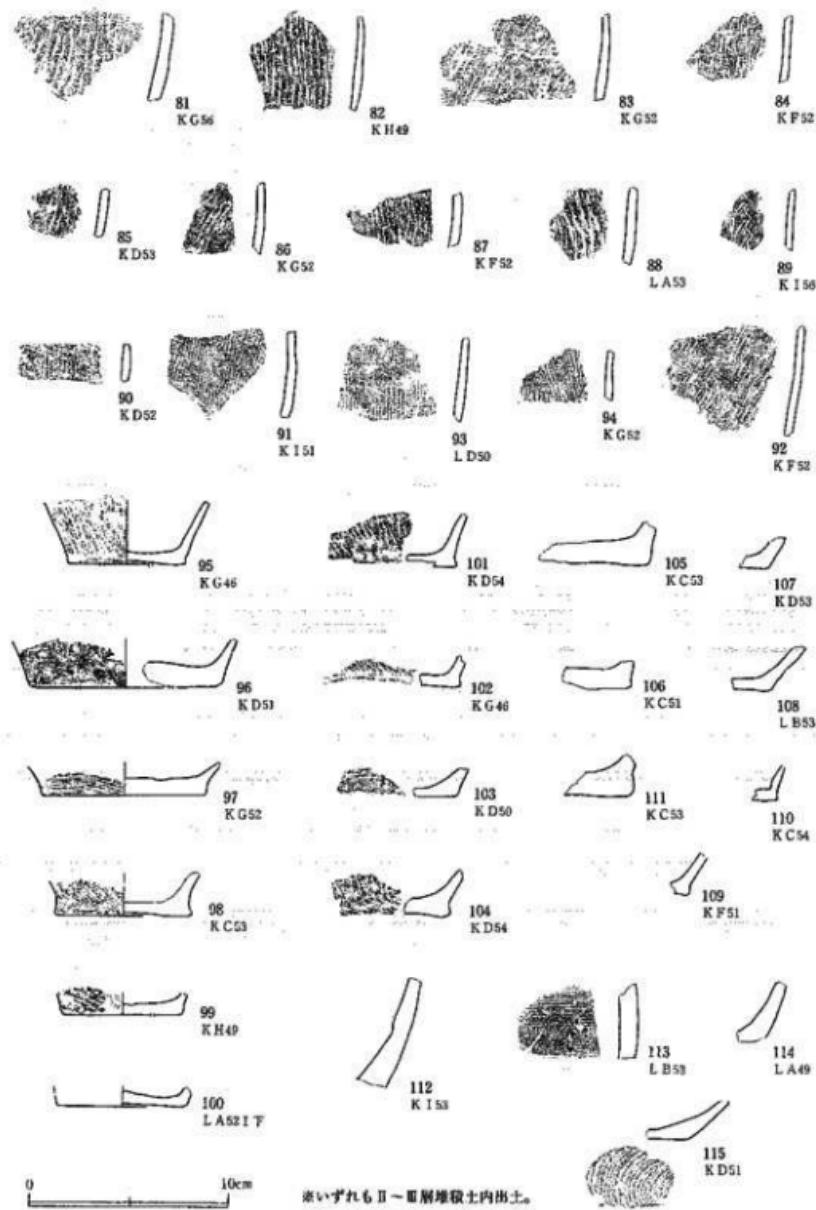
第125圖 G區⑦遺構外出土遺物—玉器(3) —



第5～2筋 G区の遺構外出土遺物



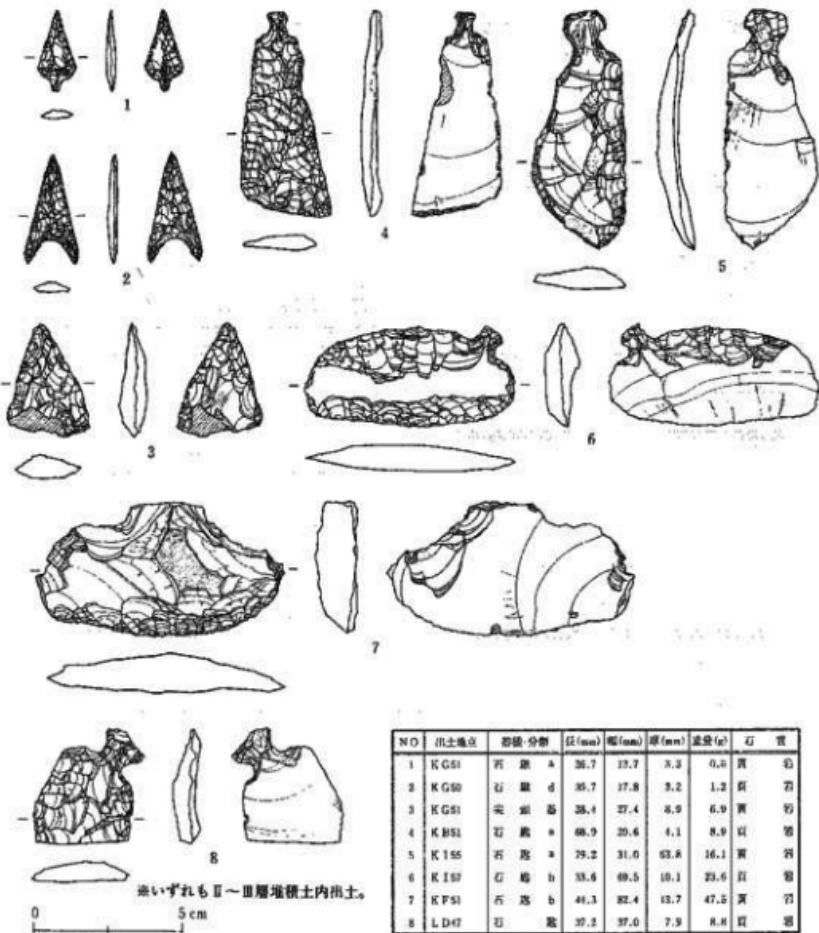
第26図 G区の遺構外出土遺物—土器(4)



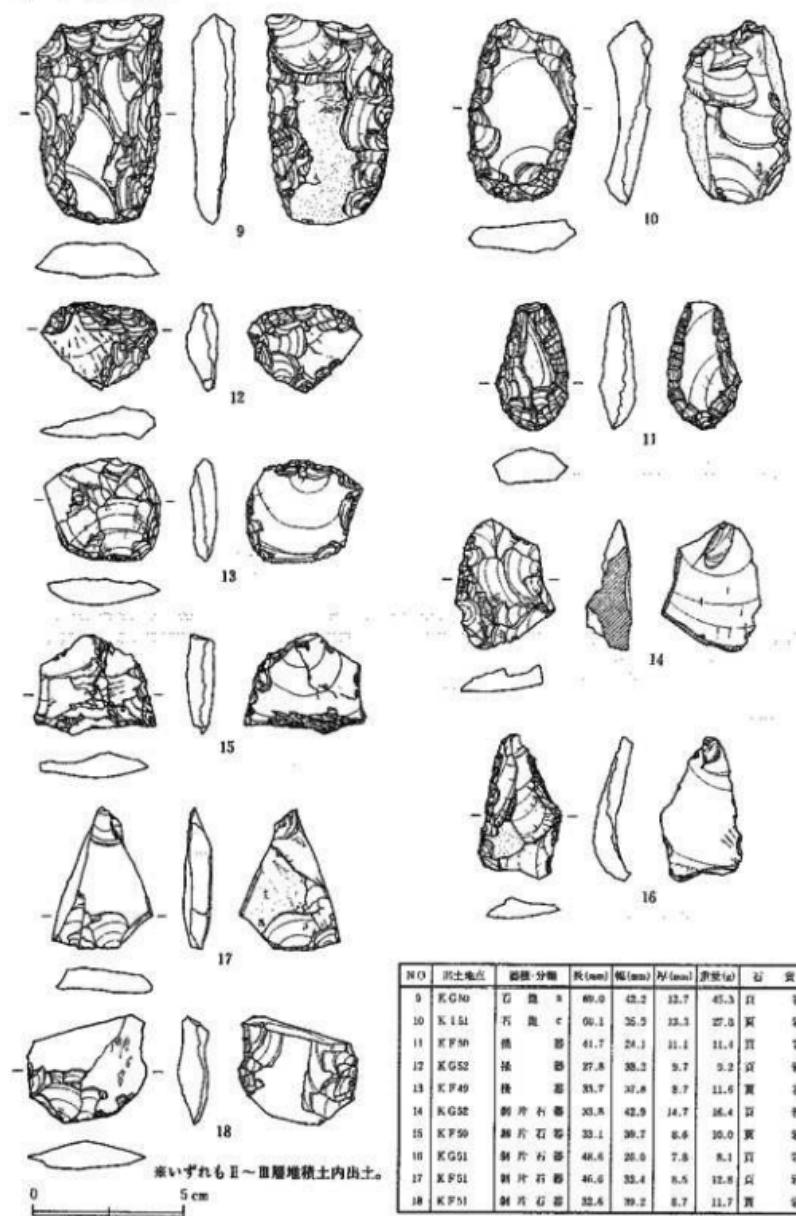
第127図 G区の遺構外出土遺物－土器（5）－

= 石器 = 形態分類はA区で行った分類に順じた。第128~130図に実測図を示し、説明は図の通し番号で行った。

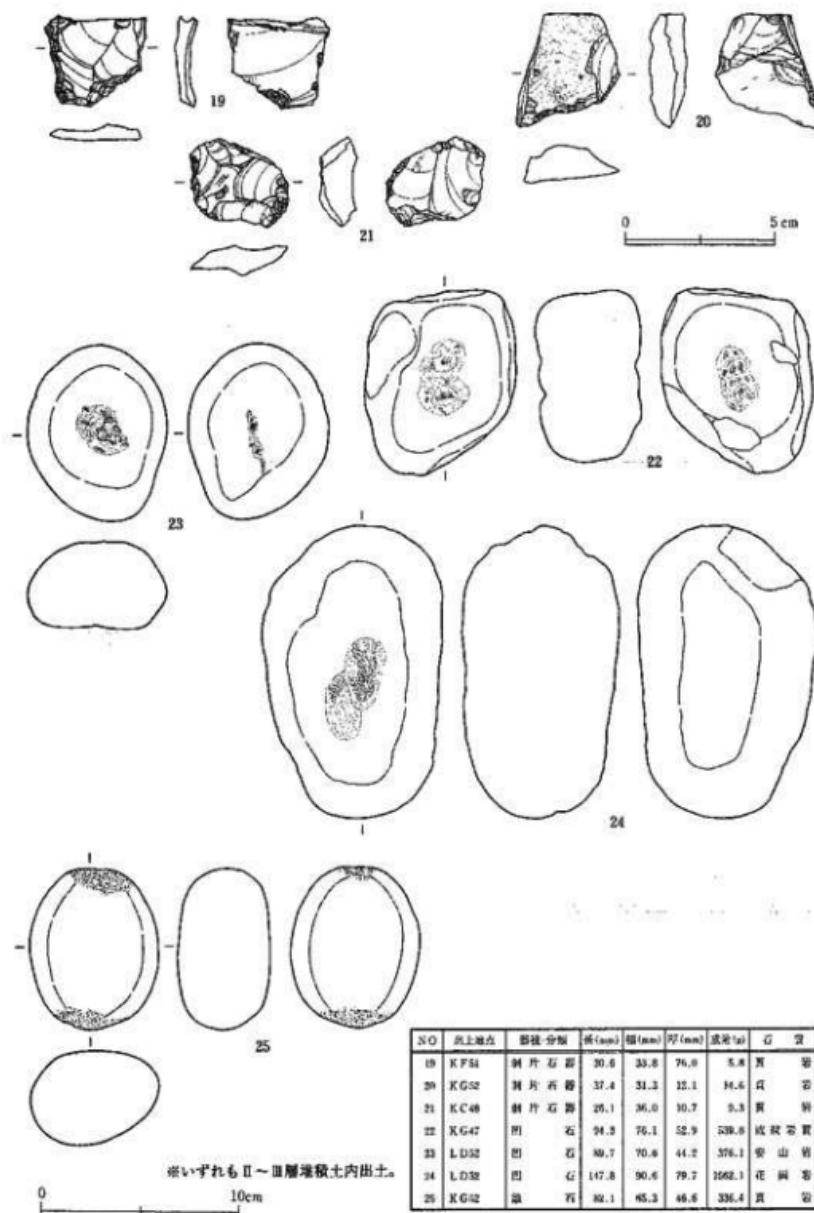
1・2は石錐で、1は有茎である。2は無茎で基部は凸を呈する。3は尖頭器である。4・5・8は縦型の石匙である。6・7は横型の石匙である。9・10・11は縁辺を丁寧に調整加工した箇状石器である。12~21は調整痕のある剝片石器である。22~24は凹石である。25は丸石の両端に敲打痕がある。



第128図 G区の遺構外出土遺物－石器（1）－



第129図 G区の遺構外出土遺物－石器（2）－



第130図 G区の遺構外出土遺物－石器（3）－

## 第6-1節 H・I区の検出遺構と出土遺物

南に向いた丘陵中腹で縄文時代の陥し穴遺構と古代の住居跡が検出された。

## 第32号陥し穴遺構 (SKT 32) - 第131図-

<位置・確認状況> I F 37グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

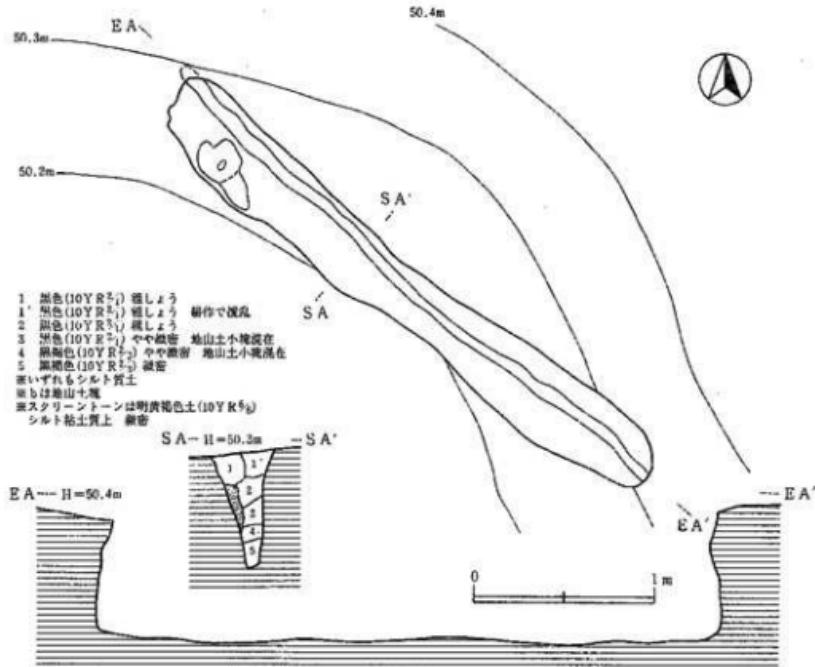
<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m36cm、短軸幅37cm、底部長軸幅3m45cm、短軸幅7cmである。確認面から最深部まで71cmである。

<長軸方向> N-50°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

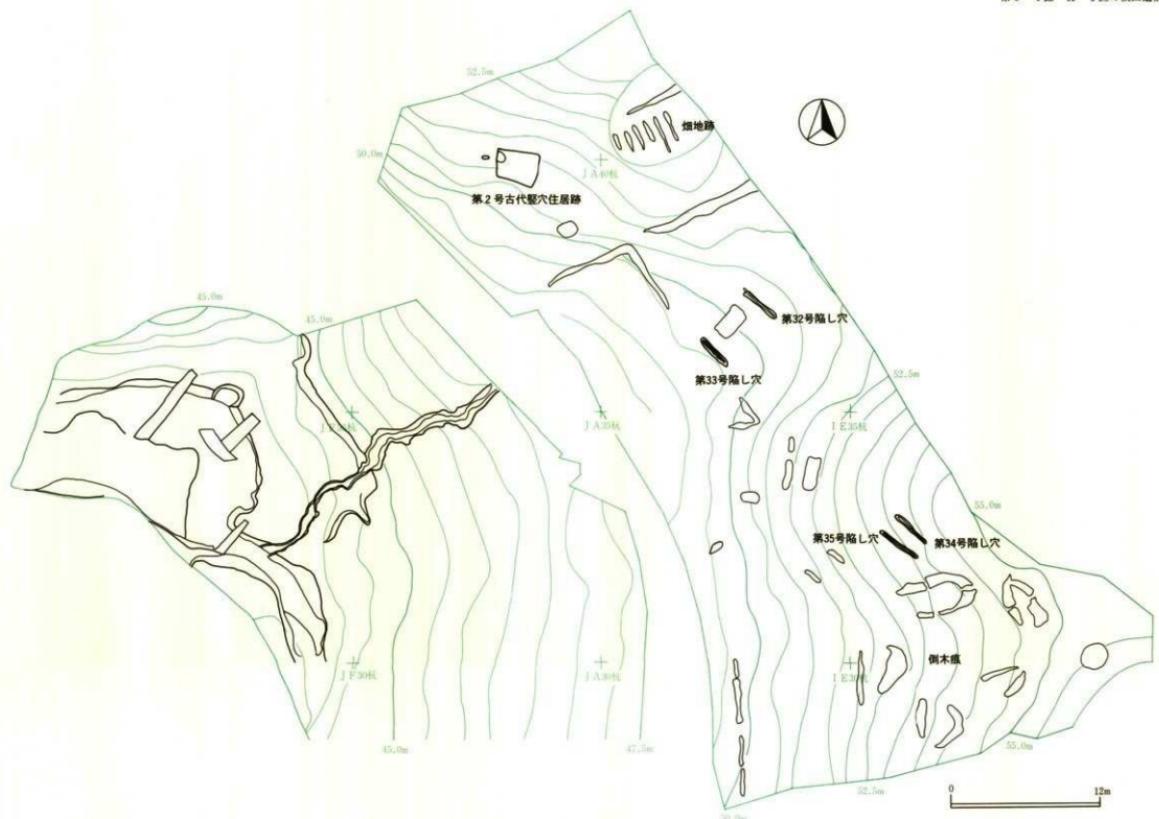
<埋土の状況>埋土は大きく6層に分けられる。下位には黒褐色土が充填しており、中位には黄褐色の地山土塊が混在した黒褐色土が、上位は黒褐色土が覆っていた。中位は壁の崩落土とみえ、自然に埋没していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部から底部にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。 <遺物・その他>出土遺物はない。



第131図 第32号陥し穴遺構



第132図 H・I区の遺構位置

## 第33号陥し穴遺構 (S K T 33) - 第133図 -

<位置・確認状況> I G36グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m 2cm、短軸幅52cm、底部長軸幅2m 94cm、短軸幅5cmである。確認面から最深部まで66cmである。

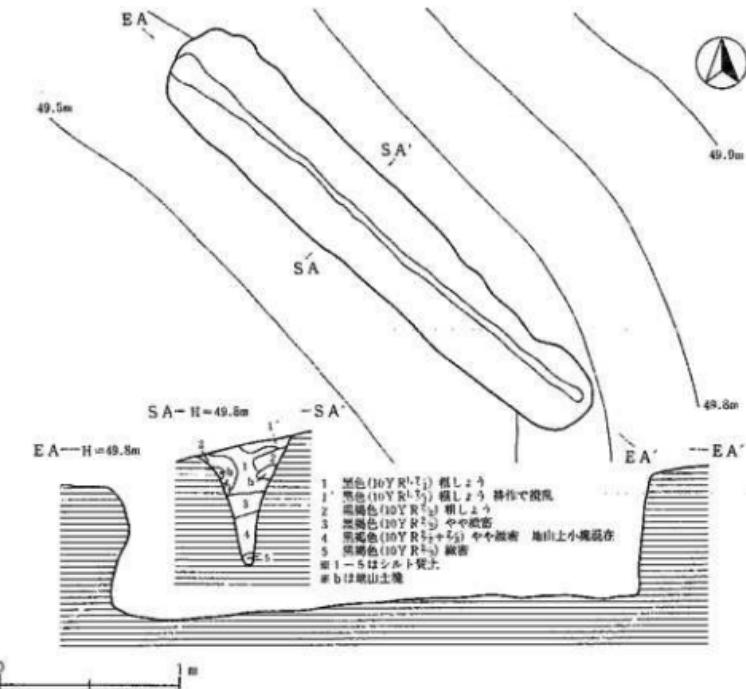
<長軸方向> N-50°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土は大きく5層に分けられる。底部には薄く黒褐色土が充填し、中位には黄褐色の地山土塊が混在した黒褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。中位は壁の崩落土とみえ、自然に埋没していったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦であるが、西側に傾斜している。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第133図 第33号陥し穴遺構

第34号陥し穴遺構（S K T 34）－第134図－

＜位置・確認状況＞ I C 32グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面ににぶい黄褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈しているが、西側の幅が広く東側が狭い。開口部長軸幅3m 25cm、短軸幅は最大で40cm・最小で15cm、底部長軸幅3m 32cm・短軸幅12～5cmである。確認面から最深部まで94cmである。

＜長軸方向＞ N-50°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ3層に分けられる。下位には灰褐色土が充填し、中位から上位にかけて黄褐色土が厚く覆っていた。地山粒子の混入状態から下位の土の堆積とともに壁が崩落していったものとみえる。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から斜めに張り出しており、台形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第35号陥し穴遺構（S K T 35）－第134図－

＜位置・確認状況＞ I D 32グリッド杭の北側で、地山の明黄褐色土層面ににぶい黄褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m 45cm・短軸幅25cm、底部長軸幅3m 88cm・短軸幅5cmである。確認面から最深部まで1m 2cmである。

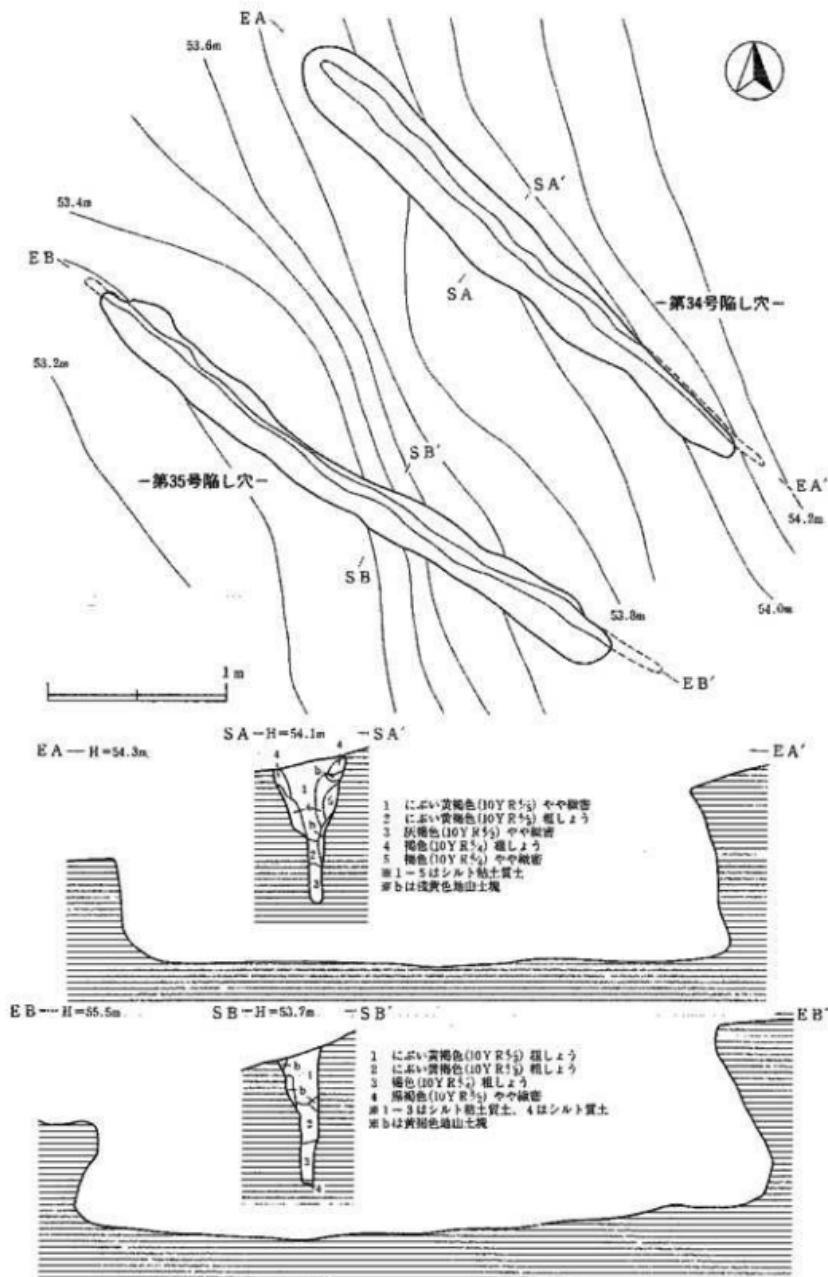
＜長軸方向＞ N-55°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおおよそ4層に分けられる。底部に薄く黒褐色土が充填しており、下位には地山土塊を含む褐色土が覆い、中位から上位には黄褐色土が覆っていた。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、壁の中位から底部まで外方向へふくらみ、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面はわずかに弓なりになっている。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第134図 第34号・第35号陥し穴遺構

## 第36号陥し穴遺構（S K T 36）—第135図—

＜位置・確認状況＞IA25グリッド中央で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m95cm・短軸幅42cm、底部長軸幅2m85cm・短軸幅4~8cmである。確認面から最深部まで85cmである。

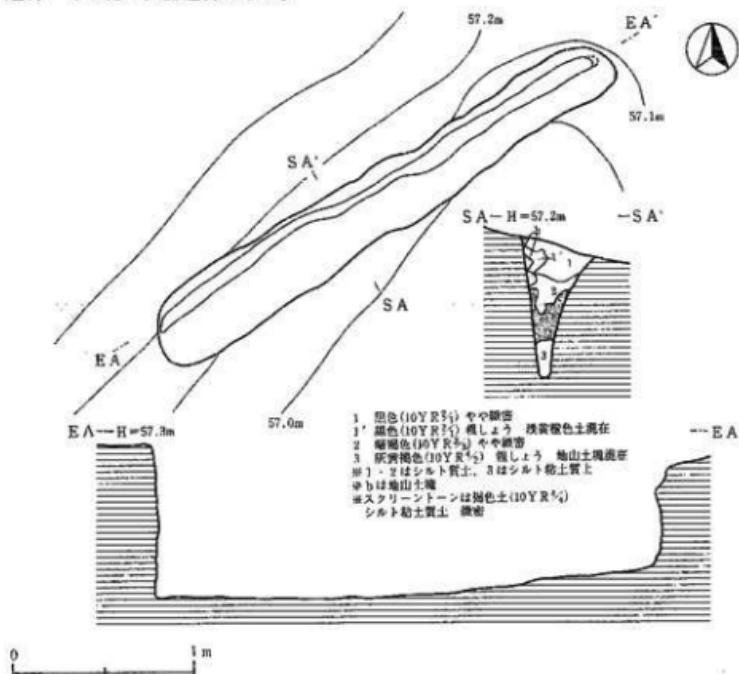
＜長軸方向＞N-60°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土はおよそ4層に分けられる。下位には灰黄褐色土が充填し、中位には明褐色の地山土塊がつまた褐色土が、上位には暗褐色土と黒褐色土が覆っていた。中位から下は地山土塊の混在量が多く、掘り上げた地山土の流れ込みとみられ、短い時間に埋没した可能性がある。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底面にかけて、ほぼ垂直に下がる箱形を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第135図 第36号陥し穴遺構

## 第2号古代住居跡（S106）－第136図－

＜位置・確認状況＞丘陵の中腹部で、窪地に堅い暗褐色土層面があり、西北の低位面で土器が出土したため、斜面上位から下の暗褐色土層面にかかる面を精査して、黒褐色土の方形の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞隅が角張り長方形を呈している。長辺の長さは3.5mである。

＜埋土の状況＞壁際には床面まで黄褐色土が堆積し、上位には半円状に黒褐色土が覆っていた。

＜壁・床面の状況＞床面は平坦であり、カマド周辺が堅くなっていた。北壁と東壁の立ち上がりは垂直で、北壁で40cm・東壁で35cmの高さがあった。

＜カマド＞西壁の北よりにあり、本体は褐色土で幅80cm、高さ25cmの半円状である。壁近くに受け口がある。煙道は壁の下を貫通し、60cm離れて煙出し口がある。

＜年代＞住居跡内出土土器から9世紀後半の年代が推定される。

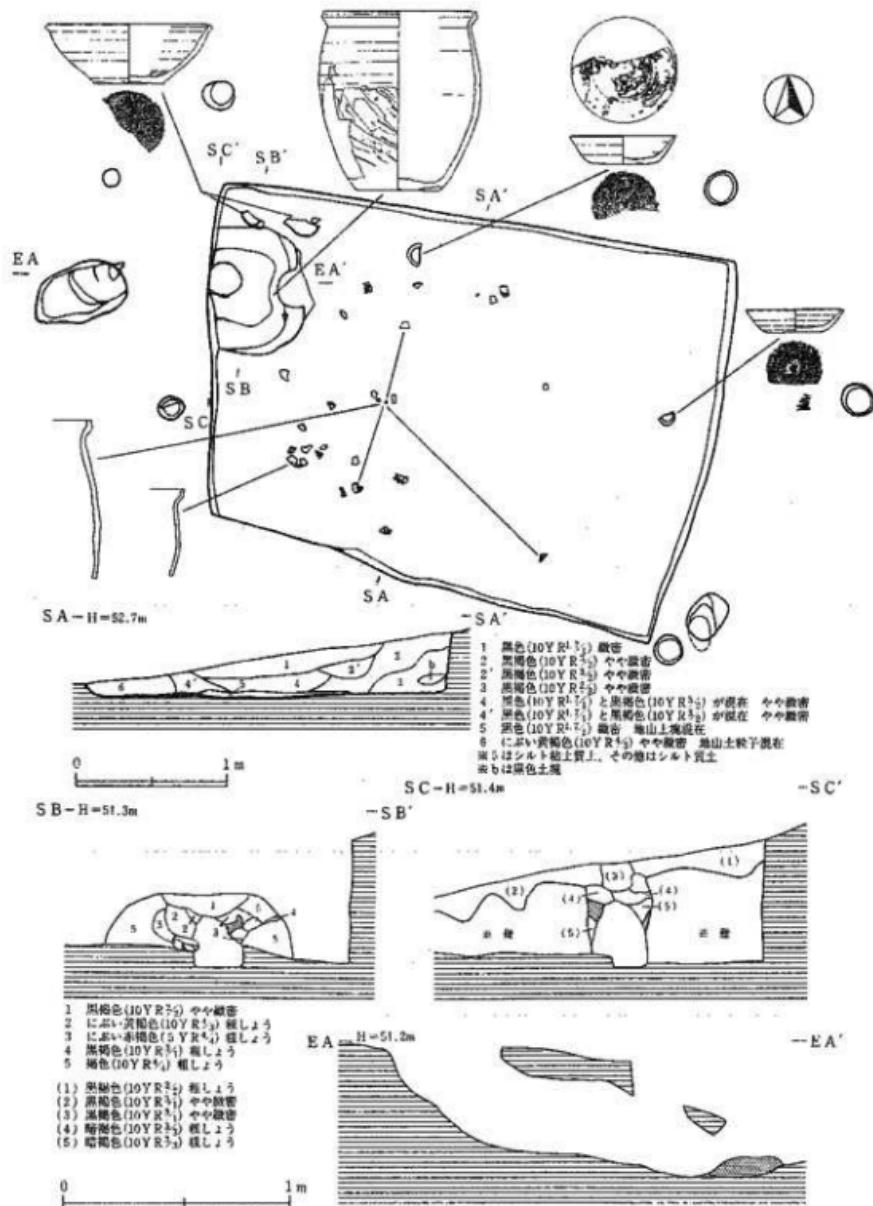
【第2号古代住居跡内出土遺物】（第137・138図に図示、説明は挿図の通し番号で行う。）

1は底部が平底を呈する壺形土器である。ふくらみをもって立ち上がり、口縁部が短く外反し、口唇が直立する。胴部下半は斜め方向の箇削りで調整され、上半はロクロナデ調整されている。

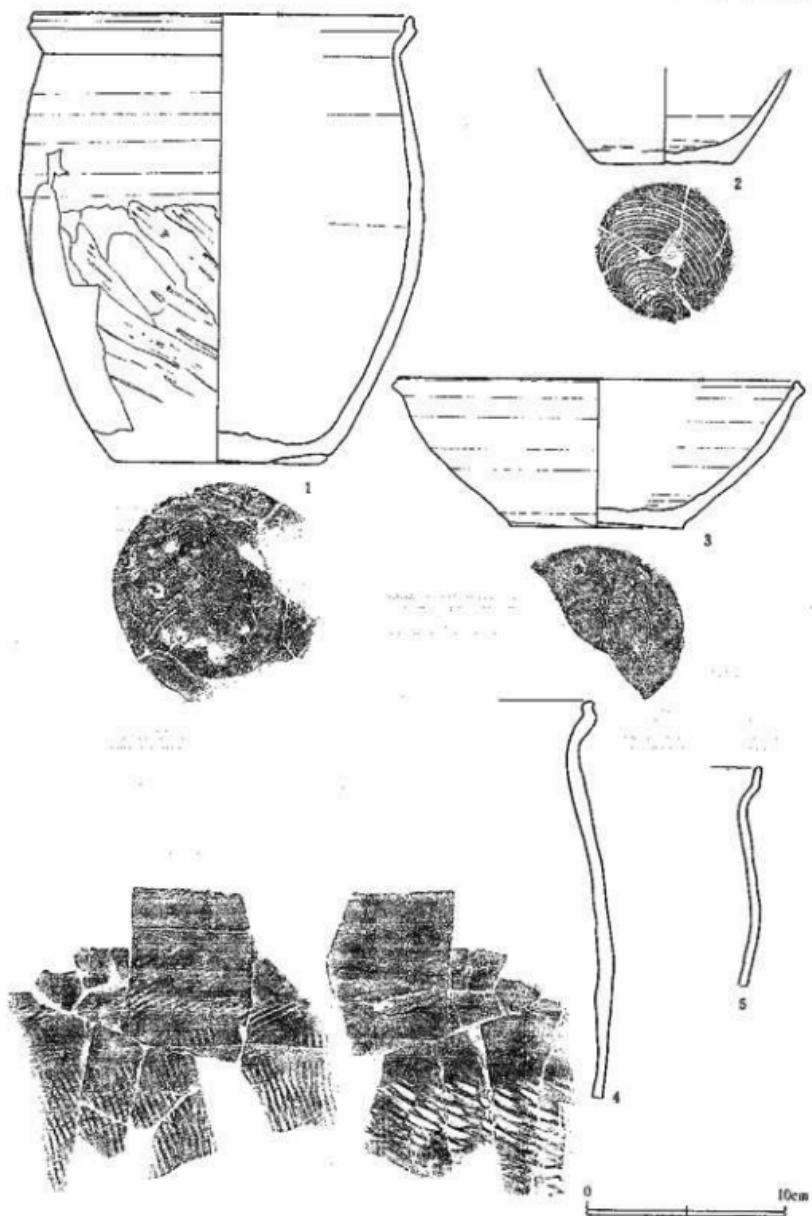
4は壺の口縁部破片である。口縁が短く外反し、口唇が直立する。胴部中位の外面には板目のみえる叩き目が、内面は当て板痕が残っている。2は小形の壺形の底部であり、底部の切り離しは回転糸切りである。3は底部が平底を呈する鉢である。底部から外傾し口縁部にいたり、口唇が直立している。ロクロナデ調整され、底部の切り離しは回転糸切りである。6～10は須恵器坏であり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。いずれも底辺に丸みをもっている。8の底部内面には墨痕が付着している。11はロクロ土師器坏であり、底部が回転糸切りで切り離されている。

## 湿地について－第139図～第142図参照－

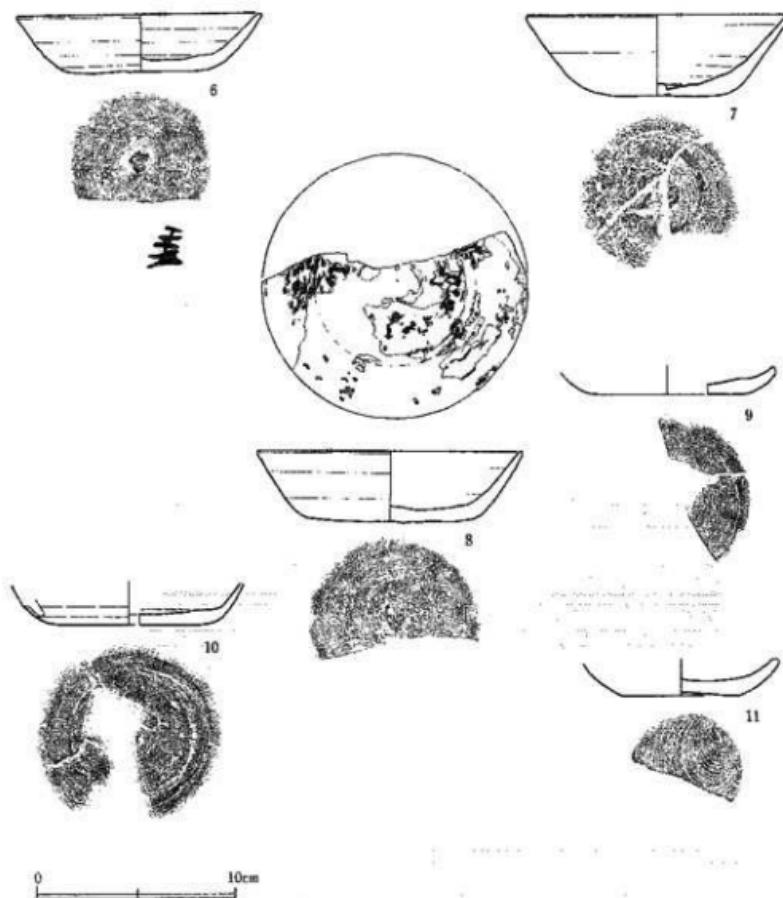
I区の南に向いた沢は西から東に伸びており、中位は昭和30年頃まで水田にされていた。その後は向いの山を削り出し、盛土して畑地に変えていったとのことである。盛土を排除し、重機で掘り下げたところ下位に泥炭層があることが分かり、沢の上位および周辺から弥生土器片が出土していることから水田遺構がないか、土層観察を進めながら掘り下げていった。縄文土器・石器・弥生土器・木製品等が出土し、杭列も検出された。土層としてはグライ化している5層までが水田土壤と認められたが、昭和30年代まで耕作されていた面との区別がつかなかつた。最下層で樹皮のついた材が密集して確認された。J区において山際に沿って地割れがあることがわかり、土砂の崩壊に伴い沢がせき止められ、そのときに樹木も一緒に埋没して行ったものと推定した。埋没の時期は縄文時代中期以前と推定され、湿地で古代の木製品としての箸が見つかっていることから、古代の住居跡のあった頃は湿地として利用されていたとみられる。したがって杭列については古代以前のものとする積極的な証拠もないが、可能性のあるものとして図示した。



第136図 第2号古代住居跡

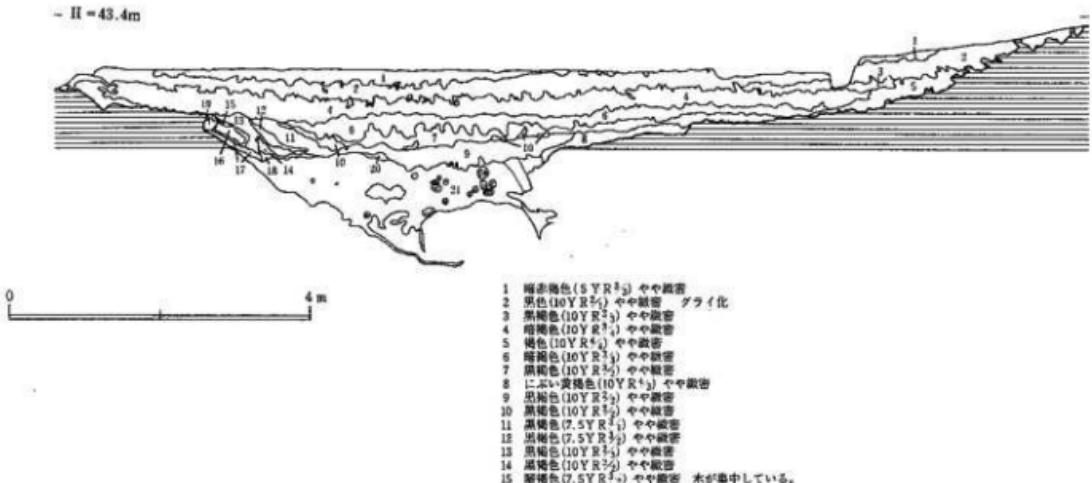


第137図 第2号古代住居跡内出土遺物（1）

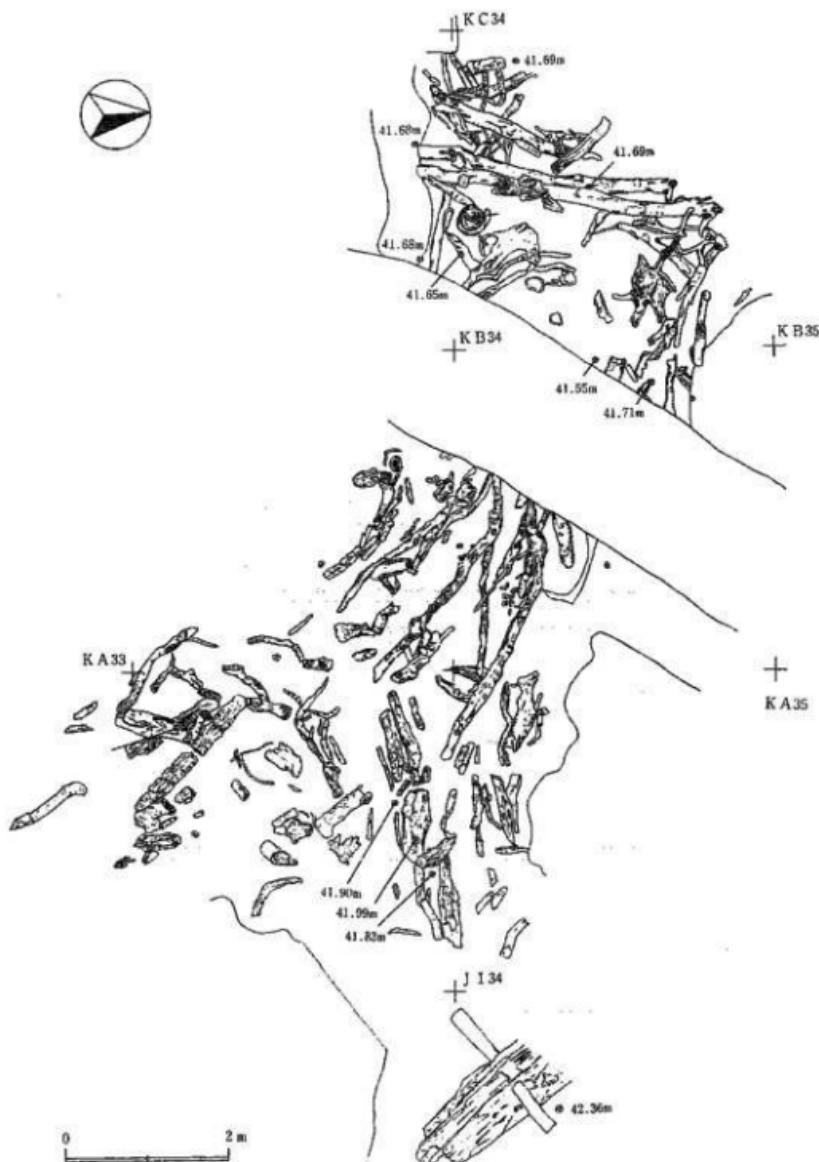


第138図 第2号古代住居跡内出土遺物（2）

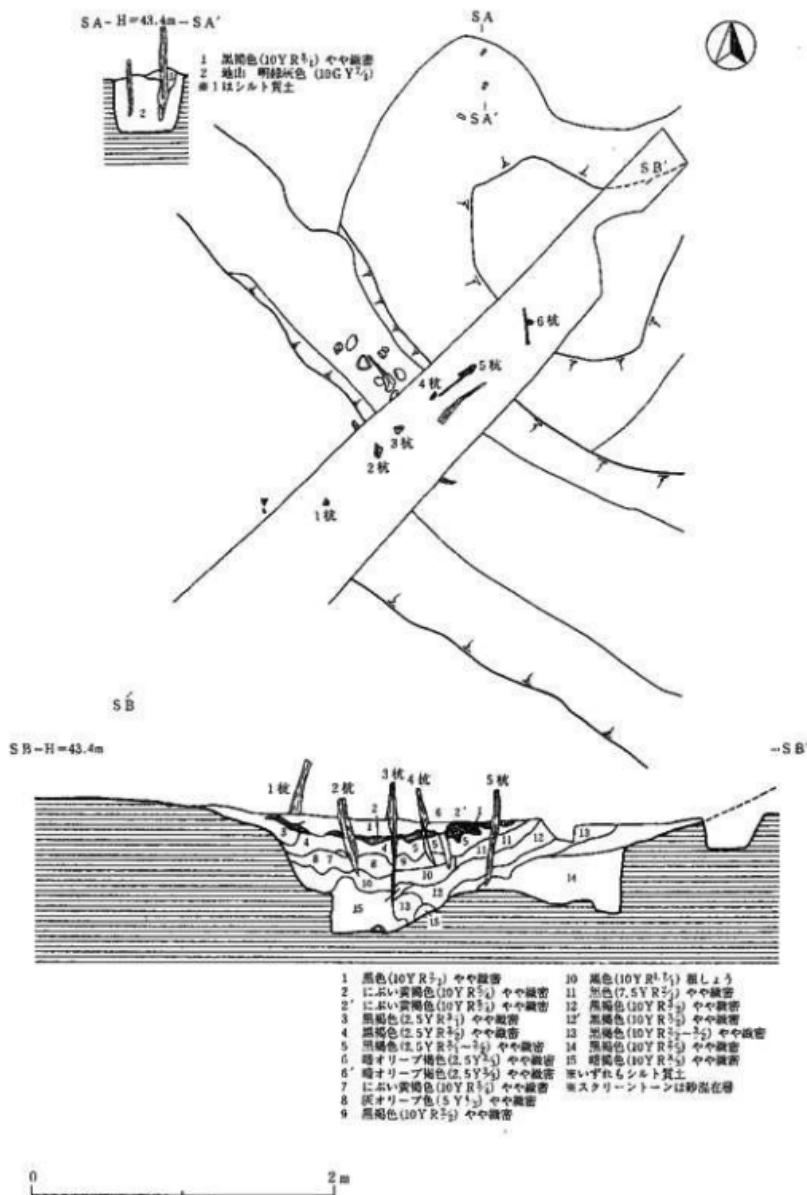
第6-1節 H・I区の検出遺構と出土遺物



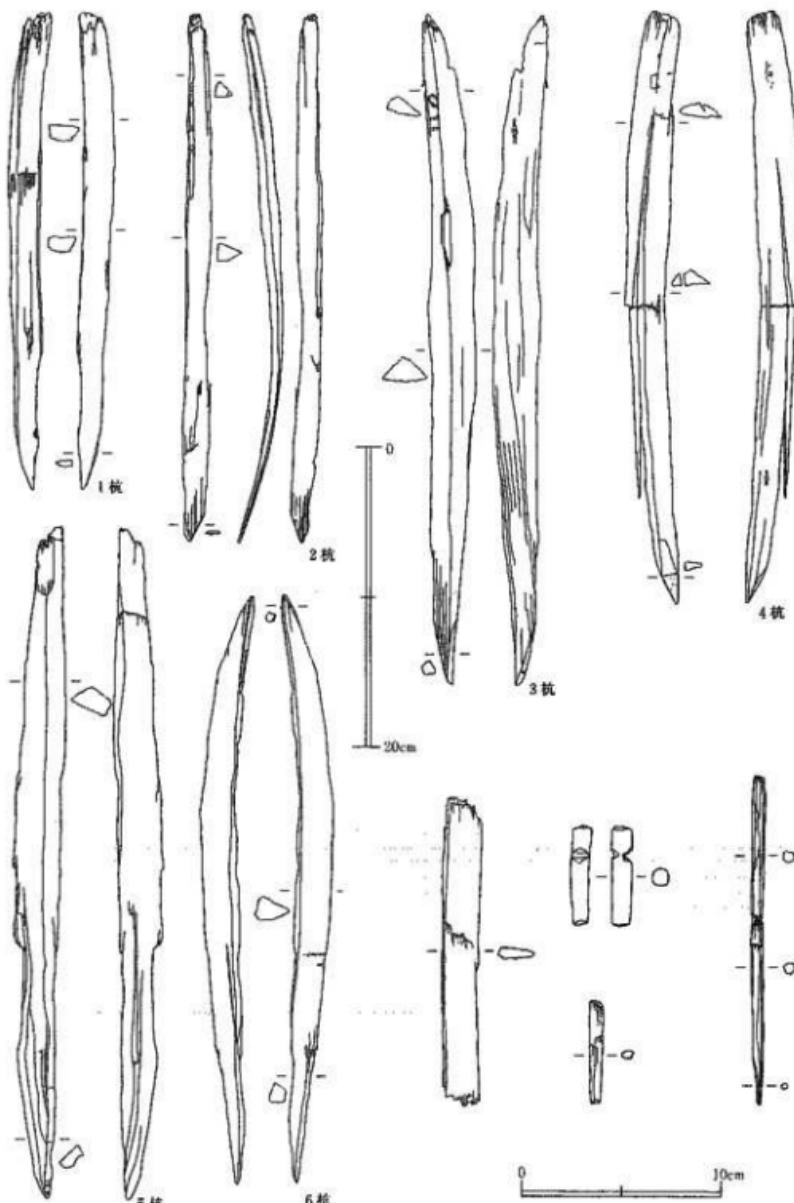
第139図 湿地の土層



第140図 湿地の木材検出状況



第141図 湿地の杭列検出状況



第142図 湿地杭・木製品

## 第6-2節 H・I区の遺構出土遺物

湿地およびその周辺から出土した遺物を土器・石器に分類し、説明を加える。

=土器= 土器については縄文時代で分類し、器形・部位、文様の特徴を説明し、最後に型式上の分類を付記した。第143~145図に実測図をまとめた。説明は挿図に付した通し番号を行った。

## 〔A：縄文時代前期後葉から中期前葉の土器群〕—第143図1~4—

- 1は口縁部の破片で、縄文原体の押圧が口唇に直交し、外面では口唇に平行についている。
- 2は深鉢の胴部上位の破片であり、粘土の瘤の脇に押圧縄文がみられる。
- 3は厚手の胴部破片であり、斜縄文が施され、胎土に纖維が混在している。
- 4は厚手の胴部破片であり、単軸の撚糸文が施されている。

## 〔B：縄文時代後期前葉の土器群〕—第143図5~14、第143図18~24—

- 5・6は口縁の突起であり、中央に円形の孔が空いている。7は波状口縁の突起で、縦におりる隆線がついている。
- 8~10は深鉢あるいは鉢の胴部破片であり、無文の地に沈線による平行線文がみられる。11~14は胴部破片で、11~13は外面に縄文が、14は網目状撚糸文が施されている。18~24は縄文土器の底部である。18の底面には網代状痕が残る。

## 〔C：縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の土器群〕—第143図15~17、第144図25~27—

- 15は口唇が小波状を呈する無文の口縁部破片である。16は口唇が小波状を呈している。口縁上位が無文帯で下に縄文が施されている。
- 17はわずかに内溝する口縁部の破片である。縄文が施されている。
- 25は口縁に平行する沈線がめぐる。26は胴部が球形にふくらむ壺である。15~17・25・26は胎土、摩滅の状態がている。
- 27は口縁に突起をもつ深鉢の破片であり、口縁部に平行な太い沈線が巡っている。内面にも沈線が引かれている。

## 〔D：弥生時代前期の土器群〕—第144図28~32—

- 28は口縁の小破片で、外面は縦に内面は横に刷毛目状痕が施されている。
- 29は胴部上半に最大径をもつ壺である。頸部がくびれ、口縁部が短く外反している。口唇は縄文がつき、無文帯をへて、頸部に3条の沈線が巡り、その下には木目列点文が付されている。胴部には縄文が施され、所々に横位の短い刷毛目状痕が付されている。
- 30は胴部上半であり、頸部に沈線が引かれている。
- 31は底部であり、縄文が施され、所々に縦位の短い刷毛目状痕が付されている。

〔E：弥生時代後期の土器群〕－第145図33～72－

器壁が薄く、器面に凹凸がある。器形は小さい破片で判然としない。

33～35は交瓦刺突文が付されている。

36は頸部に刺突列が付され、胴部には沈線による文様が展開される。

37～46は口縁あるいは頸部に重菱形文あるいは長楕円形文とみられる沈線文が引かれている。

47～62は頸部あるいは胴部の破片である。48は結節にみえる。50は縦と横の撫糸が交叉している。51～54は条間隔があいた撫糸文である。帯状の撫糸文が縦に走る。58～62は条間隔が詰まった撫糸文が施されている。63～69は、底部である。

70～72は胎土がほろほろの土器で、微隆線と三角形の刺突の組み合わせで文様を構成している。

\*33～36は天王山式土器に比定される。70～72は後北C2式土器に比定される。

〔F：平安時代の土器群〕－第145図73～76－

73～76はロクロ土師器と須恵器である。ロクロ土師器の壺と甕、須恵器壺破片が出土し、土師器の底部の切り離しは回転糸切りで、須恵器はヘラ切りで切り離されている。

=石 器= 形態分類はA区で行った分類に準拠しており、形態上・調整加工の特徴を明記した。第146図～152図に実測図を示し、説明は挿図に付した通し番号で行った。

1～10は石鎌である。基部の特徴で分類すると、1・2が有茎、3～10は無茎であり、3～5の基部は平、6～10の基部は凹を呈する。10は基部の上にくびれが入るアメリカ型石鎌である。11～22は石匙である。22だけが横型で他の12点は縦型である。11・12は細みで先端が尖がる。11はつまみ部に膨らみをもっている。15・16・19は短冊形を呈する。

23～26は石箆である。側縁の両面から刺離調整しており、23は短冊形、24は撥形、25・26は縁辺が膨らんで靴ヘラ状を呈する。

27・28は剥片石器で、縦長の剥片の縁辺を調整加工しており、形が整っている。

33～45は凹石であり、偏平な蝶の対応する両面に凹みをもつものが大部分である。

47は先端に敲打痕がある。

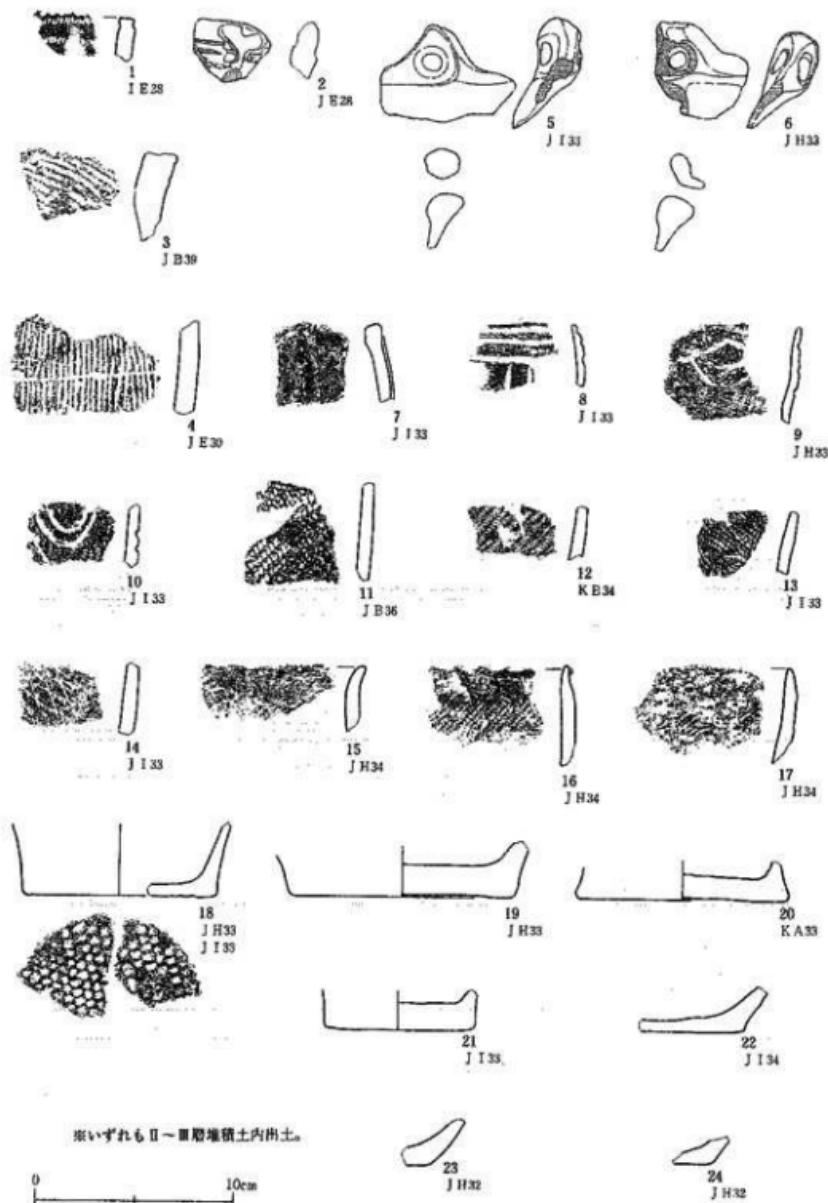
48～54は石鍤である。小型のものがI・J16グリッド周辺でまとめて出土した。

55～59は磨面をもつ丸石および磨面をもつ偏平な石である。

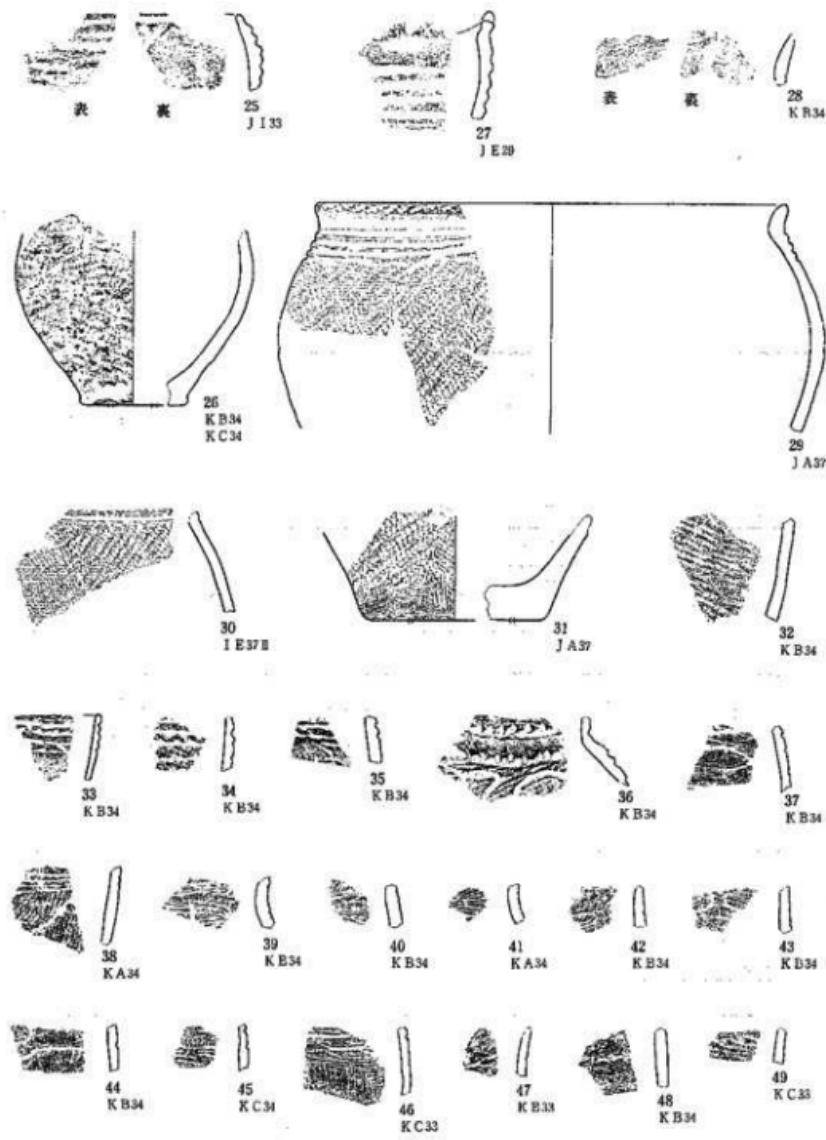
60～62は石皿であり、62は両面にくぼんだ磨面がある。

63～68は砥石である。長方体に近い形で、偏平な面と側面が研磨され角張っている。

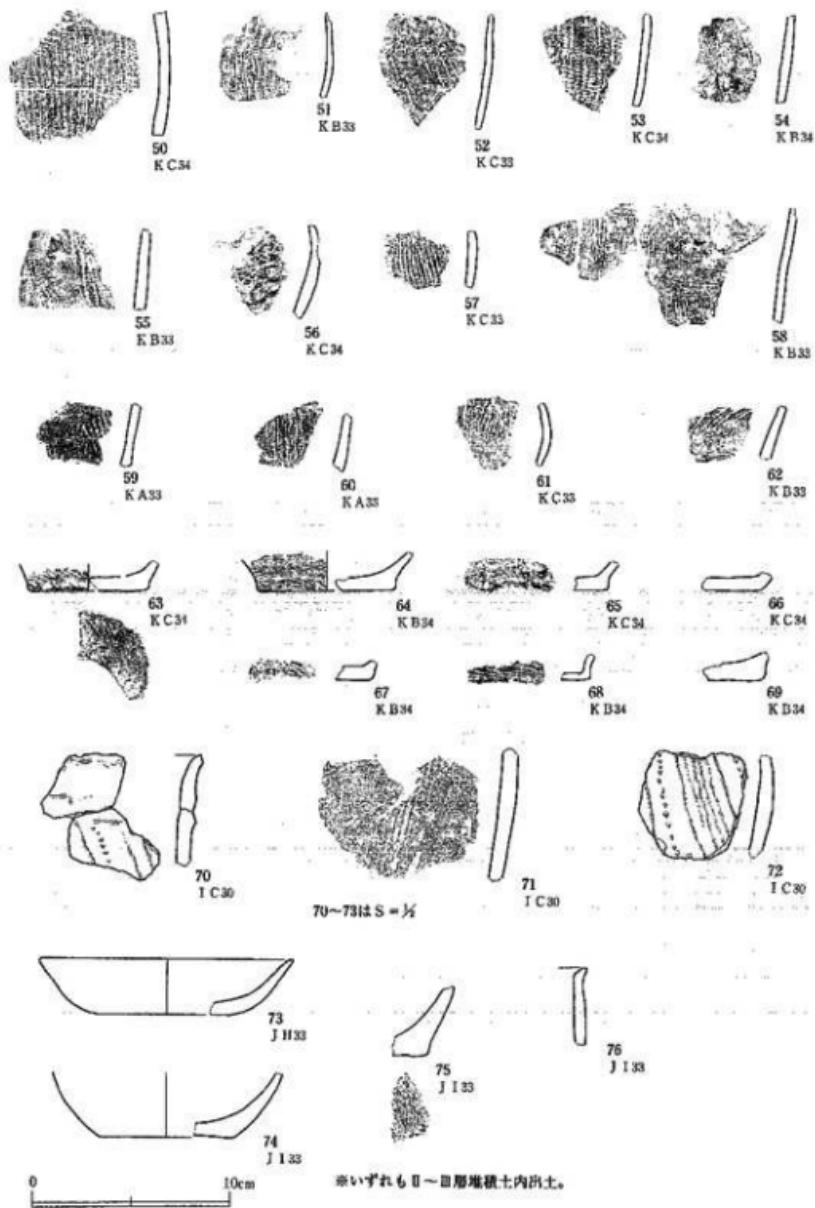
\*石鎌など大部分が縄文時代に属するものであるが、アメリカ型石鎌は弥生時代に属すると考えられる。砥石は古代以降のものである。



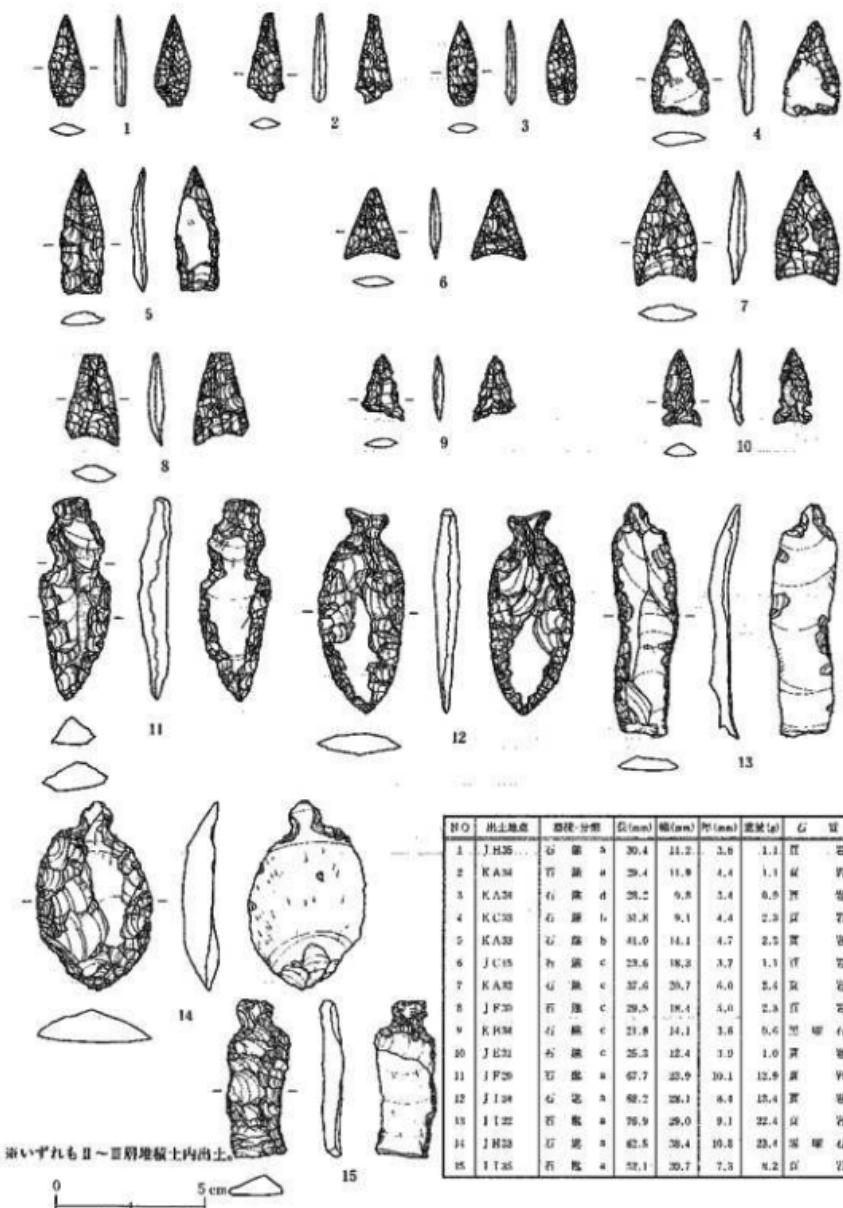
第143図 H・I区の遺構外出土遺物（1）—



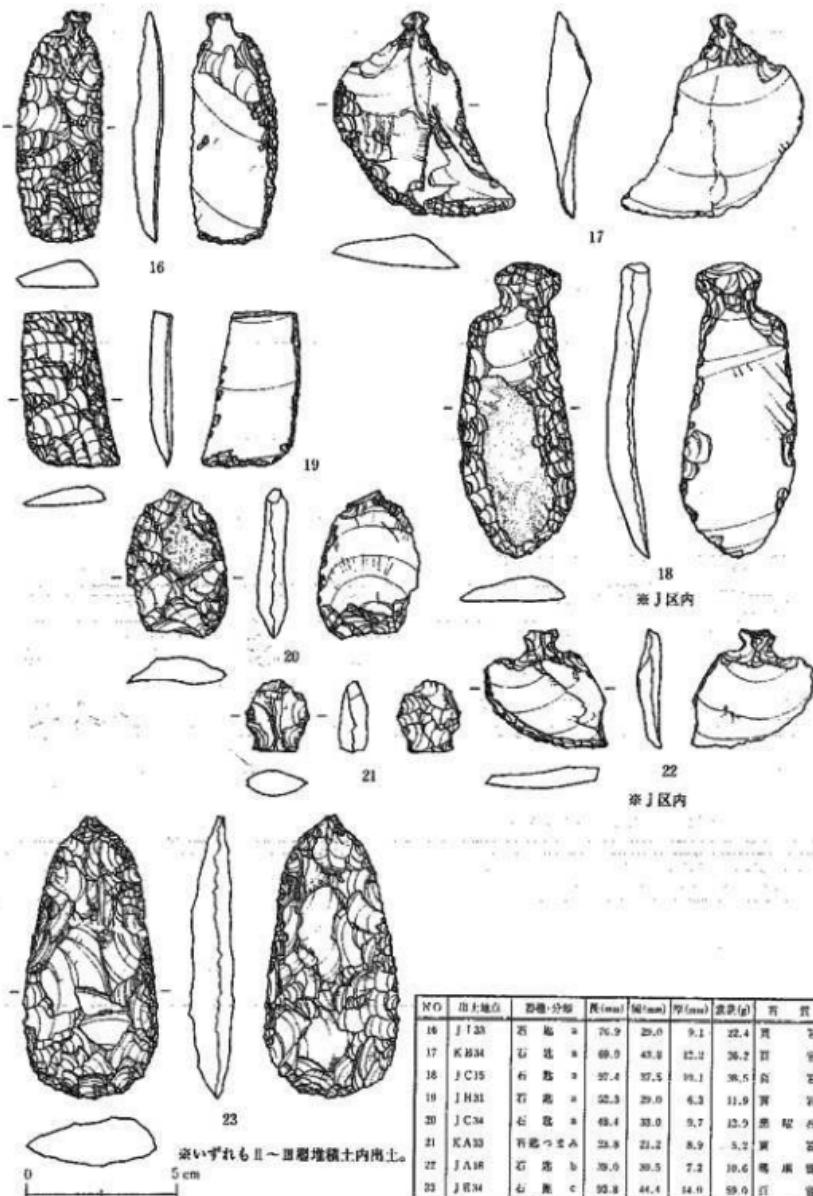
第144図 H・I区の遺構外出土遺物 - 土器 (2) -



第145図 H・I区の遺構外出土遺物（3）－土器（3）－

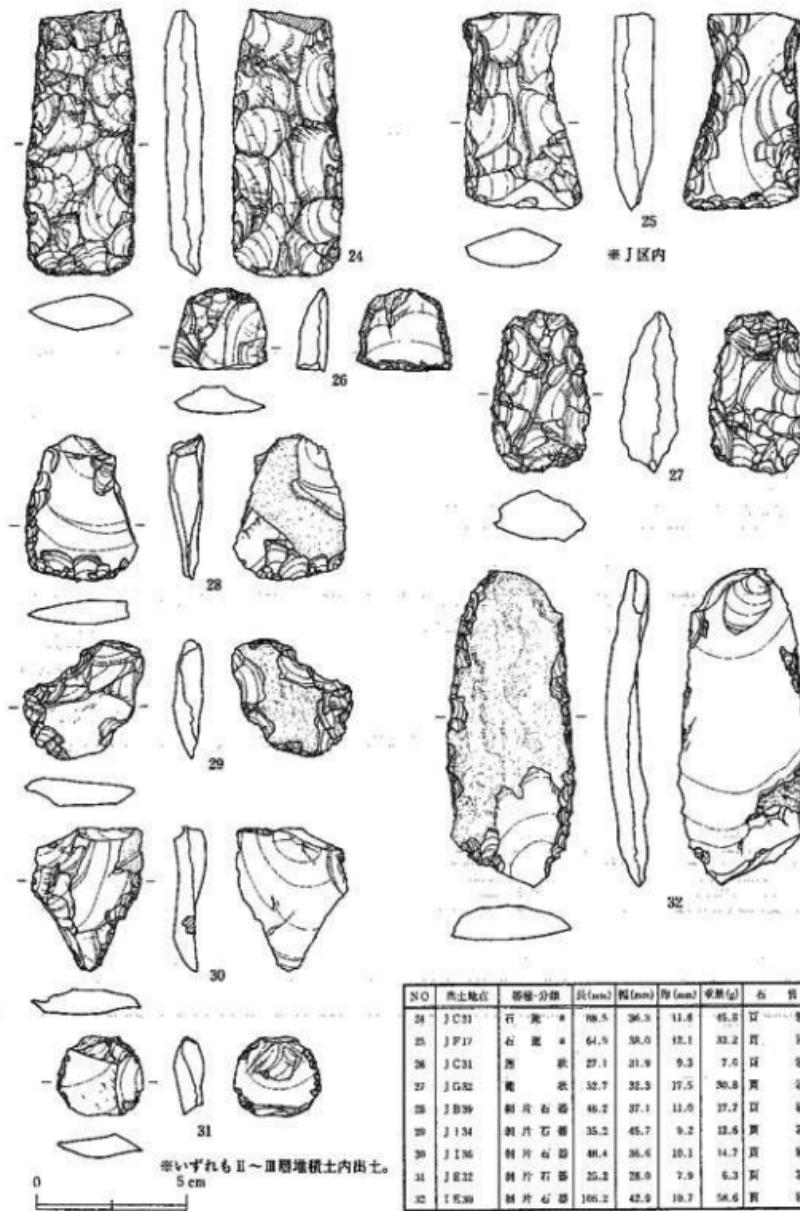


第146図 H・I区の遺構外出土遺物－石器（1）－

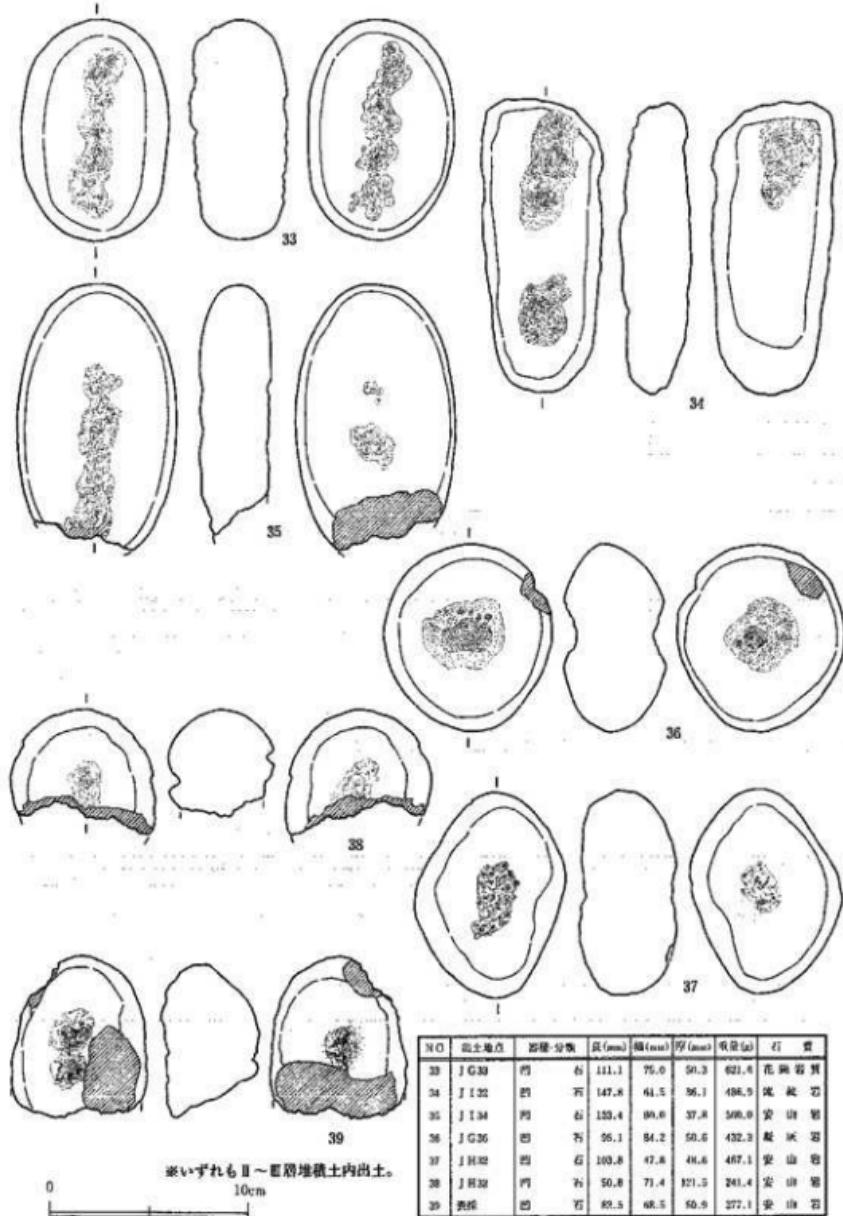


№	出土地点	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	質
16	J T 38	石 砂	26.9	29.0	9.1	22.4	質 砂
17	K B 34	石 砂	49.9	43.8	12.2	36.2	質 砂
18	J C 15	石 砂	37.4	37.5	10.1	38.5	質 砂
19	J H 31	石 砂	52.3	29.0	6.3	11.9	質 砂
20	J C 34	石 砂	42.4	33.0	9.7	15.9	質 砂 石
21	K A 33	有施つまみ	28.8	21.2	8.9	5.2	質 砂
22	J A 18	石 砂	39.0	30.5	7.2	10.6	質 砂 質
23	J E 34	石 砂	52.8	44.1	14.0	59.0	質

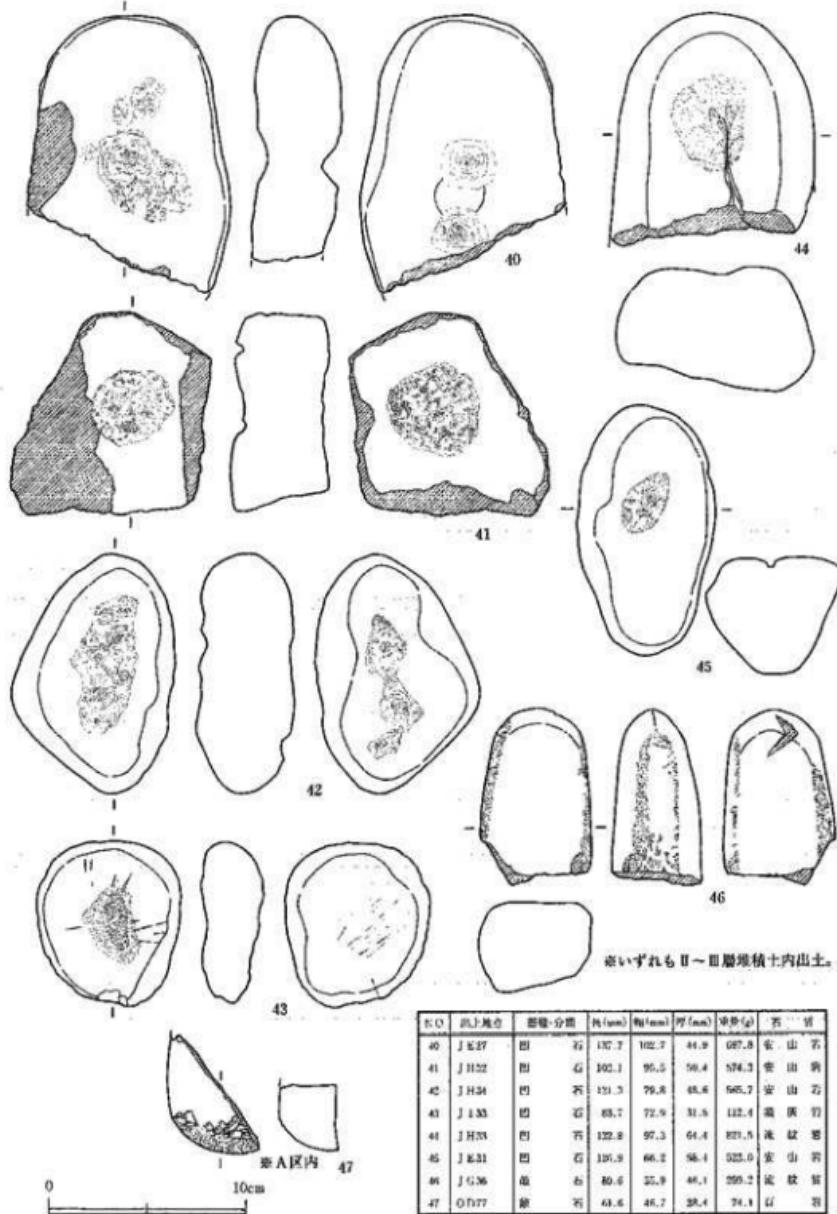
第147図 H・I区の遺構外出土遺物－石器（2）－



第148図 H+I区の遺構外出土遺物－石器（3）－



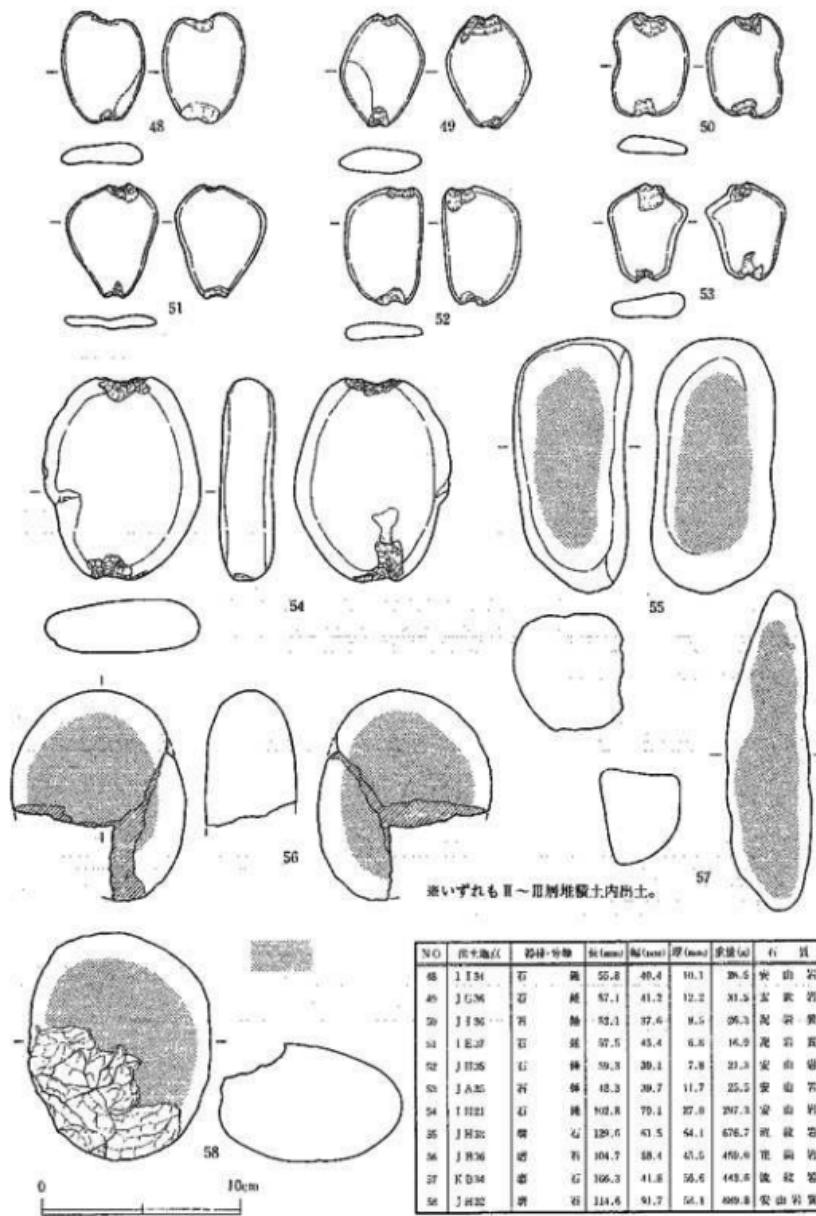
第149図 H・I区の遺構外出土遺物－石器（4）－



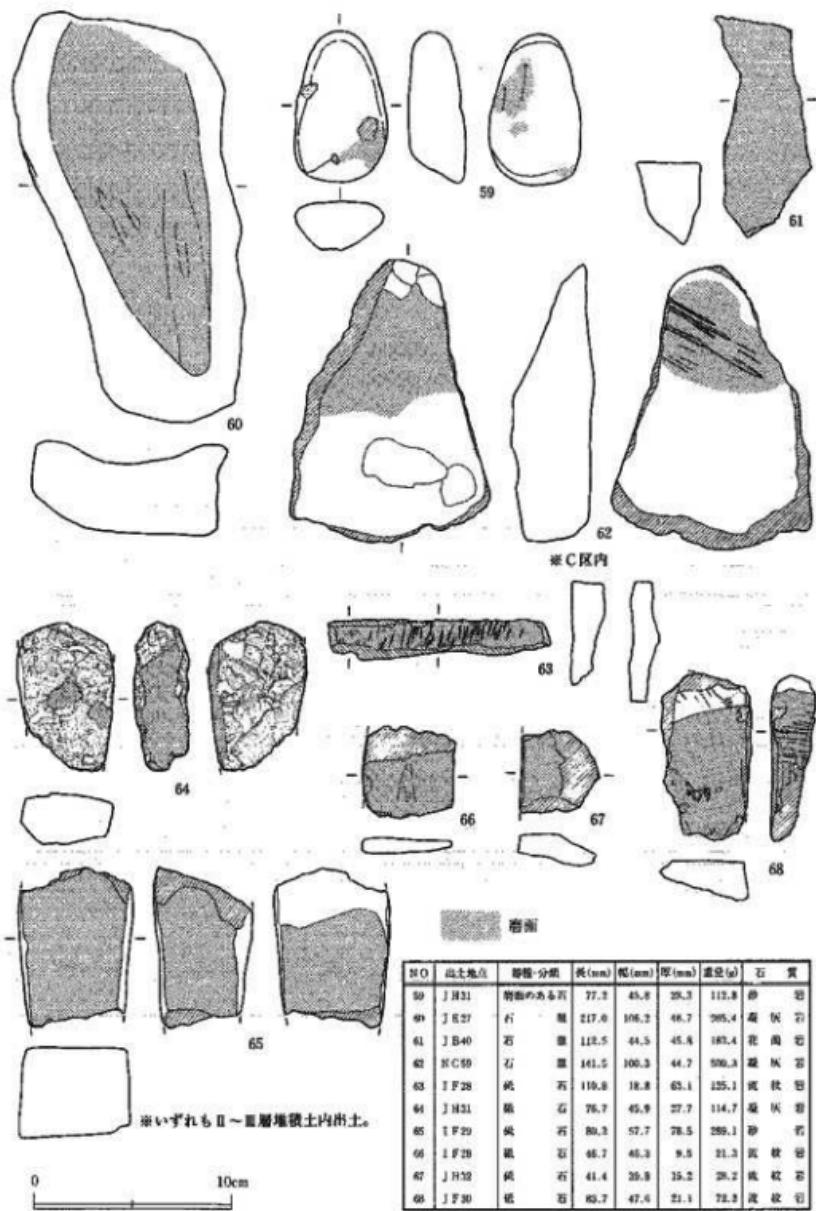
※いずれもⅡ～Ⅳ層堆積土内出土。

No.	出土地点	器種・分類	片(㎜)	柄(㎜)	厚(㎜)	重(㌘)	西	東
40	J E.27	四	石	137.7	102.7	44.9	987.8	安山石
41	J H.22	四	石	102.1	95.5	58.4	574.3	安山石
42	J H.34	四	石	121.3	79.8	48.8	565.7	安山石
43	J E.33	四	石	85.7	72.9	31.5	122.4	安山石
44	J H.25	四	石	122.8	97.3	64.4	821.5	流紋岩
45	J E.31	四	石	101.9	66.2	58.1	523.0	安山石
46	J G.36	单	石	80.6	25.9	48.1	259.2	安山石
47	O T.77	单	石	61.6	46.7	28.4	74.1	石

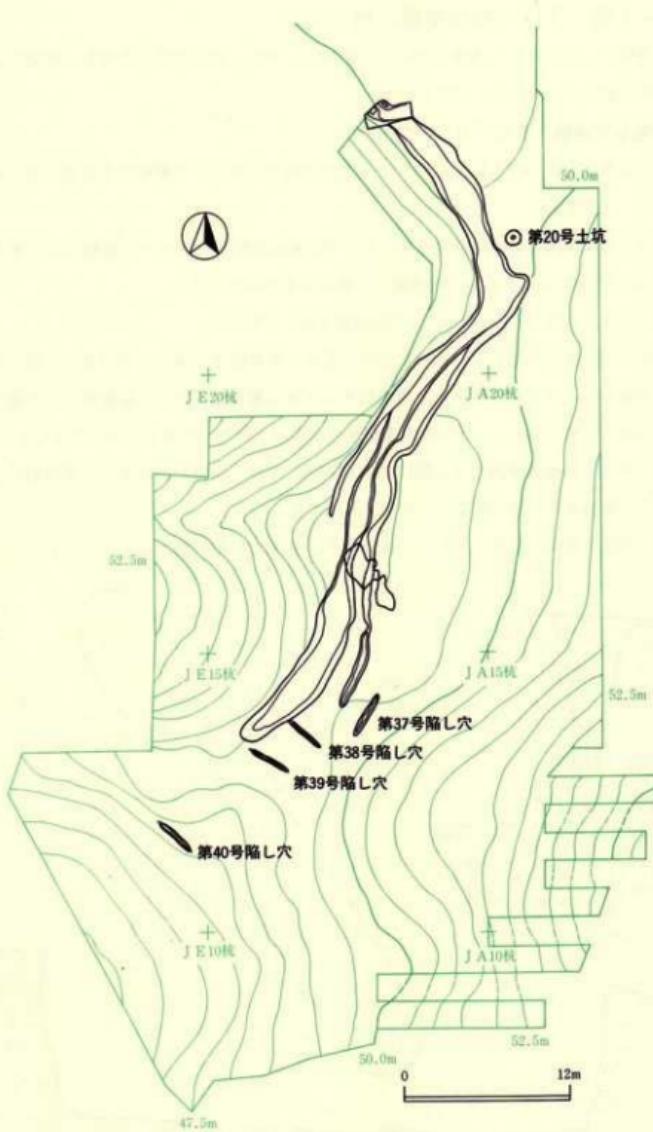
第150図 H・I区の遺構外出土遺物－石器(5)－



第151図 H・I区の遺構外出土遺物—石器(6)—



第152図 H・I区の遺構外出土遺物－石器（7）－



第153図 J区の遺構位置

## 第7-1節 J区の検出遺構と出土遺物

焼土遺構と4基の陥し穴遺構と土坑1基が検出された。焼土遺構は黒褐色土層面で、陥し穴遺構は明黄褐色土の地山面で確認された。

## 第37号陥し穴遺構 (SKT41) — 第154図 —

<位置・確認状況>谷の上位J D13グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>幅広の溝状を呈している。開口部長軸幅3m36cm・短軸幅51cm、底部長軸幅3m8cm・短軸幅15cmである。確認面から最深部まで80cmである。

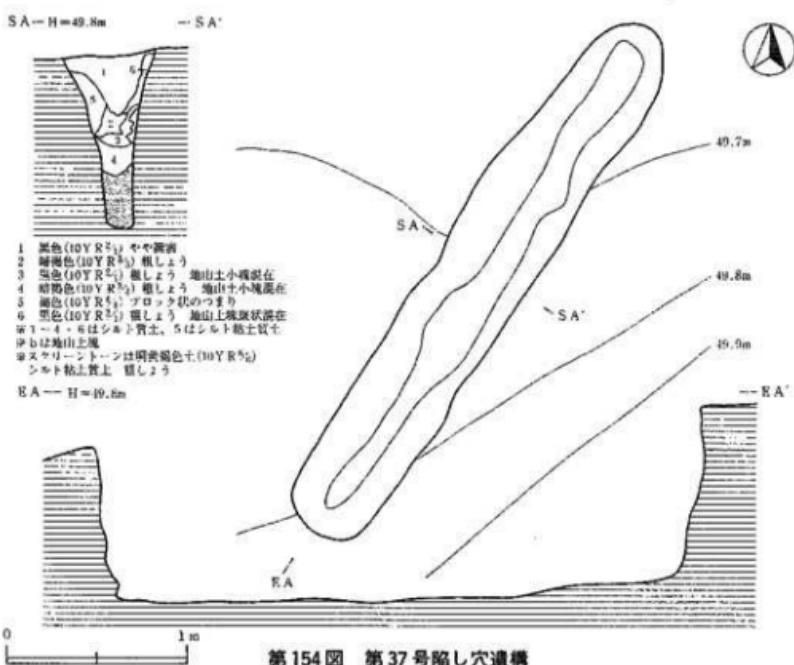
<長軸方向>N-34°-Eを向き、地山面の等高線に平行する。

<堆土の状況>理土はおよそ5層に分けられる。明黄褐色の地山土塊が下位に厚く充填しており、中位から上位には暗褐色土と黒褐色土が交互に堆積している。暗褐色土には壁の崩落とみられる地山土塊が混在し、下位の明黄褐色土は掘り上げた土の流れ込みとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部から底部にかけて内側にすぼまり、逆台形状を呈する。開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。<遺物・その他>出土遺物はない。

EA'



## 第38号陥し穴遺構 (S K T 39) - 第155図-

<位置・確認状況> 谷の上位にあたるJ E13グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模> 細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m87cm・短軸幅30cm、底部長軸幅2m87cm・短軸幅30cmである。確認面から最深部まで1m6cmである。

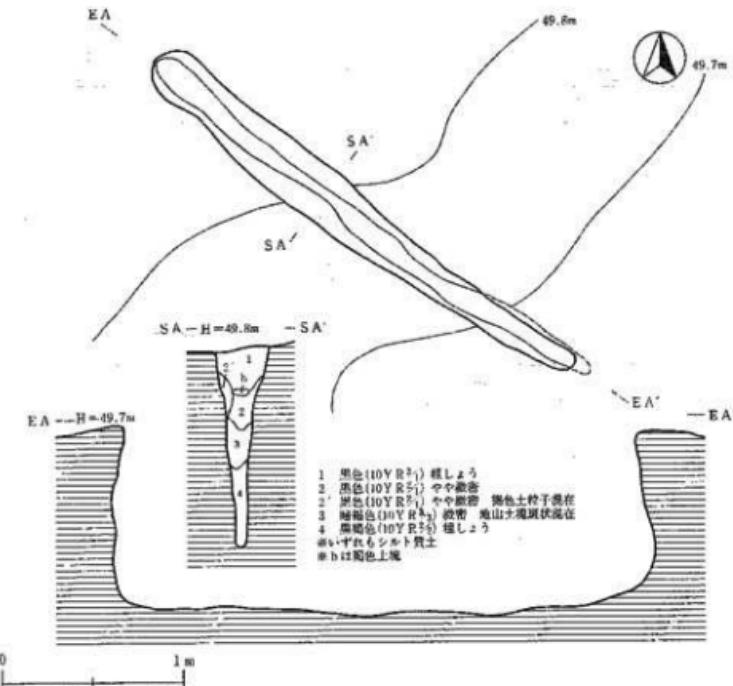
<長軸方向> N-54°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況> 埋土は大きく4層に分けられる。下位には黒褐色土が厚く堆積しており。中位には暗褐色土が、上位には黒褐色土が覆っていた。中位では壁の崩落とみられる地山土塊が混在していた。

<断面の形状> 長軸の断面形は、開口部から外方へわずかにふくらみをもって広がり、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況> 底面は波打っている。

<遺物・その他> 出土遺物はない。



第155図 第38号陥し穴遺構

## 第39号陥し穴遺構 (S K T 40) — 第156図—

<位置・確認状況>谷の上位にあたる J E 13グリッド杭北側で、地山の明黄褐色土層面に黒色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅 3m 2cm・短軸幅 28cm、底部長軸幅 3m 26cm・短軸幅 8cm である。確認面から最深部まで 80cm である。

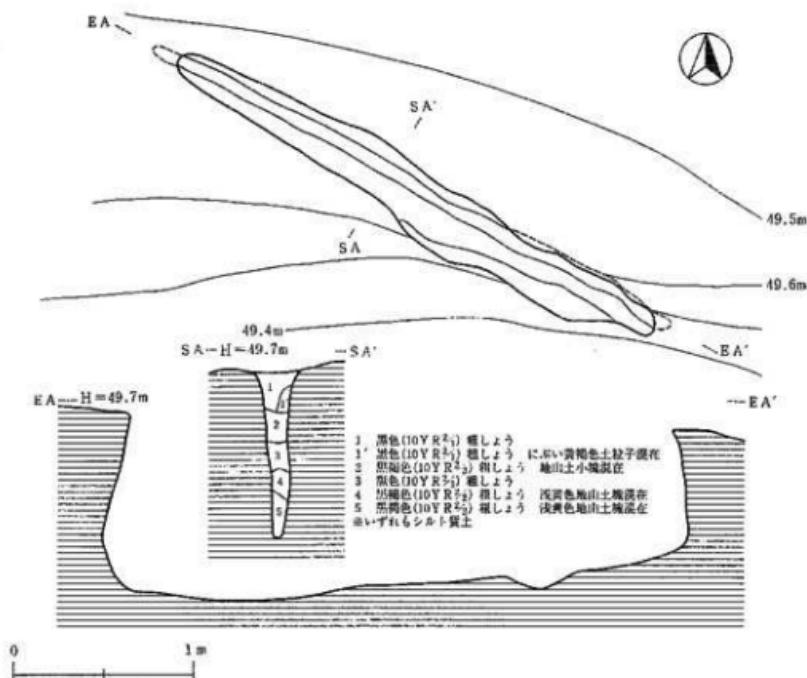
<長軸方向> N-62°-W を向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況> 埋土は黒褐色土がベースであるが、相対的な堅さ、地山粒子の混入の割合からおおよそ 5 層に分けられる。下位には浅黄色の地山土塊がわずかに混在した黒褐色土が充填しており、中位には黒色土と黒褐色土が互層で堆積し、上位には黒色土が覆っていた。

<断面の形状> 長軸の断面形は、開口部から外方へ緩やかにふくらみをもって広がり、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況> 底面は大きく波打っている。

<遺物・その他> 出土遺物はない。



第156図 第39号陥し穴遺構

## 第40号陥し穴遺構 (S K T 37) - 第157図-

<位置・確認状況>谷の中腹にあたるJ G 11グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m 84cm・短軸幅40cm、底部長軸幅3m 7cm・短軸幅6~12cmである。確認面から最深部まで90cmである。

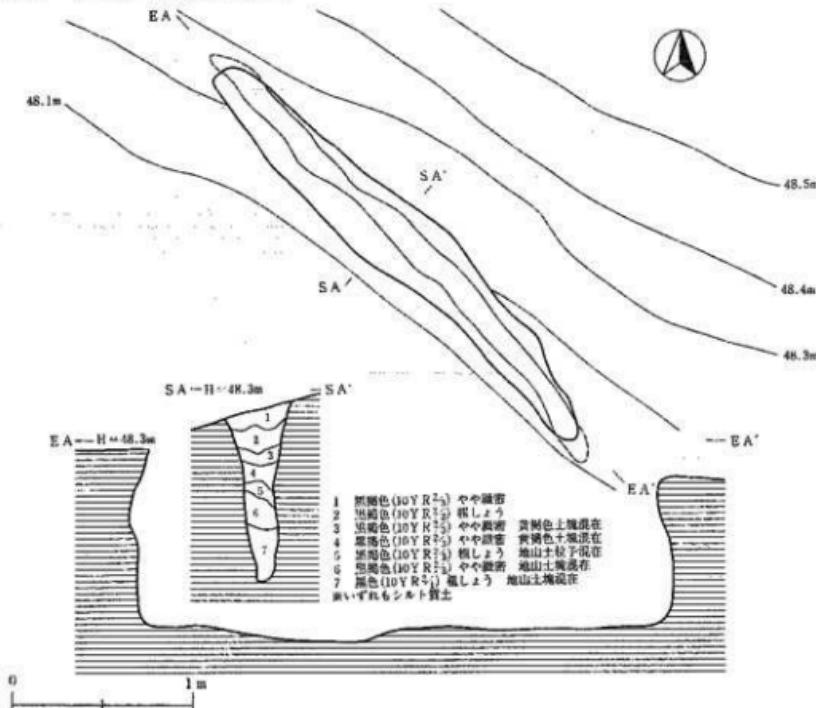
<長軸方向>N-44°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土は黒褐色土がベースであるが相対的な堅さ、地山粒子の混入の割合から7層に分けられる。下位の黒褐色土に明黄褐色の地山土塊が混在しているおり、上位に行くにつれて混入割合が減じていた。下位では掘り上げた土が流れ込んでいったものとみられる。

<断面の形状>長軸の断面形は、壁の中位から外方へわずかにふくらみをもって広がり、袋状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第157図 第40号陥し穴遺構

## 第20号土坑 (S K24) - 第158図-

<位置・確認状況> JA22グリッド中央で、地山の明黄褐色土層面に黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

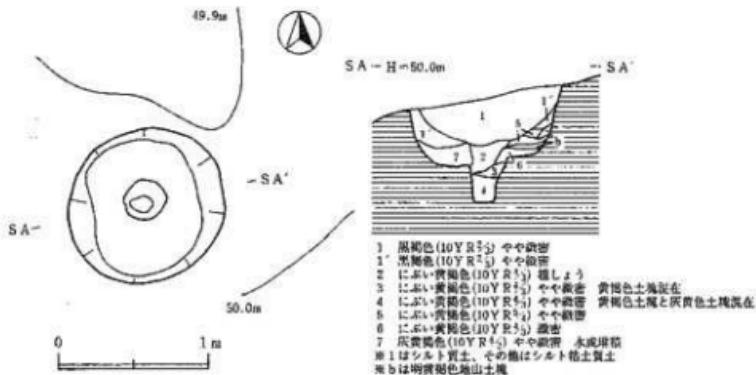
<平面形・規模>開口部は円形を呈し、直径1m4cmで、確認面から最深部まで42cmである。

<埋土の状況>底面には黄褐色土塊が凹レンズ状に、上位には半円状に黒褐色土が覆っていた。

<断面の形状>開口部から底辺に向けてすぼまり、逆台形状を呈する。

<底面の状況>底面は中央がわずかにくぼみ、中央に直径28cm・深さ30cmの小穴があった。

<遺物・その他>出土遺物はない。



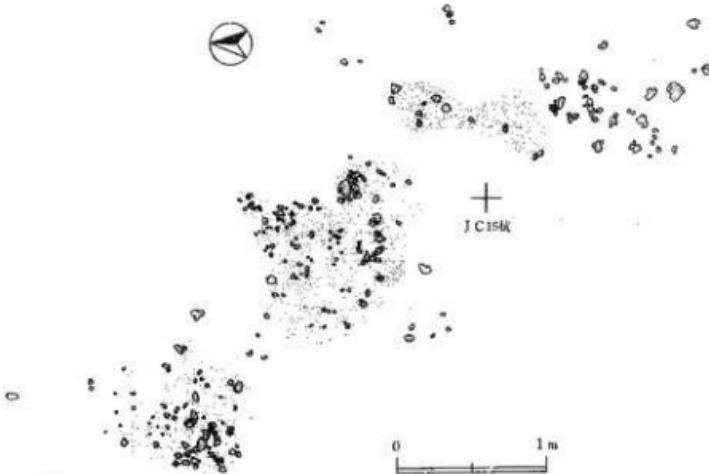
第158図 第20号土坑

## 焼石・焼土遺構 - 第159図 -

<位置・確認状況>窪地のJC15グリッドで、黒褐色土層面で細かく碎けた焼石と焼土の広がりをみつけ確認した。

範囲は長径4mにおよび集石と焼土は同じ高さで確認された。焼土面よりも焼けた石が碎け、散在した範囲のはうが広い。焼土の厚さは5cm程であった。

<年代・その他>同じ高さの黒褐色土層面で、弥生時代後期の土器片が散在しており、同時期の遺構と考えられる。なお検出後大雨のため水没した上、土が流され、断面図の作成はできなかつた。



第159図 燃石・燃土遺構

## 第7-2節 J区の遺構外出土遺物

丘陵裾部に散布していた出土遺物を土器・石器に分類し、説明を加えた。

**=土 器=** 墓域時期で分類し、器形・部位、文様の特徴を説明して行った。最後に型式上の分類を付記した。第160・161図に実測図を示し、説明は挿図の通し番号で行った。

### [A: 繩文時代中期前葉の土器群] - 第160図 1~6 -

- 1は深鉢の胴部上半であり、頸部を隆帯が区画し、繩文原体が上に押圧される。
- 2は深鉢の胴部上半で繩文原体の押圧が低い隆帯に刻まれる。口縁には押圧繩文が平行にある。
- 3は深鉢の胴部の破片であり、粘土の隆帯が区画し、結節繩文が施される。
- 4~6は胴部破片であり、4は横位に結節が、5は縦位に結節が走る繩文が施されている。6は羽状繩文が施されている。

### [B: 繩文時代後期前葉の土器群] - 第160図 7 -

- 7は鉢の口縁部破片である。折り返しの口縁となり、沈線による文様が引かれている。

### [C: 繩文時代後期中葉の土器群] - 第160図 8・9 -

- 8は波状を呈する鉢の口縁であり、口唇にそって2本の沈線があり、中に刻みが充填される。
- 9は頸部の破片で、上位は無文帶で、盛り上がったところに短い繩文が充填される。

【D：縄文時代晩期の土器群】－第160図11～17－

11は深鉢あるいは鉢の口縁で、沈線で羊齒状文が描かれている。

12は鉢の口縁部で口唇に突起が付く、その下にも瘤状の突起が貼付されている。

13・14は口縁に平行する沈線がめぐる。

15・16・17は縄文土器の底部である。後期から晩期の時期に属する。

\*11は大洞B C式に比定される。

【E：弥生時代後期の土器群】－第160図18～31、第160図32～46－

器壁が薄く、器面に凹凸がある。小さい破片で器形は判然としない。

18は口唇に連弧文、その下の口縁上位に二段の交互刺突文を巡らしている。

19は頸部の下に2段の交互刺突文が付されている。交互刺突文は2本の沈線間にに入る。

20は口唇よりわずかに下に3本の沈線が引かれ。棒状工具で縦列の線をいれています。

21・22は横位に沈線が引かれているもので、21は胴部中位に、22は頸部の下にあたる。

23～26は胴部に細い沈線で変形工字文が描かれている。

27～31はいずれも口縁部の破片である。

32は底部から丸みをもって立ち上がり、胴部中位がふくらみ球形を呈する甕である。胴部は縦の条間隔が広い撚糸文が施され、底辺部は横方向に変化している。破片をみると口縁部は横位に変化するものとみられる。

33～43はいずれも胴部の破片で、33～37は縦位と横位の撚糸文が交叉している。

38～40は条の間隔が狭い撚糸文を、41～43は条間隔が広い帯状の撚糸文を施している。

44～46は底部の破片である。底辺部は横位に撚糸文が施されている。

【F：古代・中世の土器】－第160図47・48－

47は須恵器甕の胴部破片で、外面に格子状の叩き目が内面は矢羽根状の当て板痕が残っている。

48は摺鉢の口縁部で、内面に櫛目状の卸し目が引かれている。

\*47は平安時代に、48は14世紀頃の年代が推定される。

=石器= 石器の形態分類はA区の分類に準拠し、形態上・調整加工の特徴を明記した。第162図に実測図を示し、通し番号で説明する。

1は石匙である。短冊形でつまみが大きい。

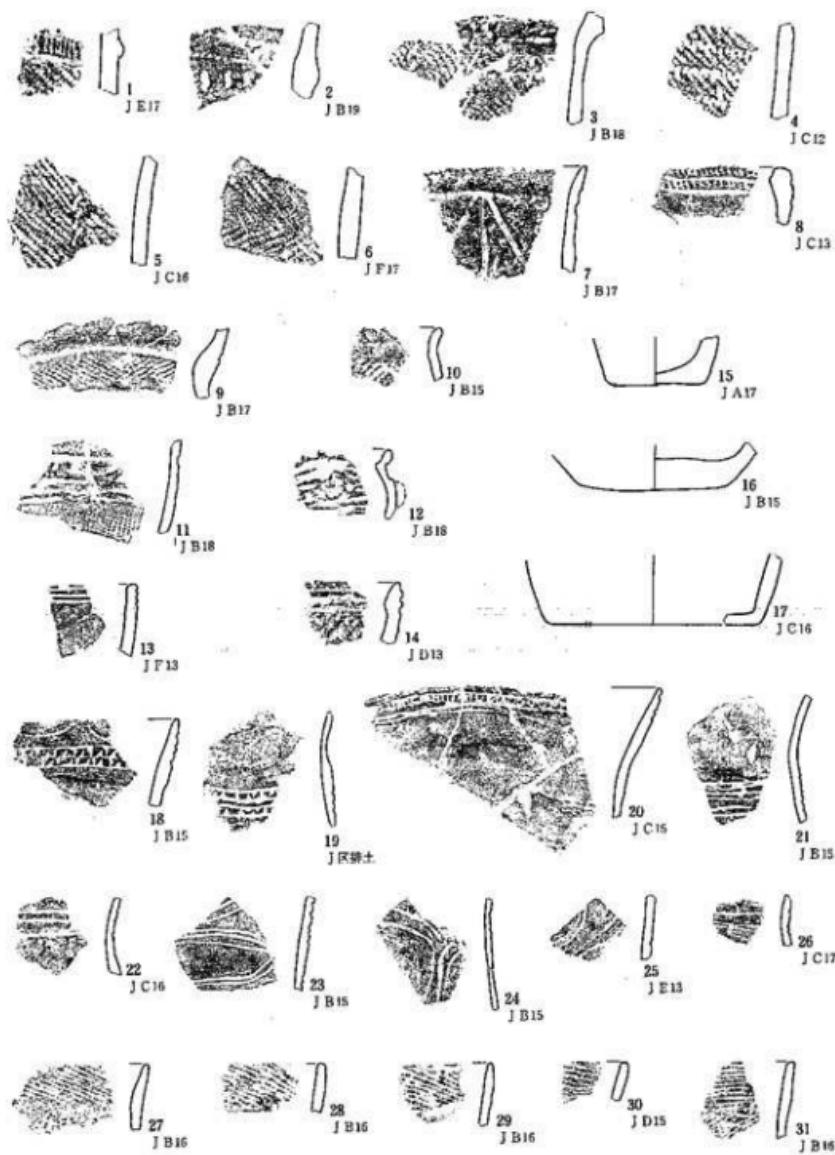
2・3はわずかな調整が施された剥片石器である。

4・5は磨製石斧でいずれも欠損している。

6・7は凹石で、6は両面に凹をもち、7は偏平な面にわずかな凹部をもつ。

8は偏平な広い部分に磨面をもつ丸石である。

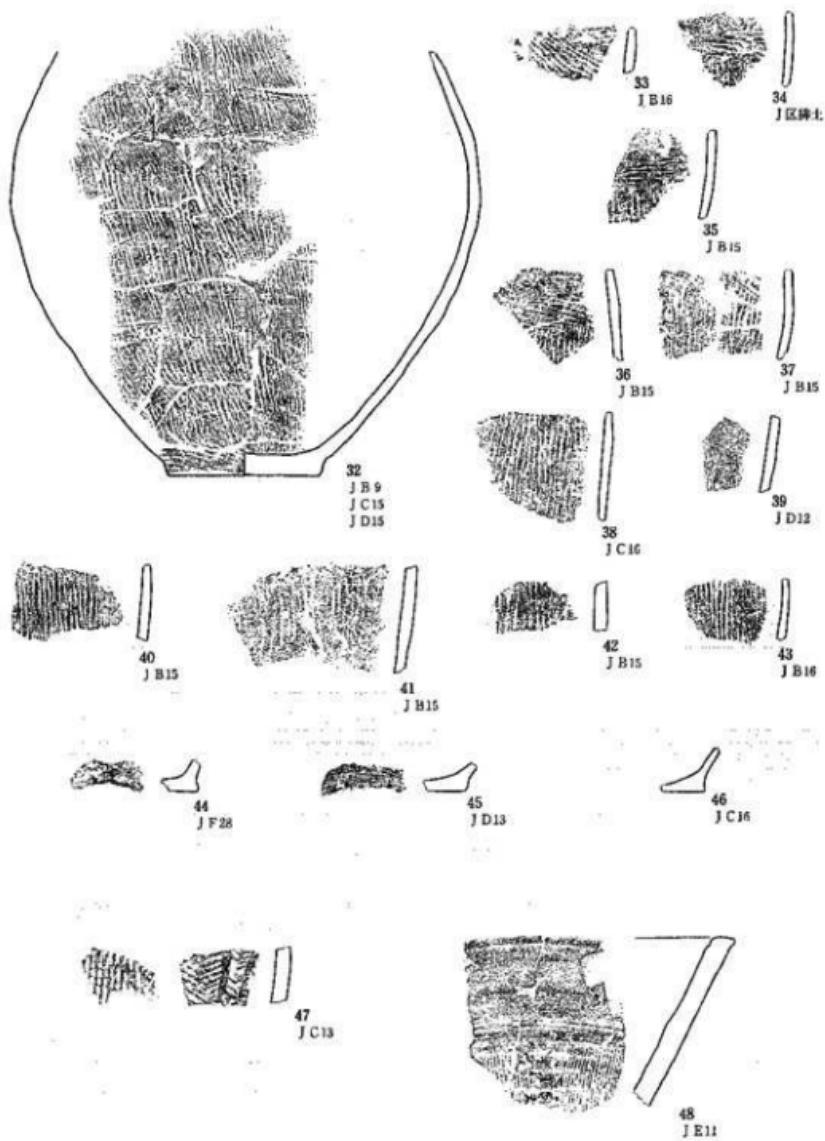
\*石匙をはじめ縄文時代に属すると推定される。



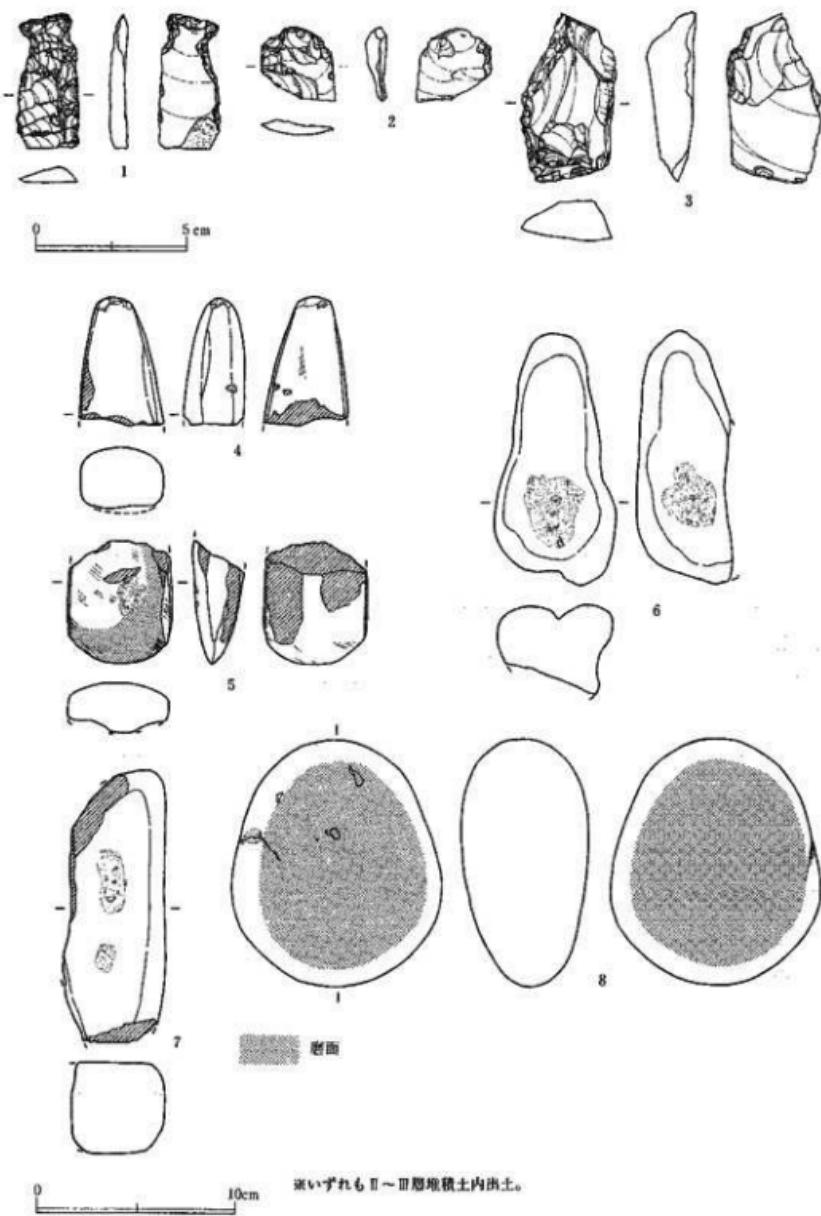
0

10cm あるいはもⅡ～Ⅲ層地積土内出土。

第160図 J区の遺構外出土遺物—土器(1)—



第161図 J区の邊構外出土遺物－土器（2）－



第162図 J区の遺構外出土遺物－石器－

## 第8-1節 K区の検出遺構と出土遺物

南北二つの小さな丘陵部とその周囲の斜面が調査対象地であり、南東側でI・J区と接している。二つの丘陵上部を中心に、住居跡1軒、土坑30基、焼土遺構2基、また、南側の丘陵上部とその北側の斜面で陥し穴遺構6基が検出された（第163図）。

南側の丘陵部から順に検出遺構を説明する。遺構断面図の埋土部分で、明確な地山（壁の崩落など）あるいは主として地山に由来するとみられる部分はスクリーントーンで示した。また、遺構毎に遺構内出土遺物の説明も加えた。

### 第2号縄文住居跡（S I 07）－第164図－

＜位置・確認状況＞K H 18グリッドにある。地山の明褐色土層面で焼土を検出、その後周辺の精査で2個のピットを確認し住居跡と判断した。西側は調査区外に延びるものと考えられる。第21・22号土坑に切られている。

＜平面形・規模＞2個のピットと焼土を含む範囲であるが、全体は不明である。2個のピットの間隔が1m80cm、このピットを結ぶ線から焼土まで1m20cmである。

＜堆積土の状況＞調査区際の土層観察によって、壁の遺存とあわせて検討した。良好な壁はとらえられなかったものの、この部分ではⅢ層相当の暗褐色土が薄く遺存しており、埋土であった可能性がある。

＜壁・床面の状況＞壁は検出できなかった。焼土の確認面となった床は、堅く平坦である。

＜柱穴＞2個確認され、径20cm前後、床面からの深さは40cm前後である。

＜炉跡＞掘り込みは伴わない。焼土面は調査区外に広がるが、調査範囲内では長さ50cm、幅15cmほどの広がりがある。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第21号土坑（S K 35）－第164図－

＜位置・確認状況＞K H 18グリッド西側で、第22号土坑を精査中にプランの違う暗褐色土をつけ確認した。第22号土坑に切られている。

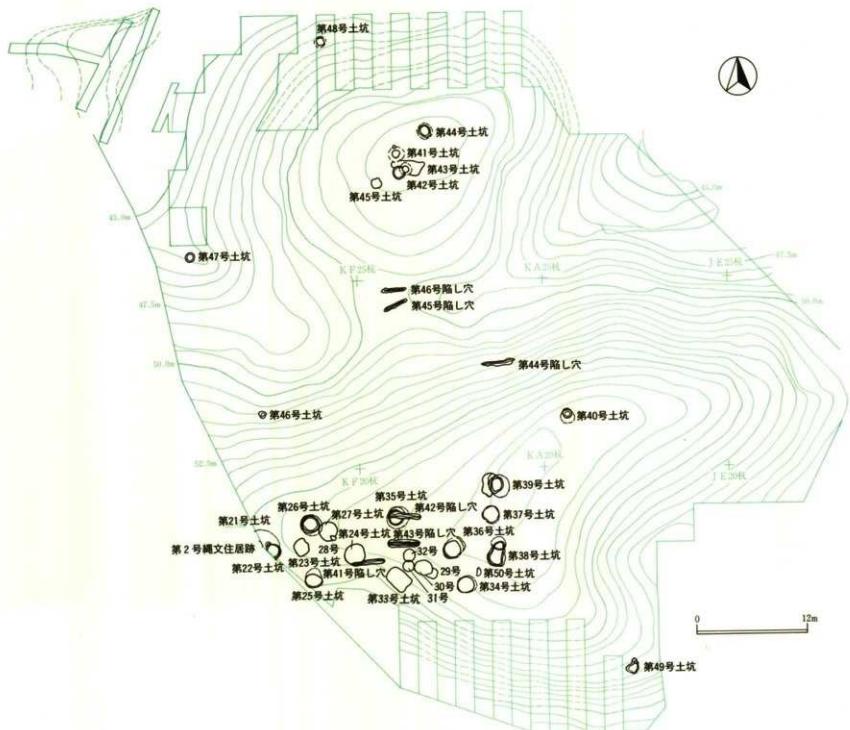
＜平面形・規模＞開口部は円形を呈していたと考えられる。直径55cmで、確認面から底面まで深さ23cmである。

＜埋土の状況＞埋土は3層に分かれる。暗褐色土と褐色土が主体で地山土と炭化物がわずかに混入する。下位には周囲の地山に由来するこぶし大の地山土塊が混在していた。

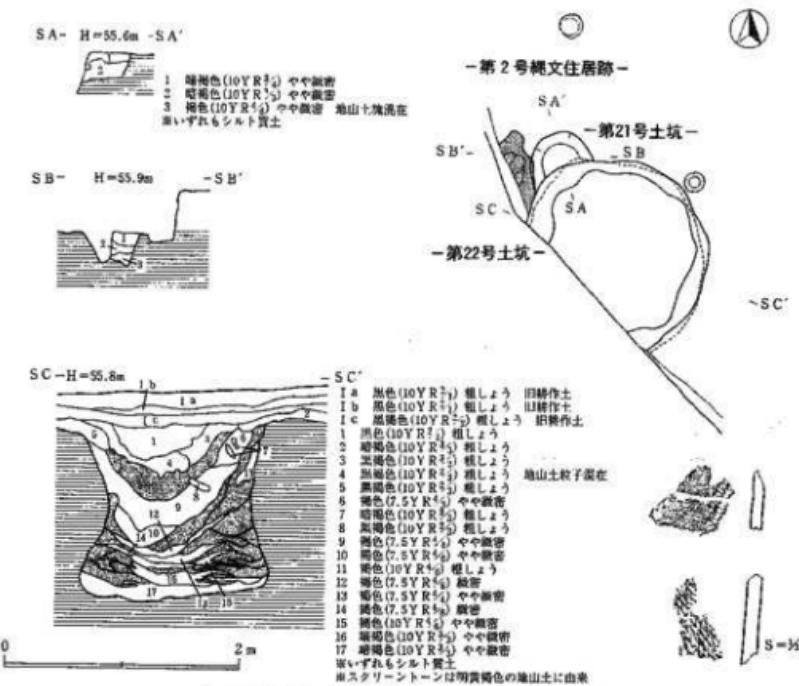
＜断面の形状＞開口部がやや広く、底部が狭い逆台形状を呈する。

＜底面の状況＞底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞埋土下位より受熱破損した刺片が1点出土した。他の遺構に比べ炭化物が多



第163図 K区の遺構位置



第164図 第2号绳文住居跡、第21号・第22号土坑

く混在しているが、遺構の位置が第2号住居跡の炉に近い点から、炭化物及び出土した剝片は第2号住居跡に由来するものと考えられる。この点で本遺構は第2号住居跡と同時もしくはそれより新しくないと判断した。

#### 第22号土坑 (SK 29) —第164図—

＜位置・確認状況＞K H18グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面で黒色土の落ち込みをみつけ確認した。第2号土坑を切っている。西側は計画路線外であり、調査を行っていない。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈する。開口部は径1m54cmである。底部は開口部と同心円の位置で開口部より若干広い。確認面から底面まで深さ1m50cmである。

＜埋土の状況＞底面に一様に暗褐色土が堆積し、それを褐色土と暗褐色土が互層をなして覆う。上位中央に地山に近い黄褐色土の堆積があり、これは人為的に投げ込まれた可能性がある。

＜断面の形状＞開口部から中位にかけてゆるくくびれ、その後底部に向かって外にはる。本来は開口部が小さく、フラスコ状を呈したものと考えられる。

＜底面の状況＞底面中央がゆるくくぼむ。

<遺物・その他>埋土上部より土器細片5点が出土した。いずれも摩滅している。1は磨消繩文により文様を描くものであろう。2は繩文が施文された胴部破片である。

#### 第23号土坑（SK 36）－第165図－

<位置・確認状況>KG18グリッド西側、地山の明黄褐色土層面で褐色土のしみをみつけたが、プランが明確にならず、試掘溝によってプランを確認した。

<平面形・規模>開口部は円形を呈し、直径1m65cmである。底部は開口部よりやや広がる。確認面から底面まで深さ25cmである。

<埋土の状況>底面にはごく薄く暗褐色土が堆積しているが図示できなかった。その上に厚く黄褐色土が堆積する。この部分には地山土塊が斑に混入しており、人為的埋土と判断した。

<断面の形状>開口部に対して、底部がわずかに外にはり出す。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>埋土下位の暗褐色土層上面で土器片1点と石匙1点が出土した。共に流入したものであろう。1は半截竹管により鋸歯状のモチーフを描く。繩文中期前葉のものである。

#### 第24号土坑（SK F47）－第165図－

<位置・確認状況>KF17グリッド北東側にある。地山上面では造構プランは見えなかつたが、KFラインに設定した試掘溝で確認した。第41号陥し穴造構と重複し、本造構が古い。

<平面形・規模>開口部は円形を呈し、直径2m20cmである。確認面から底面まで深さ80cmである。

<埋土の状況>底面に薄く褐色土が堆積し、その後壁の崩落や風化による堆積層がある。上位は地山土を混入する褐色土が厚く堆積し、人為的埋土と判断した。

<断面の形状>開口部からほほまっすぐに落ち込み、底部が少し外にふくらむ。

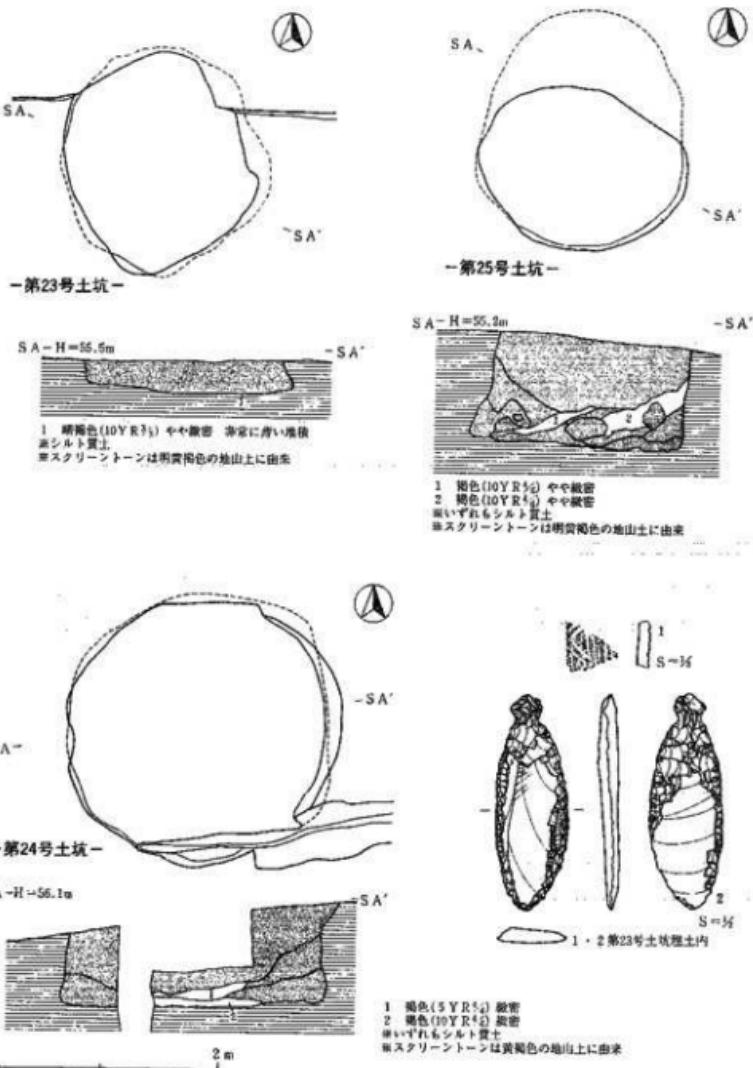
<底面の状況>底面は平坦である。<遺物・その他>出土遺物はない。

#### 第25号土坑（SK 53）－第165図－

<位置・確認状況>KG17グリッド南東側、地山の明黄褐色土層面で褐色土のしみをみつけ、試掘溝によってプランを確認した。

<平面形・規模>開口部は梢円形を呈する。長軸方向が東西であり、長径1m70cmである。底部は開口部に対し北に偏って広がり、梢円形を呈する。底部の長軸方向は南北であり、長径2m5cmである。確認面から底面まで深さ94cmである。

<埋土の状況>底面から中位まで壁の崩落や風化による黄褐色土と褐色土が堆積する。上位は



第165図 第23号・第24号・第25号土坑

地山土を混入する黄褐色土が厚く堆積し、人為的埋土と判断した。

＜断面の形状＞北西側は開口部から中位までまっすぐ落ち込み、底部が外に大きくふくらむ。

南東側では開口部から底部までまっすぐ落ち込む。<底面の状況>底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。なお、底部付近で検出した炭化物を年代測定試料とした。

第26号土坑（S K F 25）－第166図－

＜位置・確認状況＞K G 18グリッド北東側、漸移層の褐色土層面で黒色土のプランを確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈し、直径2m10cmである。底面はほぼ同心円の位置で開口部より広がっている。確認面から底面まで深さ1m85cmである。

＜埋土の状況＞埋土中央下半では薄層が互層をなし、土坑縁辺部には壁の崩落による堆積層が顕著である。上位でも褐色土から黒褐色土の順に堆積している。

＜断面の形状＞遺存状況で開口部に対し底部が広い袋状を呈するが、埋土断面で壁の崩落を観察しており、本来はラスコ状を呈したものであろう。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土下位より土器片1点、上位で鉢片1点が出土したが、周囲からの流入であろう。1は縦方向に結節繩文が施される。胎土中の砂粒もなく、繩文中期前葉のものであろう。なお、土坑底部でややまとまった炭化物が検出され、それを年代測定試料とした。

第27号土坑（S K F 28）－第166図－

＜位置・確認状況＞K F 18グリッド西側、地山の明黄褐色土層面で暗褐色土プランを確認した。

＜平面形・規模＞開口部はほぼ円形を呈し、直径1m80cmである。底面は開口部とほぼ同心円に広がる。確認面から底面まで深さ1m35cmである。

＜埋土の状況＞底部に褐色土が凸レンズ状に堆積し、それを壁の崩落や風化とみられる明黄褐色土が覆う。上位は地山土塊が斑に混在する褐色土で人為的埋土の可能性がある。

＜断面の形状＞遺存状況では開口部から底部まではまっすぐ落ち込むが、本来はラスコ状を呈したものと考えられる。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第28号土坑（S K 27）－第166図－

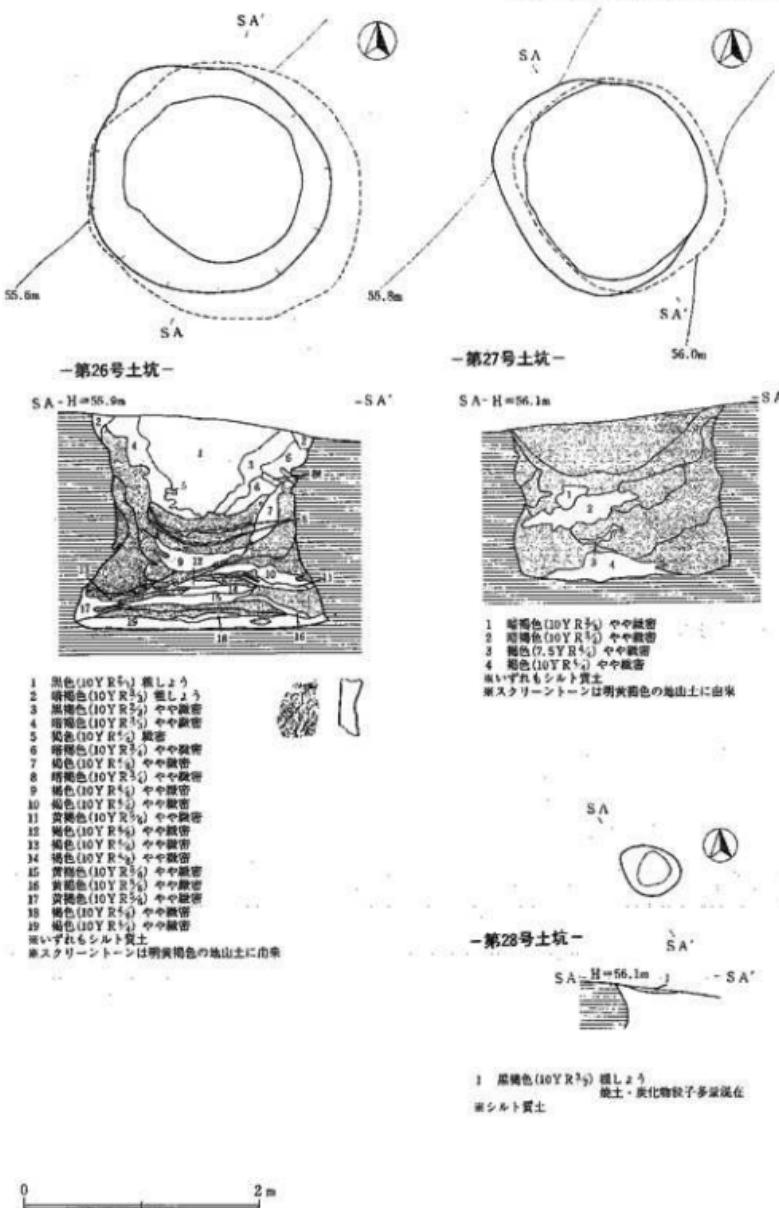
＜位置・確認状況＞K F 18グリッド南西側で、暗褐色土層中に炭化物を多く混入する黒褐色土のプランを確認した。第27号土坑の南東側上部にある。

＜平面形・規模＞全体が卵形を呈する。南北方向に長軸があり、長径40cmである。確認面から底面まで深さ4cmと浅い。

＜埋土の状況＞黒褐色土1層であり、焼土や小枝大の炭の固まりを多量に混入する。

＜断面の形状＞浅い皿状を呈する。＜底面の状況＞底面はゆるくくぼむ。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第166図 第26号・第27号・第28号土坑

### 第29号土坑（SK 54）－第167図－

＜位置・確認状況＞KD17グリッド南東側にある。地山明黄褐色土層面の遺構確認精査では遺構を確認できず、第30号土坑の調査時に第30号土坑の掘形から東にふくらむ埋土を見つけ、再度地山面での精査を行い黄褐色土プランを検出した。西側は第30号土坑に埋されており、第29号土坑が古い。

＜平面形・規模＞遺存する部分の開口部は半円形で、直径1m10cmである。確認面から底面まで深さ47cmである。＜埋土の状況＞炭化物や白色の地山土塊を含む黄褐色土1層である。

＜断面の形状＞広めの開口部から、北側ではほぼ垂直に、南側では緩やかに底部につづく。

＜底面の状況＞底面は平坦である。＜遺物・その他＞出土遺物はない。

### 第30号土坑（SK 31）－第167図－

＜位置・確認状況＞KD17グリッド南東側、地山の明黄褐色土層面で褐色土プランを確認した。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈し、直径1m80cm、確認面から底面まで深さ1m45cmである。

＜埋土の状況＞埋土下半は薄層が互層をなし、周囲の地山に由来する自然堆積層と判断した。

上位は地山土塊が斑状に混在する黄褐色土が厚く堆積する。この部分は他の土坑を掘った際の排土が埋め込まれたものと考えられる。

＜断面の形状＞開口部に対し、底面がわずかに外にはり出る。

＜底面の状況＞底面は平坦である。また、北東よりに直径18cm、深さ60cmのピットがある。

＜遺物・その他＞埋土上位から石鏸1点、剝片5点、礫2点が出土し、石鏸のみ図示した。

### 第31号土坑（SK 40）－第167図－

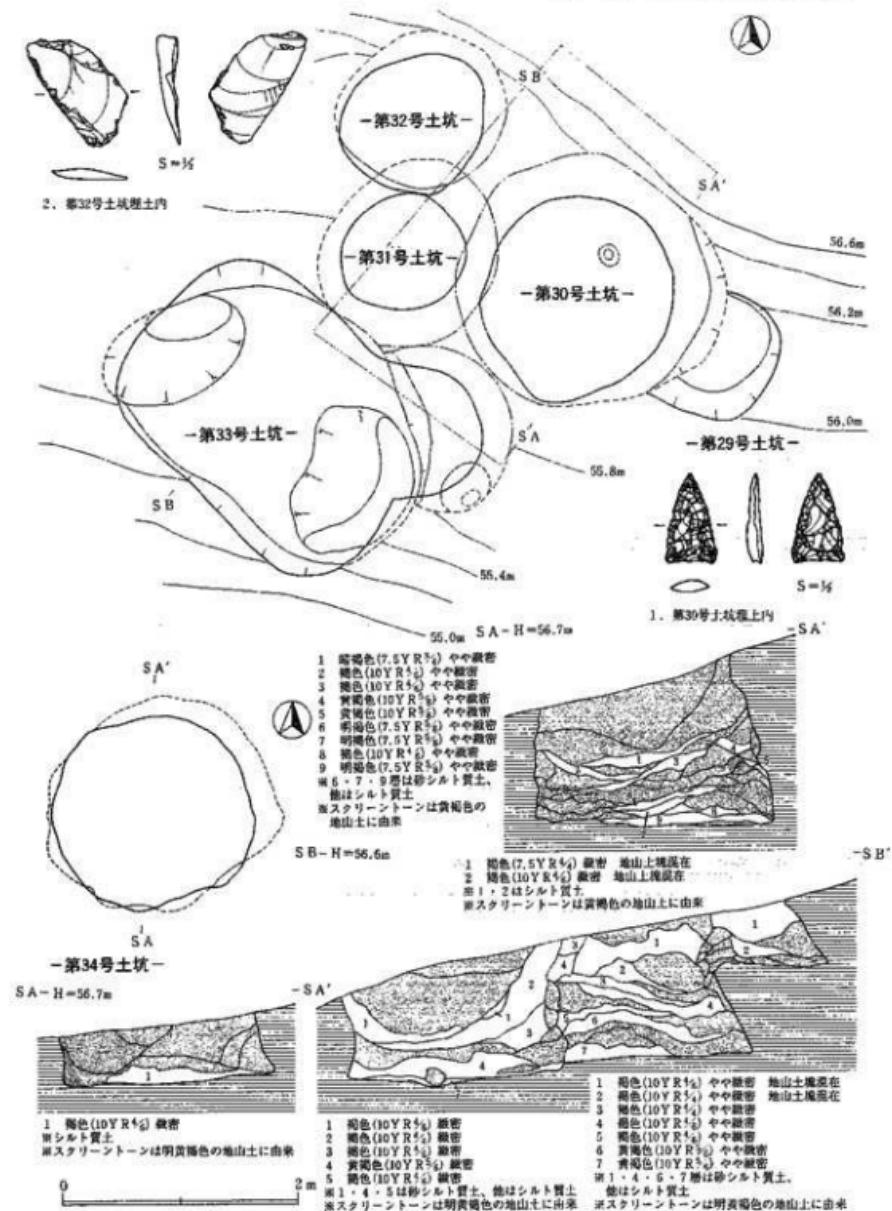
＜位置・確認状況＞KD17グリッド西側にある。地山の明黄褐色土層面では遺構の存在を確認できず、第30号土坑の断ち割りに伴い、第32・33号土坑とともに断面で確認した。このため、プランの南東側2/3は断ち割りの際に破損した。図中の方形の区画が断ち割りした部分であり、第31～33号土坑の区画内のプランは推定線である。遺構を確認した断面の状況で、第32・33号土坑との重複が確認でき、本遺構は第32号土坑より新しく、第33号土坑より占い。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈したものと推定される。推定直径1mで、確認面から底面まで深さ1m20cmである。

＜埋土の状況＞埋土下半は薄層が互層をなす。基本的に周囲の地山に由来する自然堆積層である。上位はやや大粒の地山土塊を混入しており、人為的埋土と判断した。

＜断面の形状＞開口部に対し、底部が外にはり出る。＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。



第167圖 第29号・第30号・第31号・第32号・第33号・第34号土坑

第32号土坑（SK41）—第167図—

＜位置・確認状況＞K D17グリッド北西側にある。第31号土坑と同様に第30号土坑の断ち割りに伴って確認した。第31号土坑と重複する。埋土断面では、埋土が第31号土坑側に崩れている点が観察でき、本遺構が古い。第30号土坑の断ち割りの際に遺構の1/8を破損した。

＜平面形・規模＞開口部は梢円形を呈し、長径1m28cm・推定短径1m10cmであるが、構築時の開口部はより小さい円形を呈したものであろう。確認面から底面まで深さ55cmである。

＜埋土の状況＞埋土下半は互層状の堆積を示す自然堆積層、上位は地山土を多く混入する黄褐色土であり、人為的埋土と判断した。

＜断面の形状＞遺構南側は第31号土坑の影響で崩れているが、全体としては開口部に対し、底面がわずかに外にはり出す。＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土上位で、2の背腹両面の一部に微小剝離痕のある刺片が1点出土した。なお、底部付近より出土した炭化物を年代測定試料とした。

第33号土坑（SK52）—第167図—

＜位置・確認状況＞K D17グリッド南西側にある。第31・32号土坑と同様に第30号土坑の断ち割りに伴って確認した。その後、地山面でのプラン確認精査を繰り返したが、平面プランを明確にできず、試掘溝によって遺構プランを把握した。東側に張り出す部分があり、別構造である可能性も考えられたが、遺構の切り合いなどを明確にできなかった。但し、底面も張り出し部分は緩く段をもって低いため、ここでは西側の大きいプランをA、東に張り出すプランをBとして記述する。なお、第30号土坑の断ち割りの際にAの一部とBを大きく破損している。

＜平面形・規模＞Aの開口部は梢円形を呈する。北西・南東方向に長軸があり、長径2m63cmである。確認面から底面まで深さ1m12cmである。また、Bの開口部は推定径90cm程の半円形と考えられる。確認面から底面まで深さ1m20cmである。

＜埋土の状況＞埋土下半は周囲の地山に由来する自然堆積層、上位は大きい地山土塊を斑に含み、人為的埋土の状況が顕著である。

＜断面の形状＞Aは広めの開口部から、土坑中位がやや狭くなり、底面が外に張り出す。遺構構築時にはより小さい開口部と頸部をもつフラスコ状であったと考えられるが、上部の風化・崩落の結果であろう。Bも底面がわずかに外に張り出す。

＜底面の状況＞Aの底面は全体に小さな凹凸があるがほぼ平坦である。底面の精査によって、両端に不整形な落ち込みを検出したが、この落ち込みは埋土上位に類似した地山七塊を含む褐色土が埋められており、遺構使用時点では底面は平坦であったものと判断した。Bの底面はほぼ平坦であるが、北東方向に緩く傾斜する。また、北東の縁に深さ12cmで開口部側に傾く

ピットがある。<遺物・その他> B床面においてこぶし大の礫1点が出土した。

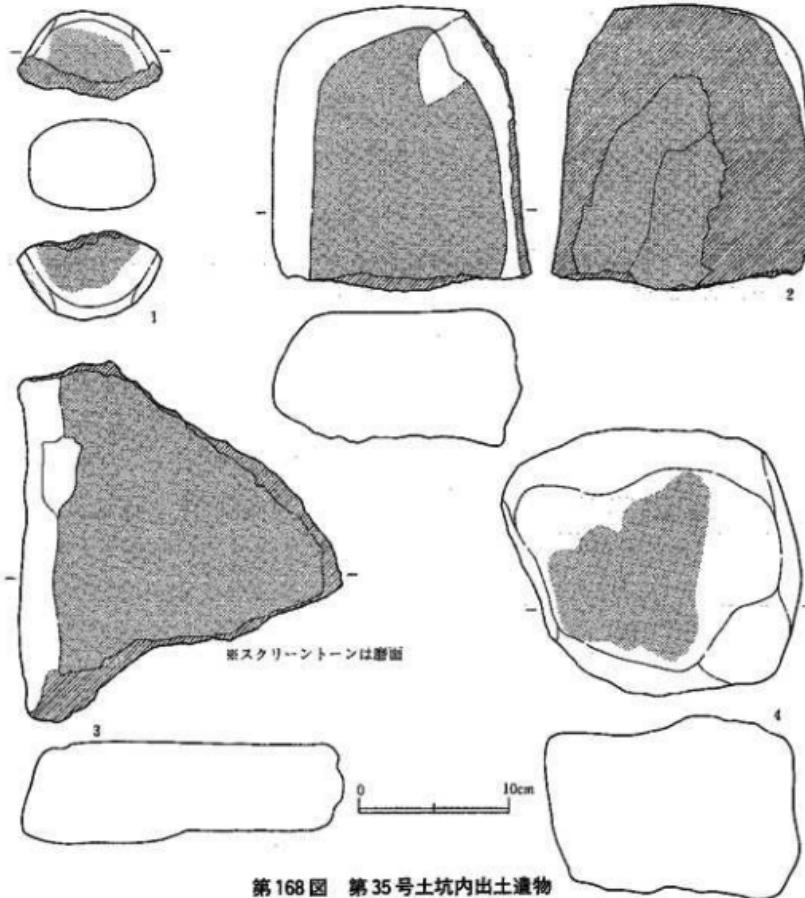
**第34号土坑 (SK 42) - 第167図-**

<位置・確認状況> KC17グリッド南東側、地山の明黄褐色土層面で褐色土プランを確認した。

<平面形・規模> 開口部は円形を呈し、直径1m65cmである。底部は開口部に対しやや北西に偏って広がる。確認面から底面まで深さ50cmである。

<埋土の状況> 埋土下位の壁側に壁の崩落土とみられる黄褐色土が、中央には厚く褐色土が堆積する。<断面の形状> 開口部に対し、底部がわずかに外に広がる。

<底面の状況> 底面は平坦である。<遺物・その他> 出土遺物はない。



第168図 第35号土坑内出土遺物

第35号土坑（SKF37）—第168・169図—

＜位置・確認状況＞KD・KE18グリッド北側、地山の明黄褐色土層面で暗褐色土のプランを確認した。第44号陥し穴造構により切られている。

＜平面形・規模＞開口部は円形を呈し、直径1m80cmである。底部は開口部に対し東に偏って広がる。確認面から底面まで深さ2mである。

＜埋土の状況＞埋土下半の壁側は壁の崩落土とみられる。中央は地山土と褐色あるいは暗褐色土がほぼ互層に堆積する。上位を覆う褐色土中には地山粒子の混入が著しく人為的埋土の可能性がある。

＜断面の形状＞開口部より、底部がつよく外にはり出す。本来はより小さな開口部で、いわゆるフラスコ状を呈したものと考えられる。＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土中位から剝片1点、底面に接して7個の碟が出土した。碟の内4個には磨面が認められ、第168図に示した。

第36号土坑（SK30）—第169図—

＜位置・確認状況＞KC17グリッド北側、地山の明黄褐色土層面で暗褐色土プランを確認した。

＜平面形・規模＞開口部は略円形を呈し、直径1m94cmである。底部は開口部に対し北東に偏って広がる。確認面から底面まで深さ1m20cmである。

＜埋土の状況＞底面に薄く褐色土が堆積する。その上には地山土に近似する黄褐色土が厚く覆う。壁面との比較で、壁際に壁の崩落と判断できる部分もあるが、全体に薄層が互層をなす層状とはならず、人為的埋土の可能性がある。

＜断面の形状＞開口部から中位でややくびれ、中位から底部は外に広がる。

＜底面の状況＞底面はやや凹凸があり、中央部に浅いピット状の凹みがある。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第37号土坑（SK32）—第169図—

＜位置・確認状況＞KB18グリッド北側の地山明黄褐色土層面で、褐色土プランを確認した。

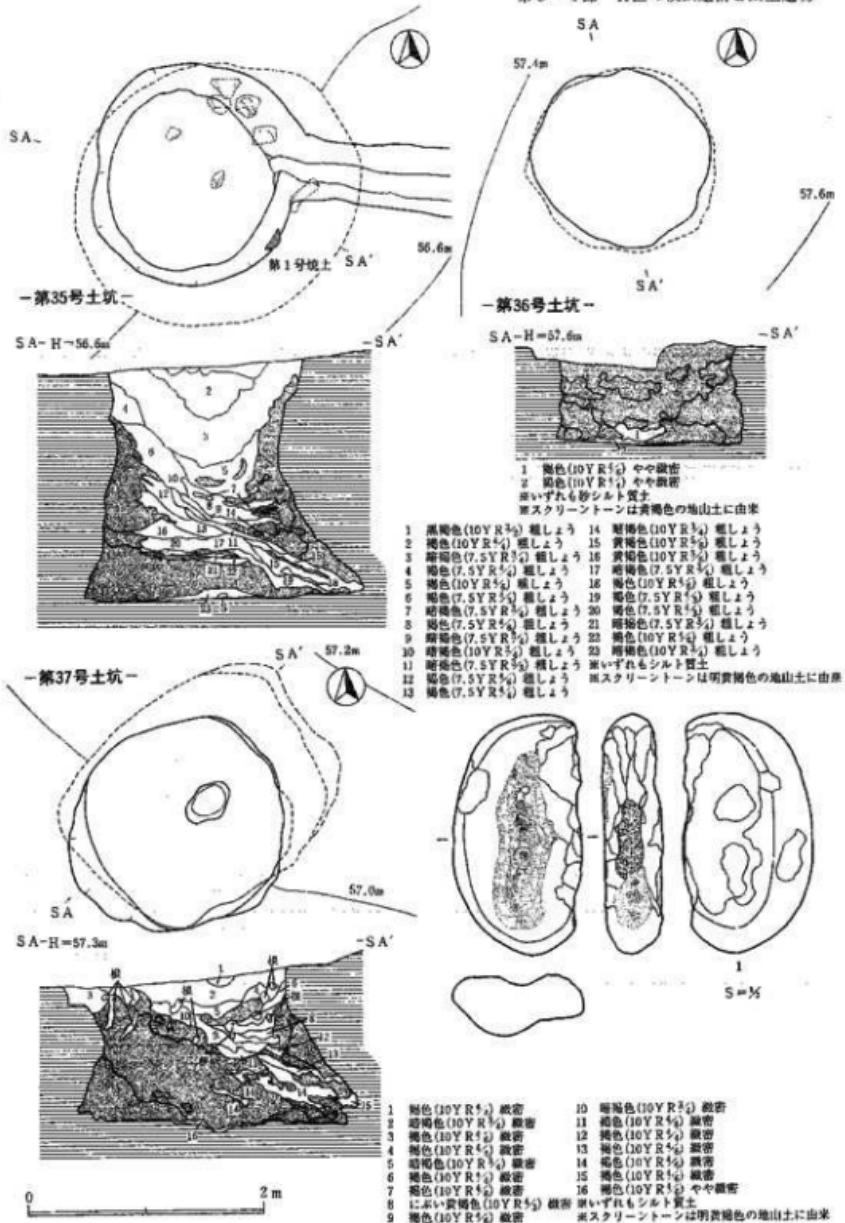
＜平面形・規模＞開口部は円形を呈し直径1m56cmである。底面まで深さ84cmである。

＜埋土の状況＞底面に褐色土が薄く堆積し、壁際下位には地山に由来する明黄褐色土が堆積する。上位は地山の大きな塊を含む褐色土であり、この部分は人為的埋土と判断した。

＜断面の形状＞開口部より底面がわずかに外にはり出す。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞遺構確認時に1の凹石1点と黒耀石の剝片1点が出土した。



### 第169図 第35号・第36号・第37号土坑

第38号土坑（S K 38）—第170・171図—

＜位置・確認状況＞K B 17グリッド北東側、地山の明黄褐色土層面で褐色土プランを確認した。調査の結果、底面に段差があり2基の重複と判断した。底面の高い方をA、低い方をBとする。埋土の断面観察からBが新しい。

＜平面形・規模＞開口部は不整な椭円形を呈する。南北方向に長軸があり、長径2m40cmである。開口部の南よりに中心のあるAの底面は、推定プランがほぼ円形で径1m90cmである。Bの底面は開口部の西端に中心があり、底径1m66cmである。確認面から底面までの深さはAが1m、Bが1m37cmである。

＜埋土の状況＞A側では底面に褐色土が堆積した後、黄褐色土と褐色土がそれぞれ薄く互層をなす。B側の埋土下半は層状がA側に類似する。開口部中央からB側埋土上半は地山土塊が斑に混入する黄褐色土で、人為的埋土と考えられる。

＜断面の形状＞遺存する部分は、A・Bともに開口部から中位にかけて緩くくびれ、その後底部まで外側に広がる。B側の方が下半の広がりが大きい。

＜底面の状況＞A側底面は多少凹凸があり、B側は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土中より第171図11が出土した。11は背面側辺に微小剝離痕がある。

第39号土坑（S K 33）—第170・171図—

＜位置・確認状況＞K B 19グリッド北東側、漸移層の褐色土層面で黒色土プランを確認した。

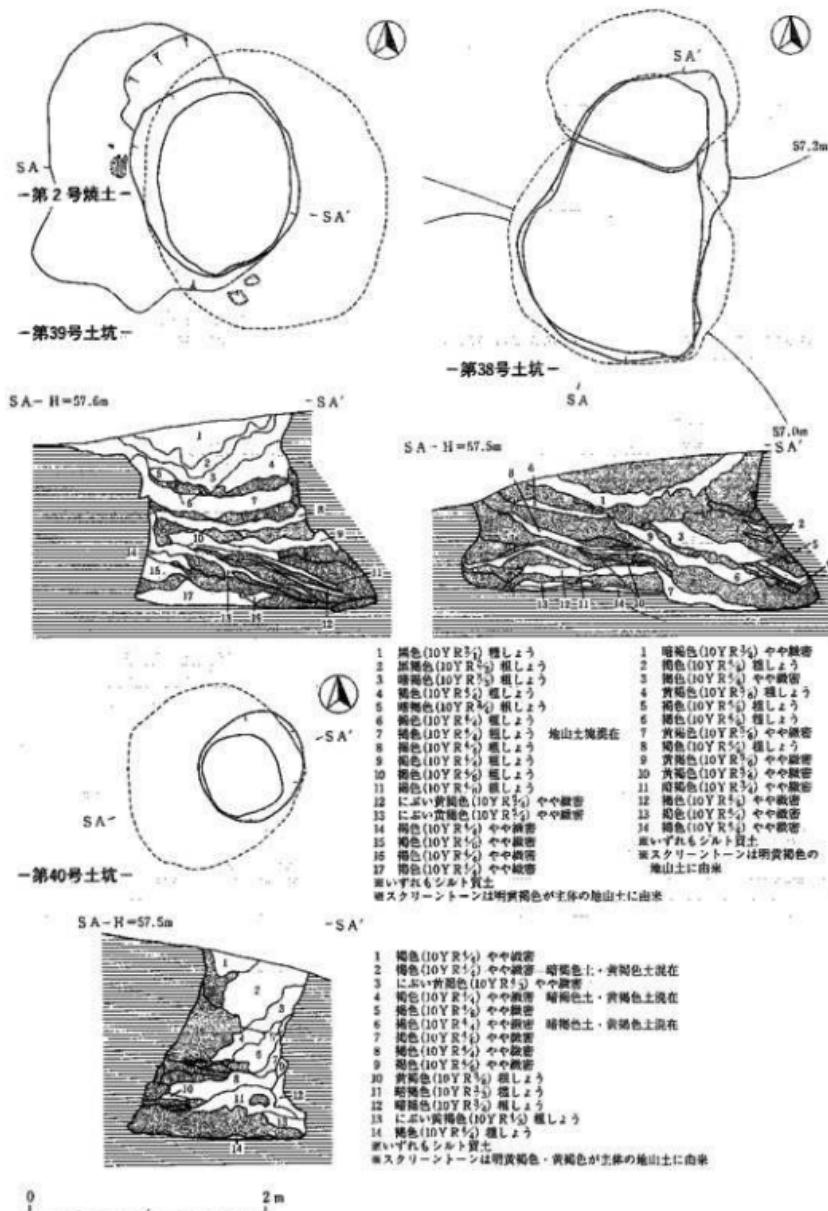
＜平面形・規模＞開口部は椭円形を呈する。南北方向に長軸があり、長径1m70cmである。底面は開口部に対し東に偏って広がっており、やはり椭円形を呈する。確認面から底面までの深さ1m60cmである。

＜埋土の状況＞底面直上に明瞭な炭化物の層があり、底面から中位にかけて、褐色土と明黄褐色土が互層に堆積する。旧地表面と壁の崩落あるいは風化に由来するものと考えられる。埋土中位の褐色土には、斑に地山土塊が混入しており、人為的埋土の可能性がある。上位は黒褐色土ないし黒色土に覆われる。

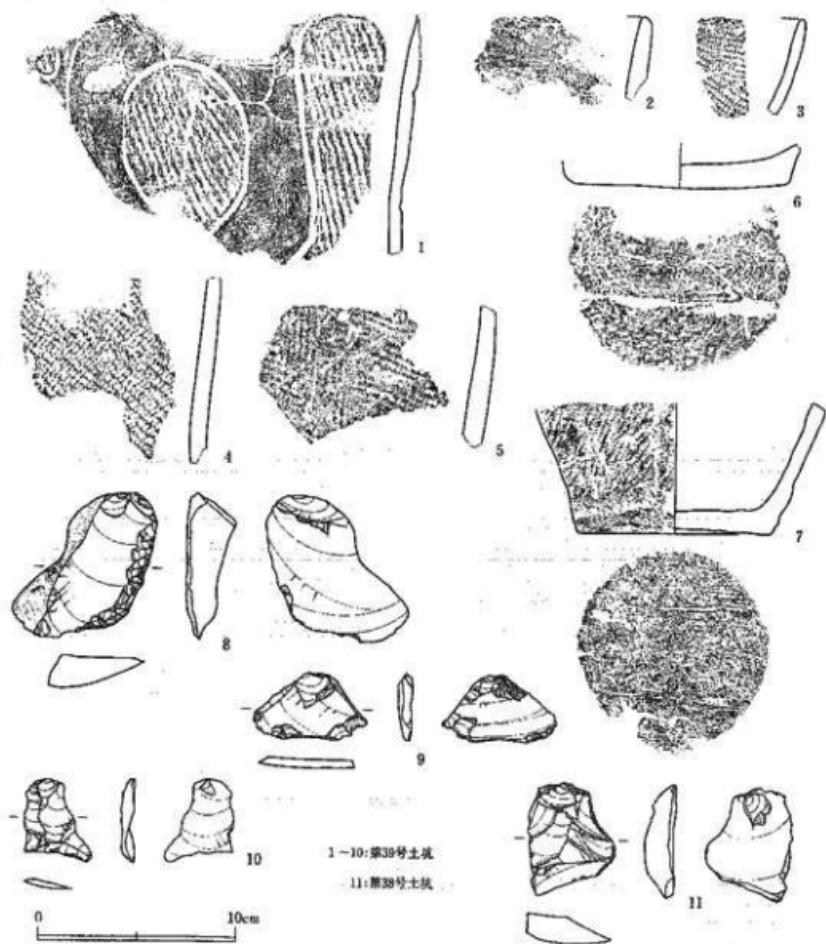
＜断面の形状＞開口部から中位までほぼまっすぐ落ち込み、中位から底部にかけて外側に広がる。本来はフ拉斯コ状を呈したものと考えられる。＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞確認面から埋土上位で土器16片（6個体）、剝片石器と剝片6点が出土し、底面から礫2個が出土した（第171図）。1・2は沈線区画にそって縄文が施される。大木10式のものである。3～5は縄文のみが施文される口縁部と体部の破片である。4・5は胎土中の砂粒が少なく1よりは古い可能性がある。6・7は底部であり、7の底面には雑な網代痕がある。胎土及び器面の砂粒が顕著である。8は背面の側辺に連続する二次加工が施されている。

第8-1節 K区の検出構造と出土遺物



第170図 第38号・第39号・第40号土坑



第171図 第38号・第39号土坑内出土遺物

9は折損しているが、刺片の末端にわずかに二次加工が施される。10は背面側の末端にわずかに微小剝離痕がある。

## 第40号土坑 (S K F 43) —第170図—

<位置・確認状況> J H21グリッド南東側、地山の明黄褐色土層面で暗褐色プランを確認した。

<平面形・規模> 開口部は円形を呈し、直径92cmである。底面は開口部に対し西に偏って広がる。確認面から底面まで深さ1m52cmである。

＜埋土の状況＞底面にうすく褐色土が堆積し、それを壁の崩落とみられる明黄褐色土が覆う。その上位には、主として褐色土、黄褐色土、明黄褐色土が混在する。黄褐色・明褐色土の土質も壁面に観察される地山とはやや異なり、人為的埋土の可能性がある。

＜断面の形状＞開口部が狭く、底部に向かって広がる。＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。なお、埋土下位に検出した炭化物を年代測定試料とした。

#### 第41号土坑（SK45）—第172・173図—

＜位置・確認状況＞KD28グリッド南西側のⅢ層暗褐色土中に遺物の集中を見つけ、その後地山の明黄褐色土層面で黒褐色土プランを確認した。

＜平面形・規模＞開口部は不整円形を呈し、直径75cm前後である。確認面から底面まで深さ80cmである。

＜埋土の状況＞埋土下半は褐色土の単層であり、埋土上位には、遺物の集中が認められる。下位層は、壁の崩壊土である壁側中位の層が落ち込む以前に堆積している点から人為的埋土の可能性がある。上位の遺物の集中は、浅い凹地となっていた部分への遺物の廃棄と考えられる。

＜断面の形状＞開口部が狭く、長さ20cmほどの頸部が残存し、底面が広くなるいわゆるフランクスコ状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。北端に径56cm、深さ15cmのピットがある。

＜遺物・その他＞遺物は、床面で土器片1点とこぶし大の礫3個が出土したほか、埋土上位で遺構プランの中央に集中しており、土器片113点、刺片7点が出土した（第173図）。土器片には細片が多いが8個体は識別される。5は半截竹管によって縦位の沈線が引かれる。中期前葉のものと考えられる。2・3・6、1・4は同一個体であり、いずれも沈線区画と磨消繩文で文様を構成する。大木10式のものである。7は折り返し口縁で、口縁部が肥厚する。体部に縦位の結節が走る繩文が施される、8～10は繩文のみが施文される。8・9は同一個体である。7～10も繩文中期後葉のものと考えられる。

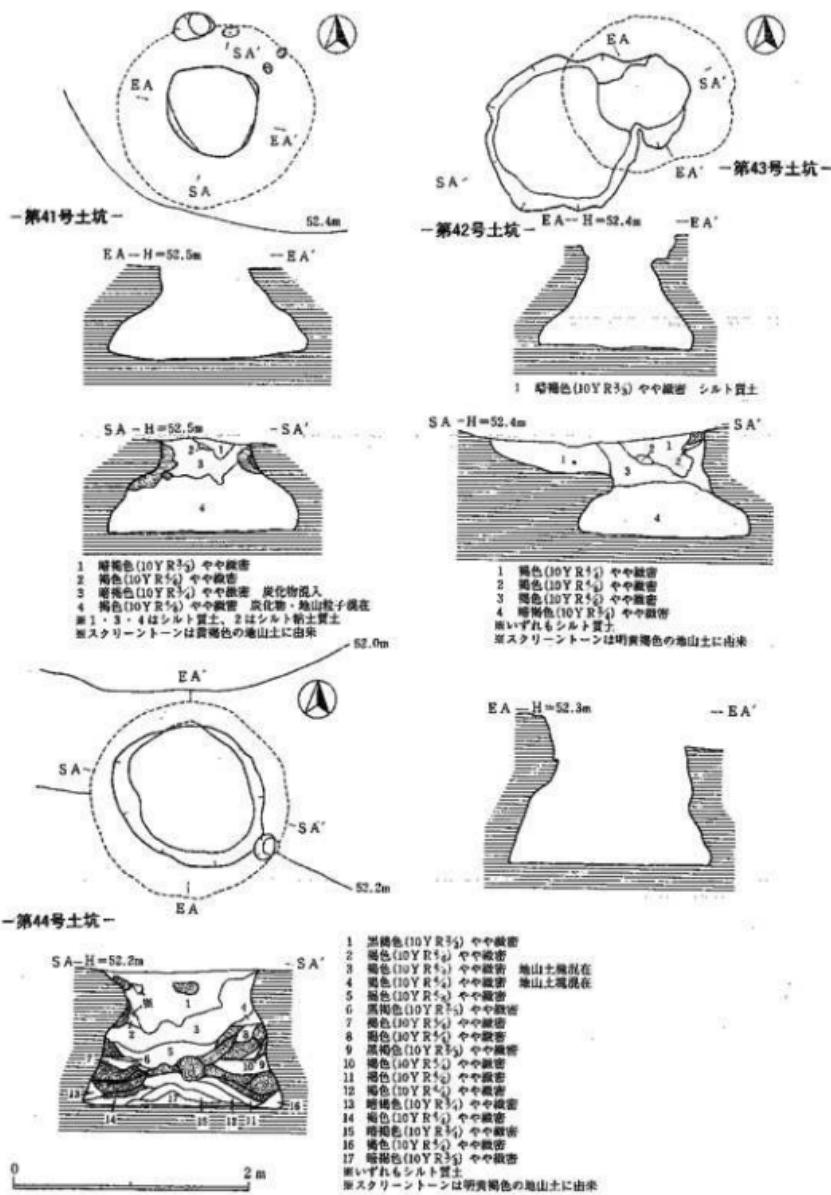
#### 第42号土坑（SK46）—第172図—

＜位置・確認状況＞KD27グリッド北西側、地山の明黄褐色土層面で褐色土プランを確認した。また、確認プランの東側に褐色土の張り出す部分が認められ、重複する第43号土坑と合わせて確認した。埋土断面の観察から本遺構が古い。

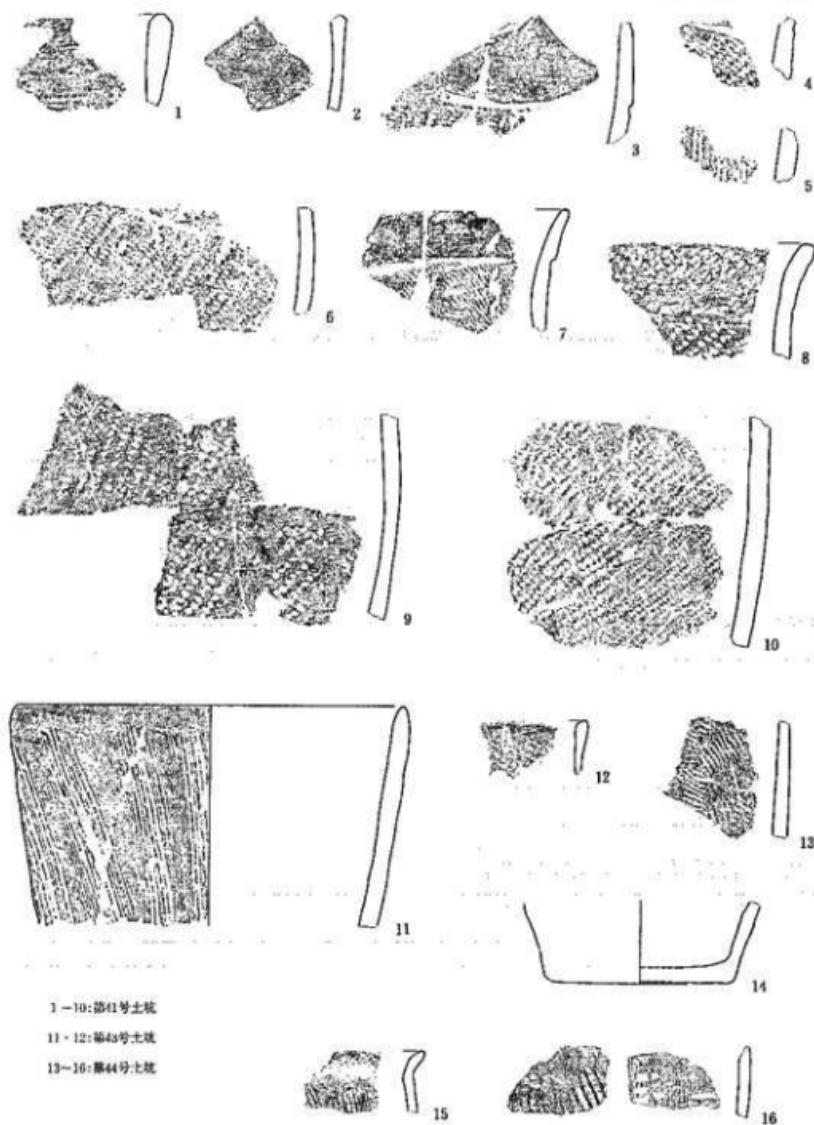
＜平面形・規模＞東側の一部が壊されているが、開口部はほぼ円形を呈したものと考えられる。

推定径1m30cmで、確認面から底面まで深さ30cmである。

＜埋土の状況＞炭化物をわずかに含む暗褐色土の単層である。



### 第172図 第41号・第42号・第43号・第44号土坑



第173図 第41号・第43号・第44号土坑内出土遺物

<断面の形状>開口部から底面にかけてゆるく丸みを帯びる。

<壁・底面の状況>底面はほぼ平坦である。<遺物・その他>出土遺物はない。

第43号土坑（SK48）—第172・173図—

<位置・確認状況>K D28グリッド北側で、重複する第42号土坑の検出時に確認した。

<平面形・規模>開口部は風化により不整な円形を呈しており、直径70cm前後である。確認面から底面まで深さ98cmである。

<埋土の状況>埋土下半は暗褐色土の単層であり、その後に褐色土の堆積が見られる。下位層は第41号土坑に類似した堆積状況から、人為的埋土の可能性がある。

<断面の形状>フラスコ状を呈する。<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>遺物は床面で11の土器が出土し、他に埋土上位から土器6片（5個体）、縄片、フレーク1点が出土した（第173図）。11は櫛歯状工具による条線が縦位に施される鉢形土器である。縄文後期のものと考えられる。12は縄文の施文された口縁部破片である。なお、底部で検出した炭化物を年代測定試料とした。

第44号土坑（SK49）—第172・173図—

<位置・確認状況>K D28グリッド北東側、地山の明黄褐色土層面で黒褐色プランを確認した。

<平面形・規模>開口部は楕円形を呈する。ほぼ南北方向に長軸があり、長径1m40cmである。確認面から底面まで深さ1m25cmである。

<埋土の状況>埋土下半は薄層が互層をなし自然堆積層と考えられる。埋土中位に地山土塊が多く混入し、人為的埋土とみられる堆積層がある。

<断面の形状>開口部に対し、底面が外にはり出す。

<底面の状況>底面は平坦であり、南西端に径35cm、深さ15cmのピットがある。

<遺物・その他>埋土上位から土器8片（5個体）、黒曜石の剥片1点、埋土下位で縄3個が出土した（第173図）。14は縄文土器底部。15・16は確認面で出土したロクロ土師器甕の口縁部と体部の破片である。

第45号土坑（SK51）—第174図—

<位置・確認状況>K E27グリッド中央、地山明黄褐色土層面で暗褐色土プランを確認した。

<平面形・規模>開口部は不整楕円形を呈する。東西に長く、長径1m15cmである。確認面から底面まで深さ34cmである。

<埋土の状況>全体に褐色土が堆積し、南半の上位を暗褐色土が覆う。

<断面の形状>開口部が広く、丸みを帯びて底面に続く。

<底面の状況>底面はおおむね平坦である。

<遺物・その他>埋土上位より土器小片2点が出土し、1点を図示した。1は縄文が施文された胴部破片である。胎土の砂粒がやや多く縄文中期後葉のものと考えられる。

#### 第46号土坑（SK39）－第174図－

<位置・確認状況>K H21グリッド中央、II層の黒褐色土層面で、暗褐色土プランを確認した。

<平面形・規模>開口部は不整円形を呈し、直径60cm前後、底面まで深さ15cmである。

<埋土の状況>第28号土坑に類似し、炭が充填されている。

<断面の形状>開口部から小さな底面にすぼまる。

<底面の状況>底面はやや丸くくぼむ。

<遺物・その他>遺構確認時に2点の縄文土器細片が出土した。摩滅著しく図化できない。なお、出土した炭化物を年代測定試料とした。

#### 第47号土坑（SK44）－第174図－

<位置・確認状況>LA25グリッド中央、II層中の黒褐色土面で炭化物の広がりを確認した。

<平面形・規模>ほぼ円形を呈する。直径90cmで、確認面から底面まで深さ5cmである。

<埋土の状況>第28・46号土坑に類似し、炭が充填されている。

<断面の形状>浅い皿状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。

#### 第48号土坑（SK50）－第174図－

<位置・確認状況>KF31グリッド西側の急斜面にある。地山の明黄褐色土層面で、黒褐色土プランを確認した。

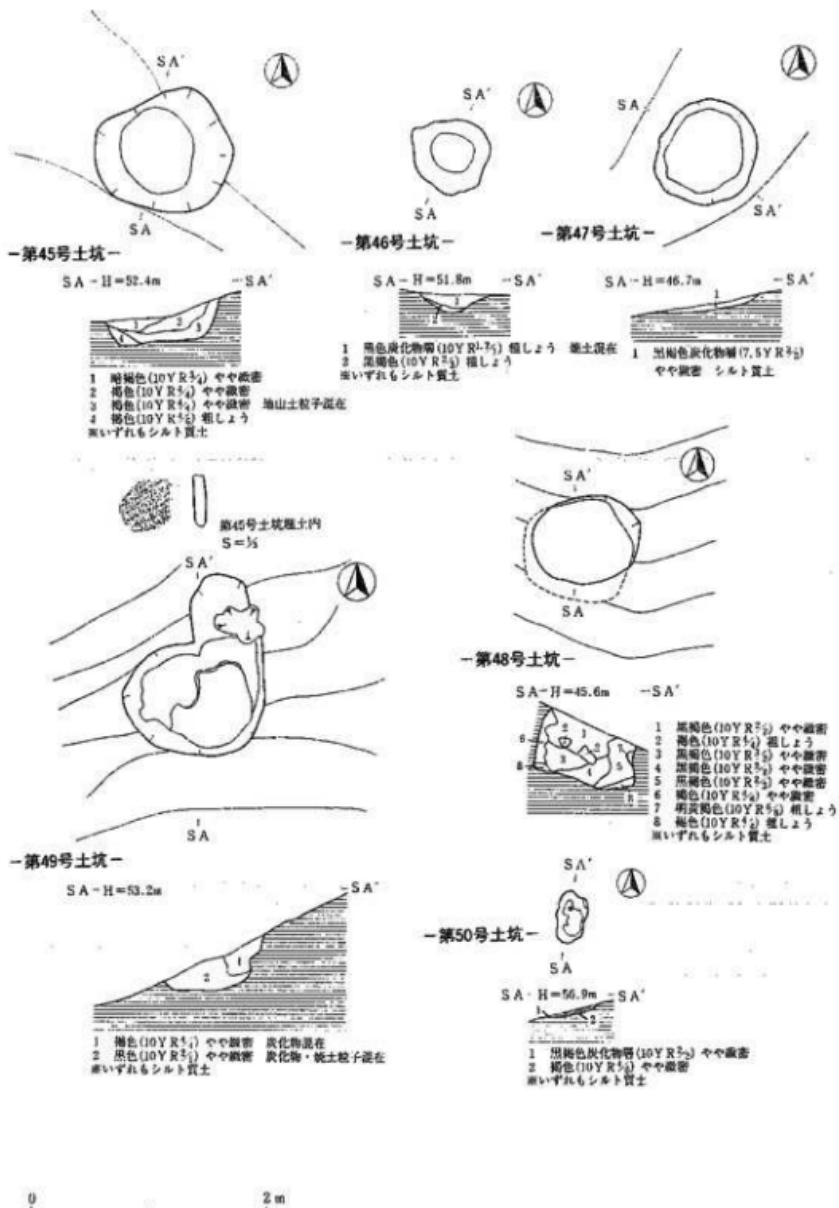
<平面形・規模>開口部はわずかに椭円形を呈す。東西方向に長軸があり、長径90cm・短径80cmで、確認面から底面まで深さ50cmである。

<埋土の状況>土坑中央に黒褐色土が堆積し、壁側には褐色土と地山土塊をやや多く混入する黒褐色土が堆積する。

<断面の形状>開口部より、底面がわずかに外にはり出す。

<底面の状況>底面はほぼ平坦であるが、地形にそって緩く傾斜し、北寄りに水平部分がある。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第174図 第45号・第46号・第47号・第48号・第49号・第50号土坑

**第49号土坑 (S K 26) - 第174図-**

<位置・確認状況> J G14グリッド北西側、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土プランを確認した。

<平面形・規模>開口部は楕円形を呈する。東西に長く長径1m20cmである。確認面から底面まで深さ28cmである。

<埋土の状況>小枝大の炭、焼土、地山土が混在する。

<断面の形状>底部が丸味を帯び、鍋底状を呈する。

<底面の状況>底面には少し凹凸がある。<遺物・その他>出土遺物はない。

**第50号土坑 (S K 34) - 第174図-**

<位置・確認状況> K B17グリッド南西側、Ⅲ層上位の暗褐色土層面で、炭を多く含む黒褐色土のプランを確認した。

<平面形・規模>不整楕円形を呈している。南北方向に長軸があり、長径44cm・短径25cmである。確認面から底面まで深さ5cmである。

<埋土の状況>浅い掘り込み内に、炭が充填される。

<断面の形状>浅い皿状を呈する。

<底面の状況>底面は平坦である。<遺物・その他>出土遺物はない。

**第1号焼土遺構 (S N 02) - 第169図-**

<位置・確認状況>第35号土坑開口部の南東側の縁にあり、第35号土坑精査中に確認した。確認状況では第35号土坑との明確な切り合いは確認できなかったが、同時期か古いと考えられる。

<平面形・規模>掘り込みではなく、地山面が焼土面である。半円形で、径20cm程に広がる。

<遺物・その他>出土遺物はない。

**第2号焼土遺構 (S N 03) - 第170図-**

<位置・確認状況>第39号土坑開口部の西側の縁にあり、第39号土坑精査中に地山面で確認した。第35号土坑の西側に地山がわずかにくぼむ部分がある。この窓地は不正楕円形を呈し、南北2m50cm、東西1m50cmほどの広がりがあり、焼土はこのほぼ中央にあたる。住居跡の可能性を考え、ピットの有無を精査したがピットは検出されず、ここでは焼土遺構として扱う。第39号土坑との明確な切り合いは確認できなかったが、同時期もしくは古い遺構と考えられる。

<平面形・規模>地山面が焼土面で掘り込みはない。長径18cm・短径15cmの楕円形を呈する。

<遺物・その他>出土遺物はない。

## 第41号陥し穴遺構 (SKT 43) - 第175図-

<位置・確認状況>丘陵尾根にあたるKE 17グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面で暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m61cm・短軸幅47cm、底部長軸幅3m92cm・短軸幅5cmである。確認面から最も深い部分で78cmである。

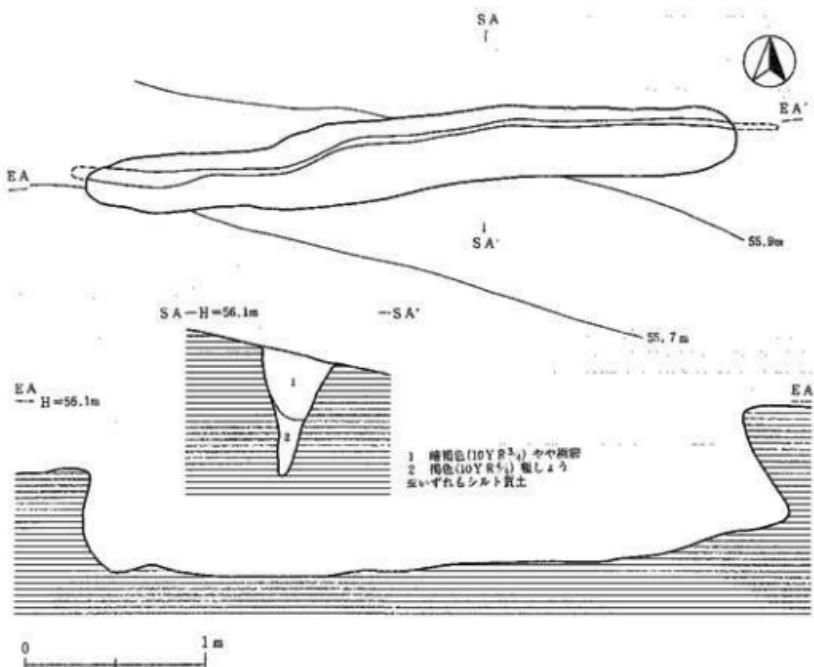
<長軸方向>N-85°-Eを向き、地山面の等高線にはほぼ平行する。

<埋土の状況>埋土は2層に分けられる。上位は暗褐色土が覆い、下位には褐色土が充填していた。

<断面の形状>長軸の断面形は、東側が開口部から斜め外方に直線的に、西側がほぼ垂直に下がる形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は波打っている。

<遺物・その他>埋土中位から剝片1点が出土している。



第175図 第41号陥し穴遺構

## 第42号陥し穴遺構 (SKT44) - 第176図-

<位置・確認状況>丘陵尾根にあたるK D18グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面で暗褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈している。開口部長軸幅3m45cm・短軸幅54cm、底部長軸幅4m・短軸幅6~8cmを測る。確認面から最も深い部分で1mである。

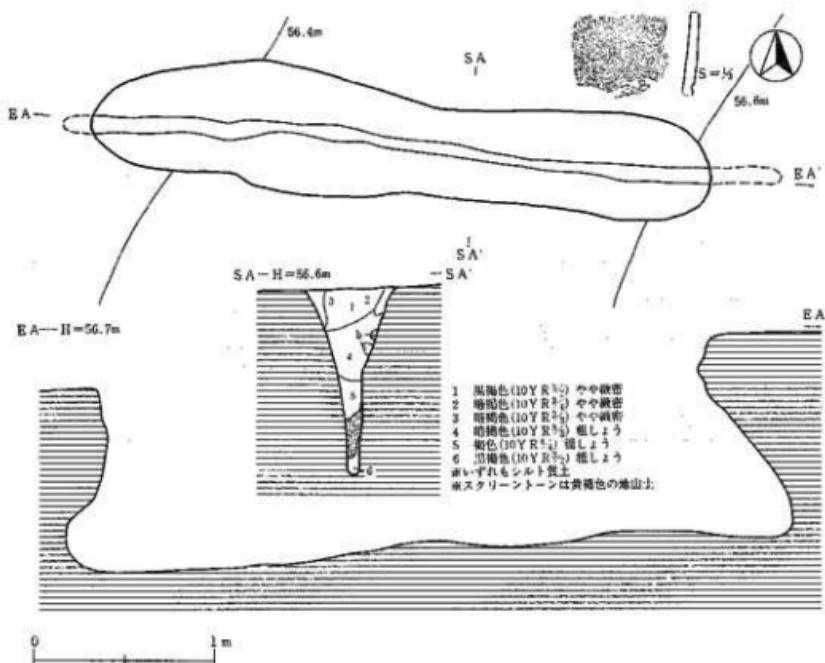
<長軸方向>N-88°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況>埋土は大きく7層に分けられる。底面に黒褐色土がうすく堆積した後に疊の崩落土である褐色土・黄褐色土が、その上に暗褐色土・黒褐色土が自然堆積していったとみえる。

<断面の形状>長軸の断面形は、西側がS字に入り込み、東側は外方へ袋状に広がる形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底面まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は大きく波打っている。

<遺物・その他>埋土中位から土器片1点が出土した。刺突列で縄文部を区画するもので縄文中期後葉のものであろう。



第176図 第42号陥し穴遺構

## 第43号陥し穴遺構 (SKT42) - 第177図-

<位置・確認状況>丘陵尾根にあたるKD18グリッド南西側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>幅が広く橢円形に近い形状を呈する。開口部長軸幅3m45cm・短軸幅78cm、底部長軸幅3m56cm・短軸幅9cmである。確認面から最も深い部分で1m25cmである。

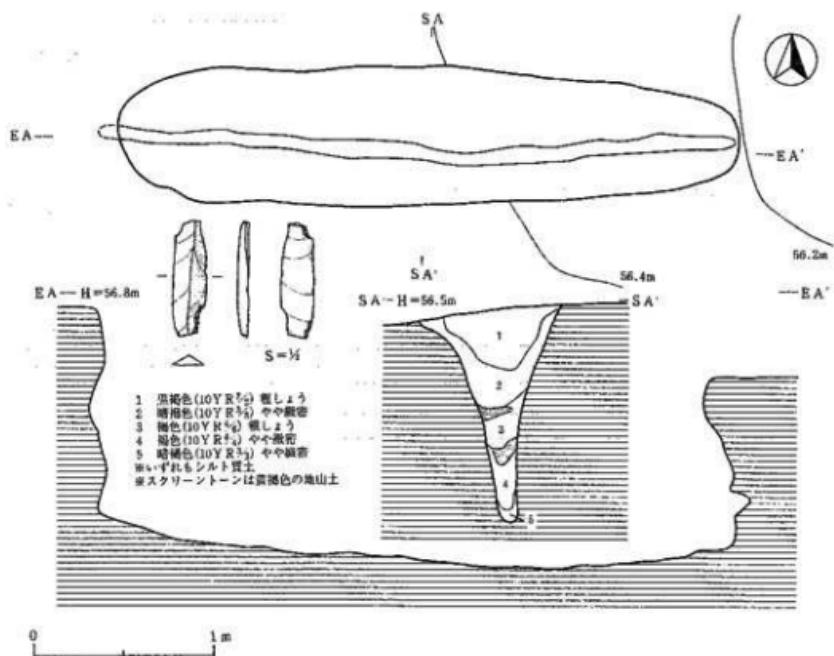
<長軸方向>N-89°-Wを向き、地山面の等高線に直交する。

<埋土の状況>埋土は7層に分けられる。底面に暗褐色土がうすく堆積した後に、壁の崩落である褐色土・黄褐色土が覆い、その上に暗褐色土・黒褐色土が自然に堆積していったとみえる。

<断面の形状>長軸の断面形は、西側が開口部から底面にかけてほぼ垂直に下がり、東側は中位から下が外方にふくらむ形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底面まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況>底面は弓なりにくぼんでいる。

<遺物・その他>埋土上位から微小剝離痕のある刺片が1点出土している。



第177図 第43号陥し穴遺構

## 第44号陥し穴遺構 (SKT45) - 第178図-

<位置・確認状況>丘陵北斜面K B22グリッド北側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

<平面形・規模>細長い溝状を呈しているが、東側の幅が広く、西側は狭い。開口部長軸幅3m27cm、短軸幅最大で60cm・最小で27cm、底部長軸幅3m45cm・短軸幅10~14cmである。確認面から最も深い部分で92cmである。

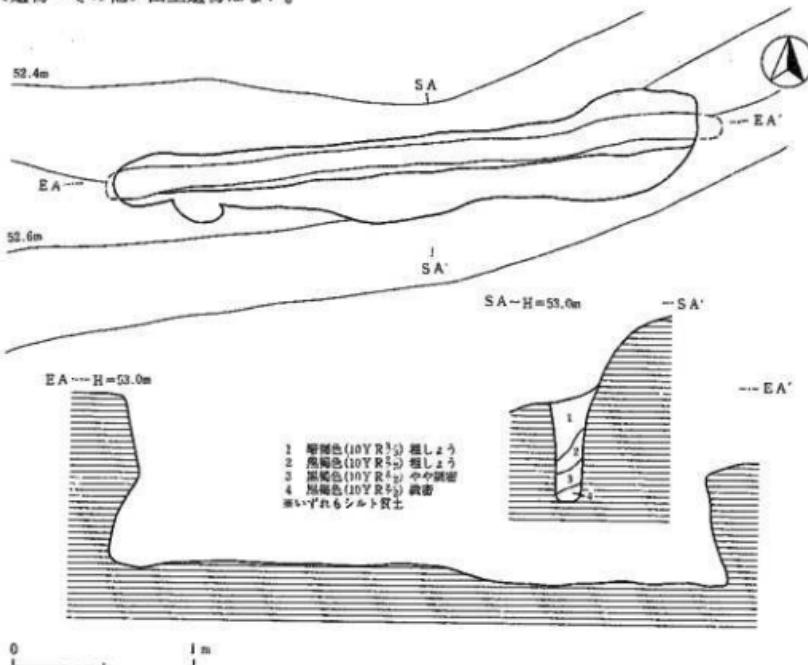
<長軸方向>N-84°-Wを向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況>埋土はおおよそ4層に分けられる。上位は暗褐色土が覆い、中位から下位には黒褐色土が充填していた。最下位の黒褐色土に地山土塊が混在している。

<断面の形状>長軸の断面形は、開口部及び壁の中位で、外方へ袋状に広がる形状を呈する。短軸の断面形は、南壁の状況からみると開口部から中位が一様な傾斜をもち、下部が垂直なY字状を呈する。

<底面の状況>底面は波打っている。

<遺物・その他>出土遺物はない。



第178図 第44号陥し穴遺構

## 第45号陥し穴遺構 (SKT 46) — 第179図 —

<位置・確認状況> K D24グリッド西側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをつけ確認した。

<平面形・規模> 細長い溝状を呈している。開口部長軸幅 2m 80cm、短軸幅 31cm、底部長軸幅 2m 58cm、短軸幅 9cm を測る。確認面から最も深い部分で 97cm である。

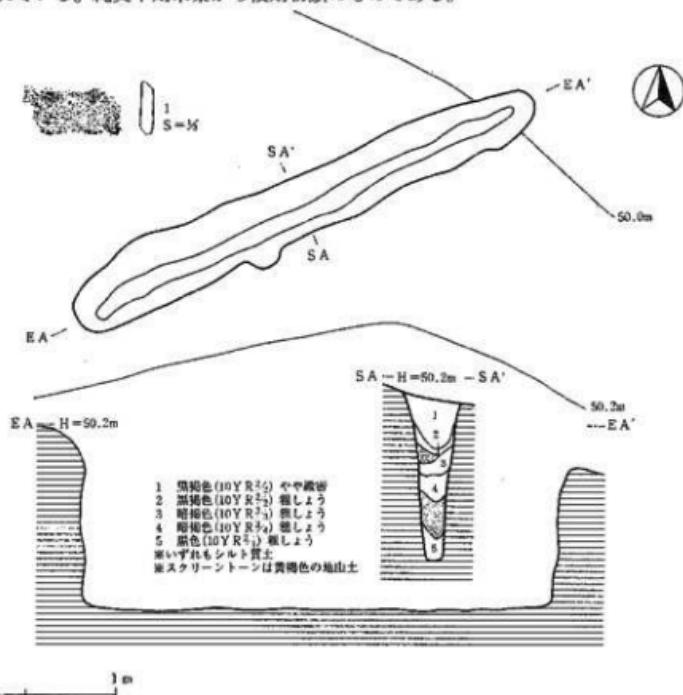
<長輪方向> N-63°-E を向き、地山面の等高線に平行する。

<埋土の状況> 埋土は大きく 6 層に分けられる。底面に黒色土が堆積した上に壁の明黄褐色土がつまり暗褐色土、黒褐色土の順に自然堆積しているとみえる。

<断面の形状> 長輪の断面形は、開口部から底部にかけてほぼ垂直に下がる形状を呈する。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

<底面の状況> 底面は平坦である。

<遺物・その他> 埋土上位において土器片 2 点が出土した。2 点とも摩滅著しい。1 は葉脈状文が施されている。縄文中期末葉から後期初頭のものである。



第179図 第45号陥し穴遺構

## 第46号陥し穴遺構 (SKT47) - 第180図-

＜位置・確認状況＞KD24グリッド北西側で、地山の明黄褐色土層面で黒褐色土の落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞細長い溝状を呈している。開口部長軸幅2m65cm・短軸幅34cm、底部長軸幅2m43cm・短軸幅6~12cmを測る。確認面から最も深い部分で75cmである。

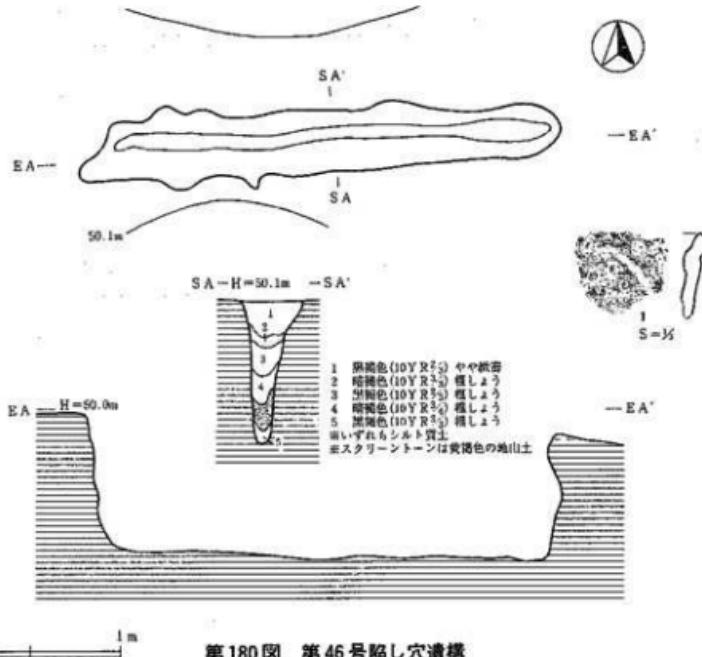
＜長軸方向＞N-88°-Eを向き、地山面の等高線に平行する。

＜埋土の状況＞埋土は6層に分けられる。底面に黒褐色土が一様に堆積した上に、壁の崩落土とみられる地山土塊を含む褐色土がつまり、その後暗褐色土と黒褐色土が交互に自然堆積している。

＜断面の形状＞長軸の断面形は、開口部から底部にかけて、内側にすぼまり逆台形状を呈する。ただし東側中位はわずかに外にふくらみをもつ。短軸の断面形は、開口部から底部まで一様に傾斜し、V字状を呈する。

＜底面の状況＞底面は平坦である。

＜遺物・その他＞埋土上位で土器片2点が出土した。2点共摩滅著しい。1は弧状の沈線区画があり、口縁部内面にも隆帯が付く。縄文中期末葉のものである。



第180図 第46号陥し穴遺構

## 第8-2節 K区の遺構外出土遺物

出土した遺物には、縄文時代及び弥生時代・平安時代の土器・石器などがあり、コンテナにして38箱程である。縄文土器の量が多く、石器は10箱程である。南側丘陵南東側の斜面と南北丘陵間の沢部からの出土が多い。

=土器= 婦属時期で分類し、器形・部位、文様の特徴を説明し、最後に型式上の分類を付記した。第181図-第190図まで実測図を掲載した。説明は通し番号で行った。

### [A: 縄文時代前期の土器群] - 第181図1・2 -

1は深鉢の胴部破片である。胎土中に微量の纖維を含む。外面に斜縄文が施される。

2は円筒形の深鉢の口縁部である。幅の狭い口頭部に、平行する撫糸圧痕文が施される。

\*1は前期前葉のもの、2は円筒下層d式に比定される。

### [B: 縄文時代中期前葉の土器群] - 第181図3-第187図72-

3-16は基本的に円筒深鉢形を呈し、口頭部がやや外傾する器形となる。多くは4単位の大きな突起を持つが、平縁のもの(15)もある。口縁上端は隆帯の貼り付けや折り返し口縁風に肥厚するものが多い。突起下には垂下する隆帯(3・12・13)や橋状把手(4・11・15・16)が付く。口頭部文様帶には撫糸圧痕文・緒条件圧痕文が平行に(3-16)施される。文様帶の下端は隆帯で区切られる。口縁端部・頭部の隆帯には縄文が施されるもの(3・16)縦位の圧痕が施されるもの(4-17)がある。3の突起頭部は隆帯の貼り付けにより肥厚させた上に、さらに鉢巻状に隆帯を貼り付けている。10は胴部がやや張る器形となる。16の胴部には横位の縄文結節の回転が見られる。また、内面の胴部下半に炭化物の附着が著しい。

17-27の器形は16に共通する。やはり4単位の突起をもつものと平縁(22)のものがある。

18・23の突起は頭部が二股に分かれ。23の突起先端部は内面側に厚くなっている。また17の突起頭部は3に類似して隆帯が巡らされ、その隆帯が内面側に厚く張り出す。17の波頭部下には円形あるいは橋状の把手がついたようだが剥落している。口縁上端は隆帯によって肥厚するほか、20-23のようにさらに縦位に短い粘土紐を貼るものもある。17-27とも口頭部の文様要素として、爪形圧痕文が加えられる点が特徴である。口頭部文様帶には18・20-24のように鋸歯状の隆帯の貼り付けがあり、隆帯に沿って撫糸の圧痕も施される。20の鋸歯状の文様が多段になる点、あるいは24のように文様帶下端の隆帯に弧線が付加される点など文様帶の構成の複雑化と文様帶が広くなる傾向がある。25・27は器厚も薄く、小型のものであろう。

28は口縁部が直立気味で、胴部が丸くふくらみ円筒状の底部に続く器形である。口縁は波状口縁となるものであろう。口縁端部は内面側に折り返し口縁風に肥厚し、外面は短沈線によって刻まれる。口縁部下の平行沈線に挟まれる位置に粗い交互刺突文が巡る。

29は体部の膨らみは無く円筒状の器形になるものと考えられる。口縁部の隆帯は縦位の短沈線

によって刻まれる。口縁部下に交互刺突文が施される。

30は小さい筒状の突起であり、撲糸圧痕が施される。突起下の口縁端部から連続する隆帯は縱位の圧痕が施されている。

31は平縁、広口の鉢で、口縁部は緩く外傾し、胴部中央で強く屈曲する器形である。口縁部は縱位の短い隆帯によって4単位に区画され、この隆帯を挟んで口縁部下端を巡った隆帯が上方に反転する。上方の隆帯は短く止まり、隆帯間に撲糸圧痕文が施される。胴部は口縁部の区画にあわせて波状の隆帯が垂下し、隆線間に半截竹管により逆T字状の文様が描かれる。沈線間に半截竹管の刺突列が付される。

32は口縁部が外傾する深鉢の頸部から胴部の破片である。口縁部に波状の隆帯が垂下しその下に半截竹管による台形状の文様が描かれる。

35は口縁部が外傾し、円筒状の胴部が中央でかすかには器形である。口頸部には鋸歯状のモチーフが描かれ、胴部は頸部から垂下する隆帯で区画され、隆帯に沿って沈線が引かれる。口縁上端と頸部・胴部の隆帯上に半截竹管の刺突列が付される。

33・34・36-39は深鉢の破片で、半截竹管による文様が描かれる。34は口縁部下に円形の剥落がある。地文の繩文が口唇部にも施される。内面及び断面には成形時の粘土帯の痕跡が顕著に残り、波頂部下の内面では三角形に凹んでいる。36-39は地文が撲糸文である。

40は浅鉢、41は小型の鉢の破片で、40では口縁部・胴部、41では口縁部の平行沈線間に半截竹管の刺突列が付される。

42-45は断面が三角形になる隆線によって文様が描かれたものである。42は口頸部が緩く外傾し胴部がややふくらむ深鉢である。口縁部に大きい鋸歯状に隆帯がめぐる。隆帯が口縁端部に接する部分は円文となり口縁にかすかに高まりを作る。43・44は口縁部破片で、43は小さな突起部に隆線を巡らせる。44は内面に成形時の粘土紐の痕跡が顕著に残る。45は円文の部分だけが突起状に付けられたものである。

46・47は浅鉢である。46は波状口縁である。口縁端部の内外面が無文で肥厚し、装飾効果をだす。47は口縁のかすかな高まりの下に菱形文があり、その頂部から隆線がのびる。隆線は部分的に波状になる。

48-58・60は撲糸圧痕により文様を描くものである。54は体部上半に最大径のある深鉢である。口縁部は横長の橢円形の隆帯で4単位に区画される。体部は口縁部の区画とはずれてY字状の隆帯が2本一組で垂下する。隆帯に沿って撲糸圧痕が施される。48-51・53・56は深鉢の口縁部、57・58は深鉢の胴部の破片である。50・51・56・57は54と同様に隆線に沿って撲糸圧痕が施されるが、隆線は54より細い。撲糸圧痕は口縁部に平行するもの(49)、弧状となるもの(50・51・53・55)があり、また56では口縁部に渦巻文が描かれる。57は胎土中に微量の金雲

母が混入している。55は波状口縁の突起部、52は小型の鉢と考えられる。

59は器壁が薄く、小型の鉢の胴部と考えられる。斜行する沈線の屈曲部には潰れた粘土粒がつき、その部分に縄文結節が垂下する。

60は口縁部が強く外傾し、直線的な胴部がやや鼓形に張る底部に続く器形である。口縁部には厚く大きい突起が付き、頸部には細い隆線と撫糸圧痕が巡る。口縁部・胴部とも撫糸圧痕による弧線と渦巻の組み合わせで文様が描かれる。

61は口縁部が緩く外傾し、体部がゆるく張る器形である。口縁端部が内側に厚みをもつ。また屈曲部に瘤状の貼付があるが、周囲と一緒に縄文が施されている。

62は口縁部が直立する無文の鉢である。器面に成形時の粘土紐の痕跡を残している。

63~67は地文のみの土器である。63~65は口縁部が折り返し口縁となっている。

68は円筒状の器形である。口縁部は平縁と考えられるが、2単位の突起が付く可能性もある。頸部には2単位に瘤状の突起が付き、そのやや下方に半截竹管の刺突列がめぐる。頸部の瘤に対応し体部文様も全体に2単位である。垂下する沈線の接点はB字状に連絡する。沈線間の格子目は先に縱方向、つづいて横方向の線が引かれている。

69~71は68に類似する胴部破片である。

72は深鉢の胴部破片である。横位の沈線はやや太く、沈線の両側は地文の上に粘土の高まりが被っている。また垂下する隆線には2条の沈線が沿っている。

※3~16、17~27は円筒系で前者が円筒上層a式、後者が円筒上層b式に比定される。28~60・72は大木系で、28・31・32は大木7a式、42・43は7b式に比定される。33・34は半截竹管による文様表出技法の共通性で本群に含めたが、前期まで遡るかもしれない。29は五領ヶ台式との関係が考えられる。60は器形的に古い特徴を示すが、体部文様は54のような区画を取り除き横位に展開しており、大木7b式から8a式にかけてのものととらえておく。68~71はいわゆる北陸系の土器で、新崎式との関係が強い土器である。

【C：縄文時代中期後葉～後期前葉の土器群】—第187図73~第189図124—

73・74は深鉢で波状口縁を呈する。3本一組の沈線あるいは隆沈線によって文様を構成する。

75は深鉢に付く突起部で、上面は隆帶で渦巻を表している。76は深鉢の体部で沈線と充填縄文による縱位の懸垂区画と梢円文がある。

77~101は、沈線(77・78・86・92~96)・隆帶(79~81・87・97~101)の区画と磨消縄文によって文様を構成するものである。77~91は深鉢の口縁部破片であり、83・86では口縁部内面にも隆線が巡る。83は上下2段の円形の透かしとなっている。85は器外面側として図化したが内面となるかもしれない。87では隆帶に沿って刺突が施される。88~90は口縁部無文帯の下に沈線が引かれている。下部には縄文のみが施文される。胴部文様では、割付後に縄文・撫糸文

の施文を行い、その後92~96では沈線により、97~101では隆帯により区画され、縄文のはみ出る部分が磨消される。92・94~101は深鉢、93は傾きがやや大きく浅鉢の可能性もある。

102~107も沈線（102~104・106・107）・隆帯（105）の区画によって文様を構成するものであるが、区画内に沈線により葉脈状文の施される土器である。いずれも深鉢で、102は口縁部、他は胴部の破片である。

108~111は深鉢の胴部で、108では沈線間に粗い刺突が付される。109・110は地文上に沈線が引かれ、111は沈線が縄文部と無文部を区画している。いずれも細い沈線が引かれている。

112・113は深鉢の口縁部に近く、114は胴部の破片である。前者では隆帯が疑似口縁状になっている。114の胴部の沈線区画は部分的な隆帯が付く。

115は深鉢の口縁部で、波状口縁となる。口縁部下には刺突列の沿う隆帯が巡る。

116・117は撚糸文上に沈線と磨消による文様が描かれるが、磨消が雑になっている。117は口唇にも沈線が引かれる。器面の文様は口縁から底部まで広がって描かれる。

118は深鉢の胴部である。3条一組の継位の沈線を地文とし、その上にさらに沈線によって曲線的な文様が描かれている。

119は小形の鉢である。頭部に刺突列が巡り、胴部には磨消縄文手法により入組文が描かれる。

120は深鉢で、頭部に撚糸圧痕が巡る。口縁部は無文、胴部に縄文が施される。

121~124は地文のみの土器で、いずれも深鉢である。121は口縁部で、口縁がわずかに外傾する。122は胴部、123は底部で、底面の縁がやや角張り、直線的に胴部に立ち上がっている。底面には雑な網代痕がある。

124は深鉢の胴部下半である。胴部下端より一回り小さい底部から緩やかに胴部に立ち上がる。底面はやや上ヶ底状である。器厚が厚く、16~18mmの厚さがある。器面の半分は縄文が施され、残り半分には撚糸文が施されている。表面の下方は二次加熱により剥落した部分が多く、内面には煤状炭化物が付着している。

※中期では73・74は大木8b式、75・76は大木9式に比定される。77・78は大木9・10中間式、79~87・92~101は大木10式と考えられるが、胴部破片では前者とすべきものが含まれるかもしれない。112・113は後期初頭の門前式に、117・119は後期前葉の宮戸Ib式に比定される。

102~107は近年県内の類似資料が蓄積されてきているものである。大曲市の太田遺跡では文様の全体がわかるものが確認され、後期初頭に位置づけられている。また、115も秋田県内県北地区で出土例があり、後期初頭の位置づけが検討されている。121~124は後期初頭から前葉の粗製の土器である。

[D : 弥生時代前半の土器群] - 第190図125~127-

125は波状口縁を呈する浅鉢である。胴部には変形工字文が描かれ、また口唇部・口縁部内面にも沈線が引かれる。

126は鉢である。口縁部外面には3本一組、口縁部内面には2本の沈線が巡る。

127は甕の口縁部で、無文部下に3本の沈線が巡っている。

\*125は砂押式に比定され、126・127はそれより新しい段階のものと考えられる。

[E : 弥生時代後半の土器群] - 第190図128~144-

128~130は鉢の口縁部、131は胴部である。128は口縁部に沿って上向きの緩い弧線が引かれ、その中は沈線によって刻まれる。下方には3本一組で下向きの緩い弧線が引かれている。129では沈線間に右方向からの円形の刺突が充填される。130は口縁上端側に下向き、下方に上向きの連弧文を配している。

132は深鉢の口縁部で、口縁部が内彎する。器面には縄文上に、2本一組の沈線により、変形工字文が描かれる。内面には調整痕が顕著である。

133は肥厚する口縁端部が剥落した深鉢の口縁部と考えられる。縄文上に2本一組の沈線が引かれる。

134~143は附加条縄文あるいは撚糸文の施された胴部破片、144は底部である。

\*129・130は天王山式に比定され、134~144も弥生後期のものである。128・132はこれよりやや古い段階のものと考えられる。

=土製品= - 第189図145・146-

耳飾り2点が出土した。ともに破片であるが、環状を呈したものであろう。外縁部は滑車状の凹面となっている。146では上下両面に、145では残存する片面に二重に刺突列が巡る。

=石器= 出土した石器には石鎌・石匙・石箇・不定形剝片石器・石錘・磨製石斧・凹石・磨石・砥石などがある。いずれも縄文時代のものである。第191図~第202図に実測図を掲載した。説明は挿図の通し番号で行った。

[1 : 打製石器] - 第191図1~第197図63-

1~7は石鎌であり、1~5は有茎のもの、6・7は無茎で、基部が凹を呈するものである。

9は尖頭器である。小型で両面を二次加工により整形している。

10~17・19は石匙である。基本的に縱長のもので、10~13・15は背面全体に丁寧な押圧剝離が加えられている。19は基部と先端部を欠損している。

8・18・21は石箇である。小型で両面に二次加工が施されている。

20は両面に丁寧な二次加工が施されているが、欠損品で全体は不明である。

25は縦長の剥片を素材とし、背面の全周に二次加工が施されている。最終的な刃部と見られる図の左上側の直線的な部分を除き、剥離面の陵線は摩耗が著しい。

22~24・26~39・41・43・45・47~49・52・57・59~61・63は二次加工のある剥片である。石器の縁辺が鋭く直線的な部分を刃とみなした場合、二次加工によって刃部を作り出すもの（22・23・28・30・31・33~37・39・43・48・59）と、刃部は素材剥片の鋭い縁辺にあり、刃つぶし状に二次加工を施すもの（26・29・32・41・45・47・52・57・59~61・63）、二次加工は施されているが刃部の不明瞭なもの（24・27・38・49）がある。なお、23では石器の片側全体に漆が付着している。

40・42・44・46・50・51・53~56・58・62は微小剥離痕のある剥片である。いずれも、刃部と見られる素材剥片の鋭い縁辺に微小剥離痕がみられる。42・44・46・51・55・56・58・62は比較的小さい剥片を素材としている。

#### [2：磨製石器] - 第197図64~68-

64~68は磨製石斧で、66・67は完形、64・65と68は基部側を欠損するが全体に小さい。67は片刃で、側辺に3ヶ所づつの溝がある。65~67では刃部の摩耗が著しい。

#### [3：礫石器] - 第198図69~第202図96-

72は打製礫石器で細長い亜角礫の一端に刃部が作られている。

71は偏平な礫の四方に打ち欠きが加えられた石錘であるが、図の下辺は半円状扁平打製石器状となっている。

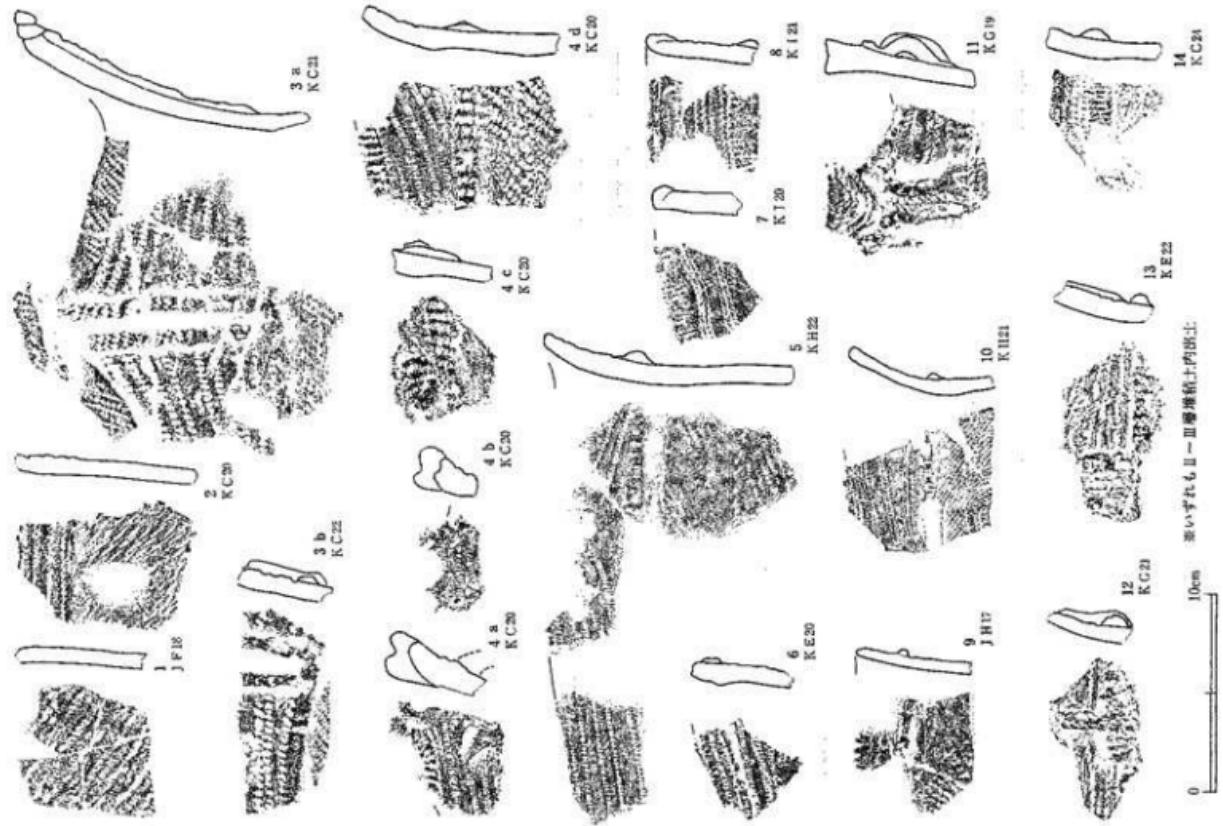
73~85・87・90は凹石である。凹部が1面のもの（82~84・87）、2面のもの（74・78~81・90）、3面のもの（77・85）、4面のもの（73・75・76・41）がある。なお、87・90では2面が磨面となっている。90の片面は凹部が古いが、残りの面と87では磨面より凹部が新しい。75では部分的に線刻がある。

69・70はやや偏平な礫の幅の狭い側辺に、88・89・91~95は手中にできる大きさの円盤の1面（91~95）あるいは2面（88・89）に磨面のある磨石である。また、96は台石状の大きいもので広い磨面がある。

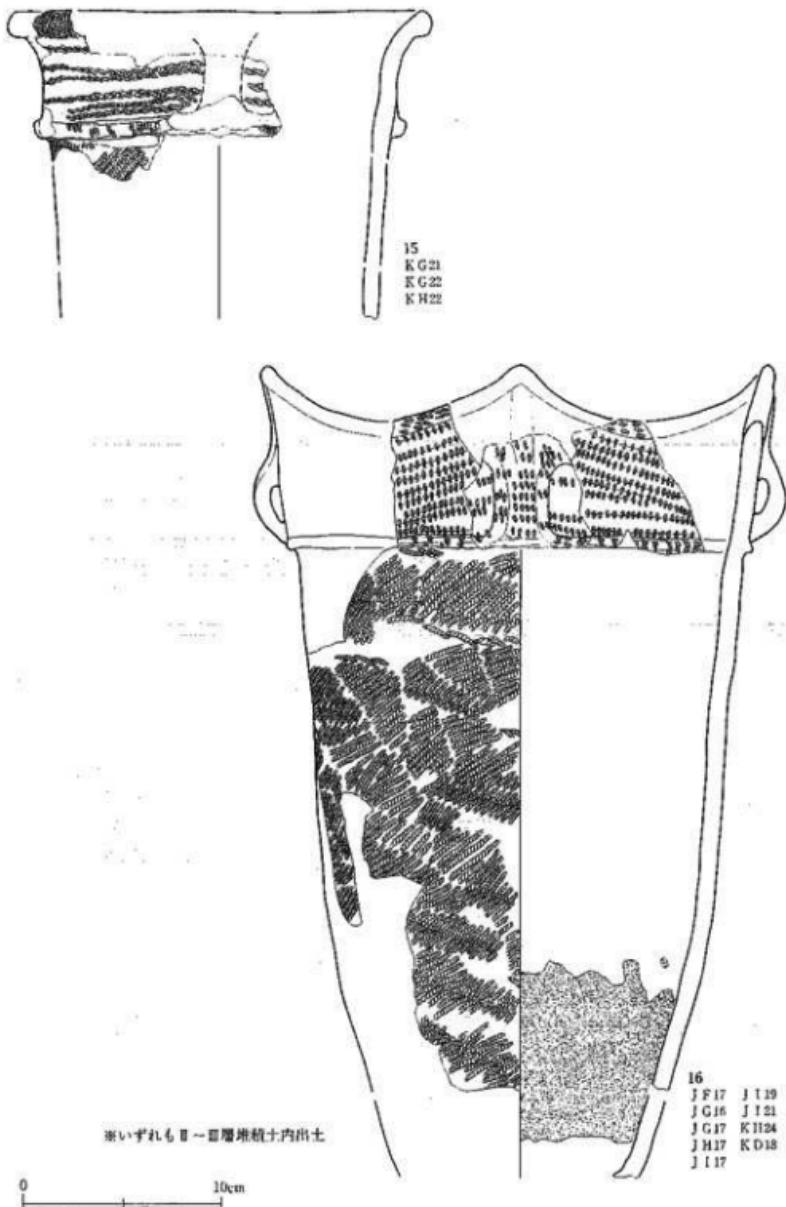
86は幅1~0.5cmほどの溝状のくぼみが2条ある砥石である。

#### =金属製品= - 第190図-

寛永通宝が1点出土した。図の縮尺は1/2である。



第181図 K区の邊縁外出土遺物一土器(1) —

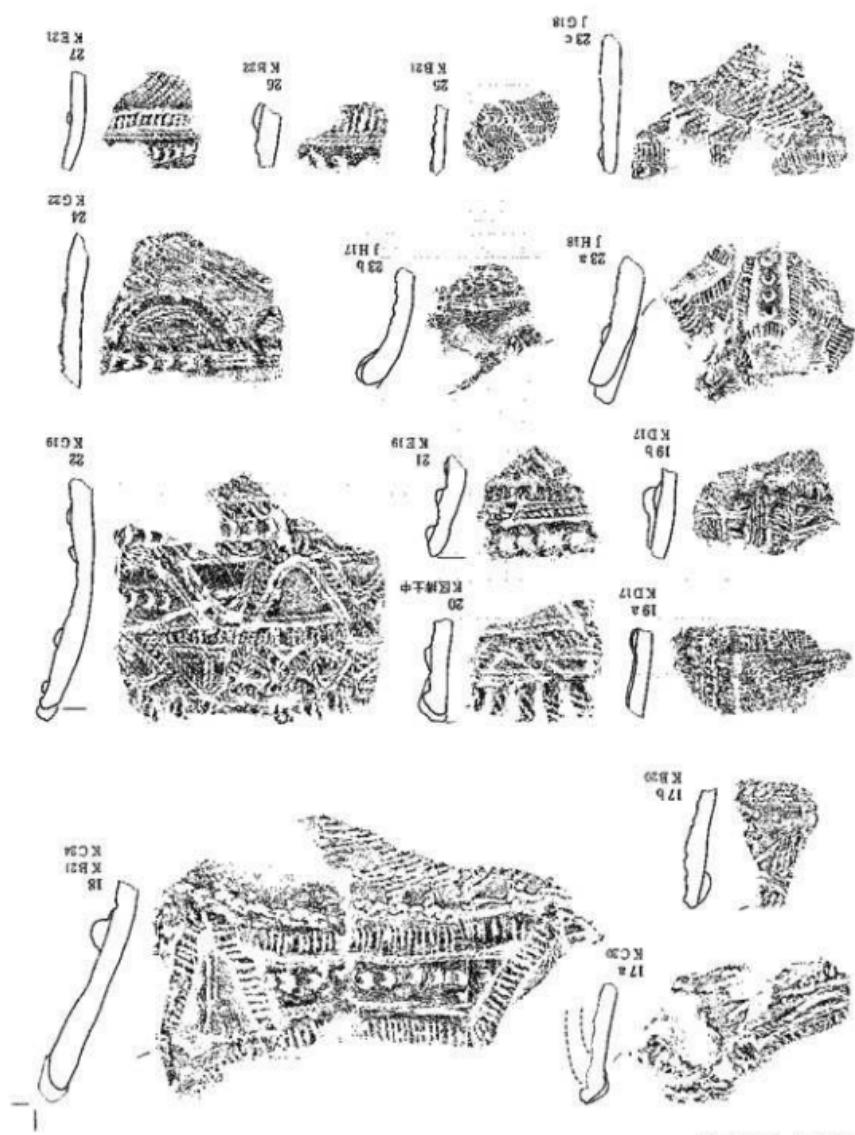


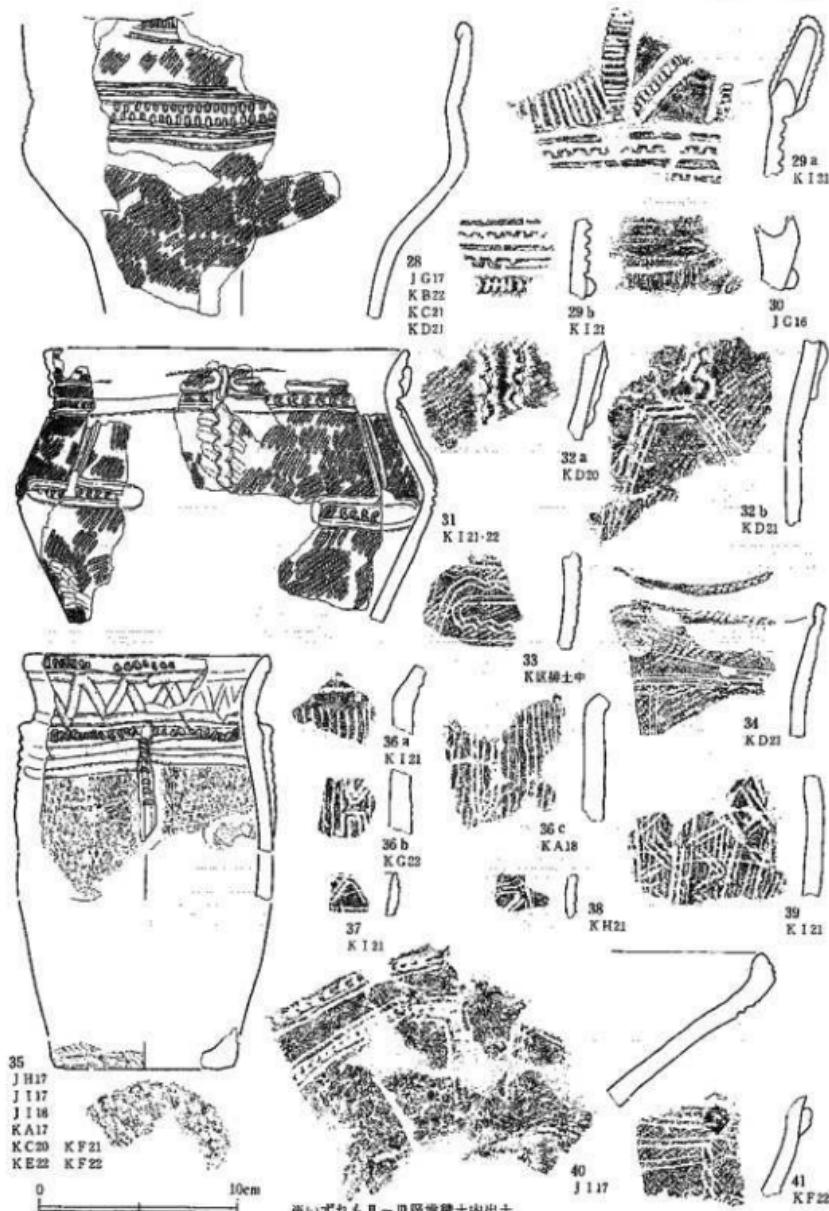
第182図 K区の遺構外出土遺物－土器（2）－

第183圖 K区の遺跡外出土遺物一王器(3) -

10c-0

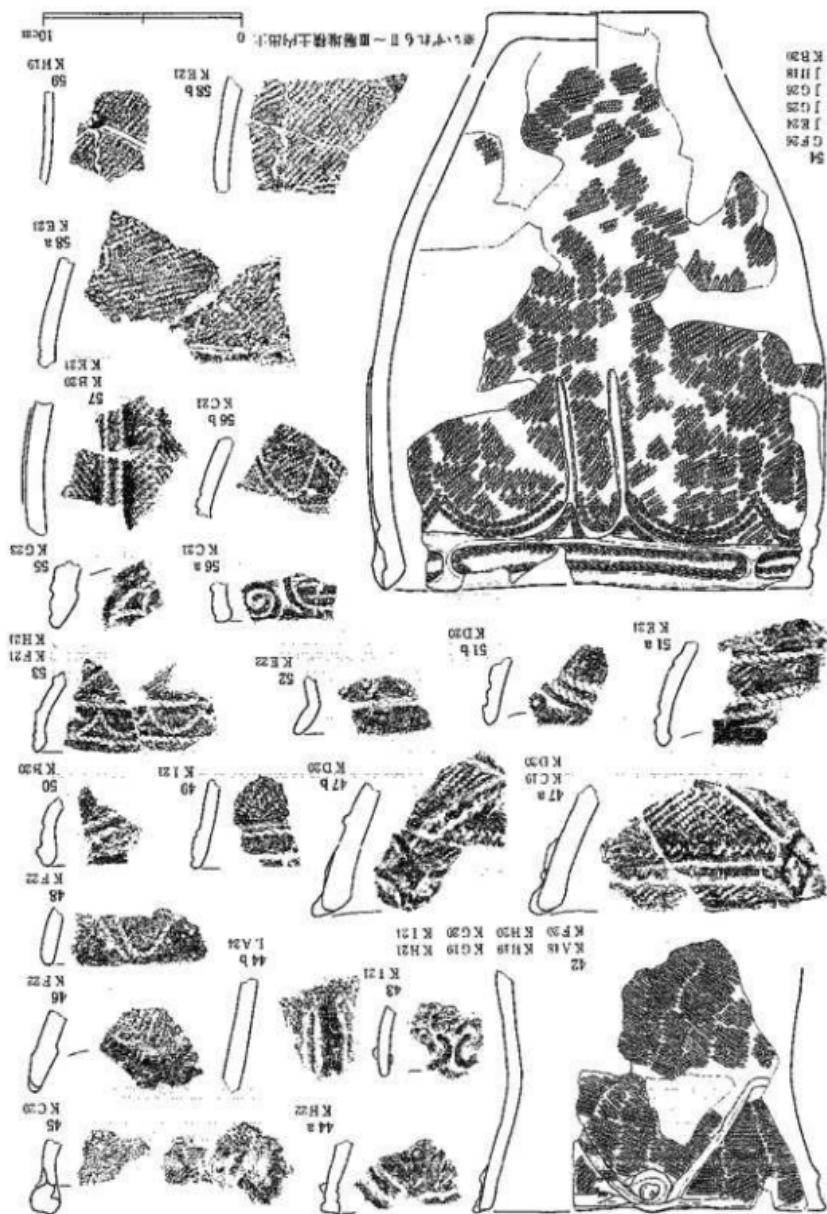
王國維全集

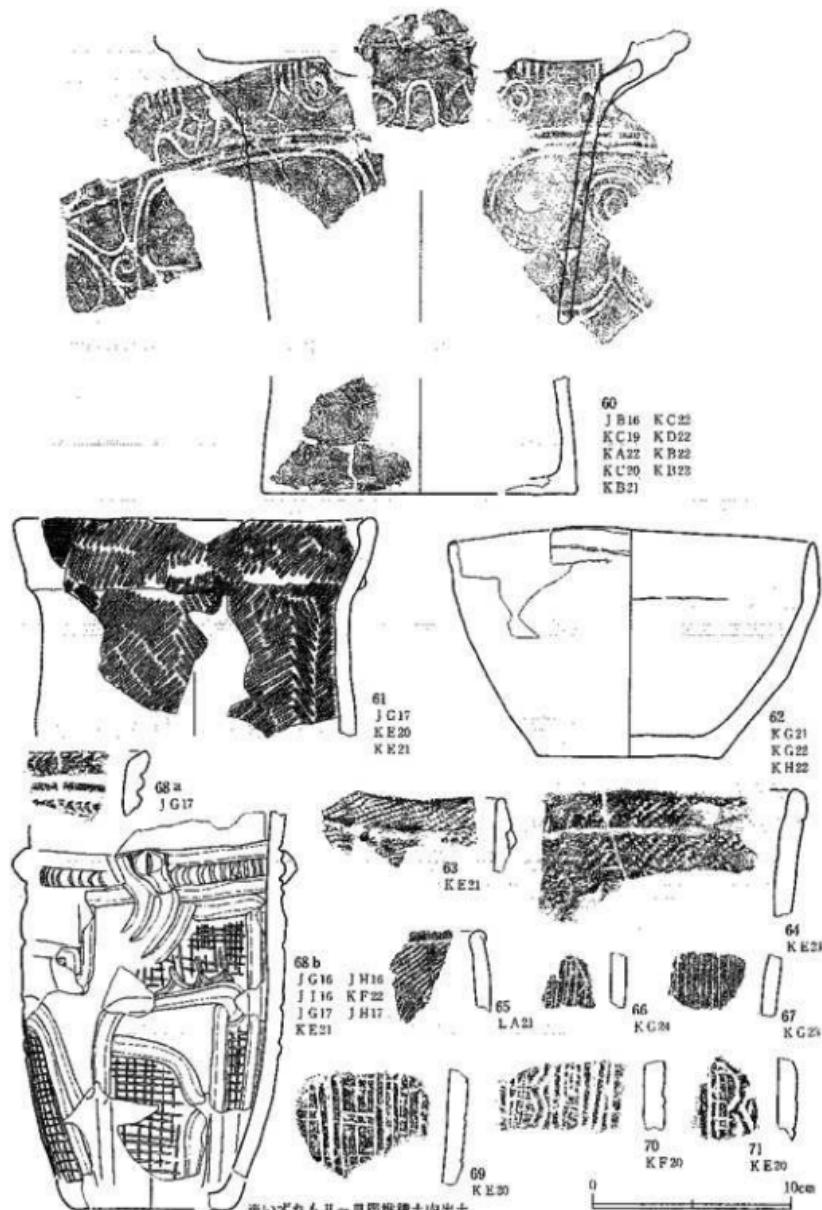




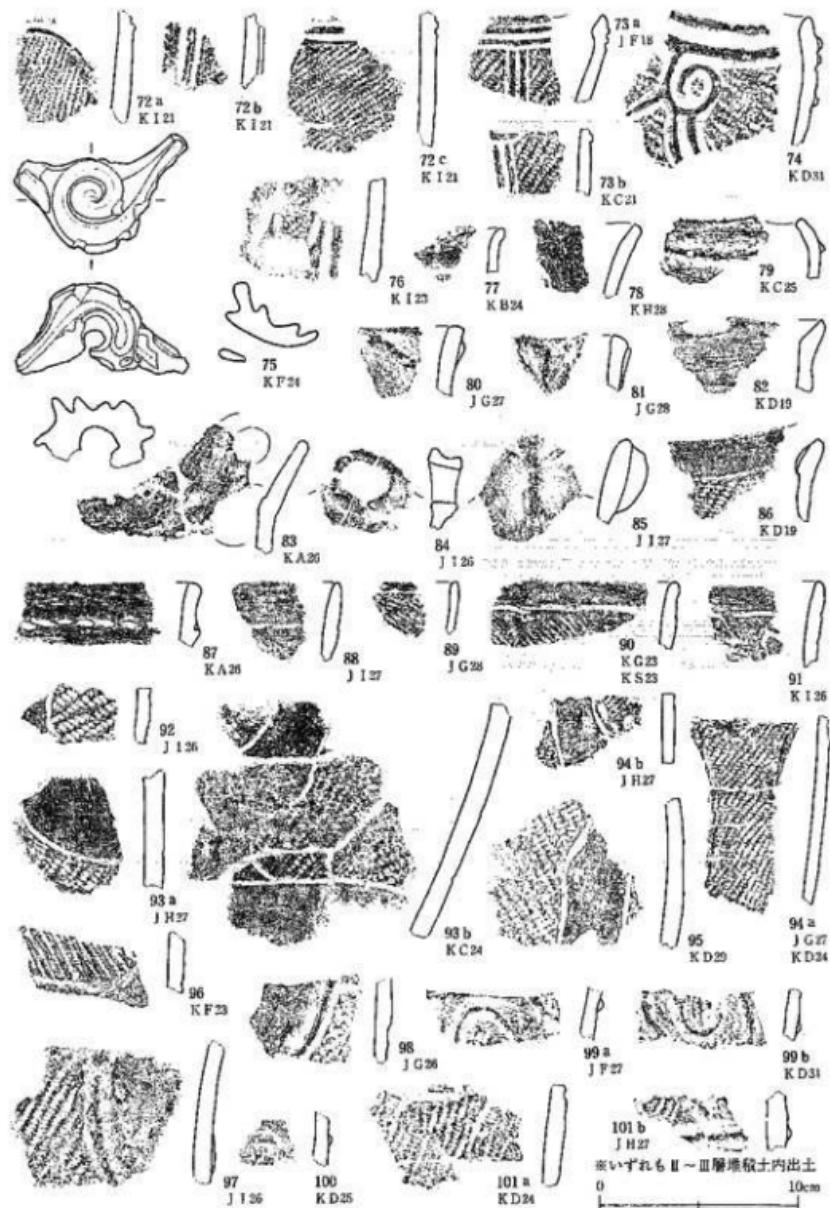
第184図 K区の遺構外出土遺物—土器(4)

圖 185 K 区の遺跡外田王遺物一玉器 (5) -

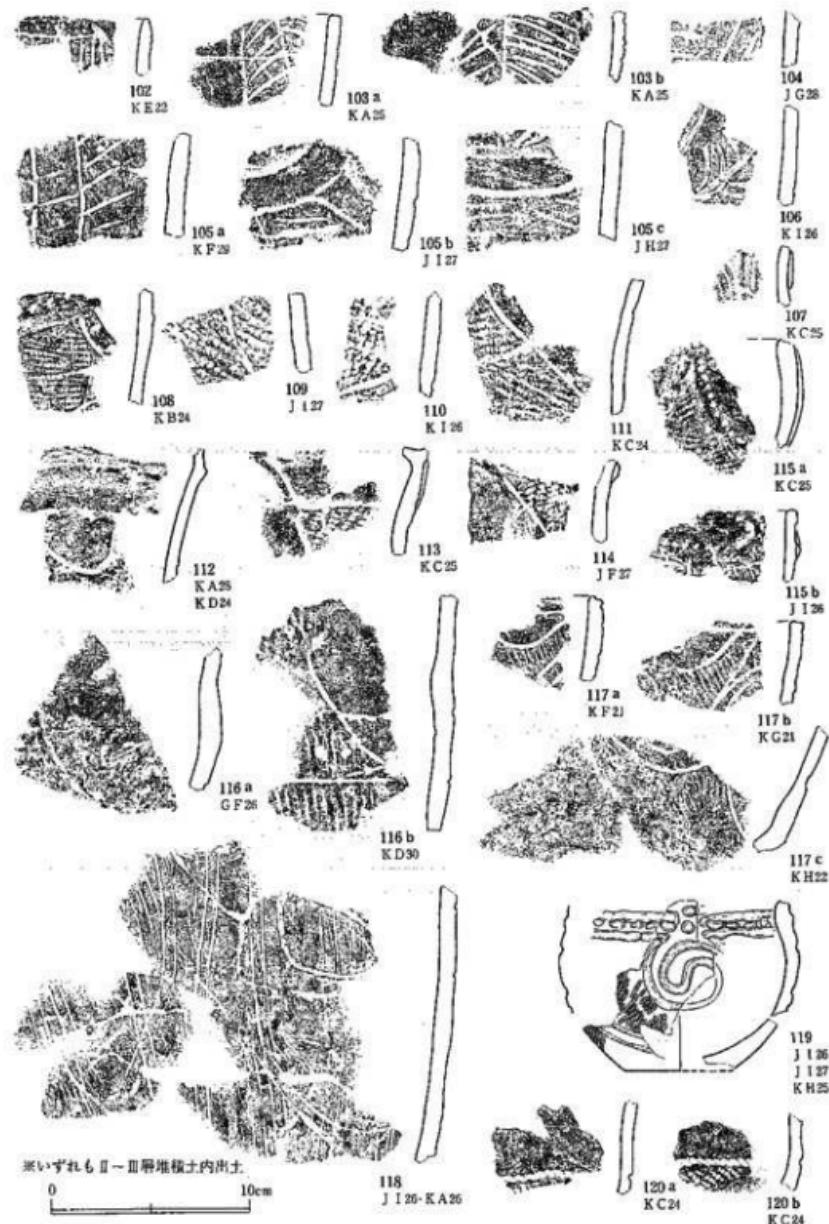




第186図 K区の遺構外出土遺物—土器（6）—

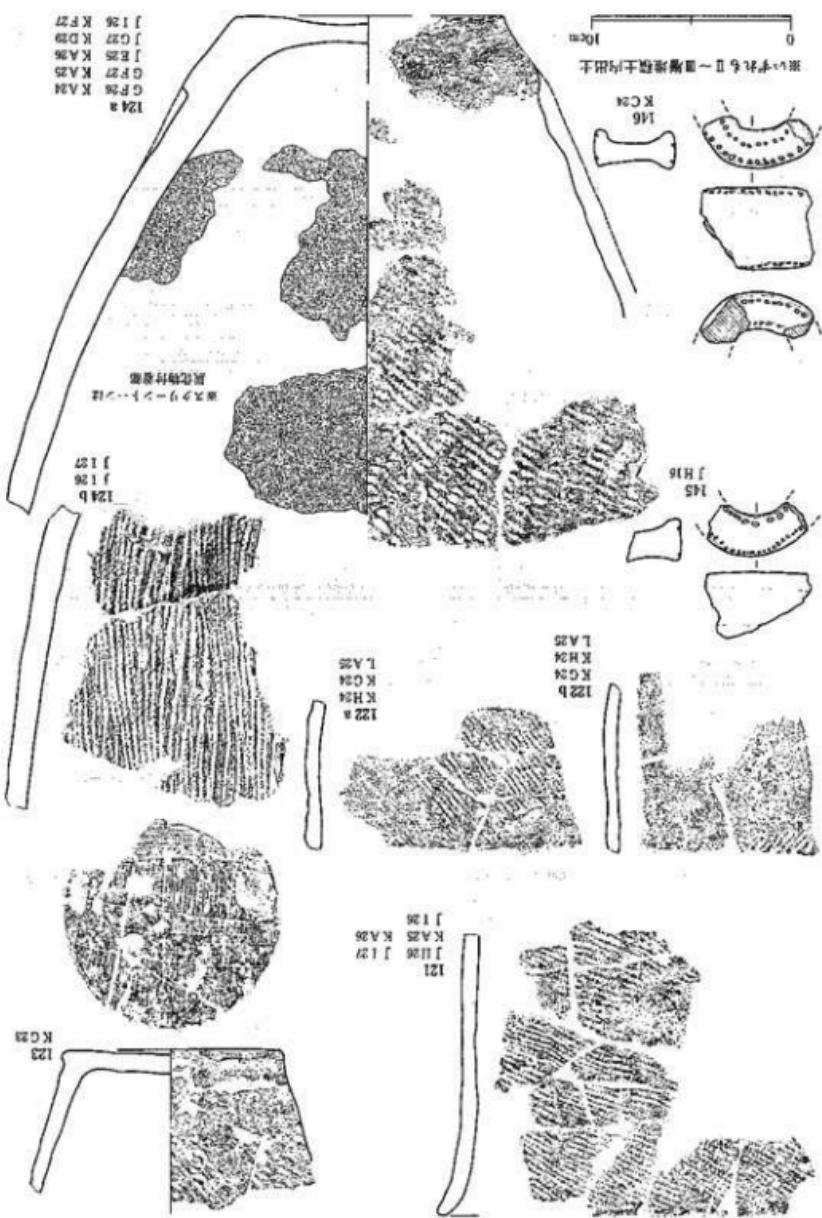


第187図 K区の遺構外出土遺物—土器（7）—

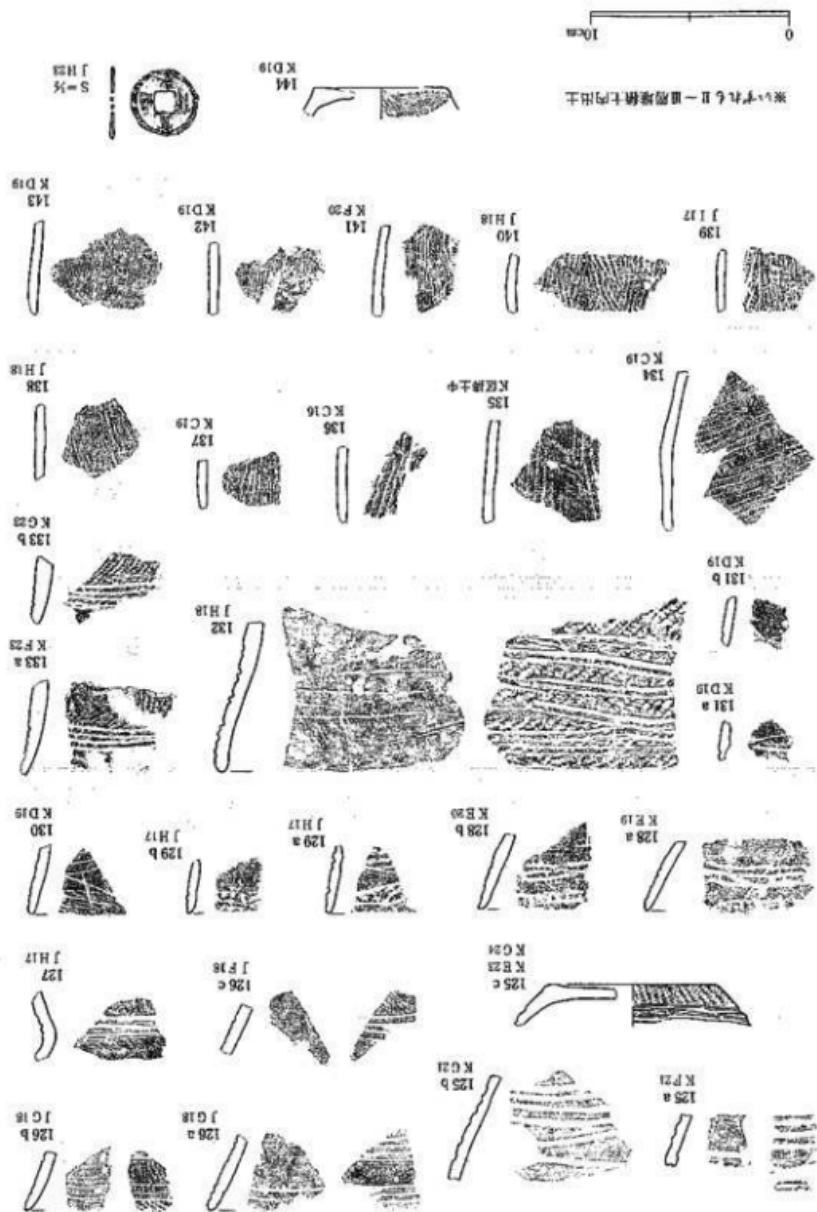


第188図 K区の遺構外出土遺物—土器（8）—

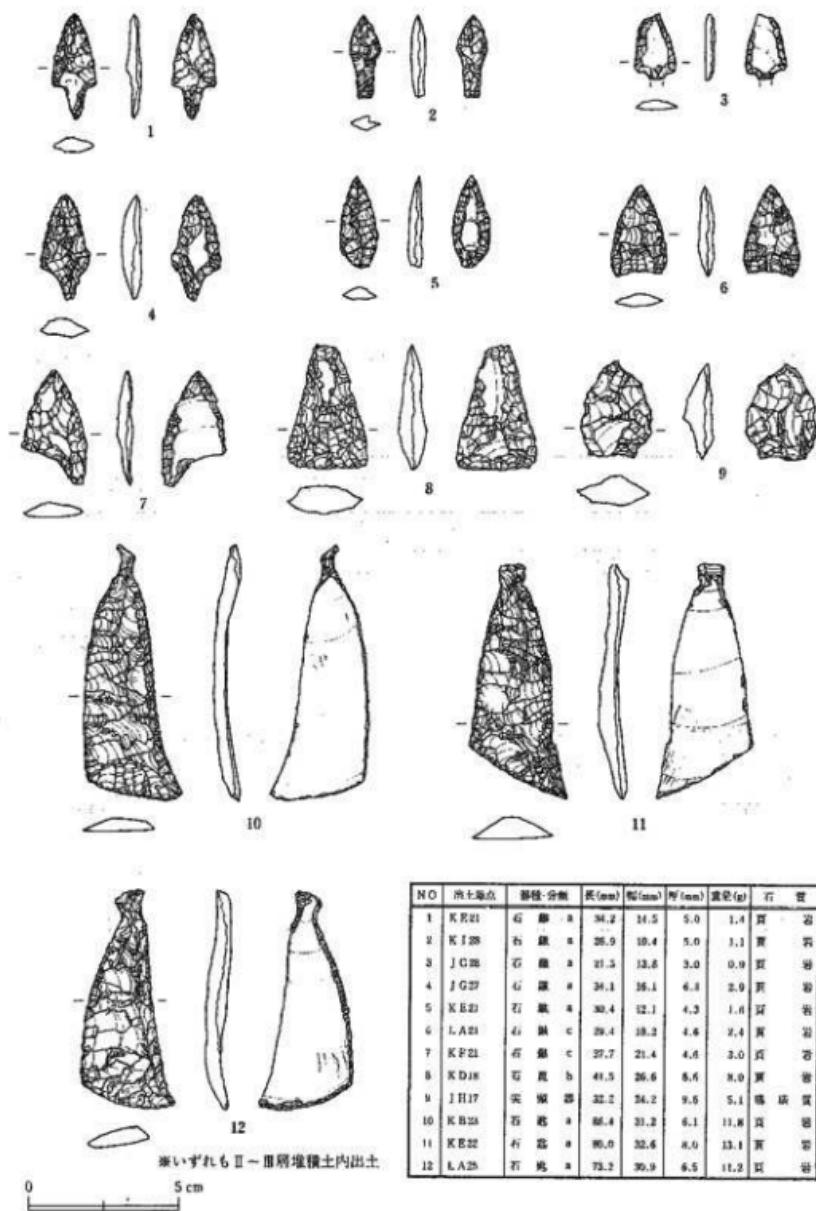
第189図 K区の遺跡外出土遺物一土器(9)・土器品一



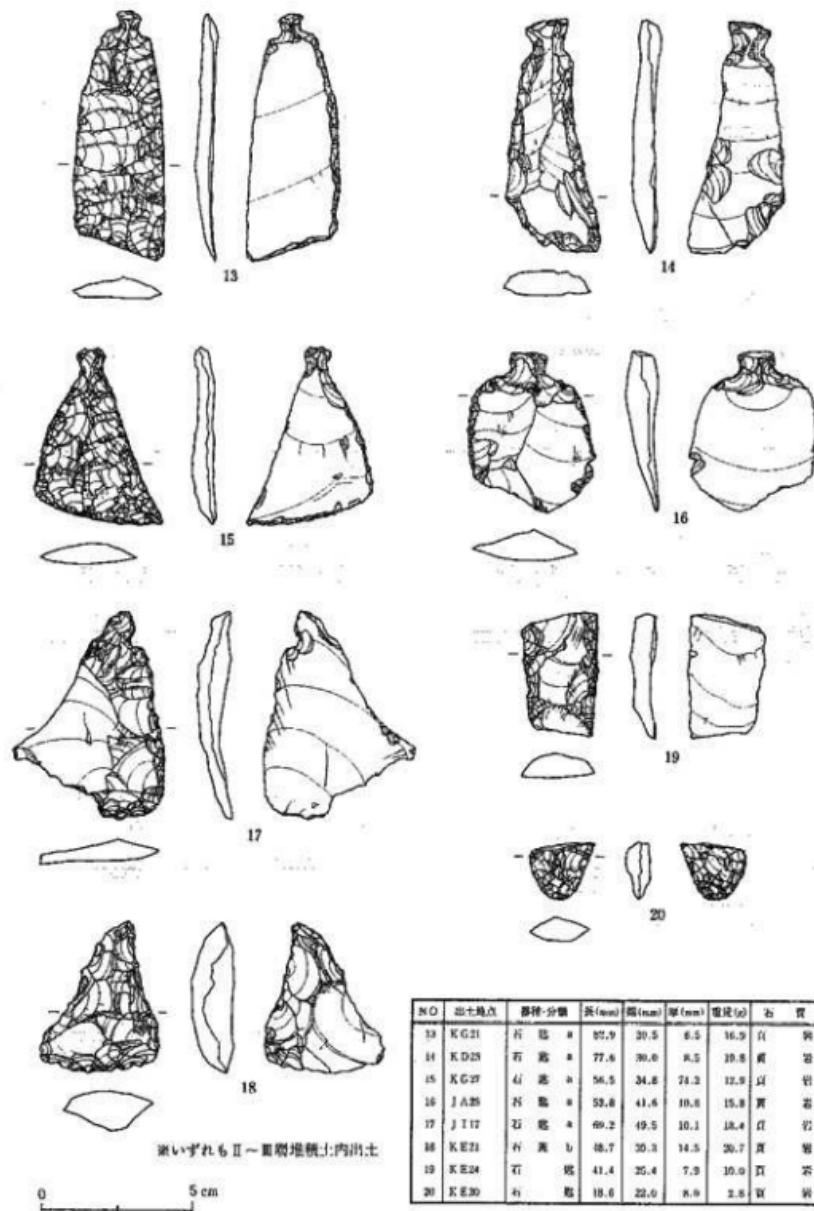
第190圖 K區⑦遺構外出土遺物一土壤 (10)・金屬品一



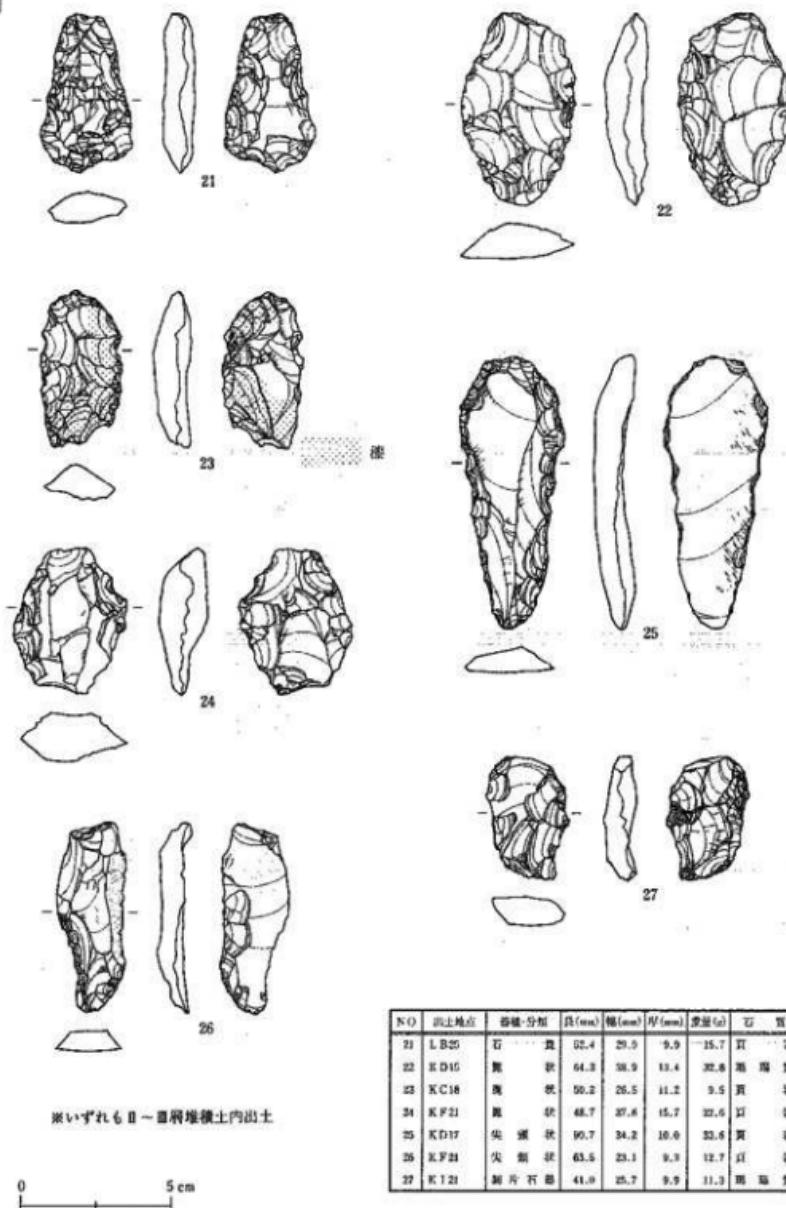
第8-2圖 K區⑦遺構外出土遺物



第191図 K区の造構外出土遺物—石器（1）—

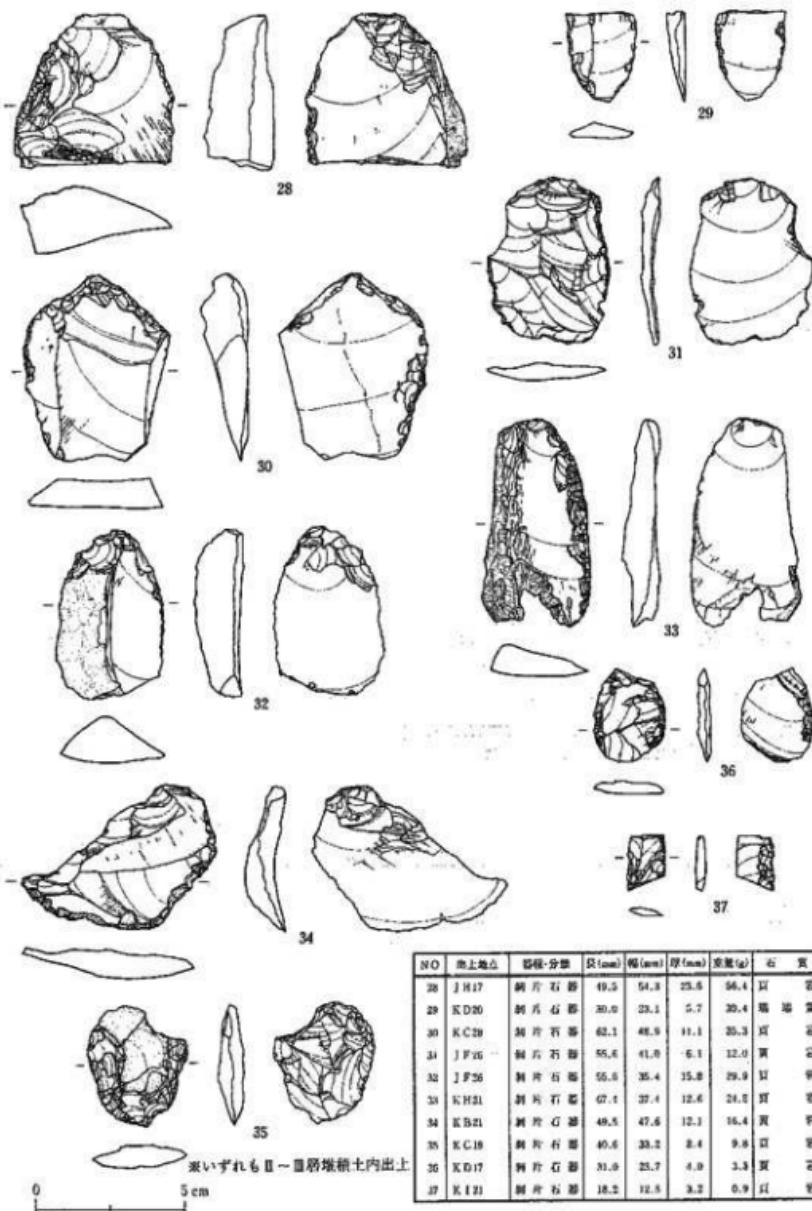


第192図 K区の遺構外出土遺物—石器（2）—

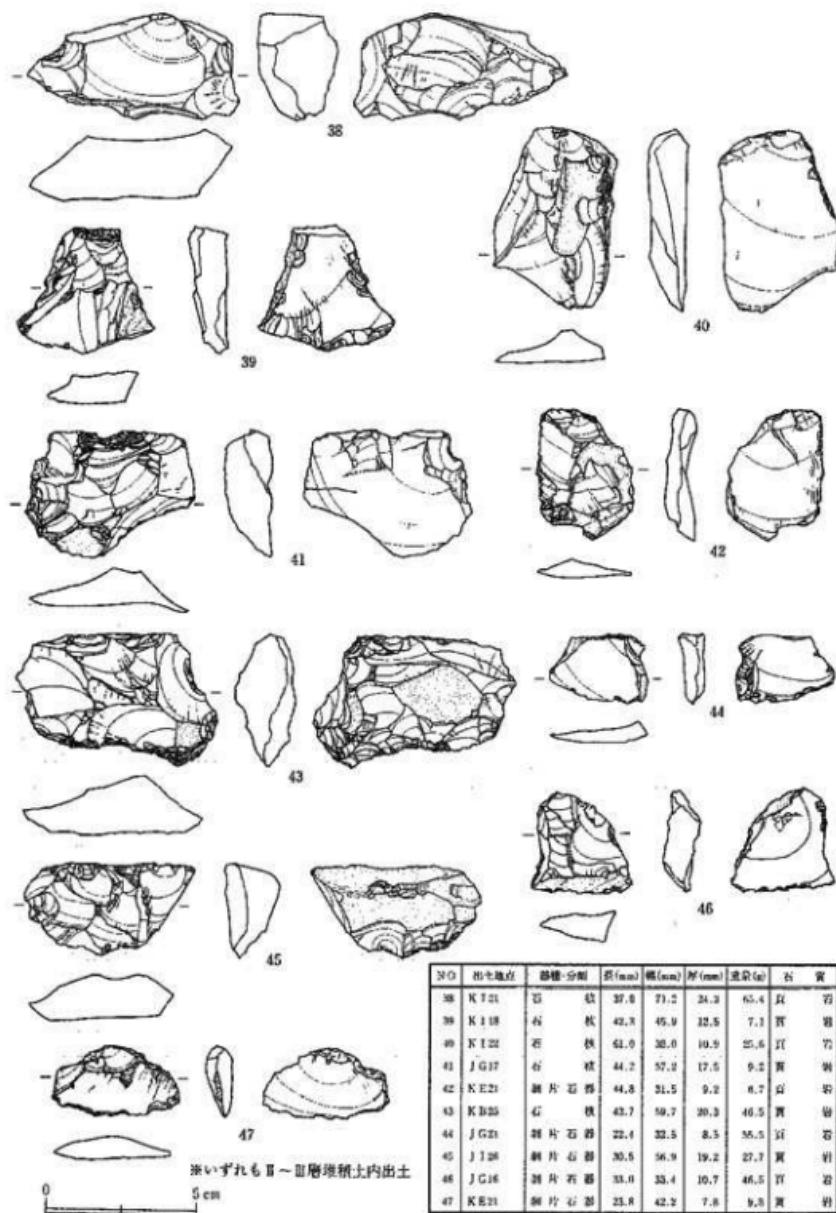


第193図 K区の遺構外出土遺物—石器（3）—

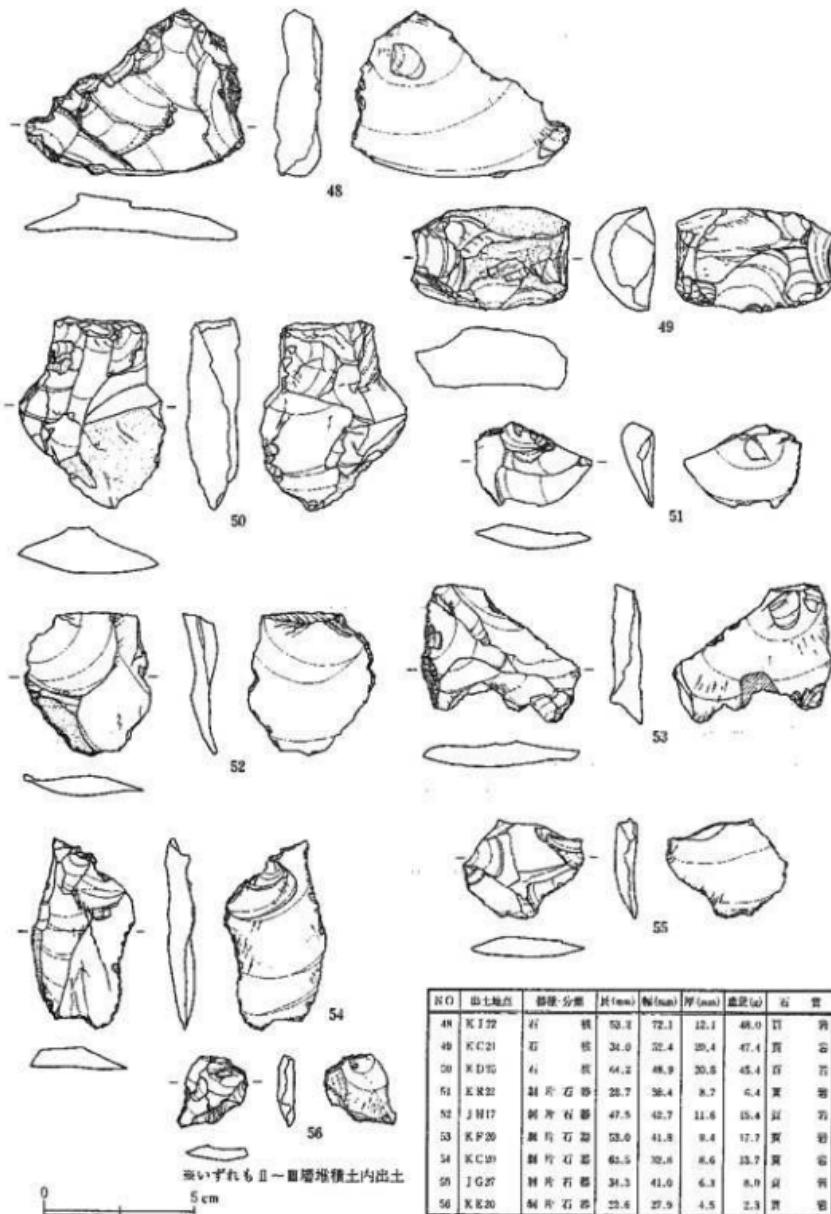
N.O	出土地点	器種・分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石	質
21	LB25	石 瓶	62.4	29.5	9.9	—15.7	質	良
22	KD45	陶 瓶	64.3	38.9	13.4	—32.8	陶	良
23	KC18	陶 瓶	56.2	26.5	11.2	—9.5	質	良
24	KF21	陶 瓶	48.7	37.6	15.7	—32.6	質	良
25	KD17	尖 頂 瓶	90.7	34.2	10.0	—33.5	質	良
26	KF21	尖 頂 瓶	63.5	23.1	9.3	—12.7	質	良
27	K 121	網 瓦 片	41.0	25.7	9.9	—11.3	質	良



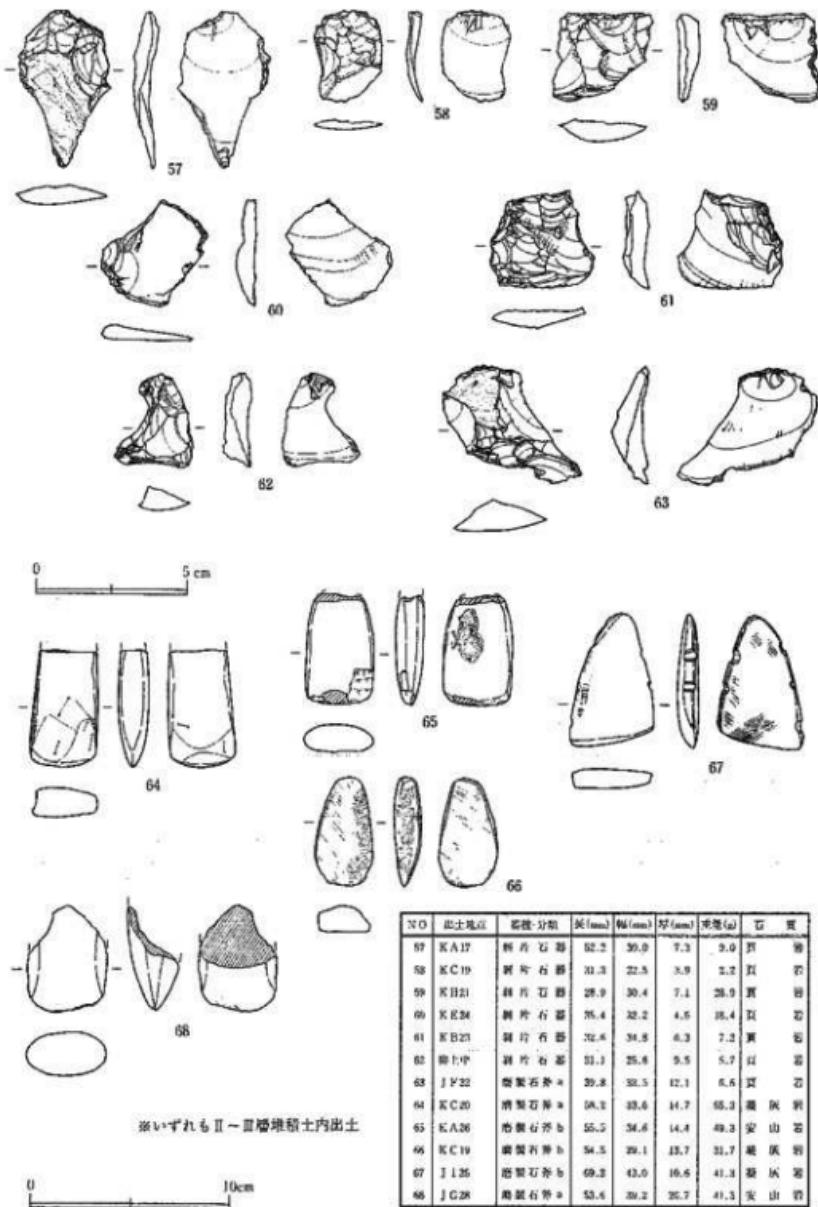
第194図 K区の遺構外出土遺物—石器(4)—



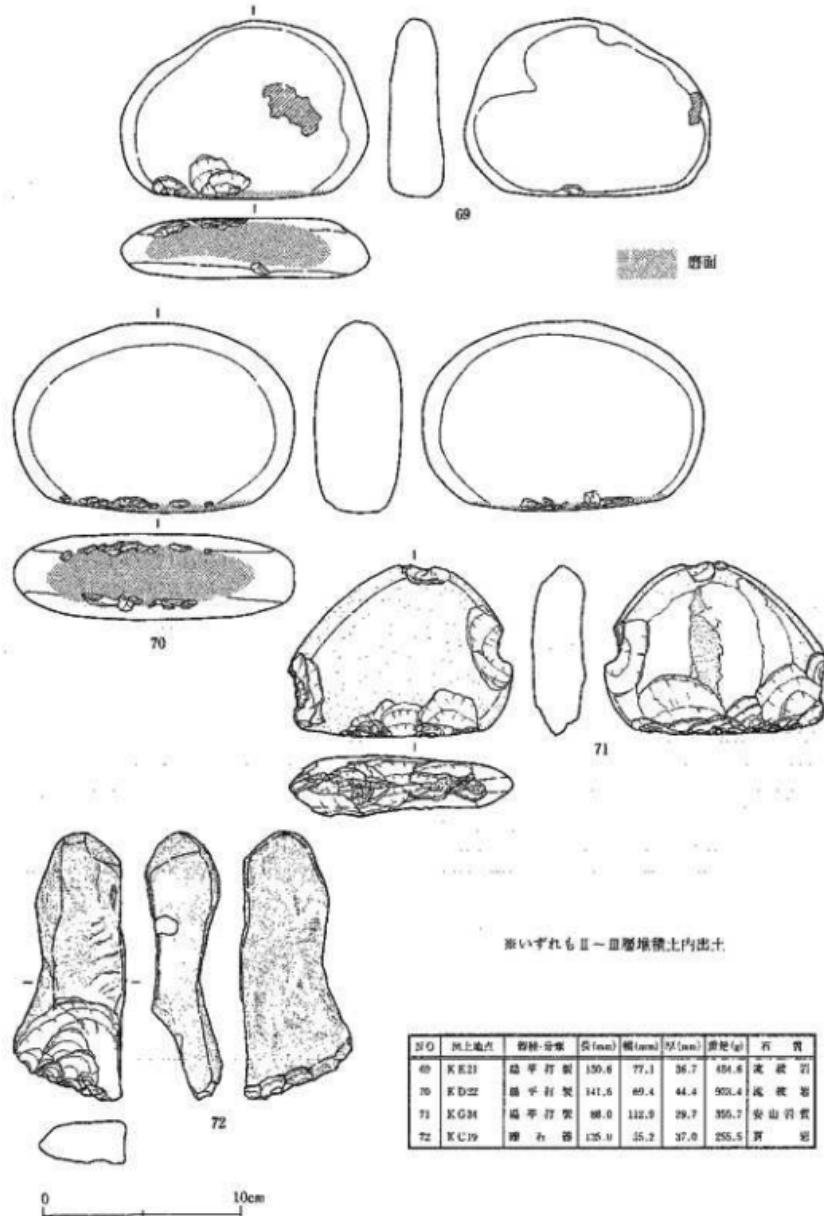
第195図 K区の遺構外出土遺物—石器（5）—



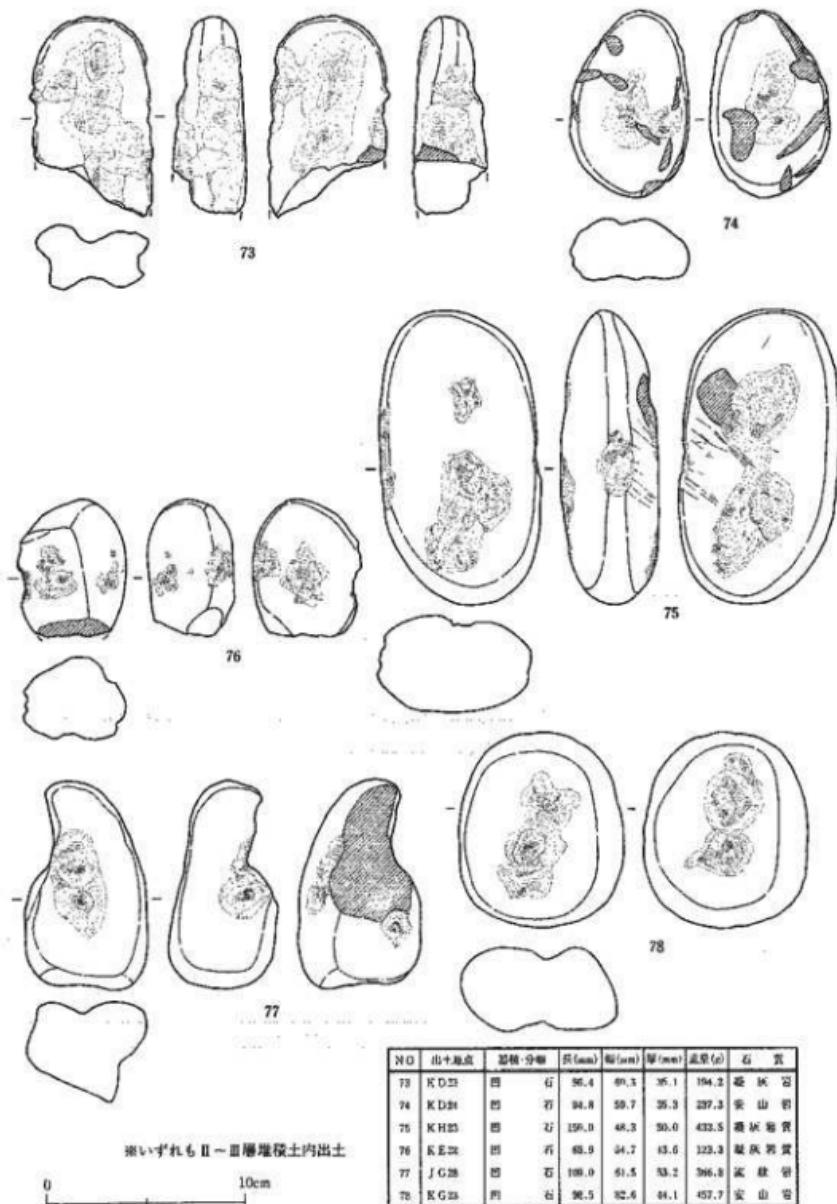
第196図 K区の遺構外出土遺物－石器（6）－



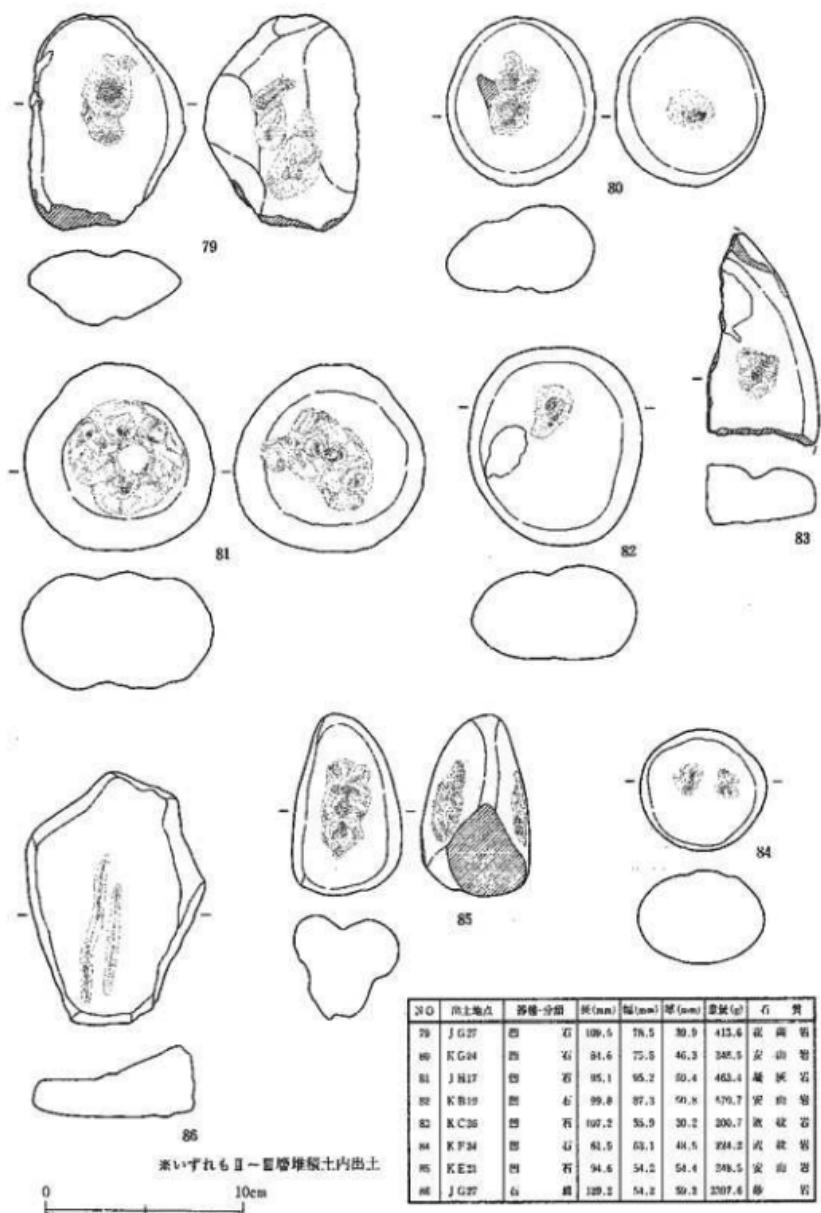
第197図 K区の遺構外出土遺物－石器（7）－



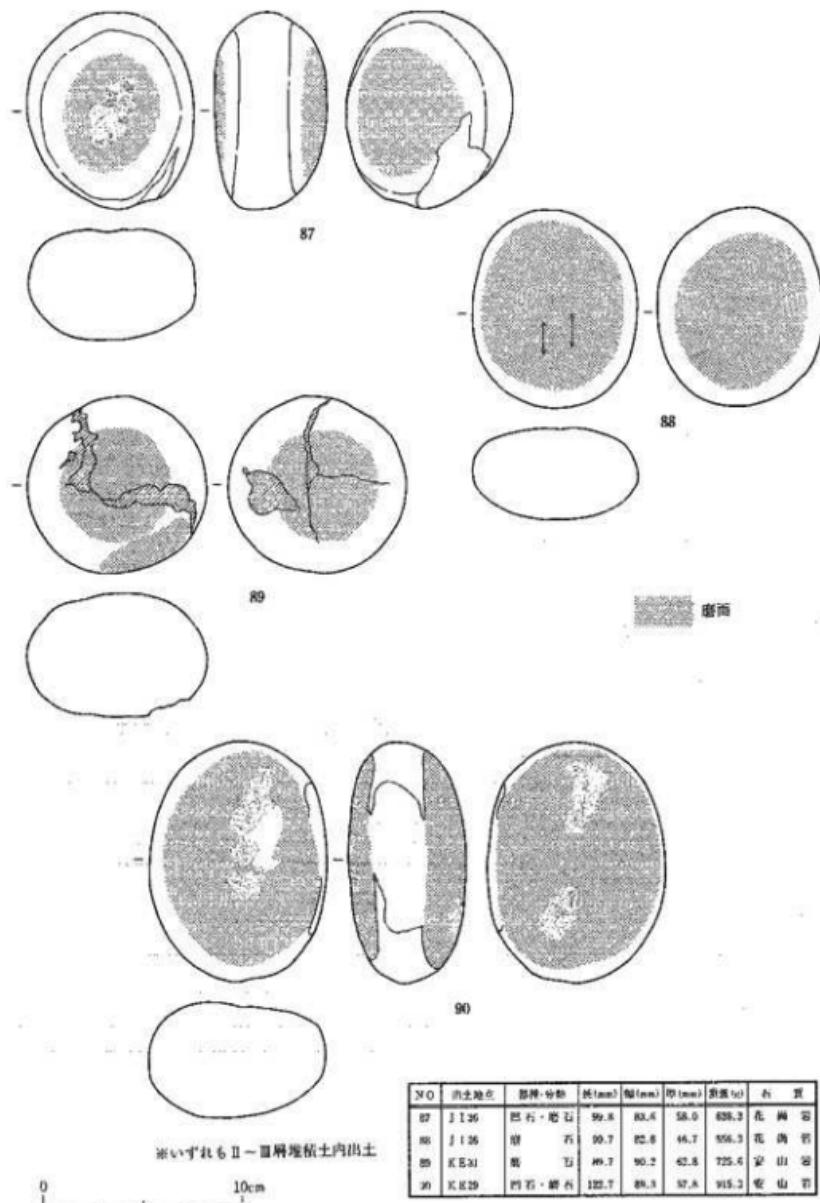
第198図 K区の遺構外出土遺物—石器（8）—



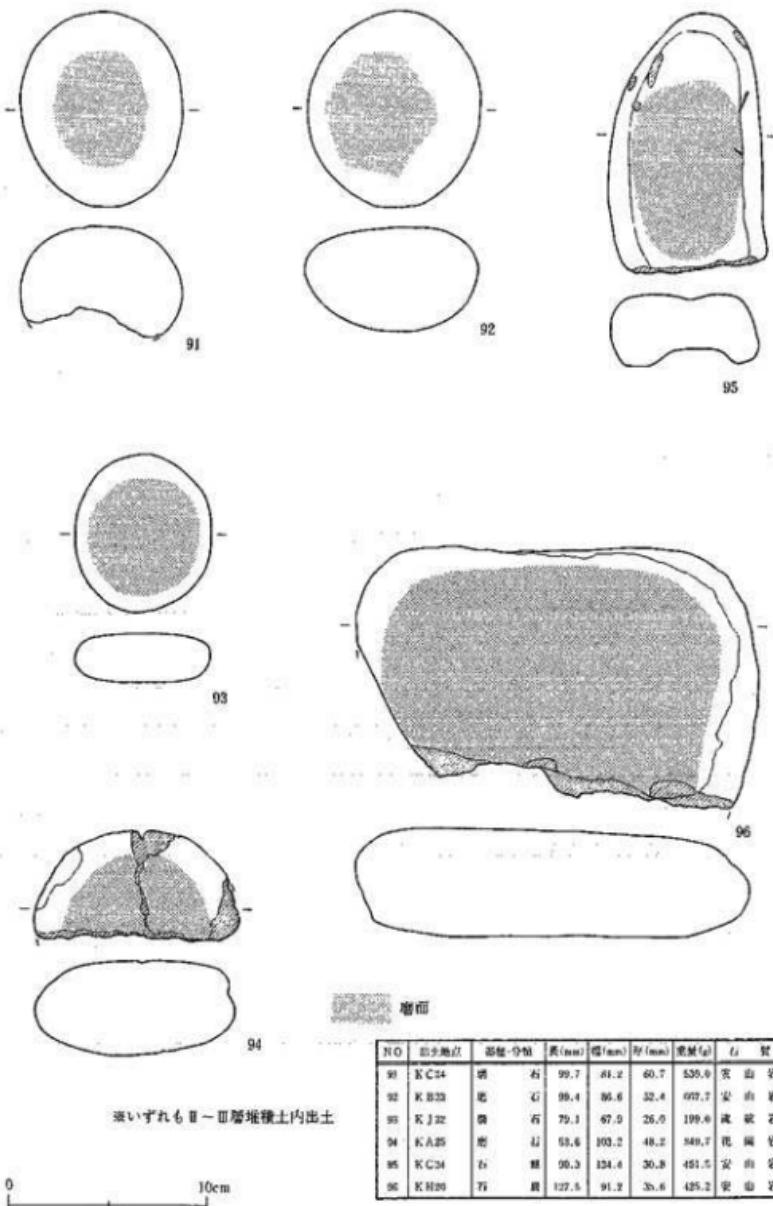
第199図 K区の遺構外出土遺物—石器（9）—



第200図 K区の遺構外出土遺物－石器（10）－



第201図 K区の遺構外出土遺物－石器（11）－



第202図 K区の遺構外出土遺物 一石器(12) -